村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ!③

鬼畜のススメ

復活編〜純粋妄想電波批評



村崎百郎

村崎百郎は時空を超えて存在する
悪意の総体である。

村崎百郎「電波系」より抜粋

《お知らせ》

●本書の文字のミスや質問等は以下アドレスにメールをお願い致します。

nekomurasakineko+100@gmail.com

●本書のサポートサイトは以下の〈鬼畜☆告知〉中の

「データ版鬼畜のススメ　サポートコーナー」になります。

http://murasaki100.com/a0900.html

■商標について

本書に掲載されている各種名称などは、その発売元の商標、または登録商標です。

本書を制作する目的のみ、それら商品名、団体名、組織名を記載しており、著者、および出版社は、

その商標権などを侵害する意思や目的はありません。

目次

クーロン黒沢（ライター）
ケロッピー前田（身体改造ジャーナリスト）
◆サ行
さかもと未明（アーティスト）
GENET（AUTO-MODリーダー）
須川善行（編集者／元「ユリイカ」編集長）
砂（漫画家）
ソワレ（シャンソン歌手）
◆タ行
釣崎清隆（死体写真家）
◆ナ行
流水りんこ（漫画家）
二村ヒトシ（AV監督）
◆ハ行
比嘉健二（元「GON!」編集長）
福居ショウジン（映画監督／演奏動画（VJ）／TVBARけむり（マスター））
◆マ行
三浦悦子（造形作家）

✹ 第1章



村崎百郎寄稿文セレクト集

査をしても何も出てこないので無罪放免どころか逆に「すみませんでした」と相手をあやまらせたことがあったたな。優れた犯罪者をめざすのに限らず、こういう野生のカンというやつはあった方がいいと思うぞ。

まあ、俺の場合は10歳の頃から下着泥棒をやっていてそういうカンを鍛えていたからな。何も威張るワケじゃないが、盗みというのは単純そうだが奥が深くて、大胆な行動力と緻密な観察眼と細心の注意力の3つがバランス良く必要な犯罪なんだから、頭の回転の遅い奴らはやらないにこしたことはないだろう。バカがやって運だけで成功したり、ついでに押し入った家に居合わせた若い女と無理矢理性○したりすることはできても長くは続かないだろう。

盗みに入るときにまわりで誰かに見られていないか気を配り、盗んでからもすぐには家に戻らずに、誰か後を追いかけてこないかを確かめながらぐるぐる迂回して帰宅して、自分の部屋でゆったりと落ち着いてから盗んだパ○ティのニオイをしみじみ嗅いで深呼吸し、頭の中を妄想で一杯にして激しく行うア○ルオナ○ーほど気持ちのイイものはねえよな。

……って、話が脱線しちまったんで元に戻すけど、要するにここで俺が主張したいのは「いま自分が置かれている状況を正しく認識する」ことは、窃盗でも放火でも戦場でも人生でも非常に大切なことであるということだ。これを間違うととんでもないスカを引いてしまうことになるぞ〜。

第1章　村崎百郎寄稿文セレクト集

これはインターネットが広く一般に普及したためという理由もあるだろう。便所の数が増えれば増えるだけ、流れる糞の数も増える。インターネットは人々の暗い欲望を増幅させ、暴走させ、それが邪悪で強力な電波を発信する元になっているのは間違いないが、それはだけでは説明がつかないぐらいに悪い電波は増えているのである。

この電波は人の弱みに付け込んで様々なことを語りかける。「オマエは選ばれた人間だ」「町中がお前を憎んでいるぞ」「殺さなければ追っ手に殺されるぞ。包丁を持って通りに出て行ってみろ。最初に会った小学生の女の子が諸悪の根源でお前を陥れようとする組織のボスだ。背負っているランドセルに差している縦笛の先からおまえの殺害を指示する電波を出しているんだ」。

こういうことを真に受けて行動してしまうと、とてつもなく悲惨なことになってしまう。昨年起きた小学生の女の子をメッタ刺しにした通り魔殺人では、犯人は古○東子のポスターとシ○ズナのCDジャケットの写真が語りかける「お前は狙われて追われている。逃げなければ殺される」という言葉を信じて、恐怖をあおられて犯行に走ったのだという。これが典型的な電波による詐欺事件である。電波は語るだけ何もできないが、真に受けて行動すると、妄想界では単なる詐欺事件も現実世界では通り魔殺人事件に発展するから恐ろしいもんだ。こういう電波の存在こそが『危ない28号』の数千倍は罪深いことはいうまでもないが、残念なことに、この種の電波がもたらす妄想に対抗できる法律も手段もこの世には存在しない。悪性の電波や妄想と闘うには強い精神力をもって無視する以外に

『世紀末鬼畜放談』★犯罪者のための脳内革命／村崎百郎
読むだけで心が腐る！　鬼畜エリートになるための鬼畜講話　第1回

混迷の世紀末を生き抜くために

よお、読者諸君、俺がこの国で最低最悪の電波系鬼畜ライター村崎百郎だ！
この連載は表題通り、腐敗と混迷の世紀末日本をいかに強く逞しく、そして楽しく生き抜いていくかという、ありがたい教えを、お布施も取らずに公開しようという実に気前の良い企画だ。俺の話を本気にして、良心を捨てて性根を徹底的に腐らせさえすれば、お前らにはとてつもなくドロドロに腐り切った腐臭漂う輝かしい未来がやってくることだろう。それが嫌ならこのページは破いて便所に捨ててくれ。
さあ、腐りたがりのクズ読者ども諸君、鬼畜界へようこそ！

★こんな腐った世の中は先に腐った奴の勝ちだ

さて、まずは状況分析からいこうかね。いま現在がどういう状態かということを瞬時に把握できる能力を持つというのは強く生き抜くための必須条件だからな。
そうそう、オレは十代の頃に地元のスーパーで万引きをやって、盗品を持って店を出てからアパートに帰ろうと夜道を歩いているときに、後から誰かに付けられていることに気がつき、とっさに路地に入り込んで盗品（確か女モノのエロいパ○ティだったたと思う）を他人の家の塀の内側に捨て、表通りに出た所で後をつけてきた店員に捕まったが、身体検

マ○汁を流してひいひいヨガってから金を払う、フーゾクという性感商法の方がいいねえ。まあ、どっちにしてもボッタクられるのは御免だけどな。

そういうわけで（自分で言うのもなんだが、俺はホントに前置きが長いねえ）、この国が清くも平和でもないことは何となくみんなも分かってるだろう。こんな状況のもとで騙されたり犯罪の被害者になって殺されないように生きるにはどうすればいいか？

清く正しく生きることは、ある意味で人間としての理想だろう。それは実に正しい。しかし、そんな生き方を現代の日本で貫こうとすれば、腐敗に満ちた周囲の人間たちとも摩擦を起こして、いずれは被害者になって東京湾あたりに浮かぶのが関の山だろう。何とも悲しいことである。

そうならないために我々はどうすればいいのか？

この疑問に対する解答こそが、この連載なのである。

腐敗しきった世界を強く生き抜くには、誰よりも腐った心を持った鬼畜になる必要があるのだ！　誰よりも腐った心を持っていれば、何を見ても何をしても、人として瞬時にそれについての超ド最低の思考や発想が可能となり、結果として人を騙すことはあっても騙されることなど決してないような人生が送れるのである。

そんな馬鹿な、という声もあるだろう。人間の暖かさや良心を信じたい気持ちは理解できなくもない。だが、昨年和歌山で起きたヒ素入りカレー事件の容疑者のH夫妻の華麗な

というワケで、現在の日本で我々が置かれている状況について考えてみよう。

我々が住んでいる国は、一応は平和憲法を奉じる平和な民主国家日本だが、実はそうではないことぐらいは賢明な読者諸君もお分かりだろう。まるで国中が発狂したかと思われたようなバブルの好景気もあっさりハジけ、その後現在に至るまで悪夢のように長引く不況は国民の精神を荒廃させ、巷には悪質な詐欺や窃盗や暴行事件が蔓延し、さながら天罰直前のソドムの市状態である。何もせずとも黙っているだけで国から高い税金をボッタクられるなんてのはまだマシな方だ。知らないうちに他人に保険をかけられたり、土地の登記を書き換えられたり、結婚しないでフラフラしてたら東南アジアの国の女の子と籍が入っていたり、銀行の定期預金がおろされていたり、ついでにズボンもパンツも引き下ろされてイイ顔の親父にチ○ポを根本までシャクられてウグウグされていて、あまりの気持ち良さについ射○をしてしまったら調子こいたホモ親父にけつの穴に中指を第二関節までさし込まれてグリグリほじられて前立腺を刺激されて勃○がとまらなかったりと、そんな理不尽な行為はそこかしこで横行しているのが現状だ。

堕落し、腐敗しているのは現実界だけではない。多くの電波が飛びかう妄想界でも世紀末を控えた現在、未曾有の大変動が起こっている。何かというと、電波の量が最近急激に増えているのである。それも、人心を惑わし腐敗させる悪質な毒電波ばかりが集中的に増えている気がする。

保険金生活を見てもわかるように、正しく生きることが馬鹿馬鹿しく思えるような事件が続発している現在、我々はとても無垢なままではいられない。
犯罪の被害者にならないためには、先んじて巧妙な犯罪に手を染め、エリート犯罪者になることも一つの選択だが、洗濯は晴れた日の午前中にやるのがいいだろう……ではなくて、犯罪者と同等、あるいはそれ以上の犯罪思考とセンスを持って、自分や家族が犯罪の被害者にならないように未然に予防することが大切なのだ。
当たり前のことだが、自分の身は自分で守らなくてはならない。国家や法律が国民を守ってくれるから大丈夫だなどというのは大きな妄想である。目の前にシ○ブでテンパったキチ○イがいて、自分を刃物で刺そうと襲いかかる直前に「それは正しい行為ではありません」とか「あなたは私の権利と生命を侵害しようとしています。それでは人権が守られません」などと流暢に説明して相手が納得して刃物をしまうとでも思うか？　刺される0.1秒前にいつもいつも都合よく正義の味方のポリスマンがやってきてキチ○イを逮捕してくれると思うか？　犯罪も肉体労働と同じで、インテリの意見や理論は現場では通用しない。警察が動くのはほとんどの場合、犯罪が起きた後である。「法律」はもっとタチが悪く、犯罪が起きて容疑者が逮捕されたずっと後の裁判になって初めてじわじわと効力を上げるが、この場合、容疑者側の権利も守るので被害者や遺族にとっていいのか悪いのか分からない所がある。いい例が一連のオウム事件のA被告の例である。

ないのである。

そういうわけで、現在の我々は非常に危険な状態に置かれていることは間違いない。現実界も妄想界もひっかけ詐欺や騙し合いばかりで、もう大変な状況なのだ。

少し前のオウム事件もヒドかったが、21世紀も近いというのに、あい変わらず霊感商法は手を変え品を変え我々を狙っている。昨年訴訟沙汰で話題になった○○会の手口は笑えたろう。何でも、信者の持っている札束を煙でいぶして浄化する「念金」とかいうのがあって、預かった金を返さないんでモメているそうだが、それが教祖のババアの「年金」代わりに使われたのは間違いないだろう。この国は霊能者なんていう無能な詐欺商売やってるジジババに年金を払うほど寛大じゃねえからな。国から貰えないなら金持ちの他人を騙して大金をせしめようというのは、将来への不安をかかえる老人にとっては当然の権利だというのだろう。しかし、21世紀も間近だというのに、いまだに霊だの死後の世界がどーしたこーしたいう非科学的な霊感商法がまかり通るんだから驚きだよな。そんなに死後の世界を信じる馬鹿が多いのかねえ。俺は電波で霊を自称する連中の声も聞くし、幽霊も天使も妖怪もたまに見えるから言っておくけど、死後の世界なんかどこにもねえんだよ！

自分にひっついてくる妄想を妄想と認識できないようではハナシにならないねえ。個人的にはオドされてカネをさし出す霊感商法よりは、ア○スやチ○ポをシ○ブられてくせえ

A被告は松本サリン事件を初めとして、地下鉄サリンや坂本一家殺害事件、信者殺害事件など、かかわったとされる凶悪犯罪の件数が多すぎてとても10年や20年では裁判が終わりそうにない。これはヒ素入りカレー殺人事件のM美容疑者も同じであるが、「捕まって死刑になりそうな犯罪は、一件だけでやめると死刑判決が出て死刑になる怖れがあるが、その逆に、一回どころか何十回も凶悪な殺人事件や犯罪を起こしてしまえば、裁判が長引いて生きている間に死刑になる怖れがない。だから死刑になりそうな犯罪はなるべく沢山やったほうが身のためだ」というステキな価値観を生むわけである。

裁判で「これは冤罪だ！　私は警察の横暴で自白を強要されました」といって争えば、慈悲深くて人間ができていらっしゃる、賢い人権派の弁護士さま（左翼系）が何人も味方についてくれて裁判を引き延ばしてくれるから、ありがたいことこの上ない。

ちなみに松本サリン事件の裁判では、弁護士たちの質問があまりに素晴らしくて、傍聴していた被害者の会の連中が怒りで顔を膨張させて「弁護人は夜中に突然農民が各自の家で同時刻に一斉に農薬を飲んで倒れる事態など、万が一でも本当にあると思ってるのか！」と言ったそうだが、裁判を引き延ばし、同時に被害者や遺族に不快感を与えるいやがらせの質問としては実に巧妙なものであると言えるだろう。

たとえば「サリンがまかれたといいますが、それが同じ地球人の手によるものではなく、空飛ぶ円盤に乗ってはるばる火星からやってきた火星人が友好のためにと思ってまいた可能性は真剣に調査したんでしょうか、やっていなかったとすれば警察の重大な捜査ミ

スで我々は即時再調査を要求します！」という質問は、「火星」と「火星人」の部分を夜空に浮かぶ星の名前を片っ端から当てはめることで何回でも質問ができ、何時間どころか何十年でも何百年でも裁判を長引かせることができるだろう。星の名前を全部あげてしまったら、今度は「松本サリン事件が数千万年後の未来の惑星間戦争で地球連合に負けたレティクル星人たちがタイムマシンをつかって過去の地球を攻撃しようとした実験の結果ではなかったという議論がなされないのは検察の重大な職務怠慢です。速やかに再捜査を要求します」という質問にパターンを変えて、あとは「レティクル星人」の部分を同様に何回でも変えて質問が可能だろう。こう書くと冗談のように聞こえるかもしれないが、実際のオウム事件裁判ではこれに近い引き延ばし工作が行われて、30分で済む質問を何時間もかけているというから、弁護士という商売もナカナカ鬼畜でいいもんだと俺は思う。

まあ、そもそも弁護士なんていうのは善人の弁護を除けば、金を貰って悪い連中の味方をするこの世で最も卑しい商売なのだから「先生」などと呼んで尊敬する必要など全くないので皆の衆もカン違いするなよ。タチの悪さは政治家以上、官僚未満程度だろう。

って、ウダウダ脱線こいてたらまた何いってるか忘れちゃったなあ……ワリいなあ、俺は中卒なうえにアタマがパアで、活字見たらアタマ痛くて叫びたくなっちまうタチでさあ……だけど中卒もたまには役に立つことがあるんだぜ。しつこいY新聞の勧誘員が家にやってきたら「オレは中卒だから新聞なんて読めねえよ」って言えば大抵の奴は引くぜ。

それに対して何か言いかえてしてきたら「何だよ、あんたオレの学歴に文句あるのかよ」って言っとけばしまいにゃ「どうしたの？　誰かに何か言われたんですか？」って心配するフリまでしてくれるぜ。まあ、俺はこれまでもY新聞の勧誘員にはせ○ずりをコイているときにこられて丸裸で勃○したチンポを握りしめたままドアをあけて玄関に出て「いまオナ○ーやっててもうすぐ出るからまたあとで来てくれよ。ガマ○汁もこんなに出てるからさあ」と、カ○パー液でベトベトになった指を勧誘員の顔の前にかざしてやったこともあるけど、さすがにそいつは何日待っても二度と俺の家には来なかったな（当然か？）。これは心を腐らせるのとはあんまり関係ない話だが、恥知らずでどこでもチ○ポを出せるような根性を持つことも、鬼畜としては大切なことなんだよな、うん。

そういうわけで（このフレーズ、何回目だ？）、こんな腐った世の中で清く正しく生きなければならないなんて妄想を持って生きていては、必ずスカを引く人生を送るハメになるからやめとけって話をしてたんだよなあ。しかし何で「人は清く正しく生きなければならない」などというスカした妄想が広く一般に普及してしまったのだろう。

これについては俺はいままで何度も事あるごとに口を酸っぱくして主張してきたが、諸悪の根源は、「先の戦争で日本が敗けたこと以外にはない」のである。

すべた……ではなく全ては日本が戦争に敗けたことから始まっている。戦後処理の諸問題も日本があの戦争に勝利していれば謝罪どころか「反省」などという発想すら誰一人の

頭の中にも浮かばなかっただろう。何度考えても腹立たしいのは勝利がほぼ確実だったにもかかわらず、人体実験同様に原爆を2つも投下しやがった米軍の◯ソどもだが、こいつらからも学ぶべき点はいくつかある。それは「やっぱり腐った奴らは強い」ということだ。

だいだいアメリカという国は、建国の経緯からして因業だね。船で偉そうに世界各地を侵略して回り、平和に暮らす現住民たちからかすめ取った植民地のアガリで優雅にま◯こや麻薬をやって暮らしていた大英帝国という泥棒国家の連中の、その中でもとびきり強欲な連中が「こんなんじゃ暮らしていけねえ。もっと搾取可能なカモのいる場所はないか」といってアメリカ大陸に渡って、平和で善良なネイティヴ・アメリカンやバッファローたちを虐殺しまくって無理矢理土地をブン取って、アフリカから罪もない黒人たちを鎖につないで連れてきて奴隷としてこき使って繁栄を築いた、人類史上最低最悪の超鬼畜国家なんだからさあ。そういう極悪なことをやってきた国が腐敗しないワケがない。おかげで現在はジャンキーと変態と凶悪犯罪に満ち満ちた世界イチの超汚穢国家に成り下がっちまっている。だから軍隊も強いワケよ。国のあちこちで毎日ドンパチやって殺人が珍しくない状態になってるから、奴らも人殺しは英会話以上に得意なんだろう。英会話同様、「駅前留学」で教えてくんねえかな？　シドニィ・シェルダンを原書で読めば正しい英会話と適切な殺しのテクが身に良く付くんだろうなあ、きっと。

と、まあ、こういう恥かしい過去を持ってるだけに、アメリカはやたらと「世界の警察」を気取りたがり、少しモメそうな雰囲気があればどこへでも出ていくから困ったもんだ。人権問題でアヤをつけられている中国も「あんな連中に言われたかねえよ」と思っていることだろう。「他国の人権をどうこう言う前に、てめえの国のヤ○中と殺人鬼をどうにかしやがれ」という意見はもっともなのだ。あんな国に敗けたかと思うと本当にムカつくよなあ。でも奴らが強いのはどの国の連中よりも腐っているからにほかならない。いつか、奴らを徹底的に倒すためには、我々も、身も心も奴ら以上に腐敗しなくてはならないのだ（といっても、別に銃や麻薬の解禁を叫んでいるのではない。麻薬以外にも麻薬以上に人心を腐敗させるものはいくらでもこの世に存在する）。

戦争に敗けたおかげでその後の日本にはびこった（かのように見える）民主主義では何故か「人は民主主義に基づいて平和に正しく生きることが正しい」という風潮が国中に広がった。幸いにしてこの俺はわりと早いうちに「正しく生きねばならない根拠など、どこにも存在しない」ということに気がついた。もっとも、そんな根拠などあろうがなかろうが、俺は絶対に間違っていると思うことでも、自分がやりたければいつでもやっただろう。それがまっとうな鬼畜というものである。

何だか自慢話ばかりでいっこうに話が先に進まないが、それは俺が中卒でアタマ悪くて要領を得ないからってことで勘弁してくれよ。膀胱の容量はサオやフグリ同様、かなり大

きくて小便をガマンするのは得意なんだけどな。射○となるとそうもいかないんだけど、それはどーでもいいことなので置いておこう。俺がついでに声を大にして言いたいのは、バイアグラの流行についてで、バイアグラ飲まなけりゃ立たねえような役立たずのチンカス野郎はガンガンバイアグラ飲んでさっさと副作用で死んじまえよ。誰も止めねえって。男の数が減れば減るほど、オレにまわってくる女の数が増えるんじゃねえかという、中卒ならではのさもしい了見でモノ言ってるんだけど、そもそもバイアグラの流行なんて人よりもチ○ポが臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて臭くて太くて、まぐわった女どもからいつも「大きすぎる」と苦情が出る俺には無縁の問題だからねえ、いやあ、チ○ポの大きすぎるのも、ホントに困ったもんだねえ。かなりガバガバのま○こでもなけりゃこちらも楽しくハメられねえんだからやってられねえよ。ああ、困った困った。

この場を借りて、これまで俺のチ○ポが大きすぎて性交時に痛い思いをさせてしまった多くの女性の皆様に深くおわび申し上げます。といっても深く反省しているわけではなく、今後とも機会があれば俺と俺の息子を宜しくお願い致します。なお、これまで太いチ○ポに恵まれず寂しい思いをしてきた女性読者の皆さんの中で「一度でいいから○いっぱいの幸せを味わってみたい」という方は編集部気付で村崎宛てに相談の手紙を出すと運が

良ければ良い知らせが届くことでしょう。

ああ、ホントにどうしようもねえな。話が脱線してサッパリ前に進まねえや。

……で、何だっけ、何言うのか忘れちゃったじゃねえかよ！　こんな長い原稿書かすんじゃねえよ馬鹿野郎！　俺のアタマはちょっと油断するとすぐに妄想電波入り込んで大変なんだからたまんねえぜ。皆の衆もそういうのあるだろう？　え？　ない⁉　嘘つくなあ！

★突然電波講座　妄想戦を勝ち抜くために

……って、つまるところこの世の全ては「妄想戦」なんだよ。現実世界と平行して、別の次元では個々人が発する妄想と妄想が無数にぶつかり合って激しく火花を散らしているんだ。もちろんその闘いに勝った奴がいい目を見て、敗けたやつがドツボにはまって尻の毛までむしられるのは常識よ。自分の正気に少々自身のねえ奴、そうじゃない奴らはシ◯ブとかクサとかキメてテンパッたときでいいから、なんにもねえ空見上げてじっと空間見つめてみろよ。そしたら無数の半透明の小さなヒトダマみてえのが精◯の群れみたいに激しく動き回っているのが見えるだろう。それが妄想戦で飛び交う電波弾なんだよ、電波。ああ、まったくいつ見てもゾッとしちまう光景だよな。見えてもあんまり真剣に見るなよ、奴らは見られてると思うと寄ってくるからよォ。

ど、コレに取り憑かれてるとセ○クスが数十倍気持ち良くなるから便利といえば便利なんだが、ハマリすぎると他のものが何も見えなくなって破滅しちゃうこともあるから、恋愛はしてもいいけどいい加減にやっとけよと俺は言いたいのよ。だから誰かに「惚れる」っていうのは相手の出した淫波にイカレちまって、相手の妄想に取り込まれる「妄想戦の敗北」を意味するものなんだ。ここんトコは大事だからヘラヘラしないで真剣に聞けよ！

男も女も同性愛者も両性具有者も人間は基本的にみんなして「あたし／オレはセクシーで魅力的な人間なんだぜ」っていう妄想をさまざまな形で自分から放出している動物なワケよ。「他人を好きになる」ってのは、相手の出した妄想に取り込まれて妄想戦に敗けてしまうことを意味してんの。コレの悪質な例が結婚詐欺だな。

自分が相手に惚れられるならともかく、簡単に自分以外の誰かを好きになるなんてのは鬼畜として最低最悪の愚行なんだから、エリート犯罪者を目指す諸君らはくれぐれも自重しよけよ。いいか、マジな恋愛なんか冗談じゃねえぞ。

誰かに心を奪われるなんてのは、本来「一番大切なはずの自分」が自分以外の別のものに取って変わってしまうという自己保存本能に最も逆らった、たわけた行為なんだから冗談じゃねえんだって。

また、恋愛という妄想戦はやっかいなもので勝者が必ずしもいい目を見るとは限らない。掴んだ男がカスだったり、致死性の精神障○者ストーカーに惚れさせたらエラいことだからな。

そういうワケでマトモに鬼畜を目指す良い子はマジな恋愛なんかしちゃ駄目だって。俺もさっきからこの「愛」っていう超汚い二文字言葉、キーボードで打ち込むの嫌で嫌でしようがねえんだよ。鬼畜はこういうけがらわしい言葉、あんまり使っちゃなんねえぞ、「努力」とか「友情」とか……うげえええええ……「信頼」「平和」げげげげええええ！

あ〜もう気ィ狂いそうだぜ！　お○んこア○ルセ○クス！　ア○ルセ○クス！　ア○ルセ○クス！

……ああ、心安らぐコトバを連呼したらやっと落ち着いたぜ。ああいう汚い言葉は全人類鬼畜化計画が達成された暁には速やかに「放送禁止用語」に指定しなけりゃ、一言聞くたびに寿命が縮む思いだわ。ああ、それにしてもア○ルセ○クスがやりたい／やられたいねえ。

さて、それでは恋愛（オエッ！）の鬼畜的対処方法についてもう少し書いておこう。

「何でもこの世は思い込み次第」という妄想戦の基本戦略は「恋愛」にも応用がきく。そもそも恋愛の相手を自分と対等の人間だと思うのが間違いなのである。鬼畜エリートをめざす諸君たちは今日から自分以外の異性を人と思わず「穴」だと思え！（女性の場合は「サオ」）、バイセクシャルや同性愛者はケースバイケース）。軽く思い込むだけでは駄目で、心の底から真剣に「穴」だと思い込むことである。

で、妄想戦ってのは日常の中でいくらでも行われている。分かり易い例をあげれば年頃の若者がサカり合う「恋愛」が典型的な妄想戦だ。クリスマスだとかバレンタインデーが近づくと急激に増えるんだよねえ、ヤリてえ男とヤラレてえ女が放つ「淫波」がさあ。これを体験したかったら、歌舞伎町みたいな繁華街に行って街角に立って、フラフラ歩いてるエロい姉ちゃん物色してみろよ。チ○ポの先が何かこう、ムズムズしてくるからよお。それが淫波なんだよ淫波。とびきり淫らな電波のことだ。これもあんまり無防備に受けてるとホントに女を○したくなるからたいがいにしとけよ。歌舞伎町の街角に立って立ててたチ○ポの先で電波受信してみるとホントにすごいぞ～。あたし魅力的でしょ、かぐわしいま○こ持ちなのよフフフ、オレのチ○ポは野太いぜえええ、ああ無性にハメ殺してえ、おいおいそこで無駄にチ○ポ立ててるお前、通りの向こうに立ってる女いるだろ、あの女いますぐお前にハメられてえんだとよ、3万円でいいってさ。ナマ尺口内射○付きで顔射はプラス5千円。早くいけよ馬鹿……なんて声がでたらめにビンビン来るからね。ポン引き電波の言うこと本気にして、街角に立ってる女にイキナリ万札渡そうとして横っ面張り飛ばされた奴もいっぱいいるから淫波サギには気をつけな。

★「恋愛」という妄想戦

ああ、またちょっとハナシがズレたな。確か「恋愛」が典型的な妄想戦だって話をしてたんだよな。そもそも恋愛なんてモンは、たかが性欲に取り憑いた悪性の妄想なんだけ

さあ、新しい朝が来た。起きて飯を食いに居間へやってきた君に「遅いわね、早く食べなさい」とせかすのは君の母親ではなく「母さん穴」という未知の生物だ。こいつはハナがまがりそうに臭い穴の周辺に肉や臓物がたくさんついていて手足が生えている全く不気味な生き物だ。飯を食いながら自分の親父が若い頃の「母さん穴」とアブラ汗をかきながらハメ合って自分を仕込んでくれたことを思いだそう。メシがまずくなること請け合いだがそんな妄想で満足してはいけない。この「母さん穴」はテメエのオリモノ臭えま◯こ穴を何十年間にも渡ってさんざんホジくったのと同じその指で、今朝も俺に食わす飯をじかに触ってといで炊きやがったんだよなあああ、この恥知らずがふざけんじゃゃねえええええ！ と妄想を広げれば不潔感と怒りの感情がこみあげてきて飯は更にまずくなり、君は「母さん穴」への感謝の気持ちを完全に忘れるだろう。それでいいのだ。美味しい飯を食って平和に過ごしていては決して良い犯罪者にはなれない。親子の情愛は全ての「善なるもの」を育てる元凶であり、我々はこれを第一に粉砕しなければならない！ 破滅的鬼畜革命の第一段階はあらゆる家族的信頼関係の打破にある！って低能左翼風にいえばわかるかねえ？ すげえビンボー臭くてカッコ悪いから止めとくわ。

話を戻そう。君の目の前にいる彼女は実は人間ではない！ 彼女の正体は「穴」である。たかが穴の分際で何かの間違いで意志を持ったにすぎない。おそらく太古の昔に地球に飛来してきたＵＦＯ（キ◯ガイどもの妄想／実在しない）ではなく隕石に付いていた細菌のような「穴」がつい最近になって進化して歩きまわっているのだろう。だから君は

「穴」のいうことを真に受けてはいけない。君の目の前にいる「穴」の当面の目的は、人類支配と君のチ○ポの永久獲得であることは言うまでもない。確かに「穴」はチ○ポをさし入れればそれなりにヌクヌクと気持ちが良いが、もったいぶって簡単にヤラせてくれないので実に生意気である。チ○ポを入れて気持ちを良くしてくれる以外に何の使い道もないのに、それはないんじゃないと君が思うのも無理はない。しかし不思議なことに、この国ではたかが「穴」にも我々と同等の権利が認められ勝手にチ○ポを埋めてはいけないという法律まであるから大変だ。

だから専用穴（「恋人」とも言うらしい）のない連中は、ソープや立ちんぼなどの半非合法な商売穴に金を払ってちょっと埋めさせて貰うのが現実だ。鬼畜の俺としてはそういうことに対しては以前から「たかがお○んこにカネなんか払えるか！　お○んこはできればみんなタダがいい」というケチな理由だけで売○には絶対反対なのである。過程はどうあれ結論だけはフェミニストたちと同じというのも不思議といえば不思議だが……。

まあ、そんなことはどうでもいい。世間では、ダイオキシンなどの環境ホルモンの影響で男性の精○が減っているせいか、「穴」なら黙ってやらせろ！　愛だのカネだのツマンネエもん欲しがるんじゃねえ！　日本は戦争に敗けたんだぞ！　貴様まだわからんのかあああぁ！って言うようなバカに男らしい奴はどうやら激減してるようだな。

ところで、オレの知り合いの家の近所には敬虔なモルモン教徒の外国人が住んでいて、彼らは礼儀正しく親切で掃除や挨拶がキチンとしていて町内でもものの凄く評判がいいん

だってさ。こういう「環境モルモン」ならいいんだけどねえ、俺みたいに始終発情してる奴が近所をうろつく「環境悶々」は困るかもねえ。何、つまらねえ？　けっ、悪かったよ！

★妄想「穴」革命とア〇ルセ〇クス

だらだら書いてたら何がいいたかったのか忘れちゃったなあ。どうせ忘れる程度のつまんねえことだろうけどよ。そんなもの読まされる読者の皆さんが可哀相だよな。

……ああ、ええと穴の話してたんだよな、穴。さっき来た電波の妄想によれば、今日から女のことは女と呼ばずに「穴」と呼ぼうっていう世界的な穴運動が今年起こる確率は、晴れた夜のフロ上がりにベランダに出てチ〇ポを立てて腰に手を添えて仁王立ちしているときに、遥か彼方から裸の女が飛んできてチ〇ポがその女の尻穴にすっぽりと突き刺さる確率よりもやや下で、その上の膣穴に突き刺さる確率と同じくらいだろうってことだから、まあ、フェミニストの皆さんもそんなに目くじらを立てなくても大丈夫だぜ。

ただ、俺が幻視した穴運動テロは凄かったぜ〜もうハンパじゃねえの。穴運動テロリストが「穴」って黒々と書かれた紙を、街中のあらゆる公衆便所の「女子用」のマークの上に貼りまくるの。女子用じゃなくて「穴」用だっていうわけさ。凄えよな昔の左翼の過激派以上の無差別意味なしテロだよな。もちろんフェミニストもすぐに対抗して「サオ」だとか「短小」とかいう張紙を公衆便所の「男子用」マークの上に貼りまくるワケよ。「短

小」用の張紙の貼られた便所の前で、「あぁオレは極太だから入っちゃダメなのかなあ……」って途方にくれてるこの俺の姿まで幻視しちゃったよお。俺も鬼畜の分際で妙なところにマジメだからなあ……いくらナンでも「短小用」って書かれた便所じゃ小便はできねえよなあ、はははは。ついでに書くけど、ラブホテルの経営者の皆さんはMサイズだけじゃなくてLサイズのコンド○ムも部屋に常備しといてくんねえかなあ。オレはもう通常のサイズのコンド○ムじゃチ○ポが苦しくて苦しくてタマンねえんだよ、はははは。ほーんとに困っちゃうよな～はははは。いやあホント、俺はチ○ポが小さい奴の悩みって全然わかんねえや。チ○ポ小さい奴がマジでうらやましいよ。俺なんかよお、ア○ルセッ○スが死ぬほど好きなのにチ○ポが太いからホントに大変なんだぞ～！　はははは、世の中、上手くいかないねえ。外人みたいに太くてもフニ○マ○ならまだ良かったのに、オレのはパリダカではなくカリ高で黒光りしたガチガチの逸品だもんなあ。「なんでも鑑定団」に出したら一千万円ぐらいの値がつかねえかなな、はははは。鑑定してくれるんなら俺はチ○ポ出すぜ。でも誰が鑑定するんだろうね。「チ○ポ鑑定歴50年」とかいって、イカにもそれらしい好きモンのババア出てきたりしてな、はははは。ああ、もう少し小さいチ○ポに生まれたかったなあ、ははははは。だからさあ、男の価値はチ○ポの大きさじゃないよ、ウン。いっくらチ○ポ大きくてもア○ルセ○クスができなきゃ意味ねえんだからさあ。いやあワリイな、読者諸君、何だかすぐにチ○ポ自慢の話に脱線するねえ、でも俺が自慢できるのは何もチ○ポの太さだけじゃねえぞ。ア○ルオナ○ー歴27年を誇りながら

一度もキレ痔になったことがないという「鉄の肛○」も自慢の逸品なんだからさあ。ははははは、凄えだろう。鬼畜なんだから尻も鍛えないとな。

これまで何度も書いたけど尻はいいぜえシリはよおおおおお。コレ読んでる奴で尻の開発が済んでねえ奴はせめて指が二本入るぐらいは鍛えておけよ。男も女もいいオトナになって尻の性感も開発されてねえなんて、もうド最低のイモだからな。

この本読んでる東京以外の地方の読者には親切で教えといてやるけど、いまの東京じゃ○穴が処女の男なんて糞ダサすぎて牝犬はおろかシビレフグも相手にしてくれないんだぜ。マトモな男はみんな尻○の性感開発がとうに済んでいて、親しい男の友人同士で掘りあったり、双方向ディルドを装着した恋人の女に尻を貫かれてよがり狂ったりして楽しむのが朝のカフェオレ以上に常識化して一般に普及してるんだから、○穴開発は絶対に上京前に済ませておかなきゃダメ。でないと常識と良識を疑われるぜ（全て村崎の妄想です‥編集部注）。こないだもよォ、近所で泣きながら警官に連行されてる若い兄ちゃんとその後からバツが悪そうについていく若い姉ちゃん見かけてさ、後でタバコ屋のおばちゃんに「どうしたの」って聞いたら、その兄ちゃん、ナンとアパートの部屋で性○中に女に両足首をつかまれてア○ルなめをされて「やめろ変態！」とか言って怒り出して女を蹴飛ばしたんだって！　全くどうしようもねえガキだよな。○穴なめられるぐらいでビビる野郎が女連れ込んでセ○クスなんかすんじゃねえって。十年早いんだよ！

しっかしまあ、○穴ってのは可愛いよな。尻○のことを考えるといても立ってもいられ

ねえよ。こじつけのようだが良い鬼畜になるにはできるだけ長く暇さえあれば寝ても覚めても○穴のことばかり考えるといいぞ。あんまり普通の人間は○穴のことは考えないからねえ。普通の人間と同じコト考えてちゃ、普通のワク内の思考しかできなくなるだろう（屁理屈）。だから尻○がイイんだよ。誰よりも深く熱心にただひたすら○穴のことだけを考えて考えて考えまくれ。そうすればいいことなんかまるでなくても、とりあえずは暇が無意味に潰れて死ぬ時がそれだけ迫るから大変な損失だ。

ああ、俺はこの一生であと何人何回、ア○ルセ○クスができるのだろう……。そんなふうに遠い街の灯を眺めながら煙草をくゆらせて、しみじみア○ルセッ○スに思いを馳せれば、傍目には「ああ、あの紳士は何か高邁なことを考えていなさるのだろう」とか誤解されたりするもんなんだよ。全くよォ、人間なんてどいつもこいつも、すまし顔のウラでどんなコト考えてるか分かったもんじゃねえ。俺がたまにいく駅前のマ○ドの店員の姉ちゃんなんか「いらっしゃいませ」とか眩しい笑顔で言うけど、そいつなんか、朝の8時から仕事が終わって恋人の部屋でキメるうす汚ねえま○このことばっか考えて、うっすら濡れて口からヨダレまでたらしてやがんだぜえ。俺なんかもう何度も思わずキレかけて「まじめに仕事しろ！　この腐れま○こ女が！」って叫びそうになってタイヘンだよ。厨房でハンバーガー作ってる連中もみんな似たような意識の高い連中ばかりで、十数時間後に恋人とキメるア○ルセ○クスのことしか考えていねえ。ホントにマ○ドの○○駅前店の店員は揃いも揃ってま○こ中毒の性欲労働者ばかりだぜ！　マ○汁のしみすぎた指で作られる

オリモノ臭えハンバーガー食わせられる客の身にもなってみやがれよ！　わあかってんのかこの糞があああああ！（全て根拠のない言いがかりです。気にしないで下さい：編集部注）

★突然質疑応答　善人に墜ちないためにはどうすればいいか！

……で、一体俺は何話してたんだっけ？　ア○ルセ○クス？　違うよな。穴だよ穴、女を女と思わず穴だと思えば割り切った交際ができるって話してたんだっけ？　まあいいや、話続けよう……って何？　俺のハナシは意味がなくてつまんねえ？　あたりまえだろ！　馬鹿野郎！　マトモなことや意味のあることが読みたけりゃ、朝日新聞とか岩波書店の本読んでろよ、陰でコソコソちん○立てる良識変態のインテリ野郎が偉そうにコイてんじゃねえよおおおお！　『危ない28号』が上品な教養雑誌だとでも思ってんのかァ？この雑誌は下品な悪事の強要雑誌なんだよ！　見てわかる質問すんじゃねえええええええ！

……って、ああ、マトモな意見にいちいち反論するのはホントにめんどくせえなあ。俺はこの連載で正しいことを語るつもりは、これっぽっちもねえんだからいちいち文句たれんなよ。これだから中卒以上の高学歴な連中はイヤなんだよ。

だからよお、「穴」なんかと真面目に恋愛してたら身の破滅だし、まちがって「優しい気持ち」になんかなっちまったら鬼畜としてすげえ堕落だからやめとけって言いたいのよ。

何よりもそんなことをして間違って「愛」（うげえええええ！）に目覚めたりしたら、俺が一番怖れている「善人に墜ちてしまう」かもしれないぞ！　いやあ全く恐ろしいねえ。こんな腐った時代に善人になるぐらいなら、ケツに無理矢理4百リットル○腸ブチ込まれて糞たれながら死んだ方がよっぽどマシだぜ糞野郎。

って、気がついたら何かさっきからダラダラと意味不明の訓たれてるけど、これはきっとこの混迷の世紀末を強く生き抜く鬼畜としての心構えを話してるんだな。わかりやすく箇条書きにすりゃあいいんだろうが、それじゃすぐに原稿終わっちまうから、更にダラダラいくぜえ。

おや……原稿書いてたらいろいろと過去や未来や現在の読者から質問の電波メールが続々届いているようなので、たまには誠実に答えてやろう。どれどれ

●質問者／埼玉県所沢市の主婦（54歳）　回答者／村崎百郎（巨根／下○泥棒）

Q：バブルがはじけてからというもの、それまで順調だった主人の仕事（不動産業）が全く上手くいかなくなり困っています。家計は傾いて八方ふさがりで本当にどうしようもありません。借金は増えるばかりで取り立てに追われ、土地や家屋敷も、軽井沢の別荘も、4台あったベンツやジャガーも全て手放しましたがそれでも全然足りません。老後の不安はつのる一方で、主人の浮気も気になります。私は一体どうしたらいいのでしょう？　この頃では生きるのが嫌になってきました。

Ａ：さっさとシねよ。

こらあああ！　だあああれが人生相談やるっていったあああああ！　冒頭から辛気臭え質問するんじゃねえええ！……アタマくんなあ。だいたい「質問」なんてモンはそれができた時点で回答も一緒にできあがってんだよ。それを自分じゃなくて他人の口から聞きたくて悩み相談したりするのがこういう連中の常套パターンなんだが、「持ってる悩みを他人に相談してみようか」って考えた時点でこいつはアウト。やったら被害者面しやがってよお、何様のつもりだあ？　どうせお前、バブルん時は父ちゃんのカネでさんざんいい目を見てきたんだろうが。誰も同情しねえって。自分で考えろって。こういう不安かかえた連中に善人面して猫なで声ですり寄って「それはねえ、あなたの先祖供養に問題があるんですよおおお。私達のご教主様にすがってみませんかあああ？　そうすりゃ不安もなくなって死んでから極楽に行けますよおおお。なあに簡単です。残ってるお金や財産をみんな私たちに寄進しさえすればいいんですからねえええ。アナタ、自分の運命に感謝しないと駄目ですよォ。私たちに会えたのがあなたの人生最大の幸運です。ホントに良かったですよねえええええ」っていうのがご立派な霊感商法の手口というものだ。

いいよなあ、人の不安につけ込んでガンガン儲けるなんて、マトモな良心を持ってちゃ絶対にできねえよな。霊感商法の連中はみんな素晴らしい鬼畜エリートだよ。こういう妄想戦に敗けて相手の妄想（霊界や死後の世界があるとか、タタリがあるとか畳がないと

か……）に取り込まれてたら尻の毛はもちろん、直腸にたまった宿便まで全部抜かれるハメに陥るんだぜ、恐ろしいねえ。

さて、言うまでもないが、鬼畜エリートを目指す我々は、霊感商法でしこたま儲けることはあっても、絶対に霊感商法などにボッタクられてはいけない。霊感商法から身を守るためにはどうすればいいかといえば、俺の例をあげると、「積極的に発狂しちまえばそれでいい」というのがある。霊媒よりは売○女が百倍好きな俺は、俺の前で俺の前世がどうだとか守護霊がどうのと言う野郎は、老若男女を問わず全て間髪を入れず発作が起きたフリをして奥歯が折れるまで激しくブン殴ることにしている。

基本的に宗教家や霊能者というのは全て悪質な電波系のキ○ガイだと思って間違いなく、我々にはこういう連中とマトモに対話をする義務も必要も全くない。というか、言葉での会話は一切無駄だからやめとけ。こういう連中は一応は我々と同じ言語を使って、それが通じているように見えるが、それは大きな妄想だ。何しろ、霊の声や姿が見えたり霊界があるというんだから、ホントにそう思っているなら人間として終わっている。霊の声や姿なんかこの俺だっていつも見たり聞いたりしてるが、それらは間違いなく俺の狂ったアタマに取り憑いた妄想である。そんなことはちょっと考えれば分かることなのだ。それなのにあえて霊だの霊界だのタタリだのと言うのはキ○ガイでなければ詐欺師に間違いない。したがってそんな奴らとマトモに会話する必要は全くない。いや、詐欺の基本は対話なのだから、連中と喋ってはいけないのだ。詐欺の被害を防ぐ一番の方法はコミュニケー

ションを一方的にぶち壊すことだ。だから俺は霊がどうのという連中は容赦なく殴り倒すことにしている。相手が詐欺事件を起こす前に、こちらが傷害事件にしてやるのだ。
だから詐欺師と口なんかきいちゃ駄目なんだって。オウム事件でも味噌だか醤油だかと名前が似てる坊ちゃん面した小僧（上佑だと思います：編集部注）がウダウダ理屈こねて取材陣を翻弄してたろう？　マトモに口きくからそういう目にあうんだって。とにかくだまされそうだなって思ったら、その場をぶちこわしちまえばいいんだよ。暴力嫌いならイキナリ裸になって大声で「ベサメムーチョ」歌いながら脱○して相手の顔に糞塗たくってやれよ。それで笑顔で糞なめて平然とした顔して「う～ん、テイスティ！」とかいうような怪物は『お尻倶楽部』の常連ス○トロ投稿者に違いないいんだから絶対に相手にしちゃなんねえ。すぐに机をひっくり返して全速力で逃げろ。
こう書くと「自分は便秘ぎみですぐに糞なんか出ません」という奴もいるかもしれないが、だあから俺は日頃からア○ルオナ○ーで尻穴拡張して鍛えておけって口酸っぱくして以前から言ってるだろうが！　アナ○オ○ニーは意外なところで役に立つんだぜ（嘘です：編集部注）。
そういうワケで、この質問者のオバちゃんには自分の人生は自分で切り開く必要があるのよ。別に俺はカレーの隠し味付けが上手な和歌山の主婦Mちゃんを見習えって言ってんじゃねえからカン違いするなよ。とにかく黙って被害者意識持って泣いてるだけじゃ、そのうちそこに付け込まれてモノホンの被害者になっちまうから、このままウジウジした態

度あらためねえなら、どうせ生きてたってしょうがねえからさっさとくたばれって言ってんだよ。そうそう、ヘタに財産なんか持ってるからつけ込まれるんだよな。仕方がねえ、俺がそういう財産みんな貰ってやるから有り難く思えよ、銀行の口座番号と名義は……なんて詐欺が多いから気を付けろって言ってんだよ。わあったなババア！

●質問者／板橋区の男子学生（22歳）　回答者／村崎百郎（キ○ガイ／放火マニア）

Q：いつも村崎さんの下品な原稿を読んでアキレています。あなたのような超最低のゲス野郎は日本の恥です。一体、どうやったらそんなにバカで卑しくて下品な文が書けるようなクズライターになれるんですか？　あなたの品性の愚劣さと下劣さはとても学歴が中卒だという理由だけでは説明がつかないと思います。ほんとに戦争で死んでいった英霊の皆さんに恥ずかしくないんですか？　私はとても憤っています。

A：いやあ嬉しいな、ありがとう。そんなにホメられるとテレちゃうよォ。

ああ、何て甘く美しい響きなんだろう！「あなたのような超最低のゲス野郎は日本の恥です」って、コレだよコレ！　俺はこんなふうに人から罵られたくてライターやってるんだからホントに嬉しいねえ。さあ、もっとだ！　もっと言ってくれ！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎

め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　俺を憎め！　みんなの憎悪が俺の活力なんだああああ！
フウ……いいファンレター貰うとよ、ああライターやっててて良かったなってマジで思うよな。「どうやったらそんなにバカで卑しくて下品な文が書けるのか」ってか？　そりゃあオメエ、自分がホントにバカで卑しくて下品にさえなれば、書くことも自然にバカで卑しくて下品になるに決まってるだろう。これがねえ、一般の良識ある連中にはなかなか難しいらしいんだよな。俺だって、「努力」って汚いコトバは嫌いだが、これでも俺は人よりもバカで卑しくて下品になるべく日夜血のにじむような「努力」してんだから、当然といえば当然なんだよ。俺はいつもこの世の穢れを司る汚穢神ダストグラマトン（妄想の産物）に、「誰よりもバカで下品で卑しいド最低の鬼畜になれますように」って日夜祈りを捧げてるんだからね。他の無自覚なクズどもとは気合いの入れ方が全然違うんだよ。俺みたいに品性を最低レベルに保つのは普通の善人どもにはちょっと無理だろう。ま、何つうかその～これも「才能」ってやつかねえ、ははは。「クズになるのも才能がいるのか？」って思うかもしれないが、いるに決まってるだろう。素質のねえ野郎には無理だね。
たとえばお前らいつも便所でクソするだろう。私はそんなものしません！　なんて清純そうな顔してる若くてキレイな美人だって、記名アンケートに「将来の夢は結婚」と書いてクラス中を暗くしちまうような造形的にバランスの悪すぎる顔した不幸な女（激醜女）

だって、そいつが人類である限り、この世にこれまで尻○から糞をひり出したことのない奴はただの一人もいねえよな。で、大抵の連中は糞を便所で思いきりひり出した後は必ず紙で尻を拭くだろう。ちょっと潔癖症の奴なら拭いた紙に糞がつかなくなって尻穴から血がにじむまで何度も何度も拭くだろう。まあ、普通は拭いた紙に糞がつかなくなるまで拭くよな。それをあとでパンツに糞がこびりつく程度にいい加減に拭き残すような精神が大切だと俺はここで声を大にして言いたいのよ！

脱○後にあえてきちんと尻を拭かずに肛○に糞を残しておく。それが汚穢主義者としての〝粋〟であり侘び寂びの心にも通じるものなんだよ（嘘です。全くのデタラメです：編集部注）。優れたクズになるためには「尻についたクソを拭き残す余裕」が必要なんだよ。マトモな精神持った上品善人どもにはわからねえだろうなあ。ははは。

何？　汚い？　当たり前だろ、俺はけた外れにバカでクズで下品で卑しいんだから不潔ぐらい当たり前じゃねえか。だいたいなあ、どんな美人だって偉い奴だって腹ン中にとびきり臭え糞溜め込んでんだぜ！　お前らも美人を見たら乳首やま○この妄想だけで満足しないで、同時に彼女の尻○や直腸にある野太い糞や腸壁にこびりついた宿便の匂いもちゃんと妄想しとけよ。そういう真実を見つめる目をバランス感覚がこれからの時代には必要になってくるんだからな（こんな奴に言われたくありません：編集部注）。

俺は昇る朝日を拝みながら「今日も下品な一日でありますように、世界人類が一刻も早くゲスで下品な鬼畜になれますように」ってみんなを代表して祈ってるんだから有り難く

思えよ。ここだけの話だけどよお、この国の腐敗は、見かけは糞政府や糞官僚どもの糞努力のおかげで成り立っているように見えるかもしれないが、ホントは俺が毎日お日様に祈ってるからなんだよ。凄いだろう（妄想）。全ての諸悪の根源はみんなこの俺の祈りに端を発しているんだよ。

日本が戦争に敗けたのも俺のせい。長引く不況も俺のせい。銀行の破綻と急激な円安も俺のせい。阪神淡路大震災も俺のせい。一連のオウム事件も俺のせい。和歌山で起きたカレー毒物混入事件も俺のせい。鎌倉幕府が倒れたのも俺のせい。阿片戦争が起きたのも俺のせい。フランス革命もインド&パキスタンの核実験もボスニア・ヘルツェゴビナの紛争もみんなみんな俺のせい。タイタニックが沈没したのも俺のせい。百年戦争も俺のせい。ベトナム戦争も中東戦争も俺のせい。大化の改新も、本能寺の変も、クルド人の虐殺も、ソ連の崩壊も、エリツィンの病気も、アイルランド紛争も、テポドンの実験も全部全部俺のせい。こんなに悪さこいてんのに一向につかまんねえんだよ。はははははは。なんったってアタマからゲス電波飛ばしてるだけだかんな〜。

こういうコト書くと、マジで信じて「世界平和のために村崎を殺そう」って思う電波戦士が出てくるだろうって心配するかもしれないけど、この雑誌の読者はみんなインターネットに接続できるようなアタマのいい連中だから、そこまでハジけた馬鹿はいねえだろう。電波系の俺はプロバイダーと契約した覚えもないのに妄想インターネットと生涯接続してるんで、これ以上めんどくさい繋がりはいらねえからインターネットは全くやってな

い。よく知らないけど聞くところによれば、オレの妄想インターネットなみに狂った連中もいるらしいが、そういうハイテク・キ○ガイはローテク・キ○ガイの俺とどんなふうに違うかちょっと興味あるなあ。でもまあ、コンピュータなんて難しそうだし、中卒にはキツイかねえ。どっかに『中卒にもわかるインターネット』とかいう本ねえかな。

●質問者／都内の女性（年令不祥）　回答者／村崎百郎（ま○こ中毒患者／ア○ルマニア）

Q：村崎さんの素敵な巨根話を読むたびにアソコが濡れっぱなしてうずきます。一度でいいからぶっといイ○モツを私のアソコとア○スにぶちこんでかきまわしては頂けないでしょうか？　村崎さんの太いチ○ポのことを考えると今夜も大人しく眠れそうにありません。あは～ん、ウフ～ン！

A：援助挿入の申込みは常時受け付けておりますので編集部気付村崎百郎宛てにお送り下さい。なお、美醜の感覚が完全に壊れている村崎は女性を容姿で選り好みするような趣味はなく、基本的に穴さえあるなら異星人とでも平気でヤレるセ○クス中毒患者ですが、写真や汚れた下着を同封すると返事が早くなるともっぱらの評判です。

んんっ、戦後も50年以上経つというのに世の中には太いチ○ポに不自由して困っている女性がまだまだ沢山いるんだねえ。こういう問題は政府の対応を待ってたらとても埒があ

かないから大変だよ。何とかしたいがチ○ポは一本しかねえし、地道にやるしかねえなあ。そういうワケで順番が回ってくるまで少々お待ち下さい。

●質問者／都内の男性（24歳）　回答者／村崎百郎（人間のクズ／通り魔）

Q：村崎さんの原稿を読んでア○ルセ○クスがしたくなって2歳年下の彼女に頼んだら「冗談じゃないわ！　そんなことは頭のおかしい人のすることよ」と断られてしまいました。彼女はお嬢様育ちでとても上品な美人です。セ○クスは一応しますが、オーラル行為は嫌いでフ○ラはほとんどしてくれません。そのくせ僕が彼女のま○こをナメるのは気持ちが良いらしく、やめようとするといつも「ああン、もっとしてよ」とせがみます。育ちが上品なワリには彼女のま○こは鼻が曲がりそうになるぐらいに程よく臭くてナカナカ美味しいです。これでア○ルもやらせてくれたら言うことなしなのですが、どうにか彼女にア○ル開発を承諾させる方法はないものでしょうか？

A：くう〜この野郎ォ〜何だと思ったら彼女の自慢話かよ！　聞いちゃいられねえぜ！　単に殴り倒して無理矢理やりゃあいいだけの話じゃねえか。んなことしたら、逃げられるってか？　いーじゃねえか「穴」はそこらじゅうで発情してムンムンフェロモン出しまくりでうろついてんだからよお。しかしまあ、気の毒なハナシではあるよな。
　相談者のこいつ、ちゃんと彼女に状況を説明してないんじゃねえのか？「はっきりいっ

て、いまの日本のナウいヤング（超死語）でア○ルセ○クスを楽しんでないカップルなんかただの一人もいねえんだよ！　タイや韓国や中国や台湾やベトナムやインドネシアなどアジアの近隣諸国の若い連中だってみんな日本に追いつき追い越そうと先を争って尻○広げてア○ルセ○クス楽しんでるんだぜ！　昔は限られた連中たちの密かな愉しみだったのがデモクラシーだとか情報公開制度だとか人権意識が急速に普及して今じゃア○ルセ○クスは恋人たちの必須アイテムで、世界共通言語の一つにもなってるんだぜ！

たとえば先進国首脳会議でも、会議場が重苦しい雰囲気に包まれて煮詰まったときにア○ルなめ好き大統領のクリントンあたりが「ところで私が昨夜楽しんだア○ルフ○ックは……」って切り出すとたんに各国首脳の面々も顔を明るくして「そうかい、オレはねえ……」なんて言いだして和やかで明るい雰囲気に変わっちゃうんだよ！　ああもう「スピーク・ラーク」の比じゃねえよ、それをわあかって拒んでんのか、この腐れま○こがあ！っていえば「ごめんなさい！　私が悪かったわ」って言って、四つん這いになってその場で尻を高くつき出してア○ルセ○クスを求めることだろう。いやあメデタイねえ。

だいたい去年話題の大ヒット映画『タイタニック』でも、一番感動的だったのはラストのア○ルセ○クスシーンだったじゃねえかよ（村崎には見えたようですが、そんなシーンは存在しません：編集部注）。俺も思わずチ○ポ立って先っちょから涙の代わりにカ○パー液が出たねえ。そういえば90年代に入ってから作られた恋愛映画のほとんどのセ○クスシーンはア○ルセ○クスになってるしな（嘘です。この項に限らず村崎の書くことは全

てデタラメです：編集部注）。とにかくア○ルセ○クスを拒むような奴は男も女もロクな奴ァいねえよ。人格とか品性とかがちゃんと卑しい立派な鬼畜はみんなア○ルセ○クスが好きさ。

しかし、ここまでくるにはずいぶん長い道のりだったねえ。過激派連中がよど号をハイジャックして「ア○ルセ○クスの自由を認めろ。認めねえなら俺たちはこんなま○こ臭え国にはいられねえ」って言ってア○ルセ○クスをしに北朝鮮へ渡ったのはもうずいぶん前になるよな。「ア○ルセ○クスも認めねえで国際空港もねえだろう！　空港を開港する前にまずはお前らの○穴を開け！」って成田の農民が立ち上がった成田空港ア○ルセ○クス闘争も忘れられねえ事件だよな。機動隊の中にもホモやア○ルセ○クス好きが沢山いたからアレはツライ闘いだったたと思うぜ。そう思えばこれまで日本の歴史は全てがア○ルセ○クスだったような気がするねえ。こうして、いつでもア○ルセ○クスが安心して楽しめる国になったのは、みんな俺たちのじいちゃんやばあちゃんたちの世代から親父お袋の時代まで多くのみんなが必死で豊かなア○ルセ○クスを夢見て頑張ってきたからなんだよねえ。みんな顔射……じゃなくて感謝しないといけねえよなあ。いまシブヤとか新宿の路上を偉そうに歩いてるコギャルとか女子高生とかいうガングロ、まだら白髪頭＆ニキビ面でヤニ臭くてうす汚ねえ便所交際好きのクソガキ売女どもを増長させて繁殖させたのもみ〜んな前の世代の連中が激しいア○ルセ○クスを夢見て頑張ったおかげなんだよなあ。

俺はああいう小便臭い若い女どもが大嫌いでよお。女はやっぱ腐りかけた年増がイイん

だよ。小便臭い女よりもま○こ臭い女の方がだんぜんイイにきまってんだよ。ま○こ臭さにしても、女が真の意味でま○こ臭くなるのは三十代も後半からで、四十越えたらもう、側にいるだけてタマンねえぜ糞野郎。何しろ年増女は身体のパーツの一つ一つに年期入ってて、たとえば肛○にしても、ひねり出した糞の量が若い女とは全然違うんだから、ウンコ臭さの芳醇さも実に味わい深いんだぜえええええ。思い出しただけでハナが曲がりそうでチ○ポ立つぜ。だから若い女諸君はできるだけ早くま○こ臭い女になれるように、せいぜい安値でクソ親父相手の便所交際でもしてさっさと腐れよ。いまの時代のコギャルどもはいいよな。たいした努力もしないで流行さえ追いかけていれば立派に腐れるんだから楽でいいよな。

相談者の問いに戻るけど、とりあえず最近のバカ者（若者）どもを説得するには「流行ってんだ」っていえばイチコロだって（笑）。特に田舎のツッパリとかな（笑）。ナンせ連中は親や先生や社会には逆らえても流行には全く逆らえない従順な奴隷だかんな〜。「流行の下僕」ははは、笑っちゃうよな。広告代理店とかトレンドセッターの引いた営業戦略の線上で素直に踊るしか能がないんだから全くミジメな連中だぜ。そうやって妄想の制服着て何が楽しいんだかわかんねえけど、とにかく人間ってのは慣れるのが好きな動物だから、たとえハマッたのが泥沼で、腰まで泥に浸かってヒルにたかられて血を吸われても、それなりに快感を見いだして楽しめちゃうのよ。つくづくいい加減な動物だよ。

俺たちの浸っている幸せが養豚場の豚の幸せだということを決して忘れるなよ。屠殺さ

れるその直前までは、丸々と肥え太るように美味しいエサが与えられているだけなんだからな。まあ、それも幸せには違いないけどな。

ここで「穴」に話を戻そう。我々は「穴」の表面上の美醜にこだわる必要はまるでないということを忘れてはならない。実は俺のアタマの中には「美人」とか「醜女」とかいう言葉はそれほど意味がない。というか全く気にならない。「美人」だからやりてえとか「醜女」だからやりたくねえとかそういうことは一切考えたことがない。そもそも俺は「美人」とか「醜女」の違いがあんまし良くわかんねえんだよ。

俺にとっては女の区分はたったの２つしかない。やらせてくれるのが「良い穴」でやらせてくれねえのは「悪い穴」だ。それ以上に女について考えるのは時間の無駄だし、「無駄な勃◯はなるべく避けて、立ったチ◯ポは即挿入」という単純明快なセ◯クス人生を送るのが理想なんだから付き合う「穴」の性格なんか考えたこともねえんだよ。

考えても見ろよ。女の美醜ったって皮一枚の問題だぜ。少々顔形が整っていようが崩れていようが、男だって女だってどいつもこいつも皮一枚下は血と肉と脂肪がぶよぶよ詰まった汚穢袋みたいなモンなんだから容姿なんかどうだっていいんだよ。やっぱ女の良し悪しはま◯こだよま◯こ！　ま◯こ以外は本当にどうだっていい問題なんだよ。俺はなるべく臭くてグロいま◯こが好きだなあ。肉ヒダを押し開いて出てくるピンク色の肉とま◯汁の味がたまらなくイイんだよなあ。かたくすぼまったア◯スのシワが多くて深ければ深

い程たまんねえよなあ。それさえあれば顔なんかどうだっていいよ。フ○ラやア○ルなめが上手ければいうことねえけどよな。とにかくタダでヤラせてくれるならそれ以上、相手の性格の良し悪しなんかどうだっていいね。やった後で金くれっていう女もいるけど、そういうのに対してはすぐにその場でチ○ポを立てて「身体で払う」ことにしている。だって金払ったら買○になっちまうじゃねえか、俺は売○も○春も絶対反対だかんな。お前らもたかがま○こに金なんか払うなよ。金払う奴が一人でもいるからコギャルとかいう「穴」どもが増長するんだよ。いいか、ま○こはタダが基本だぞ。タダでやれよタダで！

そういうわけで俺は顔の美醜で売ってる「穴」って嫌いなんだよ。だから「アイドル」なんて腐れ穴には何の興味もないね。事実これまでアイドルなんかマジで好きになったりブロマイド買ったりしたことなんか一度もねえもんな。ああいう幻想商売も霊感商法と同じで悪質なボッタクリに違いはないんだけど、ホントによく夢中になってアイドルの追っかけとかできるよな〜って感心するぜ。

俺は自分のチ○ポをさし込める可能性のまるでない「穴」には何の興味もわかねえよ。「アイドル」なんていう実際にやれねえ女に欲情してどうすんだよ。考えるだけ時間の無駄。それに清純アイドルは雑誌の写真見たってま○こはおろか乳首も出しやがらねえでホントにムカつくよなあ。着衣のままのアイドルのカラーグラビアなんてホントに資源のムダだよな。どうせ男のま○こ欲そそるだけしか能がない糞女が脱ぎもしないなんてナメんじゃねえって。ああ、そんなつまんねえ写真を印刷された紙が可哀相だねえ。紙の原料作

るのに切り倒された熱帯雨林も泣いてるぜ。今からでも遅くないから政府も「アイドルの着衣のカラーグラビア禁止法案」とか出さねえのかね。脱ぎもしないでカラーグラビアに載るなんて全くとんでもねえぜ。

俺はアイドル見てるとその背後の仕掛け人とか商売人どもの影がちらついて、せんずる気も全く起きねえよ。「へっ、オメエら低能どもはこの女で欲情でもしてろよ。オラオラちゃんとカネ払って写真集買ってからだぞ、このバ～～カ！」とか言われてるような気がしてひたすらムカつくだけなんだよなあ。お前らそう考えたことねえのか？

我々は、商売人たちによってメディア上でばらまかれる「欲望を刺激する情報」にいちいち律儀に反応して食いつく義務なんかどこにもないんだ。与えられる情報をヘイヘイありがたがって素直に受け取ってばかりいては無害な善人に墜ちてしまうから気をつけろよ。

わかったらアイドルグッズ持ってる奴らは肥だめに捨てるか野焼きするかお宝ショップに売りに行っちまえ！　アイドルでせ○ずりこく時間があったら、地元の駅のキヨスクの姉ちゃんに「出身中学どこォ？　今度タダで一発ア○ルセ○クスやらしてくんねえかなァ」って口説いたほうが十億倍もマシだってば。

だからアイドルで抜くなら、いっそのことその背後にいる仕掛け人とかプロデューサーで抜けよ。秋元だとかコムロだとか思い浮かべてチ○ポしごいて抜いちゃうんだよ。試しにやってみろよ、秋元なんか白いモチ肌のケツがなかなか良くて尻○のシマリもサイコー

で一度抜いたら愛しくてたまんなくなるぜ（妄想）。まあ、俺ぐらいの粋な変態鬼畜になると、みのもんたや木村太郎あたりの親父タレントでも充分楽しんで抜けるけど、アイドルで抜くのがやっとの連中にはちょっとキビシイだろうね。まっ、諸君らは天童よしみやヤワラちゃんあたりで練習しとくのが適当じゃねえか？　慣れたら田嶋陽子と94時間耐久セ○クスするような激しい妄想オナ○ーに進むといい。ちゃんと克明に身体の細部や排泄物までしっかり妄想して抜くんだぜ。想像力とや妄想力を鍛えるには良い練習になるだろう。

●質問者／大阪の男性（19歳）　回答者／村崎百郎（ゲス人間／卑怯で卑劣なクズ中年）

Q：コオラ村崎、まだ生きてんのかテメエは！　たかがキ○ガイ中卒の分際で調子コイて雑誌に文なんか書いてんじゃねーよ。いい加減にしねえとマジで殺めるぞこの野郎、俺ァ少年法があるから今なら何人ブチ殺しても絶対に大丈夫なんだからお前なんか怖くねえぞ！　しっかし、何で精神病院はこういうキ○ガイを野放しにしておくんだよ。警察は何をしてんだァ？

A：ご声援ありがとう。声援ばかりじゃなくて千円札も百枚ぐらい送ってくれたって俺は一向にかまわねえよ。

実に正しい反応だねえ。こういう若い奴、好きだぜ（笑）。馬鹿でナマイキでなけりゃ

若い奴の価値なんか無いに等しいんだから読者諸君もガンガン馬鹿でナマイキ言って、もっと世の中を不愉快にしてくれよ。

いやあしかし、こんなに正義感のある若者がいる限り、まだまだ日本の将来は明るいねえ。俺ももっと頑張って鬼畜妄想ばらまいて若い連中の性根を腐らせなけりゃ駄目だなコリャ。

ただ、こいつも精神病院うんぬんの件に関しては完全に誤解しているようだからちょっと説明してやろうね。俺ってとことん親切だよなあ。

精神医療の妄想業界も競争（意味不明：編集部注）が年々激烈に盛んになってきてねえ。どの病院も重度の有名患者獲得のために専属のスカウトが全国を飛び回ってリーグ戦優勝のための逸材探しの青田買いをやってんのよ。まるでプロ野球みたいにさ（嘘です：編集部注）。

老舗の●●病院なんか密かに東京タワーに電波線を接続してそこから発狂電波飛ばして患者増やしに躍起になってるんだけど、電波が弱くてあんまり効果ないみたいだねえ。シ○ブでテンパった連中がときどきうまくハマって暴れるのに一役かってるんだけど、シ○ブ中はポイント低いから安くてダメなんだってよ（意味不明：編集部注）。スカウトたちはみんな半透明で空飛ぶ円盤に乗って全国をかけ巡り、ヒマこいてるときは趣味でイギリスへ飛んでミステリーサークル作りをやってるらしいけど、大体はクソ真面目に見どころのあるキ○ガイを求めて全国各地を飛び回ってるんだよ仕事とはいえエライよなあ。

スカウトは素質のある子供や若者を見つけると、至近距離から電波飛ばしてそいつの発狂指数を勝手に引き上げるんだ。昨年●●●市で幼女に馬乗りになってメッタ刺しにして殺した●●●●も、同じくテンパッて登校途中の●●●●ちゃんを殺した●●市の●●●●も、みんなスカウトが良い仕事をしたおかげでドラフト会議でも大人気。見事にキ○ガイ病院のマウンドに立ってスター選手になれたからホントに良かったよな（良くありません：編集部注）。

スカウト会議のことはもうみんな知ってるよな。妄想インターネット上にある妄想犯罪甲子園でその年活躍した人気のキ○ガイ犯罪者を一堂に集めて、全国各地の精神病院に均等に分配する画期的なシステムだ。こうすりゃあ全国均等なレベルでキ○ガイが分布できて環境にもいいだろうってワケだ。原発みたいに目先の金で無知な田舎の農民や漁民だまして地方にばっか原発を建設するような非道なシステムと違ってこれは実に公平でイイ話だよな。「キ○ガイは国民みんなで引き受けよう」ってホントに素晴らしいじゃねえか。何、何だ？　そんなの知らないって？……まあ確かに表のインターネットじゃ検索しても出えねだろうけどこの業界じゃ知らない奴はモグリだから覚えときな（これも嘘です。全てデタラメです：編集部注）。

もちろん超優秀なエリート最低キ○ガイのこの俺のところにはナンと0歳児の頃からスカウトが現われては「ウチの病院に来ませんかァ？　ウチにはいい医者もハイホーなクスリもみんな揃ってます。ウチに入院してくれたら世界イチの超ウルトラ・スーパー・エキ

セントリック・デラマイッタ・キ○ガイになれますよ！」って、赤ん坊のおれがオフクロのおっぱいにむしゃぶりついてングング母乳飲みまくってる横で、怪しい野郎がそんなつまんねえコマーシャルを延々わめくのよ。アレはホントに迷惑だったなあ。

でも、いくら契約金積まれたって、俺は金だけじゃ動かない鬼畜だかんね。そりゃあスカウトに「病院の看護婦長（50代）と便所掃除のオバチャン（50代後半）といつでもア○ルセ○クスが楽しめるラブラブおしり券を10枚付けるから」って言われたときは、さすがにちょっと心が動いたけど（んなもんで動くなよ！…編集部注）、何しろ俺には犬の糞よりも大切な「日本下品化計画実現」の夢があるからねえ。豊かな精神病院ライフはこの先ゲス活動を嫌になるぐらいにさんざんやりまくった後で、最後にその時一番気にくわねえ文化人か編集者か著名人の一家を全員惨殺（両親の目の前でガキや娘のけつの穴を犯しまくって歯を全部引き抜いて強制フ○ラチオのちにバットで撲殺してから腸を引き裂いてベランダに吊るす。その後女房の顔面を陥没するまでていねいにブン殴った後で亭主の目の前で裸にひん剥いて穴という穴全てにチ○ポと大根をぶち込んで犯し、仕上げに20リットル牛乳浣腸で辱めて、その際放り出した糞まみれの牛乳を入れた洗面器に無理矢理顔を突っ込んで溺死させる。自分の糞小便で溺死する気分はど～かな～？　旦那は自分の家族が惨殺されるのを全部克明に見せた後でブン殴って最後にけつの穴を犯してヨガらしてから女房の糞を大量に食わす。その後ＴＶの通販で売っている穴あき包丁で全身の生皮を剥いでからきん玉を蹴り潰して笑顔で記念写真を取ってからナタとマサカリで四肢を切り落

としてから撲殺でキマリだね。警察に通報して彼らがやってくる前に殺した奴らの肉でも口にくわえときゃ「人●まで食ってた」って報道されるだろう。普通の人殺しなら死刑判決が出るかもしらないけど、ここまでやったら精神鑑定に持ち込んで心身喪失状態の犯罪ってことで無罪だよ無罪。ずば抜けて異常な猟奇殺人を犯せば、どうせ慈悲深くてバカな人権派の弁護士や便乗して自分や著書の宣伝をしたい文化人やジャーナリストどもが大挙して支援者になってくれるだろう。支援申し込みは今から受け付けてやるから有り難く思えよ馬鹿。手記を出版したい出版社も随時受け付けるから前払いで原稿料くれよ。逮捕された後じゃ満足に使えないからな。手記の映画化もちゃんと検討しなくちゃならねえし、できればハリウッド映画がいいな。入院する病院はやっぱり名門●●クリニックだろうな。これもドラフト会議で決められるんだろうけど。言っとくけどこれはシャレや冗談じゃねえぞ。俺はホントにやるからな。何を隠そう俺はコレを実現するのが楽しみで楽しみでめんどくせえライター仕事を我慢してやってんだから期待していいぞ。決行は満月の夜。いまの所のブチコロス文化人第一候補は●●●区在住の●●さん御一家でーす。家族構成もゴミで調べてもうバッチリ。お願いだからあと20年ぐらいは引っ越さないでね！）してから裁判で無罪を勝ち取ってから送ろうと思ってるので、とりあえず今はどんな好条件の申し出にも泣く泣く我慢してる。実際、いまでも毎年盆暮れ正月には全国各地の精神病院から「村崎さん、そろそろウチへ入院しませんか？　個室病室に専属のエロい姉ちゃん看護師と、ターボエンジンに仕込み槍付きの18金メッキ超豪華戦闘用スーパー車

イスも用意して待ってます。もしも入院してくれるなら死ぬまでシャバには出さないぜベイビィー！」ってなハジけた挨拶状が何通もくるんだが、日本下品化のために俺はあえて野に踏みどどまってるワケよ！　なんつったって、この国の下品は俺が面倒みなけりゃ一日で上品に墜ちてしまうからね。大義のためとはいえ、鬼畜もけっこうツライよねえ（馬鹿言ってンじゃねえよ：編集部注）。

……って、おいおいみんな、そんなにマジに感動すんじゃねえよ。俺は鬼畜として当たり前の行動を取ったまでだよ。そんなに感心されるとテレちまうじゃねえかよ（誰も感心してねえよ：編集部注）。

まあそんなわけで、精神病院の全国優秀患者ドラフト会議は11月3日の文化の日に人知れず行われるのさ。希望が殺到した場合は抽選で決まるんだが、プロ野球と違うのはスカウトと病院長がチームを組んで、希望を出した病院同士がリングの上に立って最後の一組が残るまで時間無制限のバトルロイヤルをやって獲得病院を決めることだな。患者や患者の家族としても、満足に暴力もふるえねえようなヤワな精神病院なんかにゃ安心して子供を預けられないからなあ。家族としちゃあ治っても治らなくても生きて帰って来られたらエラいことだからどうしても慎重にならざるをえないんだ。だからみんな戸塚ヨットスクールのコーチなみに凶暴で強いぜ〜。とても医療関係者とは思えないくらいだ。この対戦がK－1なみに見どころのあるショーでねえ……ああ、プレステでもサターンでもドリームキャストでも64でもいいからこのドラフト会議を3Dで格闘ゲーム化してくんねえ

かな。「頚動脈直撃の精神安定剤注射」とか「電撃調教スタンガン攻撃」とか「地獄の精神棒注入」とかバイオレントな反則業が盛り沢山だ（スミマセン。こんなキ◯ガイに原稿を頼んだ私たちが軽率でした。ちなみに村崎は中卒だそうです：編集部注）。

そういうわけで精神病院のスカウトは半透明の無定形であらゆるものに姿を変えて我々の日常に隠れ潜み突然傍らから迫って来る。ＴＶの画面から、つけっ放しのラジオの中から、流しの下水道の排水溝の泥の中から、奴らスカウトは時間も場所も状況も選ばずどこからでも君に語りかけて入院を迫るだろう。もしも君が生活に疲れまくって希望も絶望もあるんだかないんだかわからないような悲惨な状態にいるなら、やつらの呼びかけに答えるのもレット・イット・ビーだが、少しでも人間だとか鬼畜としての尊厳が残っているなら、奴ら電波スカウトどもの怪しい招きに応じてはならない。我々は得体の知れない電波どもの言うことを決して真に受けて身体を預けてはならないのだ。気がついたら馬乗りになって幼児をメッタ刺しにしていたなどという酷い状況に陥りたくなければ、電波スカウトの甘言に乗ってはならない。ヨージ・ヤマモトならともかく、たいした用事もないのにただの幼児をコロスなんて、いくら何でもあんまりだ。

俺は読者諸君らにはどんな妄想や電波からも徹底的に自由な鬼畜であって欲しい。なるべく多くの悪性の妄想からフリーになって好き放題をやって欲しい。誰もがきん玉やま◯こを風にさらして往来をマッパで歩けるような光り輝くゲス・ユートピア。そんな下品で下らない国を夢見て俺は今日もゴミを漁り、ま◯こや尻◯を妄想し、思いきり激しくア◯

ル セ○ずりをこく。
　いい人生だなあ。
　　　（というワケでこの続きは以下次号。雑誌の続く限り来世紀まで続けます）

★付録　世紀末鬼畜放談　連載記念インタヴュー

編集部・南村孝三郎（以下南村）◇ちょっと村崎さん、カンベンして下さいよ～。何ですかこの原稿は、半分以上がア○ルセ○クスと自分のちん○自慢ばかりじゃないですか！
村崎百郎（以下村崎）◆（デブの分際でフテブテしく両手で鼻糞をほじりながら）そんなに感激しなくてもいいよ。
南村◇してねえよ！
村崎◆あ～そう（といって今度はズボンを下ろして汚い尻を出して自分の尻○をほじくり出す）……はあああ、たまんねえぜこん畜生ォ！　しりはいいぜえええええ！　しりはよおおおおお！
南村◇……頼むから真面目にやって下さいよォ。連載記念のインタビューなんだから。
村崎◆何言えばいいの？
南村◇この『危ない28号』はどうですか？
村崎◆ん～、漢字と英語が多くて低能中卒の俺には読むのがちょっとツライねえ。漢字に

は全部ルビふってくんねえかな。ああ、それにしてもア○ルセ○クスがやりてえぜ。
南村◇……内容について聞いてるんですよ。
村崎◆創刊号のハッキング特集だけど……
南村◇創刊号のハッキング特集があ⁉（おお、やっと真面目に答えてくれるのか、このキ○ガイは！）
村崎◆ファッ○ング特集の方がいいなあ、俺は。
南村◇ガクッ……漫才やってんじゃないんだから、頼むから真面目に答えて下さいよォ。
村崎◆だからさあ、おめーは真面目だからひと皮ムケないんだよ。いま俺がやってる相手をナメきった不遜で不真面目な態度こそが現状に対しての非道徳的鬼畜的対処っつー奴で鬼畜になるための第一歩でもあるんだ。出された質問に素直に答えるようでは善人に墜ちるぞ善人にィ！
南村◇ははあー（と、とりあえずは納得したフリ）。
村崎◆たとえばなあ、Y新聞の拡張員に「新聞取ってくれませんか！」って言われたらマジな顔して「ウチはア○ルセ○クスが好きだから大丈夫です！」って答えときゃ、とりあえずは会話が成立しねえだろ！　相手が「はあ？」っと言ったところですかさず臭いチ○ポ出して腰をくねらせて「しゃぶってェ下さいィ根元までェ〜、今夜はァ〜ア○スま〜でねぶられェたいィ〜」って演歌を大声で歌い出せば、大抵の奴はこんな家を訪問したことを後悔するだろう？　それでホントにチ○ポしゃぶられて気持ち良かったら素直にイッち

まえばいいんだよ。
南村◇……（何言ってんだァ、このキ○ガイは？）。
村崎◆ただし、それでイッたって素直に新聞とっちゃなんねえぞ！　文句言ったらお前が勝手に俺のチ○ポしゃぶったんだろう。お前こそ俺のチ○ポしゃぶったフ○ラ代払えよ30秒2千円でいいぞ馬鹿野郎！って言ってやれよ。
南村◇……（駄目だ、限りなく駄目すぎるううう！）。
村崎◆だいたい正月早々、こんな糞長い糞原稿書かせやがって、俺はまだセン○リのカキぞめも終わってないんだぞ！　どうしてくれる！
南村◇さっさと年末に書いとけば良かっただけのことでしょう！
村崎◆……だから、相手の問い掛けに真面目に答えるなって言ってんだろ！
南村◇はあ？
村崎◆「はあ？」じゃねえ！　今の場合の模範回答は「母さんと私は知りたいんだが」だ。
南村◇なんですかそれは？
村崎◆いいんだよ。言われて相手が不安になるような、できるだけ無意味なことをぶつけてコミュニケーション・ラインを潰せばセールスは不可能になるんだって。
南村◇それが何か？
村崎◆いま俺は詐欺の被害に合わないための賢い方法を伝授してやったんだよ。どんな詐

欺師でもシラフで薬屋の前のケロヨン人形に話しかける奴はいないだろう。
南村◇はあ……なるほど、相手にとって対話の成立しない存在になるということですね。
村崎◆詐欺師やセールスマンに限らず、相手に合わせた言語使って会話しなきゃならねえ義務なんかどこにもねえんだから軽々しく他人と口なんかきくんじゃねえよ。
南村◇そういうもんですかねえ。
村崎◆人間ってのはしゃべればしゃべるほど、脳みそから意味が抜けて馬鹿になるんだよ。街でケータイとかPHS放さないでしゃべりっ放しの若い連中の馬鹿面見てりゃあ分かるだろうがァ！
南村◇そういわれてみればそうですね。
村崎◆ああいうのを「携帯ジャンキー」っていうのかねえ、赤ん坊のオシャブリが携帯に変わっただけだろ。とにかく誰かと携帯で話してないと不安で不安で一人じゃチ〇ポも立てられない。そういう連中がバイアグラ買うんだろう。
南村◇違うと思いますが……。
村崎◆んなごづねっ！
南村◇どこの方言ですかあ？
村崎◆パプア・ニューギニアの巨大ペ〇スケース装着民族。
南村◇へえー。
村崎◆信じるなよ！

南村◇信じるわけねえだろ馬鹿ァ！
村崎◆……よしよし、大分良くなってきたな、もう少しだ。
南村◇あの～ホメて頂いて嬉しいんですが、そろそろ実のある話をしては頂けませんか？
村崎◆そうだな。このままじゃTVでやってる「愛の貧乏脱出大作戦」の、ダメ職人の修行引き受けた達人の気分だよな。もっともこの場合は「悪夢の善人脱出大作戦」だが。
南村◇何でもいいですよ～。ちゃんとしたこと言って下さいよォ～。
村崎◆じゃあ『危ない28号』について語ろう。これは一言で言うなら「手口の総合マニュアル本」だな。いろんな悪事の手口が満載されているトコは犯罪者にとって大変におトクだ。
南村◇まあ、そうですね。
村崎◆だが、しかしだ。手口（理論）ばっかり必死こいて学んだって実際に完全犯罪を実行するにあたってはそれ以上に必要なことがある！
南村◇それは「愛」ですか？
村崎◆……（5秒間沈黙後、うつむいて身体を小刻みに震わせる）……（さらに10秒間沈黙。重苦しい雰囲気があたりを包む）……はああ……今のは今日一番いい反応だったよ。思わず全力で殴り倒してやろうかと思ったぜ。
南村◇ありがとうございます。
村崎◆その汚らわしいモノは犯罪においても最も必要のない妄想だ。頼むから犯行時には家

の戸棚にしまっとけよ。
南村◇はい……では犯罪において最も必要だというモノは？
村崎◆「何が何でもやったるぜ！」っていう鉄の意志と少々のことでは動じない肝っ玉だよ。
南村◇なあんだ、精神論かあ。
村崎◆おいおい、馬鹿にすんなよ。俺は現場主義の立場でモノを言ってるんだよ。
南村◇現場主義？
村崎◆たとえば暴力系の犯罪の実行ってのは、アタマで考えたシミュレーションのようにはすんなり行かないことが多いんだよ。誰かと組んでやれば良くわかるんだが、直前まで威勢のいい奴がいざ始まったらガクガク足震わせて全然使いものにならなかったとか、そういうことが良くあるんだよ。だから俺は誰も信用しないし、どんな犯罪も単独でやるね。
南村◇あの～、この雑誌は別に犯罪を奨励してるわけじゃないんですけど。
村崎◆わあってるよ。それはこの雑誌に書かれている情報を受け取る読者次第だってな。
南村◇そうなんです。
村崎◆実は悪事の手法をこういう雑誌で公開することは両刃の剣で、必ずしもその悪事を世の中に蔓延させる効果だけでは終わらない。これを読んで単純に真似をする奴もいれば、その一方で、これを読んで犯罪の予防策を立てて、その情報を広く世の中に普及させせ

ることも可能なわけだ。少なくともこの雑誌を読んだ奴は、何も知らない奴らよりもここに出てくる犯罪にまきこまれる可能性は低くなるだろう、自覚して気をつけるから。意見は割れるだろうけど、犯罪についての本を全く出さず、誰にも何も知らせないよりは、はるかにマシだと俺は思うぜ。
南村◇はい、そうなんですよ！
村崎◆「憎むべき犯罪を撲滅するためには我々はもっと深く犯罪のことを学ばねばならぬ」って連続殺人鬼研究家の柳下毅一郎氏も著書に書いてるしな。
南村◇はあ……何かわざとらしく聞こえますねえ。
村崎◆それはお前の心が卑しいからだァ！
南村◇ははあ～（おめーに言われたかねえよ、おめーに！）。
村崎◆「いつでもどこでも、最もらしい建前をでっちあげられること」
南村◇何ですかそれは。
村崎◆独り言だよ、気にするな。
南村◇気になりますよ！
村崎◆（無視して）だからなあ、話戻すと手口だけ膨大に知ってても全然使えない馬鹿もいるんだよ！
南村◇それはどんな。
村崎◆いざ警察に逮捕されたら、とたんにビビって素直になって、聞かれてもいない悪事

まで全部勝手にゲロって仲間売るようなチンカス野郎がいるだろ！
南村◇村崎さん、過去にそういう奴にチクられた経験あるんですか？
村崎◆シベリアで中坊の頃にな……だから俺は悪事はいつも単独でやることにしてんだよ！
南村◇はあ……いろいろ苦労したんスねえ。
村崎◆まあ俺は徹底して暴力中心の闇討ち通り魔系犯罪者だかんな。中卒らしくやることが低能で単純で陰湿なわけだ。しかもとびきり卑怯で卑劣！
南村◇もしかして自慢してるんですか？
村崎◆わかる？
南村◇わかりますよぉ、それくらい。
村崎◆さっすがあ、大卒の学士様は違うなあ。
南村◇やめて下さいよォ。
村崎◆俺みたいに泥臭くて単細胞な暴力キ○ガイと違って、『危ない28号』の読者やライターはハイテクなコンピュータ犯罪が可能な、超インテリ犯罪者って感じがするな。
南村◇『危ない1号』のときと違ってハッカーとかクラッカーが多いみたいですね。おクスリ好きのヒトは共通して多いようですが。
村崎◆俺は風邪グスリも全くやらないから。
南村◇クスリは嫌いなんですか？

村崎◆それでなくても常時幻聴と幻視に悩まされてんだよ。このうえクスリなんか飲めるかよ！
南村◇ある意味でそれはすごく、健全ですねえ。
村崎◆「暴力」は体力勝負だからねえ。夢は素手で「撲殺」だよ撲殺！　ああ、何て甘い響きだろう！
南村◇……くれぐれも逮捕されるのは原稿入れてからにして下さいね。
村崎◆されるかよ馬鹿。俺はな〜んにも悪いコトしてねえもんね。
南村◇「自分で悪いと思うコト」をしてないって言うんでしょ。
村崎◆さあねえ。話を戻すけど、根性とか気合いとか入ってないと完全犯罪を成立させるのは難しいんだよ。証拠がなけりゃ大丈夫だなんてのはいかにもインテリの考えそうなコトだけど、サシで向かいあった刑事の「職業的カン」を完全に誤魔化すのは至難の業だし、取調べ室で刑事の激しい追及を延々と受ければ、よっぽどハラがすわってなけりゃあ全部簡単に吐かされるぜ。
　だから、つまるところ人間の強さってのは、俺は「意志の強さ」だと思うのよ。どんなに拷問されても相手に媚びず考え方を変えないで殺されるまで何もしゃべらないような意志の強さ――そういう強さを持つのが鬼畜としての理想だねえ。それに「どんな卑怯で卑劣なことでも平気でできる鬼畜な心」が加わればもう言うことナシだ。
　俺の連載はそういう「意志の強さ」や「卑怯、卑劣さ」をどうやったら簡単に身に付け

られるかという有り難い教えなんだよ。分かるかなァ?
南村◇そうだったんですか……（分かりたくねえよ、そんなもん！）。
村崎◆まあ、こうなったらとにかくガンガン行くぜ！　アアアアアアア○ルセ○クス！

「危ない28号　第3巻」　１９９９年3月25日　データハウス発行

＜鬼畜流復讐のススメ＞

神をも怖れぬあきれた所業！　まともな精神では決して行えない最悪の復讐術！

極悪非道最低最悪！　村崎百郎の鬼畜流復讐術

村崎百郎

俺が提唱する「鬼畜流復讐術」には慈悲や妥協の文字は一切ない。
ただひたすら復讐相手に苦痛を与え、最終的にはコロスことをめざすだけだ。
「復讐相手の殺害」すら真剣に考えられないような哀れなクソ善人どもは俺の鬼畜文章を読む意義も資格も義務も権利も全くないので、そういう奴らは復讐などキッパリとあきら

めて、とっとと田舎へ帰って田んぼでも耕して、美しい青空の下でとびきりクセぇ野グソでもたれて縁側で猫相手に茶でもしばきながら平和に年老いて死にやがれ。まあ、こんなに腐った時代に憎い人間一人殺せないような根性無しには明るい未来も豊かな老後も何もねえんだから、今すぐ死んでもいいんだぜ！

はじめに★よい子の読者の皆さんへ

最初に断っておくが「鬼畜流復讐術」とは字の通り、現代日本で最もゲスで下品で卑怯で卑劣でダメでどうしようもないバカ丸出しの真性ド鬼畜・村崎百郎の提唱する、完全にキレた最高に卑怯卑劣で誰にとってもド最低ド最悪で、人類にとって迷惑極まりない史上最低の復讐方法である。したがってその中身が既成の道徳や常識に照らし合せて超最低＆超最悪なけしからん内容であることなどは火を見るよりも明らかで、太陽が毎日東から昇るぐらい当たり前のことなのだ。そういうわけで以下の文章は心に少しでも良心の残っている「人類」の皆さんが読むと怒りで血圧が上がって健康に悪いことこのうえないので、非人間性に自信のない奴はこの文章は読まずに飛ばした方が身のためだと忠告しておく。といっても、有史以来もそれ以前も今後も、この地上において実際に太陽が東から昇ることなどというたわけた事態は絶対に起こらない。誰でも知っていることだが、本当は地球の自転で実際は動かない太陽が東から昇ってくるように見えるだけなのだ。それが「復讐」と何の関係があるのかと問われれば、俺もさっぱりわからねえから気にするな（深読

みしたい奴は止めねえからいくらでも深読みしていいぞ）。
そんなわけで、読者諸君はくれぐれもこれから俺が紹介するのはまともな奴には発想不可能で人間性を完全に捨てた「人でなし鬼畜」のみに実行可能な「人の道に外れた最低最悪の復讐術」だということを念頭に置いて読んでほしい。くどいようだが、何かあったときの言い逃れのタメに（ああもう、他人はどうだろうと俺は自分のコトだけは可愛くて可愛くて可愛くてしょうがねえんだよおおおお俺ってホントに最低だぜえええええええ！）ハッキリ書いておくが、俺は決してこの復讐方法を読者諸君に勧めるものではない。そこは絶対に間違えるなよ。

★鬼畜流復讐術　実行にあたっての最重要注意事項（必ず守れよ！）
本書を書店で正当にお買い求め頂き（万引きは論外である）、この原稿を読まれた善良な読者様やその御家族や御友人の皆々様がこれを参考に、このド最低の「鬼畜流復讐術」を実行しようがしまいが、失敗してドジこいて返り討ちに遇おうが遇うまいが、警察に捕まろうが逮捕して死刑になろうが、ぜんぜん俺の知ったこっちゃねえが、逮捕後には頼むから間違っても『危ない28号』で読んだとか「村崎百郎」が書いてたとか、そういうつまんねえホントの事だけは絶対に発言するんじゃねえぞ。刑事に「このあきれた犯行はどこで思い付いたんだ！　何の本を読んだんだ？」と聞かれたら、なるべく善良で正義感にあふれた優良メディアの名前を実名であげてやれ。

「そう言われても何が善良なメディアなのか良く分からない」という読者の皆さんのために具体的な例をあげると「今日の朝○新聞の朝刊の犯罪面の行間に電波で小さく表示されていました（新聞の場合、何はなくとも朝○である。産○新聞や読○新聞では「ああ、あそこならそーゆーことを書くかもな」と本気にされる怖れがあるのでダメ）」とか「N○Kの大河ドラマを見ていたら、中に出てくる織田信長が僕にテレパシーで〝やっちまえ！〟って言ったので、ついつい逆らえませんでした」とか「三週間前のニ○ースステーションの放送中に久○宏が、三週間後の予知ニュースコーナーで僕のやる犯罪を読み上げたので、彼の顔を立ててその通り実行しました」とか「新潟沖の日本海に停泊していた北○鮮の工作船のアンテナから殺害命令電波が飛んで、身体が勝手に動きました。金○日万歳！」などである。何でもいい。要は、逮捕後には、それを聞いた人間が「こんなことを言う奴は絶対に正気ではない」と即座に思うような、完全にキレた発言をすることが大切だということだ。これがどういう意味かは説明しなくても分かるだろう。現行の法制度では、通常の計画的犯罪を心身喪失者が起こした突発的な電波犯罪にすり変えてしまう方が、その後の裁判でもコトが有利に働くということだ。このように何でもとことん卑怯卑劣にやることが「鬼畜流」の基本なのである。

そして、くどいようだが、実は心が優しく基本的には悪いことなど何一つできない超善人の本誌担当編集者・南村孝三郎氏の精神安定のためにもう一度ダメ押しして書いておこう（ああ、めんどくせえ……）。これを読んで復讐を実行しようという者は、すぐさまこの

特集の中身を暗記したのちに本書を煮るなり焼くなり食うなりして手元から完全に処分しろ。他の復讐に関する書物も同様だ。犯行後に自宅からそんなもの出てくると「計画的犯行の良い証拠」と判断されて罪が重くなるからもの凄く損だぞ。やるなら本書を処分して「『危ない28号』なんて本は見たことも聞いたことと買おうと思ったこともない」と自分に言い聞かせることから始めろ。

……何？　復讐途中に次に何をするか忘れてしまったらどうするかってェ？　その時は本屋に行ってもう一度この本を注文して買うんだよ！　それでまた内容を暗記したら本は処分して、その後も忘れたら何度でもくり返し買えばいいだろ！

くっくっくっ、賢明な読者諸君はすでに気づいてイルカもしれないが、この本は基本的にニューエイジ系の精神エコロジカルでエゴまるだしの超最低の〝電波〟なんだよ〝電波！〟〝電波！〟〝電波！〟わかったな！　全てはガイアの意志なんだぞ！

★「復讐」について

さて、超最低の鬼畜流復讐術を紹介する前に、「復讐」という行為について少々、能書きをたれておこう（全く意味ねえけどな）。

中学生の頃の歴史の授業で習ったような気がするが、確か古代メソポタミヤ文明がバビロンな頃（意味不明、一部電波？：編集部注）には「ハムラビ法典」とかいう世界で最古

のサイコな法律があって、それは「目には目、歯には歯、目糞には目糞、鼻糞には鼻糞、ア○スにはチ○ポ（嘘）」などという被害者のダメージと同等の復讐刑が定められていた。これは「他人の右手を切り落とした者は自分の右手を切り落とされる」、「人を殺したものは自分も殺される」など、極めてシンプルで分かりやすい刑罰である。こういう話を聞くと賢明な読者諸君は当然、「この法律に沿って考えると、尻を○された男は○した男の尻を○してもいいというのは分かるが、膣を○された女は相手の男のどこをどう○せばいいのか？」などの、下らなくも魅惑的で興味深い重要な疑問が後から後からわきあがってきて気が散って仕方がないだろうが、そんなことを考え始めるとキリがないし時間ももったいないので、ここはひとまず我慢して話を進めよう。俺がここで声を大にして主張したいのは、「メソポタミヤ文明もとっくに滅びたことだし、今後は田宮さん（21歳女性／俺の行きつけの弁当屋のアルバイト店員／顔は可愛いがマ○コ臭そう／もうちょっと通い詰めて愛想良く口説けばそのうち一発ぐらいタダでヤラせてくれるかも／その可能性は冷静に考えて0．03％以下）のあそこはアソコタミヤと呼ぶことにしよう」などというつまらないギャグではなく、誰かに何か不快なことをヤラれたら同様にヤリ返すのは「太古の昔からの人類の常識」だったという事実を確認しようということだ。

だが、こういう例え話を持ち出して「復讐の正当性」を主張するつもりは毛頭ない。

被害を受けた者が加害者に対して直接「復讐」行為をするというのは、現在の日本のような民主主義を掲げる法治国家では、常識で考えても「民主的でも道徳的でもなく、非合

法の犯罪同様、民主国家の善良な市民には最もふさわしくない行為の一つ」なのである。良識と常識のある人なら「犯罪者の逮捕は警察に、裁きは裁判所に任せよう」と言うだろう。それは全く正しい意見である。誰もがめいめい勝手に自分の復讐に夢中になって、そこらじゅうで派手に殺し合いをはじめたら国家としての秩序も何もあったものではない。「第一、そんな野蛮なことを国が容認したら諸外国に恥ずかしいじゃないか」などとスカしたことを言う奴もいるだろう。確かに復讐は民主国家の良識と常識を照らし合わせれば、「前近代的な蛮行」でしかない。秩序を乱す犯罪者や不心得者は警察が逮捕して、裁判所で公正に裁くのが正しいことなのだ。

しかしながら、これはあくまでも法と正義と民主主義を愛する合理的な精神に富んだ知的で善良な人々だけが納得できる清く正しいイデアな制度であり、そんなものは、俺のように痴的で、訳の分からない膨大な量のルサンチマンを抱え、根性の腐り切った最低最悪のゲス鬼畜をはじめとする、さして清くも正しくも美しくもない人間たちにとっては、上っ面ばかり取りつくろった、到底納得のいかない「お嬢様制度」なのである。

これに「良識派」や「人権尊重派」と呼ばれる超悪質な○○○どもの慈悲深くて思いやりのある素晴らしい博愛精神が加わり、現在では、加害者の権利や人権ばかりが過度に尊重されて、「犯罪はやったもん勝ち、やられた奴がバカを見るだけ」というけしからん風潮が、一連のオウム事件や神戸の連続小学生殺傷事件、そして和歌山の毒入りカレー事件などを契機に、ますます顕著に一般に浸透する傾向にあるのは否定しようのない事実で

ある。
謝罪も反省も全くしないでヘラヘラと拘置所で屁をこきまくりながら鼻をほじって飯の時間を待つ尊大な加害者どもと、ただひたすら泣いて悔しがるだけの可哀相な被害者や遺族——頼みの裁判所も、事件が凶悪で件数が多く複雑であればあるほど裁判が長期化して、やり場のない怒りだけが増大していく現実——これらは弁護士&検事&判事たち法曹関係者がグルになって人の不幸をタネにメシをたらふく食い続けるためにはもの凄く都合の良い制度かもしれないが、これでは犯罪の被害者や犠牲者や遺族たちが全く浮かばれない。

鬼畜の俺が言うことではないが、これほど子供の教育に悪い事もないだろう。良識派のおりこうさんたちは「清く正しく生きることが馬鹿馬鹿しいとしか思えないような社会」を作ってこの先一体どうする気なのか？　子供たちになるべく早く「ああそうか、この世は上手くやった方が勝ちなんだ」と気づかせて、タフで強靭で優秀な子孫作りを目指すつもりなのか？　考えれば考えるほど鬱陶しくてイヤな世の中になっていくのが良くわかるだろう。これでは法治国家ではなく犯罪の放置国家だ。

ともかくそんなわけで、いつも国民から高い税金をボッタクッているにもかかわらず、この国は犯罪の被害者の望む復讐一つ満足にできない不誠実なダメ国家であることは確実だ。もっとも、自分の身にかかわる大切な「復讐」を、国家や法曹機関など他人の手に委ねようという発想自体がアウトであることも事実で、復讐に限らず、何でも国家や他人任

せではなく、納得のいくまで自分で行うことが大切なのは言うまでもない。

このように、「復讐」は倫理&道徳的には完全に間違った野蛮な行為であるが、俺の中の鬼畜理論（屁理屈）によれば、「復讐」は「挨拶」と同様に人として「礼儀正しく当たり前な行為」である。

たとえば他人から「おはようございます」と言われたら「おはようございます」と返事をするのがまっとうな社会人としての礼儀であり習慣だろう。晴れていて気持ちの良い朝なら、その後にすぐ「良い天気ですね」とつけ加えるのも気が利いている。

復讐もこれと同様である。右の頬を殴られたら、すかさず相手の右頬を殴る。それが上手くいったら続けざまに左の頬もブン殴る。実に自然な行為である。

自分の受けた恨みに対してきちんと対応して、相手にきちんと復讐する人間は、ある意味で実に誠実で真面目な人間である。大方の善良な人間（ええかっこしい）は、受けた恨みを直接晴らそうともせずにナアナアで済ませて全てをうやむやにして安穏と日々を送る。そういう連中こそ実にいい加減で自分及び自分の人生に対して不誠実で不真面目な連中といえるだろう。どちらの生き方を選ぶかは、人それぞれの趣味の問題だから俺がとやかく言う問題ではない。俺の場合はたまたま「真面目な人になりなさい」という親の教えを忠実に守って今日に至っているので、本当に教育は重要だと思う。この場を借りてシベリア在住の親父殿に礼を言っておく。

「あんたが赤ん坊の頃からタコ殴りにして育ててくれたおかげで俺はずいぶん打たれ強く育ったよ。2歳児の顔面を鼻血が出るまで平気で何度も殴るなんて、普通の親じゃあなかなかできねえことだよな。俺も親になったら必ずあんたの暴力教育を見習うぜ。俺様同様、血も涙もねえ超凶暴凶悪な鬼畜ガキに育ててやる。何年先になるかわからねえけど、お礼に総金メッキの超下品で悪趣味な仏壇買ってやるからそこに入るのを楽しみに待っとけよ！」

そんなわけで、ウダウダと書いてはきたが「復讐」そのものについてこれ以上言及するのは止めておこう。誰かに本気で「復讐」しようと思う連中は、あまり深く「復讐」そのものの意味だの意義だのを考えてはいけない。なぜなら考えれば考えるほど、冷静になればなるほど、復讐することが馬鹿馬鹿しく思えて実行しようという心が鈍るからである。特に現代のように社会が安定して文化が爛熟し、そこかしこに様々な種類の娯楽があふれかえっている現状では、一つの恨みに固執して、その恨みを晴らすことに全人生をかけるなど、どう考えてもワリに合わないことである。一度きりしかない人生なのだから、憎い相手のことなど忘れて、能天気にこれから新たに知り合う魅力的な人々とどう楽しく過ごすかを考えた方が絶対に前向きな生き方なのだ。

そういうことを一切考えず、世間並みの幸せに背を向け、ただひたすら憎い相手に復讐することだけを夢見て、黙々と復讐の準備をする連中は実にあっぱれである。道は厳しく、孤独で辛いだろうが、たまの週末にはオナ〇ーでもして寂しさをまぎらわせながら、

ぜひとも初心を貫徹して欲しい。

○鬼畜流復讐術ご教訓その1

「どうせ復讐するなら思いきり楽しく残酷に、相手には徹底的に地獄を見せてやれ！」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

☆なお、諸般の事情から以下の原稿には復讐の方法論のみを列挙するに留める。具体的な人間の殺害方法ぐらい各人が自分で考えろ。本人に本当にやる気があればいくらでも思い付くはずだ。

★鬼畜流復讐術　初級　即時報復玉砕自爆型復讐

今すぐ相手をコロさないと気が済まない、即座に復讐したい人向き

相手もろとも地獄に墜ちてもいいという自暴自棄な人向き

村崎のように短気で単純で暴力だけがとりえのアタマの悪い低能バカ復讐鬼向き

この復讐方法は鬼畜流復讐術の中では最も単純で簡単な方法である。

何をするのかというと、字の通り、復讐したい相手が決まったら肚をすえて、即座に直

接暴力的攻撃を仕掛けるだけのことである。場所も時間も人目も気にしない。とばっちりで周囲の人間にどんな迷惑がかかろうともかまわない。騒がず、叫ばす、ただひたすら淡々と事務作業をこなすように速やかに相手を攻撃する。刃物などの凶器を使うも良し、自信があれば素手での撲殺を目指すも良し、準備できるなら手製の爆発物を相手に投げつけるも良し、攻撃方法は自分と相手の体格や周辺の事情を考慮して一番効果的なものを選ぶのが良いだろう。

恨みを受けてから即座に相手を襲撃するのは、相手に防御準備の暇と隙を与えないためである。これは鬼畜流復讐術全ての基本事項だが、

「復讐行為を敢行するまでは相手に恨みごとを一切語ってはならない」

ということを忘れてはいけない。自分が相手を恨んでいる素振りを素直に相手に見せるなど言語道断の愚行である。そんな行為は相手を警戒させ、防御の機会を与えて復讐をやりにくくさせるだけである。恨んだらその瞬間から絶対にそれを相手に気づかれてはならない。恨みの感情を顔に出すな。恨みの感情を顔に出していいのは復讐相手を総力攻撃するときだけである。

基本的にこの復讐方法は「不意討ち」「奇襲攻撃」のたぐいだと思って間違いない。

ただ、織田信長が桶狭間で今川義元を打ち破った戦のように、若干の策は必要である。何せこれは「鬼畜流復讐術」なので普通の復讐よりは数段卑怯で卑劣なのだ。

襲撃時間と襲撃場所は、一日のうちで相手が最も疲れて警戒心を忘れて気を抜いている

時と場所を選ぶのが適当である。人間が最も油断している時間と場所はどこだろう？　それは相手の身になって考えてみるがいい。相手が勤め人ならば、仕事が終わって退社して、電車に乗って地元の駅の改札を出てから自分の家の玄関先あたりまでが狙い目であることは俺の経験からも明らかである。特に、玄関先で鍵を開けドアのノブに手をかけてドアを半分開いて家の中に入ろうとする瞬間などは、最重要攻撃ポイントで、このとき背後から誰かに猛ダッシュされて刃物ごと背中にぶつかってこられたらよほどの奴でもひとたまりもないだろう。かくいう俺は、いつも帰宅時には自分の背後とドアの内側の家の中に全神経を集中して、誰が出てきても全力で殴り倒してやろうと殴りかかる準備をしながらカギを開けるようにしている（あまり気にしすぎるとゴルゴ13なみに、はずみで無関係な人間を殴り倒してしまうので要注意）。相手が遊び人ならば、酒に酔ってヘロヘロになっての朝帰りの玄関先など、相手の職業や生活習慣に合わせて臨機応変に襲撃する時と場所を設定する必要があるだろう。とにかく大切なのは「相手が最もリラックスして気を抜いている瞬間」を見極め、そこに全力で奇襲攻撃をかけることだ。

例をあげておこう。これは俺のガキの頃の話だが、田舎のクソガキどもから集団でフクロ叩きのいじめにあった俺は、その日の夕方には鼻血を拭いてバットを持って、俺をフクロにした相手の家の夕食が始まるあたりを見計らって一軒ずつ訪ねて、玄関先で「こんばんわ！　〇〇くんいますか⁉」と友人を装って親しげに声をかけ、ドアが開いたらすかさずダッシュして土足で居間に上がり込み、食卓を蹴飛ばして家族の目の前で二度三度と

バットで頭を殴り倒して、無表情で「お邪魔しました」と言って帰る、という行為を繰り返して、村中から「キ〇ガイ」と言われ憎まれたものだ。この話をすると皆「よくそんなことができたな」と言う。しかし実際やってみれば分かることだが、みんな平和に慣れすぎているせいか、平和な日常生活の中（それも自分の家の中）でこんなにも酷い暴力行為が年端もいかないガキの手で堂々と行われるなどは彼らの常識と理解の範囲をはるかに越えた行為であるらしく、ほとんどの家の家族はしばらくはあっけにとられて声も出せない状態だった。あとで評判を聞いたら、叫んだりするでもなく徹底的に無表情で暴れたのが一層不気味で、「こんな奴を相手にしたら命がいくらあっても足りない」と思ったそうだ。良く分からないが、大切なのは相手や周囲を圧倒する狂気じみた「気迫」であろう。

俺も加減して殴ったせいか、さすがに死人は出なかったが、バットの当りどころが悪くて目から血を出して片眼を失明しかけた奴がいた。そういう事態になっても俺は「アタマがパアでバカな分こいつらは生命力が強いから、目なんか潰したって、後からいくらでも生えてくるだろう」と、言って全く反省しなかった。もしも潰れていたら今でも莫大な保証金を払い続けていたかもしれない。それぐらいならひと思いに殺した方がよっぽどスッキリするだろう。後悔先立たずである。

あまり人を殴ったことのない連中のために忠告しておくが、人間というのは不思議なもので、「もう立ち上がれないだろう」と思うまで殴っても平気で立ち上がって向かってくる場合もあれば、二三発ジャブをかましただけで「ええっ⁉　これから本格的に殴る予定

なのにィ！」と声をあげたくなるぐらい簡単にのびてしまう場合があるから複雑だ。弱いんだか強いんだか分からなくなるが、とにかく人間の体力と根性には個人差があるので、相手を殴り倒したからといっても決して油断はしないように。

この復讐方法は治安が良く平和な日本だからこそ余計に成功しやすいものである。実際の事件に例えるならば（復讐ではないが）、豊田商事の会長が報道陣が見ている前で無残に刺し殺された事件を思い出して欲しい。犯人の二人は、多数の報道陣が詰め掛けている中、堂々とマンションの窓をぶち破り、中に侵入してあれよあれよという間に殺害を敢行した。この犯行を見ているばかりで阻止しようとしなかった報道陣に対して非難の声も上がったが、まさかこの平和な日本の中でそんな野蛮で残酷な殺人事件が目の前で起きようとは誰も思わなかったに違いない。このように「誰も思いもよらない行動」というのがこの復讐方法の成功の秘訣である。どんなに注意深く用心深い連中でも、長い一日のうちで必ず油断する場所や時間帯や瞬間がある。たとえば浮気する夫や恋人をコロそうと思ったら、浮気相手とホテルにしけこむ瞬間ではなく、浮気相手と一戦交えて精○を出し切ってヘロヘロになってホテルから出てくる所を狙うのだ。このように常に相手の立場になって考え、相手が最も気を抜きそうな瞬間を選ぶのがこの復讐の成功の秘訣なのである。

くれぐれもこの時、相手を殺った後で逃げようなどというつまらないことを考えてはいけない。逃げることに気を取られて攻撃の手が緩んだら相手に致命傷を負わせられない可能性もあるからだ。したがって、捕まる事はもとより承知の上で、完全に相手の息の根を

止めることだけを最重要目的に、相手が意識を失ってもなくなっても徹底的に攻撃を続ける必要がある。第一、生き残られたら今度は相手からどんな報復を受けないとも限らない。そのためにも相手を確実にコロス必要があるのだ。

この復讐方法に必要なのは若干の体力と、「たとえ自分の命と引き換えにしても、こいつだけは何が何でも絶対に殺してやる!」という強い強い鉄の意志だ。それさえ本当にあるならば、後はどうとでもなるだろう。

○鬼畜流復讐術ご教訓その2

「コロせないなら愛するしかないだろう。そんな根性なしは復讐なんかハナから考えず『やすらぎ療法』(春秋社刊)でも読んで、復讐相手を許すという歪んだ快感に涙でもチ○ポ汁でもま○汁でも好きなだけ流して屁ェこいて寝ちまえよ馬鹿」

応用篇　未来の復讐

ここまで読んで「なあんだ、そんな程度で鬼畜流か、偉そうに言うわりに別に大したことないじゃないか」と思う読者がいるかも知れない。そうだろう、そうだろう。実はこの先からが本当の「鬼畜流復讐術　初級　即時報復玉砕自爆型復讐」なのだ。

だいたい誰かに何かひどい仕打ちをされたり騙されたりして恨みを受けてから復讐を誓うのは昔からある「普通の復讐」であり、そんな当たり前のことは何も鬼畜じゃなくても

普通の人間にも充分実行可能なことである。俺の提唱する鬼畜流復讐術はそんななまやさしいものではない。

鬼畜流復讐術では〝電波〟や〝被害妄想〟を最大限に駆使して、「恨み」が生じるはるか以前に「復讐相手」を予知し、その人間に対して即座に最大規模の攻撃を仕掛けるのである。こんなキ○ガイ技はまともな人間どもには絶対に実現不可能だろうが、真性電波系鬼畜の俺には朝メシ前の脱糞のごとく簡単な行為なのだ。

こう書いても何のことか分からない読者のために具体的な例をあげよう。道を歩いている時でもいい、友人や会社の同僚に誰かを紹介された時でもいい、初対面の人間の顔を見て「あっ、将来俺は必ずこいつとモメるだろうな!」と感じたら即座にその場にある椅子やテーブルを振り上げて殴りかかるのだ。この行為は何か月か何年かわからない将来まで待って、相手とモメてから殴りかかる手間暇を省く、極めて合理的で地球に優しい省エネ型のエコロジカルなキ○ガイ技であり(どこがだよ!:編集部注)、将来において必ずモメて憎しみ合う関係になる保証などどこにもないのに殴りかかるという所が鬼畜流復讐術の鬼畜たる由縁である(素晴らしいねえ!)。

この手法は、俺が十代後半で今より荒れていた頃に、バイト先の工場や工事現場でよく行っていたことなのだが(おかげで多くの職場でクビになった)、その経験から忠告しておくが、実際にこれをやると周囲から正気を疑われ、人間関係がサイコーに気まずくなるので実行にあたっては全てを諦める覚悟が必要だ。

やったことを反省する気は毛頭ないが、いまから思うと当時の俺は、殴れるならば別に誰でも良かったのだろう。実にあさましい行為である（誰でもいい！　もっと俺を非難してくれ！　俺は迫害されればされる程、お前らを深く激しく憎めるんだああぁ！）。

付記　以上のような異常な行為を「復讐」と呼ぶにはどうにも語弊がありすぎるので、今後は「予讐」と呼ぶことにする。

★鬼畜流復讐術　中級篇　長期潜伏30年越し自己成長型復讐

逮捕されるのがイヤで完全犯罪を楽しみたい人向け

ゆっくりと時間をかけて相手を苦しめたい、執念深い人向き

復讐を通して意義のある実り豊かな人生を送りたいという前向きな人向き

この復讐術は、初級篇の「即時報復玉砕自爆型復讐」と正反対の復讐方法である。

「初級篇」が自らも相手もとろも破滅する短期決戦型のネガティヴな復讐だとするなら、こちらは復讐を通して自らの成長をも同時に目指し、人生においても成功者たらんとする長期持久戦タイプのポジティヴな復讐である。結果としてやることは同じなのだが、その過程は初級篇よりもはるかに複雑なので、便宜上こちらを「中級篇」とする。

この復讐方法で一番大切なのは何をおいても「冷静さ」である。冷静になって深く考えれば考えるほど、「復讐」という行為の愚かさや馬鹿馬鹿しさが見えてくるのが普通の人間だ。そこで復讐を諦めたり忘れるというのが、ごく一般的な反応だろう。この復讐方法は、そこまでいかない程度の寸止め状態まで冷静になる必要があるのだ。

では、順を追って考えてみよう。あなたには憎い相手がいる。そいつをブチ殺してやらないことにはどうにも腹の虫がおさまらない。できればいますぐ殺してやりたい！　その思いをそのまま行動に移すのはいいが、法治国家の日本で先に紹介した玉砕型の復讐をすれば犯罪者として捕まって、下手をすると一生が台無しになってしまう。

その場合、たとえ相手をコロせても憎い相手のおかげで自分の一生が台無しになるなんて、何だかちょっと悔しくないだろうか？　いや、ちょっとどころの話ではない。そんなつまらないクズをコロスために自分の一生を引き換えにするのは、どう考えてもワリに合わない。やはり「クズは殺して自分も幸福な一生を送ろう」と考えるのがまっとうなポジティヴ・シンキングというものである。この復讐は、そう考える冷静な人のために、「復讐の成就と人生の勝利」を同時に目指す技なのだ。

では、その過程を順を追ってチャート式に説明していこう。

★長期潜伏30年越し自己成長型復讐

第一段階　準備期間

○手始めに行うこと

1　「絶対に相手をコロしてやる！」と密かに復讐を誓う
2　誓ってから3年間は復讐を完全に忘れる。
3　学業、仕事に専念し、できるだけ品行方正に生きる
4　この期間、復讐相手の情報を密かに集める。できれば復讐相手と親友になる
5　ゆっくりでいいから身体を鍛え、人を殺せるだけの体力をつける

この復讐の準備期間は最低でも3年以上（時には30年ぐらい先まで）である。とにかく3年間は何もしてはならない。その理由は「復讐の動機」を他人の目から完全に消すことである。何か大きな恨みを受けて、すぐにその相手をコロスと、警察に「最近こいつをもの凄く恨んでいた奴はいないか？」と捜査されて逮捕されるのも時間の問題だ。そんな馬鹿馬鹿しい事態だけはぜひとも避けなければならない。

そうならないように、この復讐は完全犯罪を目指すので、とりあえずは3年以上の冷却期間を置くのだ。その期間に相手の情報を集め、殺しの手口を研究し、念入りに準備をする。そうすれば、仮に人前で復讐相手とかなり激しい争いをしている事実を周囲の人に目撃されていたとしても、10~30年も経てばとっくにみんな忘れているだろうし相手も油断をするだろう。とにかく相手が殺されても誰の恨みだかわからなくなるまで長期の冷却期間を置けということだ。

神戸の連続小学生殺人事件や、和歌山の毒入りカレー事件の容疑者が逮捕された後の報道を見ればわかるが、警察やマスコミや法曹関係の連中というのは基本的に「犯罪には明確な動機がある」「なければ犯罪なんか起きない」と思い込んでいるフシがある。俺のように大した動機がなくても他人を襲うキ◯ガイ鬼畜犯罪者には笑止千万のたわ言だが、こうした見当違いの「思い込み」を利用しない手はない。「恨みを受けてから30年後に突然行われる復讐」なんて、まっとうで健全な発想しかできない奴らには理解も予測も絶対に不可能だろう（マインドレベルが極めてボクに近いツクバのオダちゃんあたりなら何とか予測可能かもしれないが、いつも東スポに退屈で凡庸なコメントよせてる日大の板倉教授程度の凡人じゃ到底無理無理無理！）。

先にあげた「手始めに行うこと」を解説すると、まず1の「復讐の誓い」は絶対に必要。このとき強い自己催眠をかけとくといいんだよ。「オレは絶対にあいつをコロスけど、とりあえず10年は完全にそのことを忘れる。10年後の今月今夜、突然思い出して怒りで全身の血が逆流し、血圧が一気に240まで上がる」とかな。

だいたい「人が心に思っていること」ってのは口に出さなくても顔や態度に出るから要注意だぞ。恨んでいることを相手に悟られないためには自己催眠で徹底的に恨みや憎しみや復讐を忘れることだ。そういう感情コントロールができるようにすること。これは復讐相手を殺害後の警察の捜査を誤魔化すためにも絶対に必要だ。殺気なんてものは相手をコ

ロスその一瞬だけに出せばいいものだ。普段は徹底して「大きな犯罪などできそうもない気弱な人間」でいいじゃないか。とにかく、恨んでいることを相手にも周囲にも悟られるのだけは禁物だ。

２は説明した通り、動機を消すことと、準備をするためと、相手を油断させるため。しかし一番重要なのは３の「信用作り」だな。「あんな良い人が凶悪な犯罪なんか乱暴するはずがない」って自分を知る誰もが思い込むまで品行方正に頑張るんだ。これは長く時間がかかるから難しいよ。人の信頼を失うのは簡単だけど、信用される人間になるにはこつこつと地道に頑張って周囲の人間に認められるしかないんだからな。これも「何があっても怒らず騒がず、全ては十数年後の復讐のため」と思えば何でもやれるだろう。まだ学生なら勤勉に勉学に励めばいいし、勤め人なら職場では人の嫌がる仕事ことでも平気で積極的にやって、嫌な上司の悪口はなるべく言わず、部下のめんどうも良く見ることが大切だ。生活にも気を配り、近所のオバさんたちにも愛相を良くして「おはようございます、今日は寒いですね」などと挨拶を欠かさないこと。ゴミは分別して正しく出す。ご町内の道にゴミが落ちていたら拾って処分する。何か困ったことがあったり分からないことがあったら、世話好きそうなうるさいオバさんに頼って相談してやれ。ああいう連中はやかましい半面、こちらが下手に出て頼れば喜んで世話を焼くものだし、そうやって地域の連中と密に交際しておくと、警察の聞き込み捜査対策など、後々何かと便利である。だから道路掃除や草むしり、夏祭りなど、商店街や町内会の集まりにも積極的に参加して、気さ

くで社交的な地域住民として振る舞おう。いつもニコニコ元気良く、困っている人を見かけたら周囲に人がいようがいまいが手助けをするようにしろ。そういう態度を続けることで自分の周囲に「善人のオーラ」とでもいうべき雰囲気ができあがるんだ。これも全ては憎い相手を八つ裂きにブチコロスためである。辛いだろうが頑張ってくれ。

そうしたことを長年続けることで次第に周囲から尊敬を集めたらしめたものだ。会社でも裏表のない公正な態度で仕事に集中して励めば、よほど要領の悪い奴でもない限り順調に出世して、「何でも自分に忠実に従う、信頼できる子分」ができるかもしれないからな。ただまあ、俺の経験では犯罪はなるべく単独でやったほうがバレにくくていいぞ。

そして4は慎重に。できれば復讐を忘れて復讐相手と親友になるのが最上だ。その友情も長年続けて、しまいには復讐相手が結婚して子供を作って家族ぐるみで親しくつき合うようになるのが望ましい。そうすることで復讐を実行するチャンスもどんどん増えてくるし、復讐を遂げて相手をコロした後も「二人が長年親友で兄弟のように仲が良く、家族ぐるみの付き合いだった」ことが周知の事実となれば、容疑者として疑われる可能性も薄くなる。とにかく、このように自分が周囲から「復讐から最も遠い所にいる人間」と思われるように仕向けることが大切なのだ。この期間は憎い相手の益になることも厭わないのはもちろんで、何でも打ち明け相談し合うような仲になれば言うことなしである。こうなるには迫真の演技力と怒りを押さえる自制心が必要になるが、「必ず相手をコロス」という鉄の意志さえあれば何とかなるものである。とにかくこの期間は復讐相手にどんなに酷い

仕打ちをされてもひたすら黙って耐えること。

復讐相手と親友になったら、なるべく相手を増長させて、ゆっくりと努力を忘れ、堕落させるように仕向けること。遊ぶ金を調達してやったり、遊び好きの異性を紹介したり、仕事そっちのけで夢中になるような悪い趣味を紹介してハマらせたりするのだ（その場合は自分も堕落しないように気をつけること）。

5も体力勝負の殺害を計画している場合は重要。ただし、あからさまに空手やボクシングなどの格闘技を習うのは少々の配慮と注意が必要だ。海外で雇われ傭兵になったり国内の傭兵講座を受講した一般の人間が、無関係の事件（軍隊の特殊訓練を受けた経験のある人間が引き起こしたとしか考えられない殺人事件だった）の捜査で職場まで刑事が来てアリバイを問い正された例が、実際に俺の知人にあるからな。

この他にも、この準備期間にぜひひとも身に付けておきたいのは常人以上の「集中力」である。これはヨガや瞑想や禅や武道系のスポーツなどの訓練で高めることができるので必ず実行して欲しい。ある程度の体力と集中力があれば、それはどんな仕事にも有効に作用し、社会的地位の確保や成功のもとになるだろう。ぐちぐちと復讐相手を恨んでいるヒマがあったら、仕事や趣味に精を出して限られた時間を有効に使う。相手のことは「コロス」と決めたのだからそれ以上は何も考えない。時間の無駄は極力省くのだ。

○準備期間中に絶対にしてはいけない10のタブー

1　自分が復讐を誓ったことはどんなに信頼している友人にもしゃべらない
2　周囲の人間に対して自分の凶暴性を見せない（何があっても激しく怒らない）
3　復讐相手に自分が恨んでいるそぶりは絶対に見せない。少々根性なしと思われてもいいから「温厚な事なかれ主義の小心者」を強調して演じろ
4　『危ない28号』系のヤバ目の本は買っても本棚の裏に隠して、この手の情報を集めていることは誰にも悟られないようにする
5　シ〇ブをはじめとするドラッグ類をやらない
6　シ〇ブ中の犯罪者たちと友達にならない
7　いかにもヤバそうな特定の新興宗教・政治結社・暴力団には入らない
8　アニメおたく程度ならいいがロリ〇ン趣味はやめろ。コスプレもほどほどに
9　あまり不潔にしない
10「村崎百郎」の名前を口にしない。

1は当たり前。2も復讐した後で疑われないため。温厚で仕事ができる人は信頼されるのでなるべく人前でキレないように。3も当然。復讐に限らず、他の犯罪をするためにも周囲の人間には「こいつは真面目だけがとりえのちょっと足りない小心者」と思われてバカにされていた方がいい。仕事でもときどきバカな失敗をして周囲の失笑を買うぐらいが丁度いい。まちがっても他人から「こいつはスルドイ。油断のならない頭のいい奴だ」な

ど思われてはいけない。自尊心など犬にくれてやれ。復讐のためなら周囲からバカにされていた方が圧倒的に都合がいいのだ。小賢しい奴ほどバカは見下して警戒しないからな。下品な冗談を言ったり、つまらないシャレを言ったりして、周囲から「こいつは下らない奴」と思われるように工夫しろ。

4も偽装工作のため。家の本棚に『殺人術』とか『復讐のススメ』のような本が大量にあったのではそれを見た奴が何と思うか考えろ。本棚の他人に見える部分には古本屋の店先の百円コーナーによくある『窓際のトットちゃん』とか『気配りのすすめ』とか『紅茶キノコ健康法』みたいなバカみたいに平和な本を置いておけ。ちなみに俺の場合はゴミで拾った福祉関係のボランティアの本や手話の本を読みもしないのに、これみよがし並べているぞ。

5は異論があるかもしれないが、復讐も遂げないうちにシ○ブの常用で電波が来て廃人になったり、麻薬取締法違反で逮捕されたのでは元も子もないというのがその理由だ。「初級篇」の玉砕型復讐を実行する直前に景気づけにシ○ブをキメるというならわかるが、これはそういう復讐術ではない。また、健康上の理由というものあるが、だからといってマリ○ァナならいいかというと、そんなこともない。場合によってはマリ○ァナの方がシ○ブよりも危険である。マリ○ァナをキメてピースフルでオープンマインドなキモチになって「ああ、オレはもう復讐なんて、どーでもいいや！　人間ってイイな、人生ってイイな、ハッピー！　ハッピー！」などと愛にあふれたことを考え始めたらエラいこと

である。それでなくともダウナー系のドラッグを常習すると性格がダラシなくなる怖れがあるので、俺は「完全犯罪系の犯罪や復讐をめざすならドラッグはやめろ」と忠告しておく。6も同様。とばっちりで警察に捕まるのは時間の無駄だし、この復讐の準備をするならなるべく警察に注目されないようにしなくてはならない。

そういう意味で7の理由も理解できるだろう。逆に偽装工作でキリスト教（新興宗教系ではなく、カトリックとかプロテスタントとか一応まともそうに見える系）に入信して日曜日に教会に通うとか、消防団や福祉関係のボランティア活動をするのは大いに結構だ。いかにもテロ活動をしそうな政治結社や、オウムのように信者というだけで犯罪者のように見られる宗教団体に入るのは逆効果である。暴力団も同様で、「幹部に昇進して鉄砲玉に復讐相手を殺害させる」というのは相当な根性と覚悟が必要なので、そういう自信のない奴はなるべく入らない方がいいだろう。当然だが、俺が趣味でやっている「中沢新一先生とオウムの関係を一刻も早く忘れる会」とか「和歌山のMみチャンの無実を無責任に信じる会」などにも入らない方がいいと思う。

8も同様の理由である。数ある犯罪の中でも幼児虐待&殺害だけは世界的にも最も憎まれ糾弾される最悪の犯罪であり、世間一般にはロリ◯ン野郎はその予備軍で「人類の敵」だと思われているフシがある。だからそういう趣味はあってもいいが、なるべく周囲の人間には知られないようにした方が無難だろう。とにかく復讐を企てる人間は、あまり不用意に目立ってはいけないのだ。

9も社会性ということであげておいた。あまり不潔にしていると人が寄り付かなくなってくる。最低でも週に2度ぐらいはお風呂に入ろう。ちなみに兼業文筆家の俺は、分泌物も多く体臭もキツいので週に5回以上は入っているぞ。

そして、10は俺の保身のためにも守って欲しいし、本誌でこの復讐方法を公開したからには、「俺の名前を知っていること＝鬼畜流の長期復讐法の原稿を読んだことがある」と他人に判断されかねないのでその予防策としても守って欲しい。夜明けに鶏が鳴くまで3回といわず何回でも「村崎百郎なんか知らねえよ」と言っていいぞ。

第二段階　復讐の実行

○うまく準備期間をしのいだら

1　復讐相手の弱みを吟味する

2　ある程度の金を用意する

3　具体的な復讐計画を練る

早いもので、復讐を誓ってからすでに3年以上、10年近くの年月が流れた。順調に準備をしているとすれば、今ごろは「勤勉な人間」と周囲から信用されていることだろう。だが、焦ってはならない。焦りは禁物でチ○ポは一物だ。

この復讐はたっぷり時間をかけて行うので相手をあっさりコロしてはつまらない。1の

情報収集は、「相手が何をされたら一番イヤなのか」ということを調べる目的で行うものだ。情報を整理して相手のウィークポイントを吟味しよう。相手が大事にしているもの、相手が大事に思っている人間（家族や恋人、愛人など）、相手がしがみついている地位や名誉、誇り、相手の経済的基盤、それら全てにまつわる情報を集められるだけ集めろ。

2が必要なのは当然のことだ。この国は何をやるにも金がかかるからな。

3については熟考を要する。とにかく相手をあっさり殺してはつまらない。コロスにしてもできるだけ大きな精神的苦痛と肉体的苦痛を与えなくては気が済まないだろう。

復讐相手に対して与えるう苦痛と恐怖には大きく分けて次の3種類が考えられる

A　相手の生命を奪う

B　相手の愛する家族やペットや大切な物を奪って精神的な苦痛を与える

C　相手の社会的地位や名誉や財産を根こそぎ奪い、精神的な苦痛を与える

復讐の手順からいくとC、B、Aの順に進めていくのが筋であり、相手に与えるダメージは強力なものになるだろう。

まずは長年集めた情報をもとにCを実行する。これはケースバイケースだが、インターネットや電話や手紙を使ってのデマや誹謗中傷、怪文書を飛ばす情報戦にはじまり、税務署や関係省庁への不正の内部告発、警察へのタレコミ、その他、考えうる限りの方法を時間をかけて慎重に行うという方法もあれば、仕組んで人身事故を起こしたり放火などの過

激な手段も考えられる。具体的にどこをどうすればいいかというのは復讐相手次第なので各人工夫すること。相手のしがみついているステイタスが何かを見極めれば、取るべき行動は必ず見えてくる。

それと平行して行うのがBである。これは、この復讐の中で一番陰惨でけしからん行動であり、単なる弱い者いじめ的な要素が莫大にあるので、具体的な例はあげない（ホントはここからが一番面白いんだけど、実はこの復讐術は、この俺自身も現在進行中の物件が複数あって、万一ここで書いて相手に気づかれたら非常にまずいので俺のために自粛する）。各人が頭の中で人として最もしてはいけないことの全てを考えてみろ。愛する家族がいる奴は、自分が絶対に遭いたくない悲惨な情景というのを思い描けばこの過程でやるべきことが何か分かるだろう。

相手に家族がいなければできるまで待つとか、時には結婚まで話が進みそうな適当な異性を見つけてきて復讐相手に紹介してやるぐらいの労はとるべきである。

実行するにあたっては全部一気にやらないということだ。一人ずつ、じわじわと、「何でこの俺の家族ばかりこんな目に……」と復讐相手が思うまで頑張ろう。

ただし、すでに関係が冷えきって復讐相手が別れたくて仕方のない古女房をこちらがわざわざ出向いて殺してやるなんてのは、親切以外の何物でもないので要注意。相手が本当に大切にしている人や物が何であるかは慎重に見極めろ

そして最後の最後に行うのがAである。

これは最後の最後の楽しみなので、できればあっさり死なないようにゆっくりと時間をかけて激しい拷問の果てになぶり殺したいものだ。そういう機会を作れるように最大限の努力をしろ。

仮に相手が格闘技のプロで、どう頑張っても絶対にかなわないぐらい強くても、体力的な強さは「老い」にはかなわない。そういう奴が復讐相手ならば、相手がヨイヨイの爺さんになるまで待つというのも一つの方法である。そのために、この復讐をしようとする者は健康に気を使い、有機野菜中心のヘルシーな食生活を心掛けたい。適度な運動と健康な食事が長生きの秘訣である。

○復讐を実行する直前に考えること

ひととおり説明した後でこういうことを言うのも何だが、長い長い準備期間を経て、さあこれから復讐を実行しよう！　と決める前にもう一度状況がどうなっているか確認する必要がある。

復讐を誓ってから10年以上、もしくは30年が過ぎているかもしれない。この復讐術を忠実に守っていれば、おそらく君は相当に充実した日々を送ってきたことだろう。こんなに長い間仕事も真面目に頑張って、生活も清く正しくして他人の面倒も良く見てきたなら、君は周囲の人間からもかなり信頼され、多くの仲間から愛され尊敬される人間になっていることだろう。当然それなりの社会的地位も確保しているに違いない。この時点で君と復

讐相手の生活状況を比べて、明らかに復讐相手のそれが格段に劣っていれば、すでに別な意味で復讐は成就したと言えるだろう。なぜなら「自分が人生で成功をおさめたのは、復讐相手を憎み、いつかそいつをコロスことを夢見て頑張ってこれたから」なのである。結果的に復讐相手のおかげで幸せになれたのだから本当にザマアミロだ。

復讐のために長年君が演じた誠実な行動は、多くの人に喜びや小さな感動や慰安を与え、有意義で楽しい人間関係を数多く生んだことだろう。それは何物にも代えがたい無形の財産である。多くの仲間に愛され信頼され、優しさに包まれた楽しい人生――それをつかんだ時点で君の完全勝利なのである。

この輝かしい勝利を確認して、それでもリスクをおかして復讐相手をコロスかどうかは、そのときになってから考えてみるがいい。

ちなみに、俺は何があってもやりとげるぜ。鬼畜なんだからな。

★鬼畜流復讐術　上級篇　対人類宣戦布告八つ当たり型復讐
（どう考えても迷惑極まりない単なる八つ当たりの迷惑行為）

この技は鬼畜流復讐術の中でも最も非人道的で最低最悪の技である。

この技のコンセプトは「人類から受けた恨みは人類全体につぐなって貰う」という極めて理不尽で身勝手な思い込みによる無差別攻撃だ。「はじめから特定の個人に復讐しよう

とせずに、不特定多数の人間に対して無差別に卑怯で卑劣な破壊工作を仕掛ける」というのがその基本である。

この技の極端な例をあげると、マンガや映画の世界に登場する悪の秘密結社の首領のように、「人類皆殺し」や「世界征服」を目指して、ひたすら世の中のためにならない悪事を働くことなどがあげられる。全ては才能次第だが「科学者になって、人類が瞬時に滅亡するような破壊兵器を平気で作る」「世界規模の悪の秘密結社を作って各国の政府を裏から操り、戦争を起こして世界を破滅させる」「UFOコンタクティになって宇宙の悪玉レティクル星人と結託して彼らの地球征服計画に加担する」などの最低行為がこの技に該当する。「そんな馬鹿なことできっこないでしょう、ただの誇大妄想じゃないですか」と笑うかもしれないが、油断してはいけない。ヒトラーやオウムの麻原の起こした数々の事件や悪事を見ても分かる通り、最初はたった一人の人間であっても、気合いと頑張りと思い込み次第で多くの人を欺き、最悪の妄想を実現する邪悪な組織を作り、世界規模の破壊と恐怖を実現させることは充分に可能なのである。

そこまで話を大きくしなくとも、単に欲求不満解消の八つ当たりでしかない他愛のない悪戯や、器物破損や、陰湿な弱い者いじめも全てこれに該当する。

具体的な例をあげると、罪もないケロヨンやケンタッキーの前に置いているカーネ◯・サンダースおじさんを殴ったり倒したり川にぶちこんだりなどの看板類の破損／「お前の秘密は全部知っている、もうお前はおしまいだ。全部バラしてやるからなぁ〜」というイ

タズラ電話を片っ端からかけまくり不特定多数の人間を不安に陥れる／グリコ森永事件のようにスーパーの菓子類に毒物を混入する／青酸コーラ事件のように清涼飲料水の瓶や缶に毒物を混入して不特定多数の人間を狙う／デパートの蒲団コーナーの蒲団や枕に針を混入する／町内会のお祭りでこっそりとカレーにヒ素を大量味付け／貯水池に汚物や毒物を投入する／性病になっても黙って性風俗店で働いて病気を広める／通りに出て無差別に目につく弱者（老人、子供、身体障○者）に理由もなく殴る蹴るなどの暴行を加える／老人と身体障○者を専門に狙うひったくり／殺人鬼テッド・バンディのように身体障○者を装って通行人に介護を申し込み、人の善意につけこんで油断した相手に攻撃を加えて婦女暴行や殺人／身体障○者を装って無差別テロを行い、凶悪な犯行声明を発表して身体障○者全体の評判を落とす／駅のホームで老人や子供や身体障○者を線路に叩き落とす／孤児院・養老院・福祉擁護施設・サナトリウム・精神病院・保育園・幼稚園ばかりを狙って放火／幼女をさらい、○したうえにコロして焼いて、そのお骨を両親に送付／弱そうな一家に押し入り全員をしばり上げ、親の目の前で娘や息子を犯してからコロし、残った奴らは家に火を放って生きたまま焼きコロス／つい最近アメリカで黒人を差別するKK○のメンバーが起こした「障害を持った老人の○人に暴行を加えたうえ、鎖につないで車で引きずり回し、五体バラバラにして殺害」というむごい事件／0歳児を犯して殺した沖縄の米兵／「育児をしない男を父とは呼ばない」という広告に対抗して「身内をコロスような男を親戚とは呼ばない」と書いたポスターを作成し、アムロの自宅周辺に貼りまくる／など、

上げてもきりがないくらいあり、実際に起きた歴史上の大きな事件でいえば、ヒトラーのやったユダヤ人虐殺／アメリカ人のやったネイテ〇ヴ・アメリカンの弾圧＆虐殺／罪もない女性たちを残虐な拷問の果てに火あぶりで無数に殺した中世の魔女裁判／カンボジアでポル〇ト派が行った民衆の大量虐殺／アメリカが参戦して広島＆長崎の原爆投下／イラクのフセ〇ンがやったクルド人虐〇／クリ〇トンが不倫報道の八つ当たりで行ったイラク空爆／ボスニア・ヘルツェ〇ビナやユーゴで日常的に行われている悲惨な虐殺……などの例の残虐さやおぞましさがこの復讐術の手本となるものだが、はっきりいってこんなド最低の無差別意味なし犯罪行為は、俺のように良心回路が存在しない血も涙もない真性ド鬼畜ならともかく、通常の神経を持ち合わせた人間が実行するとマインドに悪いことこのうえなく、続けると精神崩壊を引き起こす怖れがあるので健康上の理由からもお薦めできない。

恨みを受けた復讐相手に真面目に復讐をしようともせず、無関係な物や人に当たりちらすのだから、これほど卑怯でふざけた反社会的な復讐行為もないだろう。何を隠そう、この俺が常々掲げる「すかしきった日本の文化を下品のドン底に叩き墜としてやる！」という野望も、この技が元になっているのだが、それは残念ながら、まだまだ達成には程遠いのが現状である。

参考までに書いておくが、この種の鬼畜技は決して俺の頭の中の空想の産物だけではない。今年に入ってから、この鬼畜技に最も近い事件が、都内でも実際に起きているのだが

ら恐ろしい。通称「三〇高事件」として知られるこの事件は「自分は学校側から不当で差別的な待遇を受けている」と思い込み、これを恨んだ広〇高校の教諭Mが、「自分の勤務先の校長を狙ったのではすぐに犯行がバレてしまう。校長ならみんな同じだろうから、コロスのはどこの高校の校長でもいい」と、自分とは何の関係もない都立〇田高校の校長室に爆発物を仕掛けた事件である。逮捕後の取り調べでMは「三〇高校の校長を傷つけられなければ、次とその次に襲撃する校長を考えていた」というのだから、これは尋常な復讐事件ではない。唯一救われるのは、犯人のMが三〇高事件の前に起こした東京都教育庁次長宅爆破事件で、門扉に仕掛けた爆発物で標的でも何でもないその家の長女を傷つけてしまったことを悔やみ、次の三〇事件では確実に校長だけを殺そうと校長室に爆発物を仕掛けたという部分だが、この犯行が「完全に無差別な八つ当たり復讐」ではないにしても、かなり迷惑な事件であることだけは確かである。

もちろん我々がここで注目すべきは、恨みを抱いたMが「校長なら誰でも同じだろう」と、自分の高校の校長ではなく他高の校長の殺害を考えてしまう「発想の飛躍」である。こんな迷惑な発想が世の中全体に広がったら、我々は片時も油断できない殺伐とした日常を送らなくてはならない羽目になる。確かに「いつ誰に八つ当たり復讐で襲われるか分からない」という状況下で強く生きるのは、スリルとサスペンスにあふれたアクション映画のようで面白いかもしれないが、その状態が死ぬまで延々と続くことを考えると冗談ではない。とまれ、社会が殺伐としてくるとこういう発想に基づいた犯罪が増えていくのは間

違いないので、我々も自分の復讐だけを考えるのではなく、突然誰かに復讐される危険性をも念頭に置いて生きて行かねばならないことを忘れてはならない。以上、簡略ではあるが鬼畜流復讐術の概要説明を終わる。

付録　いくらでも八つ当たりで人がコロせるステキな商売とは？

最後に、八つ当たり復讐に関連して、人をコロしても罪にも問われず問題にもならず、御丁寧に給料まで貰えるという素敵な商売を紹介しよう。それは首切り役人などではなく、痴呆性老人の介護医療施設で働く看護師のことである。嘘だと思うなら『痴呆系』（データハウス刊）という本を読んでみるがいい。この本はギャグ仕立てのお笑い本のように見えるが、その中身は痴呆性老人の介護医療施設で日常的に行われている虐待と虐殺の内部告発でもある。本の中で痴呆性の老人たちが虫ケラ以下に扱われて殺されていく惨状が、これでもか、これでもかとテンコ盛りで記述され、誰がどう読んでも残酷な虐待殺人としか思えない事件が次々と紹介されているというのに、本が出てから二年以上経った現在も、警察はおろか、どこの市民団体も人権擁護組織も全く問題にしないのだから、この国の正義も大したもんだ。年老いた母親思いの舛添要一（国際政治学者／先の都知事選挙で「私も出ますゾエ！」といって立候補したご立派なヒト）がこんな本を読んだら、怒りで脳の血管をブチ切って即死するのは確実だろう。こんなに世間の反応がないことを考

えると、この国には「痴呆性老人だけはいくら殺しても一向にかまわない」という暗黙の了解事項でもあるのかと疑いたくなるが、ともかく『痴呆系』を読む限り、痴呆性老人の介護医療施設で働く看護師になれば、いくらでも人が殺し放題なのは事実のようである。八つ当たり復讐で人を大量に殺したい奴は今からでも遅くないから看護師を目指すんだな。

そうそう、焦らなくても大丈夫だぞ。どーせここで俺がこんなこと書いたって、誰も痴呆性老人のことなんか真剣に問題にしねえだろうからよォ！　所詮、人間どもの正義感なんてその程度のものだ、ホントにスカしてんじゃねえよ、このバ〜〜〜カ！

おわり

「危ない28号　第4巻」　1999年6月25日　データハウス発行

★自殺についての鬼畜的考察　村崎百郎

「全ての自殺志願者に告ぐ！（といっても女だけに限る）

頼むから死ぬ前に一発ヤラせてくれ！（もちろんタダでだ！）」

いまさら自殺について聞かれても、どうもこうもねえよ馬鹿野郎！　鬼畜の俺にナニ聞いてんだよ。そんなものは俺とは何の関係もない無数の赤の他人どもが、日々俺に断わりなく自分の意志で勝手に便所でクソをタレまくってるのと同様、俺の知ったことじゃねえんだよ馬鹿野郎！　コレ読んでるお前らだって、ある日突然知らねえ奴に「おいお前！　俺に断わりなく勝手にクソをたれるンじゃねえ！　今後、お前がクソをする時間はこの俺が決めてやる！」って言われて素直に「ああ、ありがとうございますだ、お代官様」って納得できるかよ馬鹿野郎！　ヘタなSMプレイやってンじゃねえんだぞ！　クソする時間を他人に管理されてたまるかよ！　クソなんかしたくなったら我慢せずにいつでも好きなときにタレていいんだって、そんなコト俺に言わせせんじゃねえええええええ！

つーワケで俺にとっての他人の自殺なんてモノは、赤の他人の脱糞と等価の問題であり、それは「何があっても真面目に考えてたまるかよ」っていう、徹底的にどーでもいい問題なんだよ！

しかしまあ、そうはいっても真面目そうな善人どもが真剣に考える深刻なテーマを、徹底的に不真面目にチ○ポの先で笑い飛ばしながら馬鹿にしまくるといのは、鬼畜的にはモラルハザードな誉められた態度なので、いい機会だから自殺について俺が思うことをのんべんだらりと行き当たりばったりで書いてみよう（脱力感85％：あまり真剣ではない）。

★しょせん自殺なんてモノは真面目な連中の考えることだ！

最初に言っておくけど、俺はこれまでの生涯で、傷害事件を数多く起こして他人様の迷惑になってきたことの方が圧倒的に多い人間（鬼畜）なんだが、自分が「自殺」するなんて大それたことだけは一秒たりとも真剣に考えたことはないねえ。といっても、生まれついての真性電波系なもんで、「自殺のお誘い電波」ってのが定番でやってくるから、それなりに退屈はしてねえよ。「自殺電波」は特定の場所に漂ってる場合もあれば、こちらが精神的、肉体的に弱っているときを狙って頼みもしないのに向こうから大挙してやってくる場合もある。意識が通常ではない状態のときにそういう電波にやってこられるのはかなりハードで、一瞬「ああ、そんなに言うなら楽になった方がいいかな……」みたいな気持ちになってしまうのも確かだ。それはちょうど寝入りばなに意識が混濁して朦朧とした状態のときに似て「いろいろ困難はあるけど……ああ、それでも何でもどうでもいいやあ……」なんていうレゲエでラスタな感覚に包まれるわけよ。んでもって中にはホントにひでえ自殺電波もあって「いま自殺されますと地獄の責め苦が2割引きになります」とか「ご先祖の太郎兵衛様が血の池地獄でお待ちです」とかしゃあしゃあと言うの（頭の中で）。意識が平常な時にそんなコト聞こうものなら「ざけんなよ、2割引きって何だよ。ダイエーの優勝セールじゃあるめえし、ソープの優待券ぐらいつけやがれ！」とか、それなりに冷静に対応できるんだけど、意識が普通じゃないぐらい弱まっているときに聞くと「ん〜2割引きかあ……ちょっと魅力かも」なんてシャレにならねえ損得計算してお得な

気分になっちゃうから怖いんだよ～。まあ俺は決して今年玄倉川で遭難したような「流され易い人々」ではないんだが、そんなお買い得情報にふりまわせれるようではまだまだ甘いよなあ。確かにそんなときに一瞬見える（ような気がする）、向こう側の世界は何だかキラキラ眩しくて居心地が良さそうで魅力的なんだが、それが魅力的に見えれば見える程、根性がヒネて疑り深い俺は「こいつは怪しい」って思って「う～ん今回は止めとこう」って気になるんだ。とにかく経験上、「得体のしれない電波の言うことを真に受けて行動して良いわけない」のだけは確かなんで、他人の自殺に興味はないが、長年電波の被害に合っている俺としては「電波に誘われて自殺するのだけは馬鹿馬鹿しいから止めとけ！」とだけは助言しておく。電波はホントに嘘つきだからよォ、人間以上に信用できねえぜ！

そんなわけで（どんなわけだか知らんが）電波に対する反発から電波自殺だけはするものかと硬くチ〇ポを立てて決意している俺なのだが、実際問題として、マジで自殺を考える連中というのは、そのほとんどが真面目でおりこうな良い子ちゃんが多いんだよな～。俺なんか世の中も人生も完全にナメきってるクソ馬鹿破廉恥無知下衆下品巨根性豪野郎なもんだから、「自分で自分をコロス」なんてアホらしいぐらい殊勝なコトは、これっぽっちも考えられねえんだよ。人間なんか放っといたってそのうちいつか必ず死ぬんだし、自分で自分をコロスよりも赤の他人をコロス方が性に合ってるからな。

冷静に考えれば、進歩だかチ〇ポだか知らねえけど、こんなに悪徳がはびこり腐りきっ

た世の中で、何の抵抗もなくのうのうと無神経に日々を楽しく過ごして生きられる連中のアタマの方がどーかしてるんだからこういうご時世に真剣に自殺を考える連中ってのは、ある意味でもの凄くマトモな連中なんだよな。「真面目で繊細で人を傷つけるくらいなら自分が傷ついた方がいいと考える優しい人々」……ああもう、俺にはたまんねえクソ善人どもだぜ！　お前らどーして牙を剥かないんだ！　ヤラれたらヤリ返せよ！　その前にヤラれるような気がしたら先回りしてどんどんヤッちまえよ！　この世は正義が勝つんじゃなくて勝った奴が正義漢面できるんだよ！　どう考えても自殺考えるお前らの方が俺みたいな鬼畜よりも数千倍も正しくてマトモなんだから、お前らが大人しく死んじゃうなんて絶対に理不尽なんだよ。正義はお前らにあるんだから堂々と俺ら不真面目な馬鹿どもに攻撃しかけていいんだよ！　受けて立つから立ち上がれよ！　とか言ってもやっぱり自分から攻撃なんかできなくてひたすら被害者に甘んじちゃうんだよな〜お前ら自殺志願者は……。ひょっとしてお前らみんな真性マゾなのか？ってマジで思っちゃうぞ俺は！

★「自殺」マニアの世界は楽しそうだな

んでもって、たまに地震やテポドンや放射能漏れなんかはあるけど、いまの世の中ものすご〜く平和だよな〜。平和だからこそ自殺も流行るんだろうな。自分がいつ殺されるとも分からない戦乱の世の中では、死にたいと思って自殺する前に、敵兵に襲われて殺されちゃたりする場合が多いからな〜！　死にたければ戦場で黙ってつっ立ってるだけでシね

るんだから、そういう時代の自殺は楽でいいよな〜ってそういう問題じゃないか……。
社会が安定期に入り、文化もいいように爛熟したおかげで、近頃の「自殺」は単なる迷惑行為や犯罪行為から立派な趣味やライフスタイルとして、その地位を確立したように思われる。最近では履歴書の「趣味・特技」の欄に堂々と「自殺」と記入して面接に行く強者もいるようだが、面接官も慣れたもので、驚くどころか「ハイハイ自殺ね。ありがち、ありがち。もうチョッと個性的な趣味を持ってると私達も楽しいんだが」とか言うらしいから、ウケ狙いで書いても駄目だってさ（断わるまでもありませんが嘘です：編集部注）。

趣味としての自殺もずいぶん盛んなようで、自殺願望を持った者同士で仲良くサークルを作って、自殺研究を名目に集まって、合コンやカラオケ（おそらく森○童子の歌でも歌うんだろう。自殺願望はないが俺も昔は好きでずいぶんライブ観に行ったもんだ）をして楽しんだ後で、ちゃっかりホテルにシケ込んでチ○ポをハメられながら「死ぬ死ぬ」とか言って、心中する相手を物色するらしい（調べたわけでがありませんが、おそらくこれも真っ赤な嘘です：編集部注）。TVのバラエティ番組でも自殺願望のある連中を集めてカップルを作る「心中カップル5対5」とかやりゃあウケるんだろうが、その際の番組スポンサーはやっぱり眠剤売ってる製薬会社がイイだろう。視聴者からは「心中するのに相手をより好みして選ぶなんてけしからん」とか抗議が来るだろうが、そんなもん絶対無視だ。自殺者の立場になって考えるならば、一度きりの自殺だからこそ徹底的にこだわる部

分にはこだわりたいものだろう。自殺する時間、場所、方法……自殺に対する思い入れが強ければ強い程、これらのことは決していい加減にはできないことなのだから部外者があれこれ口にしていい問題ではない。そのうち時代が進めば自殺を「アート」として神秘劇のような壮大で荘厳な儀式を組み立てて万人の見守る中、自らの自殺儀式を実践するようなアーティストも出てくることだろう。そのぐらい芸のある自殺があってもいい気がする。それが「文化」ってモンだろう。違うか？

★自殺者のマナーとモラルについて

俺はとにかく自殺にも自殺志願者にも興味がないからね。ホントにどーでもいいんだよ。

だからそういう連中には不快感も嫌悪感も同情も憐憫も何にも感じない。もう勝手にやってくれって感じ。ただ仕事帰りの時刻に別の駅のホームで飛び込み自殺があって電車が止まったりすると超ムカつくんだよね。「この野郎、何のウラミがあって俺が乗る電車止めやがるんだ！」って飛び込み自殺した奴を殴り殺したくなる。もう死んでるからそれ以上殺せないのにさ。とくに夕方の帰宅時間に飛び込まれるとたまんねえんだよな、こっちは仕事帰りで疲れて早く帰りたいのに冗談じゃねえぜ。ホームで俺の目の前に自殺者の首なんかが転がってきたら、すぐにチ○ポ出して小便ぶっかけて蹴飛ばしてやるから覚えとけよ馬鹿野郎。俺の知人でホームに立ってたら目の前で飛び込み自殺があって、自殺者

の肉片が胸を直撃して驚いて気絶した女がいたけど、おかげでお気に入りの服も駄目になったって怒ってたぞ。そんな目にあったらもう一生トラウマだよな。こういう迷惑自殺はやっぱ国の教育が悪いってことで、政府広報で「自殺はマナーを守って人に迷惑をかけないように行いましょう」とでも呼びかければ良いかといえばそういうわけでもなく、近代民主国家としては、あまり大勢の国民に勝手に自殺されては税収の問題とか、治安の維持とか、諸外国に恥ずかしいとか、そういった諸々の下らない理由から、「自殺はけしからんからやめろ」と言わざるを得ないんだろう。それじゃあ説得力ねえよな。もっとも、政府広報を見たり他人から何か言われて自殺を思いとどまるような不真面目な自殺志願者はそんなにいねえだろうけどな。以前、俺が知ってた自殺マニア（周囲の人間に、私はもう死ぬ死ぬ死ぬってワメくワリには一向に死なない口先だけの趣味に生きるヒト）は、よくヒマ潰しに24時間営業でやってる「いのちの電話」に電話しては自分の悩みを延々としゃべっていたけど、そういうマニアはずいぶん多いらしく、電話がなかなか繋がらない時はよく俺に長電話をかけてきて大変だったぜ。俺も相手が女だったから、最初のうちはハイハイ言いながら「そいつは難儀なことだねえ」とか聞いてるんだけど、相手の話が循環し出すと飽きてきて、しまいにはついつい「アンタが自殺するの止めないから、ぜひとも死ぬ前に一発ア○ルセ○クスやらせてくんねえかな？　もちろんタダで、ホテル代もあんた持ちで、ついでにイチジク浣腸とか薬局で大量に買ってきてくれると嬉しいんだけど」とか好きなことを言い放題に言っちまって相手を怒らせたもんだ。女「もういい、あんた私

の話、真面目に聞いてないんでしょう！」、俺「いやあ、ア○ルセ○クスしたいのは本気なんだけど……」、女「何よそれ、キー！」（ここで電話がガチャン！）……普通ならこれで終わるハズなんだけど、相手も正気ではないので数日経つとまた同じ電話がかかって来るんだよ。んでもって同じハナシのくり返しで疲れるだけなんだが、その当時の俺としてはヤレりゃそれでいいわけだったから辛抱強く相手の話聞いてたよ。だから命の電話やってる奴らの苦労、ちょっとだけど分かる気がするぜ〜。アレは気が短い奴にはつとまらねえだろうな。いのちの電話に電話かけてくる奴の中には、女の担当狙いでチ○ポいじりながら性の悩みのアレコレをハアハア息を荒げて相談する不謹慎な奴もいるらしい。女の担当に向かって「僕、オチン○ンの大きさに自信なくて死んじゃいたいんです。あなたはセ○クスで相手のモノをフ○ラチオする時どのくらいの大きさのペ○スが普通だと感じますか？　太さは？　長さは？……ふざけてるんじゃなくて僕は本当に本気で悩んでいるんだから真面目に答えてください！　あなたの今まで口にくわえたペ○スの中で一番細くて小さいのはどのくらいの大きさでしたか？　そのうえ僕は仮性包茎で、恥垢がたまりやすくてイカ臭くなりがちで、これではフ○ラチオされた時に相手に不快感を与えてしまうのではないかと怖くて怖くて夜も眠れません。あなたがフ○ラチオしてきたチ○ポの中で臭くてたまらなかったのは何本ぐらいありますか？　そういうチ○ポに対して行われるフ○ラチオはやっぱり臭くないチ○ポよりもおざなりになるものなんでしょうか？　だったら僕ってあまりにも可哀相ですよね……（中略）……だから会って一緒にホテル行って僕

のチ○ポが臭いか臭くないか、小さいかそうでもないかちゃんと見て下さいよ！　そうしてくれたら僕自殺するの思いとどまります！　会ってくれないと僕今晩これから死にますよ！　ハッキリ言うけど僕が死んだら全部あんたのせいですからね！……（中略）……あんたはとんでもない偽善者だ！　本気で体を張って他人を救おうという気がまるでないクセに、優しい善人面がしたいだけで「いのちの電話」の担当やってるんだ！　恥を知れよ恥を！　あんたの不正実な対応でこれまで何人の人間が死んだと思う？　おそらく10人や20人じゃきかないぞ！　この人ゴロし！　人ゴロし！　人ゴロし！　お前なんか死んじゃえ！　死んじゃえ！　死んじゃえ！　そうじゃないって言うなら会って一発ヤラせろよ！　そしたらあんたが真剣で誠実だって信じてやるよ。何ィ？　結婚してるからできねえ？　ざけんなよ亭主が何だ！　人命は地球よりも重いんだぞ！　くだらねえ貞操観念と俺の命とどっちが大事だと思ってンだああああああ！」なんていう身勝手な電話かけてくる奴は鬼畜的には合格のヒトなんだが、実にけしからんねえ。こんな奴はもう絶対に人間じゃねえよ。（怒）

（他人事のように書いていますが、これは村崎本人の話に間違いありません：編集部注）

★自殺と通り魔

様々な理由から人生にブッつまった奴が「もうやってられねえ！」とキレて、その怒りや憎悪が内に向かうか外に向かうかで、そいつが自殺するか確信犯の無差別通り魔になる

かに別れるんだよね。今年の夏に東京の池袋で起きた通り魔事件や、山口県の下関で起きた通り魔事件が後者のいい例で、ホントにたまんねえぐらい迷惑な話だな。こういう事件があるとすぐにおりこうな人権屋どもが騒いで犯人が匿名になって「精神障○者の犯罪に問えない」とか言う話になるけど騙されるなよ。俺も極めて悪質で凶暴な電波系のキ○ガイだから言えるんだけど、実はキ○ガイというのはものすごくキレてテンパって人を襲っているときも自己防衛本能ってのはちゃんと働いていて、無差別に襲っているようで、ホントは自分よりもずっと弱そうな人間ばかりを選んで襲ってるものなんだよ！　ウソだと思うなら通り魔事件の被害者がどういう連中か見てみろよ。女子供や老人などの弱者が圧倒的に多いだろう。下関の事件で殺された被害者の3人はみんな高齢者だし、池袋の事件でも最初に襲われたのは老夫婦で、若くてイキのいい男子高校生（TVで見た限りまじめで大人しそうな連中ばかりだった）は傷も浅く、結果的に死んだのはお婆さんと主婦だ。過去の例として有名な深川の通り魔事件でも殺されたのは幼い子供2人とその母親だったし、最近だと大阪方面でシンナー中毒でテンパったバカが「自分は殺される」という被害妄想から小学生の女の子をメッタ刺しにして殺した事件があった。どうしていつもいつも、精神に異常をきたした通り魔の犠牲になるのは見た目にも超凶暴なヤクザやガタイのいいスポーツマンや格闘家ではなくて女子供や老人などの弱者たちなのだろう？　それは彼らが弱いから殺されるのではなく、そもそも通り魔の方が強そうな奴を避けて襲っているからなのである。そういう判断力のある小ズルい通り魔を「人権」の名の元に無罪

放免する人権屋の弁護士様連中は大した鬼畜だわ。徹底的に尊敬してやるから有り難く思えよ馬鹿野郎。同じキ○ガイの立場で言えば、いかに犯人の「精神」が蝕まれていようが、罪を犯した「精神」を抱える「肉体」は、「精神」の連帯責任を取る義務があると思うぜ。

話は変わるが、いま思いついた俺の好きな自殺文学（自殺がテーマなのではなく、自殺が出てくる話ってこと）のベスト3は宮沢賢治の『よだかの星』と、三島由紀夫の『憂国』と、フィリップ・K・ディックの『戦争が終わり、世界の終わりが始まった』なんだが、ディックの『戦争〜』はSFではなく二組の夫婦の不倫話がベースで、主に一組の夫婦と別の一組の夫婦の奥さんの方がドロドロで醜悪な不倫を演じるのよ。物語が進むにつれて登場人物たちはみんな完全にキレておかしくなっていくんだけど、ただ一人、奥さんに浮気をされて徹底的にコケにされている夫のチャーリー（うろ覚えだがそういう名前だったと思う）だけは真面目で勤勉な大人しい男なんだが、物語のラストであまりの状況のヒドさにキレて「ブッ殺してやる！　みんなブッ殺してやる！」って何度も言いながらライフル持ち出して外に飛び出すんだ。これで凄惨な皆殺しシーンかな〜と期待するとそうではなく、何とチャーリーは自分の顔を撃ち抜いて死んでしまう。確かに自分を殺せば自分以外の全ての人間を消し去ることにはなるわけだから、言った通りのことを実現したともとれるんだが善人の末路は悲しいねえ。これは小説の中の話だけど、現実に自殺願望を持っちゃう奴らの多くは、チャーリーみたいに「みんなブッ殺してやる！」って言いな

がら、結局自分一人しか殺せない心根の優しい連中なんだよな。ホントに情けない根性無しだけど俺はそういう奴らの弱さの方が、「人生がうまくいかない」とか言いながら無差別通り魔をやる連中よりもずっとずっとマシだし好感が持てるぜ。別に感心はしないけどよお。

★「自殺」がらみでムカつく連中

実は俺、徹底的に自殺に興味ないもんで、これまで『完全自殺マニュアル』って本、本屋で手に取ったことも読んだことないんだわ。ゴミ漁り中にも何度か見かけたことはあるけど持ち帰ったことは一度もない（別に著者の鶴見済の文章が嫌いだとかいうコトは全くなくて他の著作はみんな読んでるぐらいだ）。自殺をする人間に興味が持てないのと同様、おそらく今後も死ぬまで読むことはないだろう。カン違いしないで欲しいので書いておくが、俺は『完全自殺マニュアル』が嫌いなのではない。ただ興味が持てないだけなのだ。しかし、この『完全自殺マニュアル』に対して単純に「青少年に自殺を勧める悪書である」とアヤつけて糾弾する連中だけはどうにも我慢がならねえぐらいムカついている。逆に「この本がなければ青少年が自殺しなくなるだろう」なんていう底の浅い短絡思考が説得力を持ってまかり通ることの方が、世の中の不快を増して自殺者を増やすことに繋がると、どうして分からねえんだろう。これは「エロ雑誌があるから性犯罪が起こる」という短絡的でバカな発想と全く同じで、こういう連中はエロ雑誌以前に「人間に性欲がある

世の中にはエロ雑誌から性犯罪が起こる」ってことがまるでわかっちゃいないんだろう。世の中にはエロ雑誌見てセ○ズリこいて射○してチ○ポの興奮を押さえて性犯罪が抑制されていることもあるんだし（これは俺の実体験だ！）、暴行で捕まった犯罪者が言い逃れで犯行を自分のせいではなくエロ雑誌のせいにするぐらい常識だろ！　エロメディアが性犯罪を助長している部分はあるかもしれないが抑制している部分も確かにある。要は諸刃の刃なんだよ！

……って話がエロになってしまうのは俺が自殺に興味がないからなので許せよ。自殺に話を戻すと、「本を読んでその影響で何となく自殺したくなる奴」がそんなに大勢いると思うかね？　確かに昔はそういうコトもあったようだが、それは小説に影響力があった古き良き時代の話だ。手元に『完全自殺マニュアル』を置いて死んだ自殺者の多くは『完全自殺マニュアル』を読んで死にたくなったのではなく、死にたいからこそ『完全自殺マニュアル』を読んだんだろうよ。実は俺の兄弟の一人も十代の頃、あるコトがもとでマジで自殺を決意し、実行寸前に両親に今生の別れの電話をしたんだが、そのときの両親の対応が素晴らしくて「張りつめた緊張感が一気にそがれてしまい自殺を思いとどまった」ってなコトがあったんだ。兄弟だから分かるんだけど、その時俺の兄弟はホントにマジに死ぬ気だった。そいつは後で俺に「死ぬって決めたら後は本当に何も怖くなくなるんだ。この気分は言っても分からないかもしれないけど、死ぬ方法なんか何でもいいやってごく自然に思えるようになるものなんだよ。死ぬときの苦痛とか痛みとかも全然気にならない。いま思うとあれはホントに不思議な境地だったなあ……」って淡々と語ってくれたけど、古今

東西の自殺話で人間がありとあらゆる方法で自殺している現実を考えると、自殺する人間の心境ってのはそういったモノなんだろう。そういう人間の強い決意の前には『完全自殺マニュアル』があろうがなかろうが関係ないだろう。むしろ『完全自殺マニュアル』を買って、できるだけ人に迷惑をかけないような方法を選んで死ぬ自殺者は、巻き添えで人を殺して死ぬ迷惑な自殺者よりも何千倍もモラルがあってマシというものだろう。いちいち書くのも面倒だが『完全自殺マニュアル』を発禁にしたって問題は何も解決しねえぞ。そんな運動は糾弾者のケチな自尊心を満足させるだけで終わるだろうよ。「私は清く正しい正義の人間なんだ」って？　ハイハイ全くそのとーりでごぜえますだお代官様。あんたらホントに正しくて立派で偉いよ。でも、果たしてあんたらの単に正しくて立派でお偉い「自殺はよくない！　やめなさい！」って素晴らしい意見だけで自殺希望者がみんな自殺を思い止まると思うかね？　そーじゃねえだろ。奴らは単に正しくて立派でお偉い意見が耐えがたいからこそ死にたくなるんじゃねのかァ？　当たり前のことだけど、マニュアル本があろうがなかろうが自殺する奴は何があっても自殺するんだよ。だから『完全自殺マニュアル』を糾弾する連中は、本の発禁を叫ぶ以前に、「どうすればこの世界を自殺者の一人も出ない楽しくて魅力的なものにできるのだろう」と前向きなことを考えた方がいいんじゃないか？　自殺者がどうして死にたくなるのかその理由を考える方が先だろう。何もかも本のせいにして済ませてしまおうという態度の方がどーかしてるぜ。そんなことよりも、「自殺したい」と思ってしまう心根の優しい繊細な連中が「もう少し生きてみようか

な」と思えるような素晴らしい世界を実現するための努力をしたらどうなんだよ。何度も書くけど今はホントにひでえ世の中だぜ。政治も官僚機構も宗教も企業も商工ローンも人の心も何もかも腐敗しきって悪臭プンプンで最低最悪じゃねえかよ。自殺する気の全くない俺だって、こんな世の中では死にたくなるって気持ちも分かるぜ。そういうのを根本的に何とかしないと自殺なんか絶対になくならねえよ。こんな当たり前のコトは鬼畜の俺が書くコトじゃねえだろ！

★自殺についての鬼畜的結論

『電波系』でも書いたけど、俺は生まれつき意識のあるときは常時幻覚幻聴に襲われている体質のキ○ガイで、ときどき発作を起こしてテンパっては部屋の電化製品をブチ壊したり部屋の壁に大穴開けたりして大声で叫んで近所の住人に何度か警察に通報されて大家からも「アパートの住人や××警察署からも連絡がきています。今度騒ぎを起こしたら出ていって貰います」という通告を受ける程度の客観的にも精神に異常のある人間だ。今もときどきアタマの中に直接響く電波（幻聴）に耐えられず「ああもう何でもどうでもいいや」という気分になることが幾度となくあるんだが、それでも自殺する気はこれっぽっちもない。そんなことをすれば電波どもの思うツボだし、俺にはできるだけ生きて生きて生きて生きまくって、この世の中を下品のどん底に叩き墜としてやるという大きな目的があるから、そう簡単に死ぬわけにはいかねえんだよ！

そういうわけで、俺は自殺したいという奴に「やめろ」と言う気も、「頑張ってやりとげろ」と言う気も何もない。ただ、今後も「私の夢は自殺することです」と言う女の子（顔の美醜は不問／もちろん熟女も可／イボ痔やキレ痔は治してから来てくれ）に会ったら、真摯な態度で「あ〜そうなの、もったいないから死ぬ前に一発ア○ルセ○クスやらしてくれねえかな。もちろんタダで！」と頼みこもうと思っている。女が俺の極太イカ臭チ○ポにア○スを貫かれ、あまりの快感によがり狂って「もう少し生きてみてもいいかな」とか思ったら、それはそれでいいと思うし、野郎の自殺志願者どもには何も言うことがないが、遺書に「俺の遺産とエロ本と裏ビデオは全て村崎百郎の日本下品化計画のための資金に使ってくれ」と書いてくれたら大いに感謝することをここに約束しよう。興味のある奴はハガキにマジックで大きく太々と「危ない28号編集部気付　村崎百郎とア○ルセ○クス熱烈希望係」と書いて送ってくれ、そんなハズカシイ手紙に自分の住所や名前を堂々と書いて出せる根性がありゃあ、今後は確実に輝かしいゲス人生を歩めるだろう。

おまけの標語★「死ぬ前に、一発決めようア○ルセ○クス！」

「危ない28号　第5巻」　1999年11月25日　データハウス発行

2月13日未明

東京都豊島区千川のマンションで、一人暮らしの会社員A子さん（24歳）が絞殺され、奪われたキャッシュカードで近所のコンビニから現金26万円が引き出される事件が起きた。コンビニの防犯ビデオに撮影された画像から割り出された犯人の元自衛官・黒田○○（28歳）は約2週間の逃亡の果てに、3月9日、栃木県宇都宮市内のファミリーレストランのトイレで首を吊って自殺しているのを発見された。所持金はわずか数十円だったという。

最初に告白しておこう。オレは自分に関係のない犯罪報道を全て娯楽として受け止め、被害者の痛みなど全く考えず、凶悪で悲惨な犯罪事件の数々を無責任に面白がる不謹慎なクズ野郎である。そういう行為は我ながら最低だと思うし、ある意味で犯罪者よりも犯罪的でタチが悪く、善良な人々から糾弾されてしかるべきなのだが、諸君らはどうだろう？

多くのマスメディアで、毎日洪水のように流される犯罪報道の数々を「フーン、そんなこともあったんだー」と聞き流し、自分には無関係の遠い世界の出来事として、何もせずに忘れていくならば、オレと大して変わらない。そんなことでいいのだろうか？　犯罪報道の意義は、起きた犯罪を広く世間に知らしめ、犯人逮捕の協力を呼びかけ、被害者やその家族の痛みを共有し、同様の犯罪の再発防止のための情報を提供することで、みんなが安心して住める健やかな社会の実現をめざすことにあるはずだ。だから我々は、もっと注

意深く犯罪報道を受け止める必要がある。大切なのは、被害者や加害者の人間関係やプライバシーに必要以上に注目して、それを面白がることではない。報道された犯罪が、自分の身に降りかかった時どうすれば被害を避けられるか、どうすればこの種の犯罪を撲滅できるのかを、犯罪報道をテキストにして真剣に考えることなのである。

そういう訳でこの連載は、毎回、女性が被害者となる典型的な犯罪事件を紹介しながら、その予防方法を検証する。読者の皆さんの防犯意識や防衛意識が高まれば幸いだ。

★一人暮らしの女性を狙う襲撃者の攻撃パターンは？

冒頭にあげたのは、実はオレの家のすぐ近所で起きた殺人事件である。事件を知った時は、つい不覚にも「こんな閑静な住宅街で、凶悪な殺人事件が起きるなんて！」と思ってしまったが、そういう油断が最も危険なことは言うまでもない。平和ボケで感覚がすっかりマヒしているが、明日が今日と同じ平穏無事な日である保障などどこにもないのだ。

試みに加害者＝犯罪者＝悪人の立場でモノを考えてみよう。悪人が狙いをつけた若い女を襲う時に何を考えるか？　悪事を企てる人間の邪悪な思考パターンは実に単純だ。それは「相手の弱点につけ込む」ことである。襲おうとする相手が襲撃を予測して完全防備して待っている時を狙って、わざわざ襲いかかるバカなどいない。効率良く襲撃を成功させるには、相手が誰かと一緒ではない一人の状態で、なおかつ最も油断している時を狙うのが正解なのだ。さあ考えてみよう、一人暮らしの女性が一日のうちで最も気を抜いて無防

備になる瞬間はいつなのか？　それは誰しも仕事が終わり、「ああ、今日も疲れたなあ」とマンションやアパートに帰り、自分の部屋のドアの鍵を開けて中へ入ろうとする瞬間ではなかろうか？　その時、階段付近や物陰に隠れていた賊に走り寄られ、背後から頭を強く殴られて、悲鳴を上げる暇もなく部屋の中へ引きずり込まれたら……実例をあげればキリがないが、この種のパターンの暴行事件や強盗事件は今も後を絶たないのである。

冒頭にあげた事件の全容は、被害者も加害者も死んでいるために正確には分からないが、被害者の死亡推定時間と現場の状況から、被害者が帰宅直後に襲われ殺されたことは間違いない。被害者の住むマンション玄関にはオートロックがあったが、これも普段は鍵を持った住人以外出入りできないが、住人の誰かが出入りする際に、開いたドアが閉じないうちに続けて通れば易々と通過できてしまう危険なものなのだ。

こうした賊の襲撃から身を守るには、一にも二にも、誰かに襲われる危険のある時には決して気を抜かず油断をしない事である。帰宅して鍵をあける瞬間だけでなく、出勤時にドアを開ける時も周囲に気を配ろう。他人事とはいえ、どう見ても危なっかしいと感じるのは、携帯電話をかけながら夜道を一人歩きする女性だ。おしゃべりやメールに夢中になっていては背後から賊が近づいても分からないだろう。世の中には、そういう無防備な女性を狙い、ワンボックスカーで背後からしのび寄り、突然車の中に引きずり込んで拉致し、さんざん輪姦してから放り出すというケダモノのような連中もいるのだ。携帯電話をかけながら夜道を歩くなら、せめて背後から近づいてくる人や車には充分注意して欲し

い。

それでも襲われた場合はどうするか？　ふいに誰かに襲われた場合、普通は気が動転してなかなか声を出せないものらしい。そういうまさかの時に大声で叫ぶ自信がないのなら、防犯ブザーのスイッチに手をかけながら歩くという手もあるが、夜道で襲われて声を出すなら「キャー！　助けてー！」「人ゴロし～！」の類ではなく「火事だ～！」が最も効果的であると昔から言われている。「助けてー！」や「人ゴロし～！」などというぶっそうな悲鳴は、近隣住人がそれを聞きつけても、刃物を振り回した凶悪な通り魔の出現を連想し、自分に被害が及ぶのを怖れて、聞こえないフリをする可能性があるが、「火事だ～！」となると話は違う。火事は放置すれば自分の家にも甚大な被害が及ぶので、それを聞いた者は、どこが火事か家の外へ確かめに出て来るだろう。襲撃犯にしても、襲った相手に「人ゴロし～！」と大声で叫ばれてはミもフタもない。慌てて相手の口をふさごうと首を絞めたり刃物で刺して殺してしまう可能性もあるが、「火事だ～！」なら、慌てる必要はない。そのまま通行人を装って逃げればいいだけだ。つまり「火事だ～！」は、効果的に助けが呼べて、なおかつ犯人に逃げ道を作って自分の身を守る、効率の良い悲鳴なのである。

読者の皆さんの多くは「いちいちそんな面倒な事を考えながら生きるのはイヤ！」とおっしゃるかもしれない。恋や食事やファッションなど、楽しいことだけ考えて暮らせれば、それに越したことはない。殺されたA子さんだって、まさか自分がその夜、襲われて

死ぬとは少しも考えず、恋人に渡すバレンタインデーのチョコを買って帰宅したのだ。合掌。

携帯電話をかけながらの夜道の一人歩きは自殺行為！

まとめ

ひとり暮らしの女性を狙った犯罪が増えている。自分はオートロックのあるマンションに住んでいるからといって決して気を抜いてはいけない。帰宅時と外出時に部屋の鍵をあける時は周囲に怪しい者がいないか充分気をつけろ。気を抜いて油断している時が最も危険な時である。携帯を使用しながらの夜道の一人歩きは、ほとんど自殺行為といっても過言ではないくらい危険なので、やめたほうがいい。自分の身は自分で守るという意識が大事。

村崎百郎（むらさき・ひゃくろう）／鬼畜ライター。1961年シベリア生まれ。中卒（笑）。プライバシーあばきのゴミ漁りが得意の著書に『鬼畜のススメ』『電波系』など。

2003年頃寄稿？　初出、出版社ともに不明

女性のための犯罪学　第2回

インターネットの普及とともに、不特定多数にあてたメールによる架空請求詐欺事件が多発している。警察が捜査中のある事件では、容疑者3人が約7万人に架空請求メールを送り、そのうち約3千人がこれに応えて金を支払ってしまい、総額9千万円以上の被害が出ている。詐欺にあった大半の人は面倒を怖れて数万円の金を支払ってしまったようだが、一度払うとつけ込まれて他の業者に名簿が流れ、どんどん架空請求メールが届くという。

身に覚えのない架空請求メールは絶対に無視しろ！

★架空請求の対応は正直者がバカを見る

いま話題の架空請求メールがウチにも来た。要約すると次のような内容だ。「これは最終通告書です。私どもは委託されて有料サイトの未納料金の回収をしている会社です。未納の料金と手数料を大至急、以下の口座に振り込みなさい。あなたの住所、名前、勤務先はプロバイダーを通じて調べられます。入金のない場合は回収担当者が自宅へ行きます。その際、宿泊費と交通費も頂きます。これは最終通告書なので当方への電話、ＦＡＸ、

メール、郵便による問い合わせには一切応じません。未納料金5万円＋手数料1万円、計6万円」

冷静に読めば、誰がどう考えてもおかしな内容である。請求書の宛先にこちらの名前も書いておらず、具体的な利用明細も書いておらず、問い合わせには一切答えないで、払わなければ取りに行き、その際、交通費や宿泊費も取るなんて、まともな借金の回収とはとても思えない。こんなものは悪質な詐欺以外の何物でもないだろうとオレは当然無視したが、冒頭にあげた事件の例では、メールを受け取った7万人の中の約3千人は平均3万円も払ったというから、約23人に1人がまんまと騙された計算になる。

こんなふざけた架空請求メールに律儀に反応して、大枚3万円も払う善男善女がそんなにいると思うと、この国もまだまだ捨てたものではないような気もするが、冗談ではない！　国民がそんな事だから、この国の政府はロクに考えもせず、脅されてもいないのにイラクの戦後復興支援だ何だと50億ドルも出さねばならないハメになるんだ、良い子ぶるのもいい加減にしろよ、そのカネ一体どっから出てると思ってんだコノヤロー！　と叫んでみたくなるが、このコーナーは戦争という国家規模の犯罪について考える場ではないので、話を個人レベルの犯罪である架空請求に戻そう。オレのような攻撃的な性格の男なら、この手の詐欺メールを受け取っても「上等じゃねえか、取りに来るなら来てみろよ、みんなブッコロしてやる！」としか思わないのだが、平和を愛する温厚な性格の善男善女はそうはいかない。真面目な人ほど「そういえば一度ぐらい間違って有料サイトに接続し

たことがあったかも？」「家族の誰かがこっそり有料アダルトサイトを見ていたかも？」などという可能性を考えて、架空請求の相手に「それは一体いつ使用したものですか？」、「何かの間違いだと思いますが」と誠実に自分の署名や連絡先を書いて、問い合わせのメールを送ってしまうようなのだ。しかし、実はこれが一番いけない。この手の架空請求メールを送る者は、何らかの名簿をもとに一斉メールを送っている場合が多く、これに返信することは、自分のメールアドレスがアクティブであることを相手に知らせ、名前や電話番号から住所や勤務先などの個人情報まで知られてしまう危険性があるのだ。実際、返信メールを送ってしまったために、今度は署名入りで多い時には一日に5件近くの架空請求メールが届いた例もあり、場合によっては不安をあおるように「シキュウカネオクレ」などの電報を送りつけてくる事もあるという。こうなると受け取った側の不安も増大して、気の弱い人は「数万円で済むなら払ってしまおう」と、相手の言いなりになってお金を振り込んでしまうらしい。ところがこれがさらに最悪で、一度でも架空請求に金を払ってしまうと、詐欺業者に「こいつはいいカモだ！」と判断され、「ちょっとオドせばカネを払う便利なカモのリスト」という有り難くない名簿に名前が載って、それ以後も、別の詐欺業者から次々と覚えのない架空請求メールが届き、その他の詐欺の標的にもされるという。

★詐欺の被害に合わないためには？

人間ほどカモにされる酷い世界に生きているのだ。詐欺の被害に合わないためには、そのことを自覚しなくてはならない。読者の皆さんも「人は清く正しく生きるのが素晴らしい」と、親や学校や社会に教えられて育ってきたことだろう。その教育は間違ってはいないが、充分ではない。この世界には人の弱みや善意につけ込んだ、何でもアリの悪意がそこらじゅうに満ちあふれている。「正しく生きる」とは、言われたことを素直に受け入れて従う、体制に従順な奴隷根性を養うことではない。善意だけではなく悪意も抱えて生きてくれ！

面倒を怖れて金を払えば更につけ込まれるだけだ！

まとめ

ネットや携帯電話の普及とともに、これを利用した詐欺犯罪も増えている。身に覚えのない脅迫めいた架空請求メールは、断固として無視するか国民生活センターや地域の警察に届けること。この種の詐欺事件で実際に家まで請求に来られた例は皆無なので怖がる必要はない。返事を出したり、面倒を怖れて一度でも金を払えば、こいつはいいカモだとつけ込まれて、詐欺業者のリストに名前が載って、次々と別の詐欺の標的にされる怖れがある。

めて幸福な立場なんだろうとしみじみ思う。
たび重なる発作で部屋を壊したり、大声で暴れて近隣住民に警察を呼ばれたことなどを記述した文章を読んで「今は良いクスリがたくさんあるから医者へ行った方がいいよ」と助言をしてくれる親切な友人もいた。「手遅れにならないうちに、病院へ行って治療した方がいい。悲惨な事件を起こしてしまってはおしまいだ」という事ぐらいは自分でも承知しているし、やってくる電波のいくつかがいまだに耐えがたいくらい苦痛なのも事実だ。だが、意識を保っていられる限り、おそらく今後も俺は自から進んでは精神病院へは行かないだろう。
それは別に精神科医が信用できないとか、現在の精神医療全体に不満があるとかいう偉そうな理由からではない。「自分が生きている間は好きなことを好きにやりたいから」というのが主な理由だ。今後も電波による発作を起こして物を壊したり、人を殴ったりと乱暴を働く可能性は充分あるだろう。だが、そもそも俺は「人間は正しいことをするのが正しいのではない、やりたいことをやるのが正しい」と考えている極めて利己的で非社会的な鬼畜野郎である。現実の生活でやりたいことの何百分の一しか実現できないのは当然としても、頭の中で考える妄想ぐらいは好きなときに好きなだけ持っていたいと思うのだ。だから、いくら苦痛が和らぐ薬とはいえ、頭の中がトコロテンになりそうなトランキライザーを投与され続けて、起きているんだか夢の中にいるんだか分からない状態で生きるくらいなら、苦痛を感じながらでも思考していたいと願うのだ。

これらの架空請求メールの被害に合わない最良の方法は、何があっても身に覚えのない請求メールは完全に無視して、絶対に返信メールを送らないことである。とはいえ、男性ならともかく、一人暮らしの女性にとって、「払わなければあなたの自宅まで伺います」という請求メールの文面は、かなりの脅威であり、不安をあおるものだろう。だが、この種の架空請求事件で、実際に誰かが自宅まで請求にやって来た例は、全国の警察署や国民生活センターでも、ただの一件も報告されていないのだ。それも当然だろう、そこまでしなくても勝手に怖がって金を払う奴が多くて、詐欺業者は黙って寝ていても数千万単位の金を手にできるのだ。そんな連中がわざわざ時間をかけて、警察に通報される危険までおかして、たったの数万円を取り立てにやって来るわけがない。だから安心して架空請求メールは無視してしまえ。オレにしても、届いた最終通告書を無視してからほぼ1か月になるが、無視したおかげか、その後、請求メールが届くことは全く無かったからね。

今回の例でも分かる通り、詐欺師たちは常に「どうやったら楽をして効率良く善良な連中からカネをかすめ取ることができるか?」を考えているものだ。個人の資産家や投資家から大金を騙し取る場合は、その人間の「儲けたい」という欲望につけ込んで詐欺を働くものだが、今回のように不特定多数の人間から広く浅くカネを集める時は、多くの人間の「善良さや誠実さ」につけ込んで儲けようとするから注意が必要だ。善良で誠実で真面目に生きている人ほど、今回のような詐欺メールに律儀に返信して、個人情報を知られて痛い目に会うのだから馬鹿馬鹿しいことこのうえない。理不尽なことだが、我々は真面目な

るのは精神病院だけである」などという、少々被害妄想ぎみのメチャクチャなテーゼが頭に浮かんでくるが、こういう考え方をヘタに進めるとすぐに「患者が一人もいなくなるとメシの食い上げになって困る精神科医は、患者を治療するふりをして、実は症状を進めてより重症の患者を育てているのだ」などという超一級の陰謀妄想に陥ってしまうので注意が必要だ。確認しておくが、この世では「患者がいるから病院が作られる」のであり、決して「病院があるから、みんな安心して気が狂う」のではない。ここのところは間違えないように気をつけよう。しかし、白衣を着て我々の前に慈悲深く偉そうに立つ、あの連中が正気であるという根拠は一体どこにあるんだろう？（これも当然だが、患者を治療するにあたって「医者側が正気である必要性」というのも、実はないのかもしれない）

★こころの時代

そして、誰が言いだしたかは知らないが、現代は「こころの時代」なんだそうだ。

これは俺流の解釈では、「我々が生きる現代社会は大昔と違って、人が一日生き抜くのにさほど気合いも根性もいらない平和な世の中だ。一日生き抜くのが非常にシビアだった時代には、人々は自分の生命を維持するのに手一杯で、自分の人生についてあれこれ思い悩む暇もなかったろう。平和な現代は心に余裕がある分だけ、つまらんことに思い悩む連中も増えてキ○ガイ人口が増大した。〝こころの時代〟とは、〝キ○ガイの時代〟のことである」ということになる。全く、考えただけで精神病院が繁盛しそうな時代だが、この

村崎百郎（むらさき・ひゃくろう）／鬼畜ライター。1961年シベリア生まれ。中卒（笑）。プライバシーあばきのゴミ漁りが得意の著書に『鬼畜のススメ』『電波系』など。

2003年頃寄稿？　初出、出版社ともに不明

キ○ガイの将来　（元原稿）　村崎百郎

――「精神障○者とは、なにが進行中なのかに気づいた連中のことをさす」ウィリアム・バロウズ

★発狂の自由

俺は昨年から電波系の鬼畜ライターとして、この「イマーゴ」をはじめ、いくつかの本に自分のアタマの中にやってくる電波や発作の症状について書いてきた。特殊漫画家の根本敬氏をはじめ、多くの人間の協力で『電波系』という共著も出せた。言いたいことを発表する場が用意され、なおかつ書いたものがお金になるというのは、キ○ガイとしては極

★キ○ガイの将来

横道にそれた話を戻すと、「別に気なんか狂っていても楽しければそれでいいじゃねえか」というのが俺自身の結論だ。

そもそも「キ○ガイは必ず治療されなければならない」というのは、精神病院の経営者側の論理のような気がする。要は凶悪犯罪さえ起こさなければ、社会にとっては個人がどれだけキ○ガイでも何ら問題はないのである。国家やＮＨＫにしても、税金や受信料さえちゃんと納めてくれるならば、誰がどれだけ狂っていても何の文句も言わないだろう。キ○ガイの起こす凶悪犯罪がマスコミでもたまに問題になるが、「正常」と呼ばれる人間たちが引き起こす犯罪の件数の方が圧倒的に多いことを忘れてはならない。身内がキ○ガイに殺されたら、「運が悪かったと諦めるのも社会福祉」だと思ってくれ、などと書いたら遺族からふざけるなと言われそうだが、「こころの時代」の現代社会では「キ○ガイの魔手をすり抜けながら生き抜くのも、より良く生きるための必須条件」と腹をくくって過ごしてほしいものだと、キ○ガイの側の俺は無責任に思う。みんながんばって生き抜いてくれ。

そして、弁明するわけじゃないが、これまで俺の知り合ったキ○ガイどもは、どいつもこいつも心根の優しい奴らばかりで、そのほとんどが自分が気が狂うのを極度に怖れていた。それも「心配する必要なんかないぜ、お前はもう充分に狂ってるよ」なんて冗談を言ったら、その場で自殺しかねないぐらいに真剣に悩んでいる奴らばかりで、鬼畜な俺は

そんな壊れかけたアタマで精神医療をとりまく諸問題を考えるとき、いつも最後は「キ○ガイはどこへ行くんだろう」というとりとめのない問いに行き着いてしまう。

たしかに、まじないや呪術が力を持っていた古代の社会では、キ○ガイやヒステリー気質の人間は巫女や霊媒となって神（を自称する電波）の言葉を人に伝えるメッセンジャー役として、共同体内部でも存在意義があり、それなりに身の置き場もあったろう。しかし、現在ではそんな狂人の需要はいかがわしい新興宗教の教主か、善良なバカを騙す霊感商法の人寄せパンダぐらいにしかなく、おおかたのキ○ガイはひたすら人々の迷惑やお荷物になっているのが現状だ。かといって面と向かって迫害されるということもなく（さすがは民主主義！）、ご慈愛あふれるマスコミの自主規制もあってか、昔の「芦原将軍」のように人々から馬鹿にされつつ愛されるようなスター的キ○ガイもなかなかメディアには登場しない。

我々が時折街なかで見かけるキ○ガイや精神薄弱児は、NHKの朝の連続テレビ小説や民放のトレンディドラマの通行人には、これからも決して登場しないだろう。キ○ガイや精神薄弱児がTVに出ていいのは真面目な福祉ドキュメンタリーと、「愛は地球を救う」とかいう24時間限定のお涙頂戴番組ぐらいのものだ。それも当然のことだと俺は思う。誰も好き好んで辛気臭いキ○ガイや精神薄弱児の姿なんか見たくもないだろうからな。

そんなわけで「俺達は社会に必要とされてなんかいない。俺達キ○ガイを必要としてい

外の俺に関係のない見知らぬ他人はどれも形のある幽霊のようなもので、自分を曲げてまでわざわざそいつらにサービスして生きなければならないなんてどこにもなかったのだ。そこまで他人なんか愛せるかよ。してみると、「お安い義務なんかどこにもなかったのだ。

能とぶつかり合って解決不可能なバグを生み出し、個体の頭脳及び行動を狂わせる」というのが、ある種の発狂の構造であることは間違いないだろう。ここは生命体の基本にたちかえり、手段を選ばず「どんなことがあっても生き抜く意志」を貫くことが快復へ向かう道だろう。しかし、そうは言っても、頭で考えるほど簡単じゃないのがこの問題の難しいところで、それがキ○ガイのなくならない理由であることも事実である。「いいんだよ、他人なんか傷つけたってさ。向こうも傷つきたくなけりゃ必死で抵抗するだろう。闘争はいつだって生存の条件だ。それよりも自分自身の欲望に徹底的に向き合って、自分が本当は何をやりたいのか考えてみろよ。全てのつまらん見栄と体裁を取り去ったところできみが欲望するのは一体何なのか、ゆっくりと考えてみろ。そして、いつかそれが何か分かったら、手段を選ばすなりふりかまわずそれをめざせよ（ただしつねに自分をとりまく包括的な全体を考えながらね）。それが他の動植物の生命を奪ってしか生きられない因業な我々の、これまで殺してきた生命と、これからコロスであろう多くの生命たちに対しての最低限の礼儀でもある」なんてことを言われてもなかなか実行できないのが現実の人生というものだ。

最後に言っておきたいのは、例外もあろうが「キ○ガイ」は一日24時間、一秒の無駄も

考え方からは「程度の違いはあれ、現代社会に生きる我々はどいつもこいつも立派なキ○ガイであり、その多くはたまたま運良く犯罪を犯さずに日常生活を平穏そうに送っているだけなのだ。キ○ガイと正常人を隔てるどんな境界線も存在しない」という結論が導き出される。俺に言わせりゃ「キ○ガイは人の数」と認めてからこそ、真の（要爆笑）キ○ガイ理解がはじまるのだ。

しかしまあ、たとえば身近な所で朝の通勤ラッシュや超不快な満員電車を考えてみると、あんな環境の中で、叫び出したりも発狂もしないで定年まで勤めあげる方が、よっぽどアタマがどうかしていると思うのは俺だけだろうか？　俺もずいぶんと親父臭くなってきたせいか、最近は新宿で茶髪&日焼けの焼豚系の若いねーちゃんを見る度に、「こいつら、こんな格好して、アタマ沸いてンじゃないか？」と思ったりもする。余談だが、若い女の焼豚系指向というのは、この俺の妄想神経のいい加減な調査によれば、決して「黒人にあこがれて」などという理由ではない。彼女たちは肌を小麦色に焼くことで、無意識に全身をオマ○コ色に染め上げようとしているのである。思い出してみるがいい、日に焼けたあの褐色は間違いなく小○唇のドドメ色である。茶色い髪も黒髪よりは性器の色に近い。彼女たちは全身を性器の色にして発情し、男をそそっているのだ。これが、我々男性が焼豚系の若い女を見て「けしからん」と思いながらもついついハメ倒したくなる理由なのだ。言いがかりにしても妙に説得力のありそうなたわごとではある。

なく完全にキ○ガイではないということだ。俺のアタマの中にしても、ごくまれに電波が途切れ、静寂が訪れることもある。陳腐な結論だが、個体によって差はあれ、人間は誰も皆「キ○ガイ」の部分や「正常」な部分を両方合わせ持ちながら生きている動物なんだろう。だから、キ○ガイはすべて「完全に正常な人間」に治療しなければならないという考え方そのものがすでに病的なのだ。そしてキ○ガイの側にも「自己の狂気を自覚し、それを楽しむ余裕」というのがあればもっと楽しい人生が送れることだろう（それができないからキ○ガイなんだという意見もあろうが……）。

俺は自分がキ○ガイであることは承知しているし、そのうち何かのはずみで誰かを殺しかねない可能性もいつだって充分感じている。そのとき俺に殺される奴には悪いが、それはそれでいいような気がする。なぜなら、めぐり合わせというものはどこにでもあるものだから。

そして、読者の皆さんには、俺のように気が狂う可能性のあるキ○ガイが、あなたも含めてあなたの住む町や身の回りにも大勢いることを認識しながら生きてほしいと切に願う。信じ合うばかりが人間ではないし、人はある部分で「他者に対しての圧倒的な不信感」を持ちながら生きる必要がある。この世界はまるごと一つの巨大な開放病棟なのだ。

どの街にも、どの夜にも、どの時間にも、

そして誰の中にも「村崎百郎」は存在する。

「キ○ガイの将来」を考えることはあなたの将来を考えることだ。

彼らの善人ぶりにホトホト呆れたもんだ。彼らは自分が発狂し、前後不覚になって他人に対して危害を加えることを極端に怖れていたのだ。

自分に関係のない見知らぬ他人を思いやって神経を擦り減らし、消耗していく連中――なまじ善意があるだけに、いや、善意しかないばかりに過度に苦しんでいる連中を見ると、「人間は孤独であるよりは、悪とともにあった方が良い」という言葉がまるで真実であるかのように思い出される。彼らは、他者に対する悪意しかない鬼畜な俺には到底信じられない善良な存在だった。どういう環境で育ったらこんな優しいだけのバカ善人ができあがるんだか知らないが、彼らに「他人を傷つけることを厭わない、ほんの少しの悪意」があれば、あんなに悩んだり狂ったりせずに済んだことは間違いない。

そして、もう少し深く考えると、こうした場合の彼らの不安の元凶は「他人への思いやりの心」というよりは「他人に対しての見栄と体裁」を気にする心だということが言えるだろう。他人から「良い人」に見られたい、他人から誉められたい、他人から尊敬されたい、他人に馬鹿にされたくない……そんな心がびくびくした優等生的思考と行動を生み、病んだ心を育ててしまうのだ。彼らも俺のように他人の目を気にしない恥知らずになりきれれば、人々の不安や悩みの半分は解消されるだろう。かくいう俺も昔はある程度他人の目を気にして生きていたが、あるときふと、自分の行動を制約しなければならないほど他人の目を気にする根拠も必要もどこにもないことに気がついて愕然としたものだ。考えてみると、俺のことを良く知っている友人には無理して格好をつける必要はないし、それ以

「ｉｍａｇｏ（イマーゴ）　１９９６年12月号　特集〈こころ〉はどこへ行くのか」１９９６年　青土社発行

俺のからだは誰のもの　**村崎百郎**

症状だけみるなら、俺は完全にキ○ガイだ。

しかし、こうして冷静そうに文章を書けるのは、俺がつねづね「一秒前の自分でさえ、赤の他人に思えてしまう」という視点で自分のことを見ているせいかもしれない。

「夜ごとのゴミ漁りを通して知ることのできる近隣住民のキ○ガイ度について書いてほしい」というのが編集部からの依頼だった。なるほど、たしかに趣味とはいえ、プライバシー暴きのゴミ漁りを十六年間も続けていると、「普通の人間が出すゴミのパターン」というのは見えてくるし、それを大きく逸脱した「気○いじみたゴミ――捨てた人間がキ○ガイではないかと思われるもの」というのも分かるようになってくる。それは、うまく

は言えないが、袋に入ったゴミの詰め方を見ても明らかなように「キ○ガイじみている」ものなのだ。

しかし、それを説明する前に、俺は自分のことを語る必要がある。

★近所で一番のキ○ガイ

俺は、生まれてから現在に至るまでの三十四年間、意識のある間は絶え間なく、さまざまな音声やビジョンを頭の中で直接受け取り続けている〝電波系〟のキ○ガイだ。

ただ幸運なことに、あまりに数多くの電波を受信しているおかげで、神だの悪魔だのを名乗るクソ電波どもの「あなたは選ばれた人間です」などというたわごとを真に受けて図に乗ることもなく、なんとか見かけは平穏に社会生活を送っている（詳しくは『電波系』太田出版刊、特殊漫画家・根本　敬氏と共著を参照）。

最近では「村崎は電波系のキ○ガイのワリには人の話も聞けるし字も書けるようだ」ということで「貴重な患者」と重宝されて、たまに電波についての文章を雑誌に発表している。俺の文章を読んだ医者からは「このぐらい冷静なら大丈夫」などとも言われるが、過去にやってしまった電波がらみの陰惨な暴行事件など、本当に都合の悪いことは書かないようにしているだけで、実は今でも気を抜くと、いつ電波にからだを乗っ取られて他人を襲い出しても不思議ではないという危うい状態なのだ。

たとえば、年間を通して電波の強かった昨年（一九九五年）は、真夜中に何度も強力な

感情操作系の電波に襲われて、その苦しさに絶叫して暴れてしまい、付近の住民からは「何か事件のようだ」と警察に通報され、大家からは「今度騒ぎを起こしたら出ていってもらいます」という最終警告書を二通もらっている。

正気を失うくらいに暴れるものだから、発作のたびに部屋の電化製品が壊れたりコードが切れたりして、テレビやラジカセやビデオはいくらゴミ漁りで使えるものを拾ってきても間に合わないぐらいだ。パソコンのプリンターも、設置している位置が悪かったのか、つい先日、買ってから半年もたっていない二台目を叩き潰してしまった。パソコン通信用のモデムのコードに至っては、多いときには月に三度も引きちぎってしまうので買い置きをしているほどだ。電話器は現在のもので四台目だが、これはあと三台ばかりゴミ漁りの拾い置きがあるので壊しても大丈夫と安心している。

部屋の電化製品ばかりを集中的に壊す理由は自分でもよく分からないのだが、たぶん発狂中の俺には、自分を苦しめる電波が部屋にある電化製品を中継して来ているように感じられるのだろう。電化製品以外では、針金の入った強化ガラスの窓を殴ってヒビを入れたのと、玄関の横の壁を大きく叩き破ってしまったことが悔やまれる（アパートを出ていくときの弁償が高くつきそうだからだ）。

また、風呂へ入って鏡を見ると、からだのあちこちに覚えのない痣や傷跡がついていて「ああ、またやっちまったのか……」とイヤな気分になる。そういう現実を冷静に考えてみれば、アパートの隣人や付近の住民にとっては、間違いなく俺こそが「隣のキ○ガイ」

なんだと思う。だから、この俺の原稿は、本書のコンセプトとはまったく逆に、俺自身や俺に近しい仲間のことを書いていくことになりそうだ。

★ゴミの詳細

しかし、いちおう編集部の意向にそって、「キ○ガイじみたゴミの詰め方」について説明だけしておこう。

袋に詰める程度の単純な作業でしかない「ゴミ出し」だが、それでも、ゴミ袋の結び目やゴミの詰め方の違いには、人間の個性というものが必ず出てしまう。几帳面な性格の人間のゴミは整然としているし、いいかげんな奴のゴミは不燃物と可燃物の区分けもデタラメだ。そして、回収日の前夜にゴミを捨てるような奴らは、圧倒的にいいかげんなゴミを出す奴らが多いのだが、「全体を通して共通する特徴」というのも確実に存在する。

たとえば、テレビやビデオ、ラジカセなどの電化製品を捨てる奴は、たいてい物音を立てないように路上に静かに置いていく。それはもちろん「他人に気づかれずに捨てる」ためなのだろうが、「今まで使ってきた製品に対する感謝の気持」というのもあるのだろう。捨てるものとはいえ、自分が使ってきたものをぞんざいに路上に放り投げて、その場で壊すような奴はほとんどいない。

同様に、着古した服を大量に捨てるときなども、女性は洗濯して畳んだ状態できちんと捨ててるし、男の場合もロクに畳みはしないが、服は服でひとかたまりにして単品で袋を

作って捨てていることが多い。これが本当の〝愛着〟とでも言うのだろうか。
長年ゴミを漁ってきたが、今まで自分が着ていた服と台所の生ゴミをムチャクチャにかきまぜて、服を汚して捨てるようなゴミ出しをする奴にはお目にかかったことがない。
このような「ゴミ出しの法則」は、他にも文房具やら包装紙やら、ジャンルごとに細かくあげればきりがなく存在していて、「普通の人間の出すゴミ」にはだいたいこれがあてはまる。そして逆に言えば、「キ○ガイじみたゴミの詰め方」というのは、これらの「法則」を大きく逸脱したものなのだ。
そんなゴミ袋は夜の路上でも異様なオーラを放っているので一目で分かるし、俺は気味が悪いのでなるべく近寄らないことにしている。
どういうものかというと、とにかくすべてがメチャクチャなのだ。たとえば、被害妄想などの強い奴だと思うが、ゴミとして出すものをものすごく細かく千切って、ゴミ袋がパンパンになるまで詰め込んでいたりする。ひどいのになると、本や雑誌を細かくカッターで切ったり、手紙類も全部一センチ以下の小さな正方形の紙片にして、絶対に復元不可能な状態にして捨てる。服にしても、なんの意味があるのか、裏側にバター（？）のようなものを塗りつけて捨てている奴がいて驚いたことがある（それは男物で、しかも、ものすごくダサい服でカビ臭かった）。漫画週刊誌のゴミでは連載ものの最後のページを全部破って捨てていた奴がいた（これは単なるイジワルか、アオリ文句の収集マニアだったのかもしれない）。腐ったトーフを幾重にもタオルや服でくるんで捨てている奴もいた（お

かげで俺は「腐ったトーフのニオイは恥垢のニオイとよく似ている」という、どーでもいいことを発見した）。

他にもコトバでは説明しにくいのだが、こういう「キ◯ガイゴミ」は拾うと確実に背筋がゾクゾクして嫌な気分になるので、興味のある方は実際にゴミ漁りをして探してみるといいだろう。

この他にも、ゴミから出てきたノートや日記の中身を読んで、それを捨てた奴がキ◯ガイであることが分かる場合もある。どちらにしても、拾って楽しいゴミじゃないことだけは確実だ。

そして、恐ろしいことに、そうしたことをふまえて、「客観的な視点」で俺がいつも出すゴミを考えると、それはどれもご町内で一番の「どこへ出しても恥ずかしくない見事なキ◯ガイゴミ」なのだ。拾ってきたゴミの一部に（キ◯ガイのゴミも含まれる）、自分の生ゴミから古着まで、なんでもかんでもメチャクチャに突っ込んで捨てている。

こんなふうに、ゴミから考えても「キ◯ガイは俺だ」というのはますます確実なものになっていく。どうやら、この原稿で書かねばならないのは、やはり俺自身のことのようである。それが「隣近所のキ◯ガイの何たるか」を読者の皆さんに分かってもらう、いちばん良い方法だと思う。

★妨害電波と闘う！

俺は冒頭で自分のことを〝電波系〟と書いた。それが具体的にどういうことなのかというと、たとえば、こうしてキ○ガイをテーマにした文章を書こうとすると、パソコンに向かってキーボードに指を置いた瞬間に、全国のキ○ガイ連中から「俺たちのプライバシーを勝手に売るんじゃねえ」「この裏切り者！」などというやかましい声が電波でやってくるからたまらない。精神科医に言わせれば、そんなものは「自分の内部の声」でかたづけられてしまうんだろうが、いくらそう思い込んでみても声が聞こえてくることに変わりはなく、うっとおしいことこのうえない。

この種の電波はつい先日まで、『電波系』という本の原稿を書いている最中に頻繁に起きた〝電波〟からの妨害現象とよく似ている。実はそちらのほうがはるかにひどいものだったのだ。その妨害現象を説明すると、俺の「症状」と「キ○ガイ度」が見えくてると思う。

〝電波〟は本の刊行が決まって原稿を書き出した昨年末近くから、夜昼の区別なく「そんな本を出すんじゃない」「俺たちの秘密を漏らさないでくれ」と数多くのいやがらせの声やビジョンを俺に送ってきた。その声も最初は哀願に近いしおらしいものだったが、俺が無視して原稿を書き進めるとしだいに強迫めいたことを言い出すようになり、「お前がこの原稿を書けばみんなが不幸になるぞ」とか、「電波の秘密をばらしたら、どんどん（電波がらみの）事件が起きるぞ」とか、「お前を殺してやる」といった物騒な声がいく

らでもやってきた。
俺は三十四年に及ぶ受信経験から、電波の言うことなんかまともに聞いちゃいなかったが、実際問題として（プライバシーがあるので詳しくは書けないが）、その本にかかわった人間や、根本氏と俺の共通の知人の関係者に急に〝電波〟が来るようになって入院する人が出たりしたものだから、だんだん無視できなくなり、同時に腹も立った。
「類は友を呼ぶ」という〝単なる偶然〟現象で済ませたいものだが、考えてみると本の刊行が決まる直前にも俺の周辺で似たような電波がらみの事件が二件ほどあり、そんなことを気にしはじめると思い当たることがどんどん出てきて、俺の精神はしだいに消耗していった。「これが電波のやり口だ、俺の被害妄想を増幅させて発狂へ追い込むつもりなんだろう」と考えるだけの余裕はあったが、追い討ちをかけるように電波が送ってきたビジョンは、俺がこれまで見てきたなかでも相当に気持ちの悪いものだった。
ある日などは、地元の駅で待ち合わせた人を迎えに行こうと部屋のドアを開けて外へ出ると、足元に自分の死体が折り重なるようにして駅まで延々と数千体転がっているビジョンが飛び込んできて、非常に不愉快だった。おそらくは、電波の野郎がごていねいにも秒単位でわずかながら存在する「駅へ行くまでにこの俺が死ぬ可能性とその結果」を数千パターン見せてくれたのだろう。死因は脳溢血や心臓発作をはじめ、交通事故や隕石の落下などさまざまで、死体は血を吐いたり、頭が潰れたり、踏切のあたりでは電車にでも轢かれてバラバラになった細切れの肉片がそこらじゅうにころがっているなど芸も細かかっ

た。
ドッペルケンガー（二重身）なんて、今までに何度も見ているので珍しくもなんともないが、これほど派手に自分の死体が大量に累々と路上に転がっているのを見るのは初めてだったので、そのときはさすがに驚いた。しかし、冷静に考えてみれば、自分が突然死ぬ可能性なんかいくらでもあるんだし、そんなものが見えたぐらいで動揺する必要はないのだと自分に言いきかせた。
本の原稿を書き上げる最後のあたりになると、朝起きると自分の頭の右斜め後方にバスケットボール大の空間ができていて、そこに小さなハエが何匹も大量発生してうるさかった。頭の後ろにあるはずの空間なのに、どういうわけかそれは右目の前に見えて、通常見える風景と重なって邪魔でしょうがなかったので、想念で空間の中に新聞紙をつくり出し、丸めてバンバンとハエを潰しまくった。小さなハエなのでなかなか潰れないし、全部潰しても朝起きるとまた増えているんで困っているとドラッグに詳しい編集者にこぼしたら、「お前、それはシ〇ブ中患者の妄想と同じだぞ」と言われた。
どうやら電波は、俺をなんとか発狂状態にしたいらしかった。この他にも自転車に乗っている最中に突然左の耳から聞こえる音が完全に消えてしまったり、気を抜いて駅のホームに立つと、右足が勝手に電車に飛び込もうとするなどの現象は頻繁に起こった。
症状だけ見るなら完全にキ〇ガイなのだが、こうして冷静そうに文を書けるのは、俺がつねづね「自分はつねに分裂／生成をくり返している」という妄想のもとに「一秒前の自

分でさえ、赤の他人に思えてしまう」という視点で自分のことを見ているせいかもしれない。たぶんこれは、現実逃避指向の入った離人症の一種なのだろう。どうしても自分のことが他人事のように思えてしかたがないし、自分という存在が「肉体」という乗り物に「搭乗している」感じがするのだ。

そして、俺が「被害妄想」にある程度の耐性があるのもこうして自分のことさえ「他人事（ひとごと）」として突き離して考えてしまうからなのだろう。被害妄想が膨れあがっても「赤の他人がどう苦しもうが俺の知ったことではない」という視点で自分を見ているおかげで、暴れずにすんでいるわけだ。まったく何が幸いするか分かったものではない。

ただ、自分が自分から離れていきそうな夜はやっぱり不安だし、そういうときに寂しさを感じないといったら嘘になる。だから、そういう俺が、「自分が自分のからだと一つになりたい」という欲望を持つのはきわめて自然の成り行きだろう。俺が他人を真面目に愛せない理由もそこにある。「好きな人と身も心も一つになりたい」などという欲望は、それ以前に「自分自身と一つになりたい」という欲望が満たされて初めて持つことが可能になる気がするからだ。

★類は友を呼んだ悩み相談

さて、俺の症状ばかりを羅列してもしょうがないので、今度は仲間のキ○ガイについて語ろう。「類は友を呼ぶ」という言葉どおり、なぜか俺の人生の周辺には俺と同様のキ○

ガイが頻繁にいたし、そういう連中を見てきて気がついたこともある。これから書くことが読者の皆さんのキ○ガイ理解の一助となり、こうした連中の引き起こす犯罪の防止に役立てば幸いだ。

ただし、俺は論理的思考というのができないので思いつくままに書いていく。

まず、俺が今まで会ったキ○ガイ連中の多くは、すでに完全にイカれているくせに「自分が○ってしまう」ことを極度に恐れていた。正常な皆さんには滑稽な話だろうが、「キ○ガイは自分のことを○っていないと思い込む」というのは本当だと思う。キ○ガイを名乗るこの俺にしても、心の底では「俺ぐらい正常な人間はいないだろう。世界じゅうの人間が最低俺のレベルで正常なら戦争なんか起こらないだろうし、もっと良い世の中になっているだろう」と思いあがっている（そういう点からも俺がキ○ガイなのは明らかである）。だから、人間は少しぐらい「自分は気が○っているかも」と考えるほうがマトモなのだ。そのぐらい謙虚に考えたほうがいいと、真性キ○ガイの俺は思う。

また、友人のキ○ガイのなかには長時間しゃべっていると、まったく同じ話を繰り返しだす奴が何人かいる。こういうのは可愛いもので、俺はそういうときにはまったく同じ受け答えをして、同じ会話を楽しむ。まるでタイムマシンに乗って、過去に返ったようなトリップ感覚がシラフで味わえるのは大変にお得だ。

今までの最高記録は、喫茶店で六時間相手の悩みを聞いたときで、合計四回、それぞれ四十分あまりも同じ会話をしたことがある。相手のキ○ガイの悩みというのが完全なダブ

ルバインドの物件で、本人が身のほど知らずの願望を諦めないかぎり解決のしようがないものだったので、話がある程度進むとふりだしに戻って「実はこれこれこうなんですが、どうしたらいいと思いますか？」という質問が一言一句違わず相手の口から出てくる。そのときは俺も腹をくくって、まったく同じ解答とまったく同じ相槌を繰り返し、会話がまったく同じ部分にさしかかると「それはひどいね」などと憤慨してみせた。

そのときはまるで、台本のない芝居の稽古をしているような気分だった。一応こちらは相手に合わせて同じセリフを語りながら、「なんとかこいつが幸せになれる根本的な解決策はないものか」と必死に考えていたのだが、なにせキ〇ガイの悩みだけに、本当にキ〇ガイじみていて救いようがなかった。絶対に実現不可能な妄想にしがみついていて「それが実現しなければ自分の人生には価値も意味もない」などと思い込んでいるのである。「お前にゃ無理だよ！」なんて言おうものなら、マジで自殺しかねない勢いだった。こういう人間は自分からその妄想を捨てるか、または完全に自閉して妄想の中に没入し、その願望が達成された「自分だけのリアリティ」の中に浸る以外に心の平安など得られないだろう。

「お嫁さんになりたい」とか「金持ちになりたい」とか「人の役に立つ仕事をしたい」など、誰が聞いても安心できる「社会のものさしに合わせた小市民的な欲望」を持つことだけが正しい生き方なんて思えない俺には、「馬鹿言ってんじゃない！　現実を見ろ！」という陳腐なセリフはとても言えなかったし、言ったところでなんの解決にもならなかった

ろう。
　こういう人間は他人の批判を聞けないものだ。それは会話中に相手が言った「いつまでも夢見てんじゃないって私をキ○ガイ扱いする人がいるの。そう言われるとアタマがどんどん痛くなって気分が悪くなるんです」という言葉からも明らかだった。だから俺には、相手に合わせながら「だけど、別の道や生き方だってあるんじゃないの？　幸福になる方法なんかいくらでもあるじゃない」という方向に話題を持っていくのが精一杯だった。
　しかし、「幸福を追求する権利」は日本国憲法でも保障されているし、その方法を他人の俺が口を出すのはどう考えても「余計なお世話」だ。かくして、喫茶店の営業時間が終わるまで堂々巡りの「悩み相談」は続いた。
　あとで分かったのは、その相手は絶えず誰かに相談していなければ不安なようで、相談の電話をかける友人がみんな寝てしまう深夜になると、いつも二十四時間営業の「命の電話」のたぐいに電話をしまくっていたらしい。「悩み相談とは、悩みの解決方法を教唆するばかりが重要なのではなく、〝相談者の話し相手になる〟ということだけでも重要なのだ」というのは本当だ。
　こんな話を読んだ精神科医は、俺について「患者の分際でセラピーの真似事をするなど言語道断だ！　そんなことをしては症状が進むだけだ」とお怒りになるだろうが、誤解しないでほしい。人でなし鬼畜の俺には、「他人を救おう」なんて善意はハナからこれっぽっちも持ち合わせちゃいない。この場合だって、貴重な時間をさいてわざわざキ○ガイ

の話を聞いたのは「自分よりも症状の重い救われないキ○ガイの悩みを真剣に聞くふりをして、その実、自分の正気を確認して優越感を味わって自己を保つ」という、人間としてはド最低の矮小かつ薄汚い根性まる出しの悪意に基づいた行動なのである。

もう少し言うと、「自分よりさらに不幸な人間を見て、自分の幸福を確認する」というのは弱くてみじめで矮小な人間にありがちな、もっとも金のかからない娯楽で、それはTVのワイドショーや事件報道などにチャンネルを合わせれば、誰でも楽しめるので読者の皆さんにもお薦めだ。

ちなみに、例にあげたこのキ○ガイは、その後七年を経ても身のほど知らずの欲望を捨てることができず、生活も人間関係も堕ちるところまで堕ちて、昨年夏に某精神病院に入院したきり連絡がとだえている。何度か病院から「キ○ガイがいっぱいいるので気持が悪い。こんなところにいると本当に気が○ってしまいそう」という電話をもらったが、俺は電話口で笑いをこらえるのに必死だった。電話がこなくなったところをみると、うまくまわりになじんで溶け込めたのだろう（爆笑）。これは他人事ではなく、もしかするとそう遠くはない、明日の自分の姿なのかもしれないが、とにかく無責任に面白かった（人でなしだからね）。

この件から俺が学んだことは、「人は人生のあるべき時に、あるべき場所で、自分がこれまで持ち続けてきた何かを捨てなければ、決して前には進めない」ということだ。そして、もちろんそれを持ち続けて堕ちていくのも自由なのだ。「堕ちてゆく快感」というの

も確実に存在する。それは「鬼畜」をやっている俺が保証する。

★被害妄想系の逆襲！

次にキ○ガイの引き起こす傷害事件のトリガーとなるものについて、かつて自分でもずいぶんそういうことをした俺がその心理を説明しよう。

俺は十六年前に上京してから一ヵ月の間に、十以上の職場を転々とした。ほとんどの場合、初日の昼休みまでにその工場や現場の主任や監督を殴り倒して帰ってきたものだ。どこでもかなり派手に暴れたのに、不思議なことに警察沙汰にはならなかった。履歴書を出しているから俺の住所も明らかなはずだったのに、何もなかったのは、どこも「あんなキ○ガイに付きまとわれてはたまらない」と思ったせいだと思う。また、そう思われるようなひどい暴れ方と捨てゼリフをかました記憶はある。

暴れた理由は俺が若くて今より短気だったので、「人から命令された」のが耐えがたかったというムチャクチャなものだったが、「田舎者だと思ってナメられてはたまらない。東京モンはみんな俺を馬鹿にするにちがいない」という被害妄想があったのも事実だ。

被害妄想というのは一人で考え込むとどんどん増幅するし、そういうときは他人の視線や些細な行動がとてつもない悪意を持ったものに感じられ、感情の爆発を促して暴力行為を起こすきっかけになっているのだ。

そういう意味では、被害妄想系のキ○ガイにとっては、国の総理大臣よりも飲食店の店員のほうがはるかに重要な存在だ。読者の皆さんにも覚えがあると思うが、混んでいる定食屋で給仕の店員が注文を間違えたり、お茶や水をテーブルに運んでくるのを忘れたりすることは珍しくないだろう。普通の人間にとっては「よくあること」でも、被害妄想がパンパンに膨れ上がってテンパッているキ○ガイにとっては、冗談ではすまされない。頭の正常な読者の皆さんは納得できないだろうが、俺のようなキ○ガイの世界では、爆発寸前のキ○ガイ相手に注文を取り忘れただけで「こん畜生！　俺を馬鹿にしやがって！」と殺人事件が起きてもまったく不思議ではないのだ。そういう場合は、きっかけになった行動だけ見ても、キ○ガイが暴力行為を起こした原因や理由は見えてこないだろう。

同様にもう一つ書いておきたいのが〝視線〟のことだ。俺のようにひがみっぽくて他人の幸福を素直に喜べない矮小な自我を持ったクズは、他人からの侮蔑の視線にはとりわけ敏感だ。これは理屈で説明できるものではない。目が合った瞬間にピンとくるし、その視線のそらせ方で、相手が自分をどう見たかを完全に理解してしまう。もちろん、「こいつは俺を馬鹿にしている」と思ったり感じたりすること自体がすでに被害妄想の症状なのかもしれないが、そんなことはテンパッた連中には到底理解できない。

これは俺がいつも体験していることだが、工場の汚い工員服で商店街を歩くと「人はいかに格好で他人を見るか」というのがよく分かって面白い。通り過ぎる通行人のほとんどが故意に視線を合わそうとせず、目が合う連中のほとんどは「何だこいつは」「側へ寄る

な」という視線を送ってくれる。ガキを連れた奥さんなんか、「ほ〜らボクちゃん、勉強しないとあーゆー人になっちゃうのよ」と心の中で言いながら、子どもが俺の方に近づかないように自分の側に引き寄せたりする。読者諸君も「他人の冷たい視線」がどれだけ人の心を傷つけ、被害妄想を増幅させるものか体験したければ、思い切り汚らしい格好をして街を歩いてみるがいい。

「人を格好で判断するようなくだらない人間どもとはこっちだって口もききたくない」というこの俺にしても、粉だらけ工員服の自分を鏡で見ると、「こんな奴と細い道で出会ったらものすごく嫌だろうな」と思うし、きっとそういうときは侮蔑の視線を送るんだろう。そうした視線はある意味で、殴る蹴る以上の暴力なのだ。

俺は近所を歩いていて、俺の異様な顔を見て（メディアに出るときは被りもので隠しているが素顔はとっても凶悪なのだ）不審そうな顔をする中年のおっさんやおばさんを見るたびに、軽い殺意が沸き上がっては新たな憎悪が深層心理に蓄積されていくのを確かに感じる。また、そういうものばかりではなく、現代社会に生きる我われは、別に悪意がなくても知らず知らずのうちに他人の心を傷つけ、お互いの憎悪を増幅しあって生きている部分があるものだ。

不愉快極まりない通勤電車や人混みを思い出してほしい。俺は「社会が悪い」なんて言うつもりは毛頭ないし、キ○ガイの発狂はキ○ガイ本人の心の弱さが原因であることは間違いないと思っているが、そのキ○ガイを犯罪者にしてしまう責任が我われ全員にあると

も思う。
では、どうすれば良いのかとなると、鬼畜な俺が書くには抵抗があるが、「一人ひとりが深い人間理解と豊かな想像力を持って、自分以外の他人に対して思いやりの心を持って接する」という陳腐な結論以外にキ○ガイの犯罪を抑止する方法はないと思う（最低！）。もしもそんな社会が実現すれば、キ○ガイの犯罪を完全になくすことができないにしても、この世はもっと慈愛に満ちた素晴らしいものになるだろう。（あああああ！書いてて気持ち悪くて指がひきつけを起こしたぜ！）。そんなことは、お前ら人間どもには百億年たっても無理だろうけどな。
俺も一匹のキ○ガイ鬼畜として老後を考えると、「年をとって文章を書くのがめんどうになって、工場で働くのが嫌になったら、気にくわない文化人の一家でも襲ってとびきり陰惨で猟奇的な皆殺しをやったあげくに、〝絶壁な世界がやってくる〟なんていう気のきいたセリフを吐いて、そいつらの肉でもむさぼり喰ってやろう」という鬼畜プランを立てている。そうすりゃあ、精神病院にぶち込まれて薬浸けにされて、何がなんだか分からなくなってシねるという、豊かな老後が送れるだろう。
べつに死刑のことは気にしていないぜ。一人、二人をコロスような通常の殺人ではなく、大量過ぎる殺人や、けた外れの猟奇殺人をやれば精神鑑定は必至だし、俺はその結果にも自信がある。また、そういう尋常ではない事件を起こせば、適当な理由をつけて支援してくれるバカな文化人どもが出てくるんだろう。今からそいつらにお礼をいっとくぜ。

このバ～～～～カ！　それから俺の起こした事件についてのノンフィクションやノベライゼーション、舞台化、映画化の話が出たら、俺はがめつくロイヤリティをしっかり取るぞ（刑務所や精神病院では使い途がないから、儲けた金は全額精神障○者のための福祉施設に寄付しようと思ってるけどな）。

そんなわけで俺は老後がとても楽しみだ。どの一家を惨殺するかはこれからじっくり考えていこうと思う。実行はまだ先になると思うが、まあ、気長に待っていてくれ。政治家連中の言い草ではないが、「約束を守れる鬼畜、村崎百郎」というのを俺は必ず証明する。

付記：本書を読んでいる「キ○ガイ」諸君へ――おそらく、この本の読者のほとんどは「キ○ガイ」の奇異な行動を興味本位で面白がる好奇心の旺盛な連中だと思う。そのことには俺もとりたてて感想はないし、それはそれでいいと思う。なんせ俺が言うのも何だけど、キ○ガイのやることや言うことは本当に面白いんだからな。

問題はこの種の本が本屋に並んでいると、「俺のことが不当に書かれているのではないか」と考えて、目を皿のようにして全ページをくまなくチェックせずにはいられない被害妄想の強い精神病院ＯＢ＆ＯＧの連中だ。俺はここでそういう連中に言っておく。自分のことが書かれていると思っても騒ぐなよ。その記憶はいったいどこから来たものか、もう一度検証してみろ。知人や友人に確認を取れ。主治医にも相談しろ。早まって包丁なんか

持ち出すなよ。電波はそういう罠をいくつも仕掛けて俺たちに発狂を促すんだ。自分の名前と歴史を思い出せ！　奴らにからだを渡してはいけない。

それに、自分のことが書かれて、「笑いものにされている」とだけ感じるのは大きな間違いだ。耳をすまして遠くから聞こえてくる笑い声をよく聴いてみろ。悪意に満ちた哄笑ばかりじゃないぞ。なかにはあんたのことを好ましく思うフレンドリーな笑いもあるさ。記事を読んでも、笑わずに真剣な面持ちでオレらキ○ガイのことを真面目に考えている奴もいる。敵も生まれれば、理解者も出てくることだろう。だから必ずしも「書かれることは侮辱されること」ではない。そこを考えて早まった行動は慎しめよ。

「別冊宝島281号　隣のサイコさん　電波系からアングラ精神病院まで！」　1996年　宝島社発行

正義のジャーナリストどもに告ぐ！

村崎百郎

自分で言うのも何だが、真性鬼畜の俺は他者への思いやりの心が完全に欠落している。性善説を信じて疑わないクソ善人の皆さんには理解不能だろうが、俺は他人様への同情が

全くできないばかりか、他人様の悲劇を自分の喜びにしか感じられない最底辺のゲス野郎で、人が死んだり殺されたりする不幸で悲惨な事件や事故のニュースを聞くと、狂喜乱舞して赤飯を炊き祝砲を撃って玄関に国旗を掲揚して祝いたくなるぐらい根性のひん曲がった劣悪な「他人の不幸マニア」なのだ。おかげで陰惨な事件報道も、俺の目にはバラエティに富んだお笑い番組にしか映らず、テロや戦争や殺人事件が頻繁に起きる現状は、毎日楽しくて実に結構なのだが、楽しい事も続きすぎると、だんだん飽きてくるものだ。そうなると、残念なことに〝新鮮な感動〟を味わうのが大変困難になり、滅多なことでは絶句したり動揺したりできなくなってしまうから困ったものだ。だから、話題になった佐世保の小学生殺人事件（２００４年）にしても、それほど驚けなかったし、ましてや俺はロリ○ンでも何でもないので加害者の女児に萌えたりして楽しむこともできなかった。むしろ、あの程度の事でメディアをあげて大騒ぎする方が情けないというか、噴飯絶句モノである。

「弱肉強食」という自然界の摂理に照らし合わせると、あの事件に対するネットの反応は、実に素直で自然なものだった。被害女児の容姿や人格をクソミソに徹底的に侮蔑する意見が　堂々と発言され、加害女児をアイドルに奉りあげて、ファンサイトが作られ、次々と萌え萌えイラストが発表されるに及んで、良識ある文化人やマスメディアは、こぞって「そんなことをする奴らは愚劣な連中だ」と糾弾していたが、俺は今どきそんな事を言う連中の存在や発言の方に絶句する。馬鹿を言うな。愚劣なのはお前らの方だ。今ま

でさんざん正義の味方面して「真実の報道」だの「報道の自由」だのを声高に主張してきたくせに何を言いやがる。報道の自由が許されるなら、その報道を受け取った側がそれに対してどんな感想を持つかも徹底的に〝自由〟が許されるべきだろう。それとも何か？お前ら正義のジャーナリストどもは「我々の発信する、これこれこういう報道に対しては、一般大衆のお前らはこういう意見と感想を持つべきだ。それ以外の意見や感想を持つことは間違っている」とでも言いたいのか？　ふざけるな馬鹿野郎！　それこそお前らの一番嫌悪するファシズムの〝思考統制〟に他ならないではないか。他人が心に思うことを止めたり強制したりする権利など誰にもない。それを無理に止めようとする方がどうかしているのだ。お前らは被害者が　馬鹿にされ殺人鬼がアイドルになる社会が健全ではないと言うだろうが、俺は誰もが無理にお行儀の良い善人面をして裏でコソコソ邪悪な事を考える社会よりもはるかに健全に思えるぜ。実際、現実はシビアだ。正しい事をしたからって、それが正当に報われたり褒められる訳じゃないし、敗者はとことん屠られる。それが嫌ならこの世から出ていけってハナシだが、変えられるものなら変えてみな。果たしてあんたらに「真実の報道」ではなく「人が正しい行いをしたくなるような報道」が可能なのかねえ？

「じゃあ、どうすればいいのか」なんて俺に聞くなよ。こういうネット社会とどう向き合えばいいのかは、とっくに答えが出ているだろう。我々は強くなるしかない。もっと深く絶望し、他人を信頼せず、当てにせず、誹謗中傷されたぐらいで傷つくような安い自尊心

を捨て、どこまでも限りなく強くなろうと激しく強く意志することだ。そして、誰の為だかわかんねえような正義感や倫理観なんかドブに捨てて、他人の目を気にして善良であろうなんてしないで、ヒマつぶしに弱い者いじめをするがいい！　それだけは徹底的にやれ！　やってやってやりまくれ！　飽きて他人に思いやりが持てる余裕が生まれるまで。

「ＳＴＵＤＩＯＶＯＩＣＥ　（スタジオ・ボイス）」　ＩＮＦＡＳパブリケーションズ発行

とっても鬼畜なプラトニック・デート

村崎百郎

ひとでなし鬼畜の俺にとっての「デート」などというものは、フェミニスト風に言うならば「全ては暴行のための準備行為」にほかならない。

そう、俺はおりこうなフェミニストたちの主張する「全ての性行為は暴行である」という発言を思い出すたびに、脳内ぺ○スが激しく勃○してカ○パーを噴き出すのを止められないあきれたゲス野郎なのだ。俺はフェミニストたちの被害妄想じみた男根主義批判の全てを積極的に認めよう！「全ての性行為は暴行」——ああ、何と甘美な言葉なんだ！　そ

う言われると何だかとてもエラいことをやってきたみたいでテレちゃうぜえええええ！
　この発想を更に進めると、「男の一生は全てが暴行」で、「この世の全ては基本的に暴行で構成されている」ことになる。男の罪深さを追及するなら、当然そういう結論に行きつくだろう。いやあ、男どもって本当にけしからん連中ですねえ、くっくっくっ。
　そんなふうに自虐的に開き直ってわが身を振りかえると、セ○クス（暴行）やデート（暴行準備）というものも、日常生活のどこからがその行為に該当するのか、厳密に考えれば考えるほど、その区別は曖昧になってくる。たとえば、デートの朝、ち○ぽこを念入りに洗うのはあきらかに性交の準備行為であり、俺にとってはセ○クス同然の極めてエロい行動である。同様に前の日に風呂に入るとか、ディープキスに備えて歯を念入りに磨くとか、デートに着ていく服を選ぶなどの行為も、みんな性交のための準備行為にあたり、思いきり拡大解沢すれば「暴行」行為にあたるだろう。
　そうなると「男」というものは、飯を喰らうのも、糞をひりだすのも、睡眠を取るのも、生活の全ての行為が暴行の準備行為にほかならず、常に暴行の為に活動しているけしからん存在ということになる。男どもは暴行するために朝目を覚まし、暴行相手の物色と暴行活動の資金作りのために会社に向かい、強い勃○を作るためにメシを喰うわけだ……常にそういう視点で生きているフェミニストにとっては、よちよち歩きの男の赤ちゃんの可愛らしい姿でさえも「ああ、またしても暴行犯人がすくすくと育っていく！」というおぞましい光景にしか見えねえんだろうなあ。そんな思想や思考はどこか鬼畜な感じがし

て、俺は過激なフェミニズムが大好きだねえ。ちなみに、この俺は「オマ〇コはできれば全部タダがいい」という理由だけで売〇には反対なんだけど、みんなこの悪意、分かるかな？

ってなわけで、いかさまフェミニスト鬼畜のこの俺の、これまでやった思いつく限りの「究極のデート」は、意外なことに十数年前にある女と同棲中に、他所で結婚の決まった年上の女とプラトニックな恋愛をしていた頃の「セ〇クス抜き」の純情デートである。当時「一回でやめれば暴行だが、そのままそこに住み込んで四年間犯し続ければ単なる愛だよな」という「住み込み暴行千五百日」を実戦していた俺は、同棲も二年目にさしかかり、ひと通りの変態行為もやり飽きて、相手の女の頭に袋を被せてSM雑誌のヌードグラビアを見て興奮しなけりゃオマ〇コなんかできない状態になっていた。そんなときにふと知り合った別の女と、約半年にわたって週三回のペースで手を握って見つめ合うだけという清いデートを続けていたのだ。何でそんなデートが性欲の権現のような俺に可能だったかというと、純愛デートの彼女を家まで送ったら余韻がさめないうちにタクシーをつかまえて、同棲相手のアパートへ乗りつけて、たった今別れた相手のことだけを想いながら「古い女」にモノも言わずに獣のような即マンをキメていたからだ。そうして性欲を解消して心と身体のバランスをとってていのだが、さすがに発覚して同棲相手にマジで殺されかけた。額を割られて包丁を逆手に持って突っ込んでこられたんだが、それも当然だよな。

「ＳＴＵＤＩＯ　ＶＯＩＣＥ　（スタジオ・ボイス）」　１９９６年　ＩＮＦＡＳパブリケーションズ発行

電波と妄想――妄想鬼畜ゲス人間の電波生活　村崎百郎

　とある地方都市の公衆便所で女子中学生がホームレスに刃物で刺されて死んだ。犯行後に茫然と死体の傍に立ちつくしていた所を逮捕された犯人のホームレスは、警察の取調べに「便所に入って小便をしたあと、手を洗おうと蛇口をひねったら、そこから命令が来た」ので、少女を刺したという。電波による痛ましい殺人事件の一例である。

　また、何年か前の夏、高円寺の駅のホームのまん中で、グラサンをかけて派手なアロハを着た暴力団風の男が快活に笑いながら、「お前ら、電車に乗ってる場合じゃねえぞ！」「●●組は、電波飛ばして人殺しをさせるんじゃゃえ！」と、明るく陰謀を暴露していた。ホームにいた電波に無理解な一般市民は「見なかった事にしよう」と完全にシカトしていた。何か悪いものでもキメている感じだったが、男は妙に明るく愉快そうに叫んでいた。

　多分、陰謀を暴く事に生きがいを感じているのだろう。

以上はよくある「電波」にまつわる話だが、実際に「電波」は受信可能な人間には、どこにいても、どんなときにも存在しているものなのだ。そして、それに関わるれば少なからず危険が伴う。だが、俺に言わせりゃ、生きる事は全て妄想戦だ。多くの妄想を持つことのできる人間が、豊かなイマジネーションを獲得し、「人生の勝利者」になれるのだ。

さて、何から語ろうか……当然電波の事だな。そう、電波はつねにどこにでもある。

かく言う俺はかなり客観的に電波とつき合っていると思う。そうなることができたのは、何も俺が、俺の頭に来る「声」がさかんに言うように「選ばれた人間」だからなどではない。何でも簡単には信用しない、卑しい根性が幸いしただけだろう。

俺は電波が聞こえる電波系のキ◯ガイである。そのつもりでこれを読んでほしい。

受信の経緯

俺が頭で直接電波を受信するようになったのは、おそらく生まれつきだ。物心ついた頃はすでに電波が聞こえていた。小さい頃の俺は、人間というのはそれが普通だと思っていたし、みんなも自分と同じように電波を受信しているものと信じて疑わなかった。確かに聞こえる事はうざったくもあったが、それよりも時々視界をよぎる妙な光の方が気になっていた。当時は極彩色の光で構成された多くの奇妙なヴィジョンや幽霊？　のようなものを頻繁に見ていたのだ。親に言わせると、暗闇を全く怖がらず自分から進んで暗い方へ歩いていくような妙な子供だったというが、多分その時俺の目には多くの光が映っていたん

だろう。幸いな事に、現在は幻視体験の方はかなり少なくなっている。
　こうした事が特異なことだと気がついたのは小学校に入学して新しい友人と遊んだりするようになってからだ。気がついた時は少々驚いたが、子供心にも「あーこれはあんまり人に言っちゃいけないのかも」と感じて、親しい友人にも話さないようにした。もちろん、その当時は、まだそれを「電波」とは呼んではいなかった。「変な音」「変な声」と呼んでいたような気がする。
　それから三十四歳の現在まで、電波はずーっと俺の人生とともにある。その間には、受信する電波が多過ぎて気が狂いそうな時期もあったし、電波量が少なくて、わりと平和に暮らせた時期もあった。総じて言うなら、人間にとって電波などというものは絶対に「余計な物」である。実生活ではうるさいだけで役に立たないし、電波が聞こえて得した事などほとんどない。読む雑誌の何もない病院の待合室でも、退屈しないで順番を待つことができるというぐらいのものだろう。
　これは、あくまで俺の場合なのだが、電波の受信状態は常に体調に左右される。体調を崩して弱っている時などに、金縛りとともに周囲数キロ四方の音が全て頭の中に直接入ってくる事がある。そういう時は雑音が延々と頭の中で爆発し続けている感じで、まるで拷問だ。犬や猫の鳴き声、ＴＶやラジオの放送にまじって聞こえる子どもの笑い声、どこかの会社の上司と部下の仕事の会話、中年夫婦の口論、兄弟が一緒に風呂に入って歌ってい

る歌、ホームレスの独り言、コオロギの鳴き声、なめくじの這う音……どんな意味があって聞こえてくるのだろう？　いや、おそらく電波を受信する事に意味なんてないに違いない。

その他にも、昼間よりは夜の方が電波が多いとか、新月や満月時には確かに通常より電波が多いなど、何らかの自然現象との関連性はあると思われる。実際に詳しく調べた訳ではないが、多分、太陽の黒点活動も電波に影響しているんだろう。

電波の分類

さて、断片的に語ってもしょうがないので、これからできるだけ分かりやすく、俺に来る電波を系統立てて分類してみよう。こんな試みは俺も初めてなので、書いている途中から頭を電波に乗っ取られる可能性もある。読者諸君はそのつもりで読んで欲しい。途中から文章がおかしくなったら、電波の影響を受けているものと思ってくれ。

そして、もう一つ読む前に覚えておいてほしいのは、これから先の文章は「元々言語でないものをかなり無理に言語化して」書いているものだ。ほとんどが適切に言葉で表わせるものかどうか、俺も自信がない。だから、そのへんはできるだけ好意的に読んでくれ。

一口に電波といっても、全ての電波が同じ状態でやって来るわけではない。俺の場合、単独で来るものもあれば、複数の電波が同時にやって来る場合もある。受信にかかる時間

もまちまちで、人間が話す声のようにゆっくりしたスピードでやってくる「声」もあれば、受信した瞬間に膨大な情報量を受け取る場合もある。たとえて言えば、ＴＶあり、ラジオあり、有線あり、レーザーディスクあり、ウォークマンあり、電気あんまあり、徳用かみそりあり、肥後ずいきありといった様相で、同じ「電波」という言葉でくくってはいるがそれぞれ全く別のメディアのような気がするのだ。
それを大きく分ければ「言語と非言語」「意味のあるものと意味不明のもの」「はやいやつとかったるいやつ」ぐらいなものだろうか。とにかく今回は読者のみんなに分かるように説明していこう。

1．メッセージが不明確な電波

俺の場合、全体の約４割ぐらいがこの電波である。
これはさらに音、音楽、他言語（？）に分類可能だが一番多いのは「音」だ。それも雑音が多い。その種類は千差万別で、虫の音、風の音、波の音など、自然界のあらゆる種類の音が断片的に聞こえてくるようなのはまだ良いほうで、苦痛な音の中には明らかに「これは他天体の音だ」と感じる音があって、それは別にやかましいノイズ系でもないのに、聞くと非常に苦痛なのだ。
この電波が来ると少し暴れたくなる。そして、この音の事はどういうものか言い表わすのがとても難しい。まるで「魂を削られるような」とでも表わせば良いのだろうか、自分

の身体が後ろからでかい包丁でスライスされるような、思い出すもの不快な音だ。静かで、不規則で、聞いていると不安になる音。これを「他天体の音」と言うのは俺にもわからんが、俺の脳内のある部分にとどまっている「何か」による助言によるものだ。

この音は、俺が十代の頃には良く来ていたが、現在は何年かに一度ぐらいしか来ない。それとは対象的に、全く別な、甘くて身体が溶けていくような快楽の音もある。この電波は受信すると身体中が蜂蜜のように甘くなり、実際に蜂が寄ってくるので大変だ。個人的には秘かに「フェロモン音」などと呼んでいる。小学生になる前に頻繁に訪れた電波である。「音」と言ってもほとんど聞こえないのだが、受信するとすぐに体が甘くなるので分かる。それに幻臭が伴う時がある。バラの香りのような甘い匂いだ。

その他にも、誰かが死ぬ時の音、魂が母体に宿る音、月の昇る音（満ち欠けの音）、地軸の傾く音、朝日の踊る音、冥王星の回転音、遥かな銀河の爆発音（？）など、挙げていけばキリがないが、様々な音がある。これらの音が日常生活で体験する音と明確に違うのは、耳ではなく頭のまん中で球体が膨らむように聞こえてくる所だろう。多分一つ一つの音にも何か複雑なメッセージが宿っているのかもしれないが、俺は意図的に知らないふりをしている。

「他言語」というのは、日本語ではない電波の総称だ。これが本当にどーでもいい電波の代表で、ラジオの短波放送で他国の放送を聞くのに少し似た感じがする。俺に来るものは音量もそんなに大きくないのでＦＥＮを聞きながら仕事をしているようなもんだ。違うの

2. 感情操作電波（無味／無臭／無音）

これは俺に来る電波の全体の一割弱ぐらい。不意に哀しみの感情やら喜びの感情が、それこそ風に乗って来るように訪れる。前述した「甘い電波」ではないが、こうした無味無臭の電波は身体に及ぼす影響力も強い。かつての、深川の通り魔事件の犯人のKが語った「ニヤニヤ電波」や「メソメソ電波」はこの類のものと思われる。確かにこの種の電波は性質が悪く、これに攻撃命令の電波が伴うと、意志の弱い奴は逆らえずに本当に人を傷つけたり、殺したりしちまうんだろう。俺などは、長年の電波生活でこれをかわすテクニックを身につけている。書くとキ○ガイ扱いされそうだが、実際俺はキ○ガイなんだし、読者サービスで書いておこう。

一つは、この種の電波が来たら、すぐさま脳内に全く対立する感情電波をデザインして、来た電波にぶつけるという方法だ。例えば「ニヤニヤ電波」なら「メソメソ電波」をぶつけ、「喜3怒8哀17楽1」の割合いの電波なら「喜8怒3哀1楽17」で対抗するというように、常に正反対の電波で迎撃して、来た電波を中和してしまうのだ。これは、やって来る電波の攻撃に脳や身体を支配される前に行わなくてはならない。

この電波に対抗するもう一つの方法は、俺自身が一時的にこの身体から自我意識とともに完全に撤退する手法である。時間にすれば一刹那ぐらい、カラッポになってやりすごす。受信装置を持ったまま外へ避難するようなもんだ。あまり長く出ていると妙なものに身体ごとぶん取られそうなので細心の注意が必要だ。身体に戻ると、遠ざかる電波をかす

は、ラジオならスイッチを切ればそれでもう放送は聞こえないが、脳内電波放送は、こっちがいくらやめてくれと思っても延々と続くという所だ。ただ、この他言語電波も脳内に別の翻訳電波が届いている時には、まれにメッセージが分かる事がある。確か、一六五四年の北大西洋からの救難信号（難破船か？　勿論この時代に無線なんかねえぞ）のようなものを受けた事もあった。脳内電波は時空を超えるらしく、未来からも過去からも時間を選ばずやって来る。それも悲痛な叫びや悲惨なメッセージが多くて困るんだ。受信したって何にもできねーんだからさ。だから、病気で死んでいく少女からの「一八二五年の遥かなさようなら」なんか聞きたくも何ともねえんだよ。まあ、俺は感情が壊れてるから別に何とも感じねーけど。

「他言語」の電波には英語もあればフランス語もある。北京語や広東語、ハングルもあれば鹿児島弁（俺には何だか意味不明）、あと何だかわからないへブライ語みたいなのもある。誰かと誰かの対話のような電波もあればパーティの中継みたいな電波もある。一番多いのはだらだら長く何かを朗読しているような声である（宗教書を読んでいる感じだ）。非常に古く、力強い電波もある。たぶん、他天体の言語もあるんだろうが俺は矢追純一じゃないのでそれはどーでもいい事だ。こうした電波について、エンターティナー系のオカルティスト達の様な興味は俺には全くない。宇宙人の実在なんて興味ないし、それよりも電波の来ない生活の方が遥かに魅力的だ。

かに感じる。ホッとするひとときである。

こんな事を続けてきたから、「自分」というのが意識のかたまりで、「身体」という乗り物に「乗っている」とか「操縦している」という感覚があるんだと思う。

3．感覚錯乱系の電波

これは感情ではなく感覚がやられる電波。割合は全電波の1パーセント以下で、そう滅多に来るものでもないが、来るとこちらの精神状態もかなりやばいものになる。いくつかの感覚に対して複合で襲ってくるものもあり、そんなときはいままでも少し錯乱してしまう。これも、いくつかパターンがあるので順を追って説明しよう。

反重力電波

この電波はやってくる電波の中でもとりわけ速い部類のものだ。今まで紹介したいくつかの電波は、やって来る直前に「あっ、何だかアレがきそうな気配だ」などという予感の働くものもあるのだが、この電波だけはいつも、まったく不意にやって来るので、心の準備が全然できない。そういう意味ではかなり迷惑なものである。

たとえばこの電波を受けると、「気がついたら上空3万メートルへ体ごと引き上げられて、今にも落下しそうな気配につつまれる」という恐怖に襲われる。メチャクチャな浮遊感覚が伴い、立っていられなくなるのだ。意識も体と一緒に何か大きな見えないものに一

気に引き上げられ、飛ばされていく感覚だ。突然、重力が消えて「上空へ墜落していく」という感じだ。とにかくこの電波の強力なものは、受信するとかなりリアルに浮遊感覚と落下する感覚が感じられて、道を歩いていても、一瞬、歩行が困難になってしまう。カッコ悪いんだけど、うずくまって地面に手をあてて自分が地上にいることを確かめずにはいられないのだ。

この電波は強弱の幅が少しあって、強いものなら落下中に自分の体にぶちあたる風さえも（そのニオイも）感じる場合もあるが、弱いものなら自分の中の何割かが上空へ行ってしまうという身体の分裂感覚も伴う。何割かならそれほど怖くないので、来ても落ち着いていられるが、ともかく来ると迷惑な電波である。

身体分裂電波

この電波を受信すると自分の体が分裂していく感覚に襲われる。

それもいつも同じような分裂のしかたをするわけではない。たとえば、ある時は表皮が一枚一枚むかれていく感覚に襲われるもの、数センチきざみでタテ割りにスライスされてゆっくりと分かれていく感覚になるもの、体から幽体のような透明な自分がいくつもいくつも飛び出していく感覚になるもの、自分の体のある部分が急激に膨脹、収縮をくり返してある方向へ伸びていく感覚のものと、それぞれ一回ごとに全く別の感覚につつまれて次にくる時は自分の体がどうなるか見当がつかない。

この電波はそれほど怖くもない。なぜなら電波を受信してから体の分裂がはじまるまで多少間があるし、身体感覚の変化も反重力電波ほど急激ではないからだ。だからこちらも心の準備をする余裕ができて、自分の体が分裂してゆくさまを楽しむことさえできるのだ。

この電波に加えて時空を超えてどこかにアクセスしてしまう次元超越電波が加わると「手首から先の左手の感覚がすっぽりと消えたかと思ったら、左手は次元超越電波にもつつまれて次元のさけめからどこかへ行ってしまっていた。それでも左手の指に何かザラザラした石のようなものに触れる感覚があったので情報電波で探ってみたら、左手が触っているのは紀元前三二三年のマケドニアにあるなんとかいう城の城壁なんだそうだ」というような事態も生まれる。こんなのは聞いてて「バッカじゃねーの?」と思う余裕もあるので良いが、手の感覚が虚空に消えて、どこか遠いところで悪さをして帰ってくるという夢遊病的な分裂状態の場合は、手が戻ってきたときにはじめて、その手が他所で何をやってきたかがこちらにも伝わるのでとても不気味だ。手は別の時空間で見知らぬ女の乳房を揉んだり、誰かの頭につっこんで脳味噌の中をかき回したり、銃の引き金を引いたり、何かの発射ボタンを押したりと、様々な行動をとっている。まあ、そういう行動をしたやつの手の感覚を俺の手が共感して、その記憶を運んできたものと思い込みたいんだが。

受信すると他人の夢と自分の夢が繋がる電波。これが来ると近くにいる奴と同じ夢を見てしまい、同じ夢のなかでコミュニケーションがとれる。繋がる相手が恋人だったりするととても楽しいのだが、そんなうれしい例はいままで2回だけ。たいていは好きでもない他人の夢の中に繋がってしまう。中でも最悪なのが過去の自分の悪夢と繋がった場合で（俺にとっては過去の自分はもはや他人である）、そのときは二重三重に増幅された悪夢の中で発狂寸前まで苦しむ。良いことよりも悪いことの方が多いのが俺に来る電波の特徴なのだ。

これは絶対に単なる偶然なのだが、昨年こうした夢電波がきている最中に、近所の家の性悪ジジイを何度もコロス夢を見て、そのあとジジイが本当にポックリ逝っちまったことがある。誰に繋がっていたかは断言できかねるが、ジジイをコロスヴィジョンがかなりリアルだったことからジジイもしくはその近親者であったことは間違いないと思われる。このジジイは絵に描いたような高慢高級お上品野郎で、道で俺とすれ違う度に、もの凄くけがらわしいものを見るような目つきでうさんくさそうに俺を睨むので（まー実際その通りなんだが）こちらも目で「よお、ジイイ、まだ生きてたか。葬式はいつだ？」と挨拶を交わしていたほど仲の良い間柄だ（正直に言うと、今度東京に関東大震災級の地震があったら、このジジイだけはドサクサにまぎれて絶対に○してやろうと決めていた。数十万人死者が出るなら、殺人の一人や二人は誰も気にしないだろうし、気にならないだろう。そういうことを考えている連中は結構多いので、身に憶えのある奴はちゃんとした迎撃体制を

作っておいた方がいいぞ）。こうまで見事に死んでくれると呪い殺したみたいで気分ハイなんだけど、要はジジイの死期を共感して、それを夢で見ただけなんだろう。そう思わないとやってられねえよ。その時にこちらの願望も少し入ってリアルな殺害シーンを体験したってわけだ。

考えてみりゃあ人間なんていつか死ぬものなんだから、自分がシねばいいと常々思っていた人間が次々と死ぬ現象なんか不思議でも何でもないぜ。俺には同様の事例がいままで10回近くあったけど（なぜか事故とか突然死が多いんだよね）、ぜ～んぶ偶然、気のせい、自意識過剰。霊も霊界も妄想だよね。呪殺なんて非科学的なもんは絶対にありまっしぇ～ん！　くっくっくっ、どうせプラズマだよ、プ・ラ・ズ・マ。

夢魔電波

これは自分が触るのと逆に、他人の手の感覚が体中をはいまわる感覚に襲われる電波。あんまり気持ちの良いものではない。相手の手に実体がないので、服でも皮膚でも内臓でも簡単に貫通してしまう。臓器をいじりまわされるような感覚がおぞましくて超バッド。夜中に「うるせ～～！」と大声を出してしまう原因の一つにもなっている。これこそ昔からモノの本に書かれている「夢魔」じゃないかとも思うんだけど、どうなんだろう？　体内の性エネルギーの暴走とか何とか言われることもあるけど、不愉快って点では俺にとっては完全に電波なんだよな。

被害妄想増幅電波

この電波自体には何の情報も含まれてはいないが、この電波を受けると自分のまわりの人々や（ときには動物や植物まで）がいっせいに自分について凄まじい悪意を持って悪口を言っているような気になってくる。被害妄想を増幅する、たちの悪い電波といえよう。

この電波は受信した人間に最悪の場合、「あああ、街中が俺を憎んでいるんだ。もうダメだ、もうダメだ、こんなに嫌われ憎まれては、こいつらを皆殺しにして俺も死ぬしかない。それが銀河系宇宙全体と高円寺南三丁目のミケ猫の為なんだ！」などと思い込ませ、追い詰めて自殺させるのだ。アメリカなどでときたま起きる銃の乱射事件などの犯人はこういう電波を受けているに違いない。実に因業な話だが、どうせ建国時に虐殺したバッファローとかインディアン、奴隷にしていじめ殺した黒○たち、それにベトナムでコロした民衆の怨念なんだろう。アメリカというのはそういう因業国である。

この電波にもずいぶん苦しめられたが、あるとき開き直って「何で他人が気になる？いいじゃねえか誰に何思われようが。殺しにきたら返り討ちだ！」と、奴らの憎悪を心待ちにするようになってからだんだん影響されなくなってきた。全てを前向きに自分への批判と受けとめて（それにしちゃあ激しすぎるんだが）謙虚な気持ちで他者を憎悪すれば、誰が本当に自分を憎んでいるか、誰を攻撃すべきかが明確に見えてくるから便利なものだ。

今の俺はハナから人に好かれようなんて思っちゃいない。基本的に「自分以外の他者とは利用するか攻撃してコロス対象」という認識で攻撃的に生きていれば、他人から自分に来る憎悪など屁のカッパなのだ。これからブチコロしてむさぼり喰おうと思っているブタにまで好かれようと愛想をふりまくのが、脆弱でお上品な現代人どもだ。ざけんじゃねえ。コロされるブタがお前らを好きなわけがないだろう。思いっきりブチコロして喰いまくり、奴らの怨念まで一滴残らず栄養として消化するのが生命体への礼儀ってもんだろう。

俺は襲いかかってくる憎悪は絶対に容赦しない。噛みついて、喰らいついて、肉を裂き、骨を砕き、内臓をひきずり出して、頭から被って踊ってやる！　体の中にくすぶっている殺意はいつでも表面に出てくるチャンスを深い所で待ち続けている。ああ、そうだ。俺は待ってる、いつでも待ってる。いつでもいいぜ。コロしたい、コロしたい、コロしたい、思いっきりコロしたい。皮肉なことに、この願望がある限り、俺は被害妄想増幅電波には滅法強いのだ。

自殺電波

受信すると死にたくなる電波、または死を誘う声。聞こうと思えばわりと簡単に聞こえるどこにでもある最も身近な奴である。イヤな電波もあったもんだが、現在俺はこの手の電波には滅法強い。全く動じずにフンフン笑いながら聞いていられるのだ。

突然自殺をするような奴らがこの種の電波を受信している可能性は高いだろう。こんな電波は夜ならどこの闇にでも転がっていて甘い声で人を死に誘う。「……もういいよネェ……いっしょに眠ろうよォ……楽になろうよォ……ホラホラこっちだよォ……」ビルの屋上や崖の上に立ってみればそんな「声」はいくらでも居る。海や湖、河川や沼などの側に立つと、今度は水たちが同じように誘うだろう。俺は常々雪山登山で遭難して死ぬ連中も、何割かは山からの自殺電波を受信しているのではないかと考えている。もちろんそうした「声」はどこにでもあって、俺が働く工場でも製粉機の奥からは始終そういう誘惑がやってくる。ウチの工場には不幸にしてそれに応じてしまい、足首から先を失った奴もいるが、それも個人の選択の自由というやつなんだろう。命を失わなかっただけマシなのかもしれない。忠告するまでもないが、この自殺電波は数ある種類の電波の中で最も信用できない部類の電波であり、聞こえてきても耳をかす必要は全くない。

この電波については色々と言いたいことがあるがそれは別の項目で語る。ひどいのになると「肉体を脱ぎ捨てたあとの快感」や「人は死んでからはじめて本当の生が始まる」なとということを主張して死を誘うたわけた電波まである。誰がそんなことを信じられるか。死んでからのことは死んでから考えるべきだ。

4．メッセージが明確な電波

これは主に具体的な映像なり言葉が来るという電波である。さらにそれを分けると以下

のようになる。

予知／予言電波

予言ものの電波も厳密にいえば分別不可能なものも少なくないのだが、ここでは一応メッセージの伝わる方に分類しておこう。予知／予言電波は他の多くの電波同様、唐突にやってくる。これは、どう言ったらいいのだろう？　「情景が聞こえる」というか、視覚が聴覚を通して同時にやってくるような感覚だ。それも非常に複雑で、一度受信した映像&音を瞬時に忘れて瞬時に思い出すという感覚がある。既視感も伴う。「ああ、そんな事もあったな」という感じで、はるか昔の事を思い出す感覚で未来？が見え／聞こえるのだ。大災害なんかなら面白いんだろうが、俺の場合、大概どうでも良い事ばかりで役に立つことはほどんどない。ほんの一瞬先の事を感じるのはよくあるが、そうでなければ、何年先か、どこか、生きていてもこの先、決して行くこともないであろうどこかの場所の風景を感じ／見てしまうのだ。

ああ、だから予言というより、「どこかの映像情報が時空間を超えて出鱈目にやってくる」といった方が正確かも知れない。見たこともない人間がかつて／いつか見た風景を様々な気持ちで眺めているような感触だ。これは誰の記憶なんだろう？

空間がある独自の「振動」を記憶し、それがぐるぐると世界を回っているのかも知れない。

声（神だの悪魔だのフリーメーソンだの）

さて、ようやく世間一般に知られている代表的な「電波」にたどりついた。たぶん、妙なチラシを製作したりして、人知れず陰謀組織と戦う孤独な戦士タイプの人間が受信しているのは、大部分がこの種の電波だろう。これは直接頭の中に、何か妙な声が割と具体的な事をしゃべるのが聞こえるという、いちばんうるさくて性質の悪い電波である。種類も様々で、知らない他人のほとんど意味のない会話もあれば、何か難解な理論を説明する講義のような声もある。しかし、一番やっかいなのは、自分は神だとか仏だとか、高次元の存在であると名乗って、こちらが聞きたくも何ともないありがたいお言葉やら説法やらを一方的にまくし立てる説教タイプの電波だ。それなりに暖かい波動が感じられたり、甘い香りとともにやって来るんだが、教義だか狂義だか知らんがこっちの意志を全く無視して語り続けるんだからたまったものではない。これに比べれば駅前の宗教アンケートなんか自分の屁みたいに可愛いもんだ。

こういう声は大概もったいぶって「おまえは選ばれた」だの「使命を果たせ」だの「あなたは私の言葉を多くの人々に伝えねばなりません」などとたわけた事を言う。うるせえ馬鹿野郎。宝クジの特賞ならまだしも、そんなもん当たろうが選ばれようが嬉しくも何ともねえんだよ。こういうのを真に受けた馬鹿が陰謀と戦う戦士になったり、妙な宗教を始めたり、セミナーを開いて金を取ったりするんだろう。全く御苦労様な事である。

そして当然だが、中には「悪」を奨励する声も聞こえてくる。どちらかといえば、俺の心はこちらに近いが、善悪の違いはあれ、はじめに言う事はみんな同じで「きみは選ばれた人間だ……」とやけに偉そうで押しつけがましい。ハイハイ、それはようございましたね、さっさと帰れよ馬鹿。悪事なんかお前に指導されなくても好きなようにやるよ。これは俺の身体だ。いちいちおめーらに命令されたかねーよ。俺は何度もこういう声を無視しているが、とりたてて何がどうなったという事もない。選ばれたとか言ってるけど、本当は「声」が聞こえる奴なら誰だっていいんだろう？　善人でも何でもない俺みたいなゲス野郎に聞こえてくるのが良い証拠だ。

俺が電波を受けても冷静でいられるのは、こうした声がたったの一つじゃなくて数多く聞こえるからだ。たった一つの声だけしか聞こえなければ、それなりにありがたがって、その気になったかも知れないけど、これだけ何種類も来られたんじゃあ、どれも信用出来ない。中には本物もいるのかも知れないが、どいつもこいつも言ってる事は大差ないし、俺の予知妄想では、こういう声に従って行動していけば、初めは良くてもそのうち声にひきずられて自分を失い、必ず自滅しちゃうらしい。「声」は一見善良そうだが、本当は甘くて危険な電波なんだ。これを読んでいる読者諸君も、いつか突然そういう声が聞こえてくる日が来るかも知れないが、どうか冷静に対処してほしい。「声」が聞こえる事自体は大した事ではない。間違っても声にそそのかされて自分が「選ばれた特別な人間だ」とか、「人類を救う使命がある」などと舞い上がらない事だ。

最近は「チャネラー」などと称する連中がいるが、そういう善良な奴らにはこう言いたい。もし、あんたが本当にこの世界を良くしたいと考えているなら、どこの何だかわからない奴が語りかける言葉を無節操に人に伝えるのは即刻止めろ。あんたが自分で考えて、世界の為に良かれと思い「伝えたい」と思う事を「あんた自身の言葉」で語るがいい。基本的にこの世界は、いま生きている生き物と、これから生まれて来る多くの生き物たちのものだ。出所の怪しい「声」をのさばらすな。お前自身の「現実」を生きろ。それが多くの「声」を聞いてきた俺からの忠告だ。

尚、補足するなら、心霊主義の研究の中には「霊界にもキ○ガイは大勢いる」とする見方もある。たとえば、自分がキリストだという妄想を抱いて死んだ人間は、霊になってもその妄想を持ったままだというのだ。霊界ではこうした「自称キリストの霊」だとか「自称ブッダの霊」「自称ノストラダムス」「自称モーセ」「自称アフラ・マズダー」なんてのが、それこそダースどころかグロス単位で存在していて、そういう霊体が、降霊会などでお手軽に出てきて、いいかげんな事を語ったりするらしい。電波を霊の発するものと決めつけるのは非常に危険だが、俺もキリストを自称する電波なら声色違いでこれまでに二十人以上来たりしているので、「声」の正体は案外そういう狂った霊だったりするのかも知れない。それにしても、あの世には霊の入る精神病院は無いんだろうか？

陰謀告発電波とあくなき脳内闘争

また、「声」には神仏などの善意系や、悪魔、邪霊などの悪意系の他にも、この世を裏から操る陰謀組織の秘密を暴く善も悪も関係のない奇妙な電波も存在する。もちろんそれも二種類あって、受信した瞬時に全ての陰謀の構造が見えてしまう場合と、「声」がゆっくりと懇切丁寧に陰謀組織の構造を語るという場合があり、どちらも受けたときは一瞬「これは大変なことを知ってしまった」と冷静さを失ってしまうのが普通である。よく考えてみればその説明に変なところはいくつもあるのだが、そうしたことを考えさせる暇もなくどんどんやってくるのが電波の恐ろしいところなのだ。

それと同時に、陰謀を知ってしまった自分を絶えず見張る存在もクリアに分かってくるので（被害妄想増幅電波の一種。たぶん間違いなく妄想）これが相乗効果を呼んで、明かされた陰謀がますます本当のことであるかのように思えてくる。俺の体験でも、自分の職場にある無数の盗聴器の存在や、アパートを囲んで自分を監視している陰謀組織の人間の存在が部屋の中にいても明確に分かるのだから大変なものだ。ひどいときには、アパートから3軒隔てた家の垣根の陰に身を潜めている刑事の息遣いはもちろん、そいつのすかしっ屁の音まで聞こえる始末だ。ここまで来れば誰だってそれが妄想であることぐらい見当が付きそうなものだが、そういう電波が来ているときにはなかなか客観的に物事を見たり聞いたりできなくなるから怖いものである。

そういう陰謀電波をつかまえて、言ってる事をかたっぱしから記述して本にすりゃあ、

今あるユダヤやフリーメーソンの陰謀本で食っている宇野○美や赤○剛、鬼塚○十一などの「陰謀成金」のようになれるかも知れないが、それではあんまり情けなくってやりきれない。実際、陰謀成金どもの本を開いてみれば、俺が受信する電波のたわ言とほとんど変わらない事が延々と書かれているので、俺はこいつらも同族ではないかと思ったりする。まあ、同じゲス人間として「無茶苦茶な民族差別と組織差別を飯のタネにして喰っている最低のゲス野郎」という点は高く評価できるが、いつまで経っても同じ陰謀を繰り返し叫ぶのはあまりにも芸がなさすぎる。なあ、頼むからお前ら一度クジでも引いて代表を決めて、一人くらい思いっきり酷くコロされてみろよ。あんな凄い陰謀を長年暴き続けているのに、ただの一人も消されないなんて、リアリティというモノをナメちゃいないか？　読者だっていつまでも馬鹿のままじゃないぞ。

陰謀史観は四十女の腐りかけたおめ○のように、一度ハマるとなかなかその魅力には抗いがたいものがあるので、ハマった連中は御愁傷様だ。しかし、どーしてこの国の連中は「ユダヤの陰謀」だとか「イルミナティの陰謀」なんて他人様の陰謀暴きにばかり夢中になるんだろう？　それに負けない「日本人の陰謀」を自分達でプランニングしようという気概のある連中はいないんだろうか？　残念ながら、俺の脳内電波の調べでは、そういうのは青年向けの漫画の中にしか存在しないようだ。

「陰謀史観」という、病んだ心が作り上げた幻にすがりつく屑のような人生もいいだろう。現実に立ち向かう気力のない連中にはお似合いの生き方だ。漠然とした不安を抱えて

生きるよりも「全ては○○の陰謀」という明確な不安があれば、何でも気に入らないことや嫌なことをその陰謀のせいにして安心して生きられるんだろう。とことん安い人生だ。そういうクズどもの欲求不満の解消のために怨まれるユダヤ民族やフリーメーソンの連中はたまったもんじゃねえだろうな。しかも、徹底して「正義を愛する心」で怨まれるんだからやりきれないぞ。こんなペテンに易々と乗ってしまう人間が何万人もいるんだから、世の中はいつまで経っても良くならないわけだ。まったく俺の思う壺だよ。

しかし、電波を受信する人間の中でも「陰謀」に取りつかれ、電波文書を作って陰謀を告発し、陰謀と戦おうという連中は人生に明確な目的ができるという点で幸福だ。彼らは一生巨大な陰謀組織と孤独な戦いを繰り広げるのだ（彼らの脳内で）。

そして、生きがいのある人生こそが、真に充実した「本物」の人生といえるのだろう。たとえ、その生きがいが幻だとしても。

小○もの（オマケ）

電波ではないが、工場勤めの中で出会う、族あがり、不良あがりの連中には、中坊の頃にさんざんシ○ナーをやりまくって歯までボロボロの連中がいる。そういうやつらにシ○ナーの体験を聞くと、何故か「○人」の幻想を語る奴が多かった。シ○ナーを吸いすぎると自分のアタマが壊れてバカになるのが客観的にもよく分かるんだそうだ。すると地面の小さな穴から緑色の（水色だったりもする）小○たちが何人も現われて、自分の頭のフタ

（意味不明）をあけて壊れた頭を修理してくれるんだそうだ。その時に何かをインプラントされたりもするらしく、これはＵＦＯにさらわれた連中の体験に似ていて面白い。

反撃は「妄想」で

最後の小○ものを除いて、以上が俺に来る電波のあらましである。これが全てではないのは、電波の事例を細部にわたって説明しようとすると、とても一冊の本では収まらないほど膨大なものになるからだ。幼少期の俺は、このような種々の電波に振り回され、いいようにオモチャにされていた。鬼畜系のゲス人間である今となっては、そうした電波の攻撃にひたすら耐えていた頃の自分がとてもいじらしく思える。

では、どうやってこの膨大な電波を克服したのか？　それは、小学5年生の夏に、海で溺れて死にかけた時の「神秘体験」（としか言い様がない）が、重要な契機となっている。この神秘体験については書き出すときりがないのと、言語で説明するのが非常に難しいので割愛するが、それによって俺は大きく変わった。

それまで俺は、どちらかといえば勤勉で大人しくて、誰からも誉められる「良い子」になろうと周囲に対して神経質に気を配る、ひ弱なガキだった。いじめっ子達から理不尽な仕打ちをされても、自分が我慢できればそれでいいという穏やかな平和主義者だった。田舎の学校に転校して、そこでいじめにあっても、善良すぎる両親の影響をモロに受けて、「できれば、みんなが仲良く幸せに暮らせればいいなあ」などと、悠長な事を思っていた

馬鹿者だった。そうした性格が、やってくる電波に対しても反映されていたのか、この時期は日毎にワケの分からない電波が増えていた。とにかく、実生活でも脳内生活でも破綻しかけていた時期であった事は確かだ。あの夏、あのまま何もなければ発狂して自殺でもしていたかもしれない。

とにかく、その神秘体験で俺は生まれ変わった。これまで世間に対しても、電波に対しても「おとなしい自分」だったのが完全にキレたのだ。

そこで得たのは、「自分を縛る何物も存在しない。これまで〝してはいけない〟と思っていた事は、みんな法や習慣からくる思い込みで、意味を離れて現象だけで考えれば、〝やっちゃいけねえ事なんて何もねえんだ！〟ああ、俺は自由なんだ。いつだって殺せる。攻撃されたら、しかえしてもいいんだ！　いや、攻撃される前に攻撃してやる！」俺は神秘体験の最中に自分の意識がぐんぐん拡大していくのがわかった。大きな解放感と深い充足感が波のようにおしよせて、生まれ変わった喜びに涙さえ流していた……ここまでは、その後数多く本で読んだ他人の神秘体験と似たり寄ったりのものだったろう。俺の場合の幸運は、その時同時に恐ろしく怜悧で凶悪な何かが身体の中に侵入してきた事だ。それは電波とは全く違った感触だった。骨を持たない肉のような塊が背後から密着して俺の中へ入ってきた。快感を伴った冷たい響きが、身体の奥から脳や手足の末端へ広がったのを憶えている。

こうして「大いなる自由と悪意」を獲得したその後の十年間、俺は傍目にはとっても嫌

なガキだった。凶暴なばかりでなく、悪事や復讐には時間も手段も選ばないサイコ野郎になっていた。いつのまにか「卑怯」とか「卑劣」という言葉の甘い響きに酔い、やることがどんどん陰惨になった（このへんの事情は「ガロ」93年10月号の根本敬氏によるインタヴューに詳しい）。

不思議な事に、暴力に目覚めてから、それまで病気がちで軟弱だった身体が、大した運動をしたわけでもないのに身長も伸びて急激に筋肉質で骨太の頑丈な身体になった。意識が身体に与える影響というのは非常に大きいものらしい。

さて、電波の方に話を戻そう。神秘体験後、俺は電波に対しても攻撃的になった。俺の取った電波への攻撃方法は、ずばり「妄想」である。一種の「開き直り」のようなものだが、それまでは電波が運んでくる音やらイメージやらに、いちいちこちらが反応していた形だったが、逆にこちら側がどんどん先へ先へと、それもなるべく醜悪な方向へ「妄想」してやろうという趣向に変えたのだ。積極的な人生——それまで自制しがちだったゲスな「妄想」を可能な限り積極的に解放したのだ。醜悪な電波には、更に醜悪な妄想をぶつけた。語りかけてくる「声」に対しても、どんどんゲスな妄想で対抗した。目つきが変わり顔つきが変わった頃、俺はすっかり一人前のゲス人間に成長していた。

拡張する妄想神経

ただ、この妄想攻撃には思わぬ副作用があった。すなわち、電波以外に対しても、妄想

が止まらないのである。何かを見たり聞いたり、触ったりすればそこから無数の妄想が同時に凄い速さで頭の中に生まれた。まるで、爆弾が炸裂してその破片が無数に飛び散るように制御不能の妄想が広がる。ほんの一瞬の間に実に多くの人生を見たり聞いたりした気になるから不思議なものだ。更に妄想が進むと、どこか遠くで行われている何かの作業が見えたりもした1。たとえば「今、こうしている時間にせ◯ずりをコイている奴が周囲200メートルに8人」などという馬鹿馬鹿しい事が妙にリアルに妄想できる。また、そうした妄想は連鎖的に無限に続く振動のようなものにもなる。たとえば、俺の頭の中には十三年前のある日の電波に対抗して発された妄想が今も継続して回っている。それに意識を集中させれば、いつでもそれは聞こえてくる。ただ、気分が悪くなるだけなので、なるべく無視しているが。そうした妄想は日を追って加速する一方だ。

次に、妄想を極力抑えるために、俺は頭の中で妄想の視覚化を行った。頭の中に一つの情景なり事物を無理矢理作りあげてそれに意識を集中させると、頭の中で無制限にバラバラに拡がる妄想がそのヴィジョンに引きずられていく。絵を見ることで妄想に一定の方向性を持たせ、想い描く絵の種類で妄想を操作しようとする試みである。これは多分、ニューエイジや神秘学の修行者が行う「瞑想」に近いものだと思うがどんなものだろう。

この気◯いじみた訓練によって、俺は頭部と全身の毛穴から分泌物とともに無数の妄想神経を無限に伸ばして、遠く離れた場所の他人の性交を覗き見るという妄想や、多くの人間どもの発情した淫波を感じて下品に欲情したりする事が出来るナイスな鬼畜野郎になれ

た。受けた淫波を更に増幅して発信もできるようになった。霊的乱暴や霊的ゴミ漁りという鬼畜技が使えるようになったのもこの訓練のおかげである（データハウス刊『危ない1号』VOL．1参照）。今では俺の妄想神経は、すっかりこの都市の夜に馴染んで、日夜電波を受けたり淫波をばらまいたりと充実した日々を送っている。

最後に

——さて、誌面にも限りはある。そろそろ俺の真の姿と正体を明かそう。

第二次世界大戦でユダヤ人600万人を虐殺したヒトラーは何を隠そうこの俺である。焚書抗儒罪もない民衆を虐殺して苦しめたローマの暴君ネロは何を隠そうこの俺である。銀貨30枚でキリストを売ったユダは何を隠そうこの俺である。時空を超えたあらゆる陰謀の中で、更に最悪の情況を導いたのは全て、何を隠そうこの俺である。ベトナム、カンボジア、中東、アイルランド、アフガニスタン、ユーゴ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、チェチェン……現在も続く全ての紛争をこじらせたのは何を隠そうこの俺である。人の歴史が続く限りこの意識、村崎百郎は終わらない。一九二〇年代セントルイス、ヒヒノケツ源流でサソリに刺されたのは何を隠そうこの俺である。俺は傷ついた星雲を横切って太古の地球にたどり着き、湿った沼地でサルどもの股間に張りついて奴らを人間に退化させたウイルスだ。村崎百郎は終わらない。ただ歴史の中でその体をくねらせ移動するだけだ。悪意の介在する全ての時空間には俺の妄想神

経が届いている。村崎百郎は時空を超えて存在する悪意の総体である。この悪意は決して終滅する事がない。鬼畜行為の裏にはいつも俺がいる。俺を憎め！　俺を恨め！　お前らの憎悪が俺を○起させるのだ。

人間の身体は柔らかい機械で、常に多くの電波や妄想や霊体が取り付き、侵入しようと狙っていることを忘れるな。

俺は嬉しそうにソフトマシーンから手を振る。死んだ指が煙の中、玄海灘を指し示す。

「電波系」根本敬村崎百郎共著　掲載タイトル～電波の種類―妄想鬼畜ゲス人間が明かす電波の本性～元原稿　１９９６年9月28日　太田出版発行

電波人間とのつき合い方

村崎百郎

ここでいう「電波人間」というのは、電波の干渉を受けていると思われる連中のことだ。

別に彼らの事を「キ○ガイ」呼ぼうが「精神病患者」と呼ぼうがそれは皆さんの勝手なんだが、たとえばクソを「御糞」と呼んでも「お大便さま」と呼んでみてもクソの臭さは変わらないし、それが何だと言われても俺もキ○ガイの一味なので特に感想はない。

まあ、こんな世の中だし、少々気ぐらい狂っていたってどうという事はないだろう。電波人間たちと上手くつき合えば、彼らの思考がカンフル剤になって、つまらない日常生活が飛躍的に楽しくなるかもしれないから、もしもあんたが退屈してるなら街へ出て電波野郎でも探してみるんだな。

★セ○クス依存症妄想系

思春期の青少年によくいるタイプ。発情しきった男女の発する「淫波」に敏感に反応してしまい、まれに暴走して性犯罪を犯してしまう。明確に「自分以外のもの」に操られている感覚を持ったまま泣きながら暴行をする少年などの例は悲惨だけど、大部分は社会生活の中で目に入る異性を片っ端から妄想の中で裸にして乱暴するだけという害のない連中。

ただ、セ○クス依存症電波を受けている最中の彼らの妄想力は尋常なものではない。相手異性の露出している肌の一部を１ｍｍ四方見ただけでも、そこから全身の裸像を瞬時に脳内で実物大の３Ｄ画像で再現し、相手の性器の色、形状、臭いはもちろん、相手の異性がこれまで行った性交人数、性交回数、アク○の数、ペ○スが○内をピストン運動した回数、さらにそのとき千切れた○毛の本数の総計などが、頼みもしないのに次々と意識の中に情報として流入して来るのだ。相手の性交映像が見えてくるのも当然だが、酷いときには自分の頭部の脳のまん中に相手女性の股間の３Ｄ画像が再現され、そこで○のピストン

運動が始まるんだから大変なもんだ。

読者諸君も友人の恋人を見たときに、つい、いけないとは思いつつ彼らのセ〇クスを妄想してしまう事があるだろう。「いかん！　これは人間として最低の行為だ！」などと自制しても、止まるどころか更にその情景が克明に見えてしまうのがこの種の妄想の罪深いところだ。これははっきり言ってどうしようもない。社会生活というのはそういう妄想の上にスカシた状態で成り立っていると認識するしかないだろう。「まあ、妄想なら許してやろう」ぐらいの寛容さが必要である。とにかくこのタイプの電波人間は襲ってこない限り無害なのだ。

やっかいなのが女性の電波人間で「毎晩同僚の〇〇さんが私を犯しに来るんです。どうしたらいいでしょう?」と言い出す「思い込み暴行被害妄想タイプ」だ。これが80歳ぐらいのお婆あちゃんなら誰の目にも「妄想」と分かるので良いのだが、妙齢の美人ならば冗談では済まない。そういうときこそ「普段の信用」がモノを言うので、普段の生活は品行方正にしておいた方が良いってわけだ。

この種の電波女性と交際して無理矢理ハメ倒すのが特技という鬼畜系の某氏（間違いなく村崎本人‥編集部注）などは「僕はほとんどムチャクチャな理由をつけて押し倒してヤッちゃいます。こういう女は意識も朦朧として〝判断力ゼロ〟というのが多くて便利ですよ。〝コレが正しいセ〇クスなんだ〟とかウソ言ってムチャクチャ変態やっても素直に言いなりになるしね。ただ、注意しなくちゃいけないのは、彼女たちもときどき正常に戻

ることがあるってことです。そういう場合にどうやって情況を誤魔化してクリアしていくかが彼女たちを深く長く喰い物にするポイントですね」というから本当にあきれたもんだ。

程度の違いはあれ、若い男というのは多かれ少なかれこのタイプの電波人間状態を経験しているものだ。対処方法としては、襲われた場合でもそれが男なら一本抜くと正気に返ることが多いので、手コキでも生尺でもとにかく一度射〇させることだな。相手が女性なら、体力の続く限りお相手をしてあげるのが人の道ってもんだろう。同性の場合？　そうれはもはや趣味の世界だ。自分で判断すべし。

★アイドル妄想系

代表例は、受信した人間に「自分は特別の人間なんだ」と思わせる電波にヤラレて「自分は世界的なスーパースターやアイドル歌手になることが決まっている」という妄想のもとに生きている若い女の子など。稀にその妄想が実現することもあるらしい。

このタイプは思春期の女の子にありがちな「いつか白馬にまたがった王子様がやってきて、会うなり私を無理矢理押し倒し、服を引き裂いてパ〇ティをむしり取り、前戯もなしにいきなりそそり立った熱いモノを私の股間の恥かしいアレに雄々しくブチ込むの！　その瞬間私は身を引き裂かれるような苦痛に美しい顔をほんの少し歪めるんだけど、これから先の王子様との甘美な愛欲生活がもたらす大いなる悦楽の数々を想って悦びに全身をわ

なわなとうち震わせて恥知らずのめす犬のように思いっきり〝来てェ～！　もっとよォ～だめだめだめェ～！〟って喘ぐんだわ」というやらしくもアホらしい妄想を少し進めた程度の症状だが、「私はあんたたち一般ピープルとは違うのよ」、「私に話しかけるなら事務所通してくれる？」などといきなりタカビーになったり、「歌手デビューも決まってるの」、「曲はコムロがどうしてでも書かせてくれって頼むのよ」などと嘘言癖になったりするため、周囲の人間から嫌われてしまうという悲しい結果を生む。

この種の人間たちと付き合っていると、初めは珍しくていいが、だんだん相手の言うことが鼻について腹が立ってくるので気の短い人間はなるべくなら近づかない方が良いだろう。相手は自分以外の人々を「一般人」と呼び、徹底して馬鹿にして見下すような鼻持ちならない馬鹿である。こういう人間を何とかしてあげたいという博愛精神がおありなら、相手の妄想に理解を示しながら、ゆっくりと現実生活に引き戻してあげる努力をしてやるしかないだろう。この種の人間に「それって嘘だろう」は禁句である。部分的に嘘をいうならまだ症状が軽い方だ。「こいつは基本的に嘘しかしゃべれない」という認識のもとに付き合うのが正しい。言うことが嘘だけに、相手はあなたにどんどん嘘の上塗りの「言い訳嘘」をつくだろう。「事務所の都合でデヴューが半年延びちゃったの」、「コムロがスランプでなかなか曲があがらないの、土下座するから許してあげたけど全く困っちゃうわ」などと言われても「それは大変だね」と言うしかない。ヘタに嘘を問い詰めると自殺しかけたり（もちろん狂言）、あなたの悪口をふれ回ったり、ひどいときにはあなたに襲

われて犯されたなどと言い出しかねないので細心の注意が必要だ。

はっきり言ってこういう彼女たちは脳の中の事務所に所属して、脳の中のコムロにプロデュースしてもらって、脳の中のレコード会社からＣＤを出して、脳の中の東京ドームで熱唱し、脳の中のＮＨＫホールで紅白歌合戦に出場するしか幸福な人生を送る方法はないだろう。脳の中の無数のファンたちはみんなお行儀が良くて彼女の良き理解者だ。彼女たちを無理に現実世界に戻すことが解決につながるとはとても思えない。この種の電波はタチが悪くて一度受信すると脳内で増幅しながらどんどん回るものだ。

何を隠そうこの俺も数年前に受けた電波のおかげでいまだに「自分が超セクシーな有名セ○クスマシーンで、朝日が醒めるとドアの外に〝村崎さん、私とセ○クスして下さい〟とお願いにやってくる若い女の子たちの群れが駅まで長い列を作って待っている」という考えただけでち○この先が１センチはすり減りそうな妄想に悩まされるが、これはなどは自分で分かっていてもなかなか捨てきれない妄想である。妄想を捨てることだけが幸せにつながるとは限らないといういい例だ。楽しければ気なんか○っていてもかまわないのがこの世の中だ。

★妄想戦士系

これが最初のエピソードに登場した○○君のタイプ。世界的陰謀など、人知れず進行中の人類破滅計画と戦う人々。彼らについてはエピソードを熟読してもらえば大体分かるだ

義ではこれに入る。この世には自分を壊していく快感に溺れる連中もいるというわけだ。
この種の連中が自殺するのは彼らの勝手なんだが、たまたまこういう連中と死ぬ前に深くかかわったりした善なる人間が「自分のせいで死んだのか」とか「自分には何かできなかったのか」という後悔にその先何年も悩まされるのが大きな迷惑というものだ。
この種の連中は暗いし破壊的で、付き合うと死だの絶望だのに引きずられたりするからできれば付き合わない方が賢明。もちろん、こういう人間の運転する車に乗るのだけはやめておいたほうが良いだろう。しかし、破滅の淵でしか味わえない甘美な世界というのもあるんだろうから、若いうちに一度ぐらい遊びで付き合うのもいいかも。気分転換に遊園地のバンジージャンプに誘うのも一興。

★錯乱狂暴系

シ○ブ中毒の連中に多いと思われる被害妄想の強い人ゴロし系電波人間。
こいつらはどこから電波の命令を受け取って、誰を敵と判断して、どこで殺しを始めるかの見当が全くつかない超危険な連中である。シ○ブ同様、「絶対に付き合わない方が良い」としか言いようがない。
対策としては、ヨダレを垂らしながら包丁を持って裸足でチ○ポコをまる出しで歩いている親父を見たら側へ寄らないこと。これは極端な例だが、同様に見て「危ない！」と思う連中を見たら目を合わさないように静かにそこから離れること。露骨に嫌悪の態度を

ろうから、ここでは妄想戦士の話を聞くときの注意をあげておこう。

1．妄想戦士の話を聞くことのできるキミは、彼らにしてみればこの世の隠された秘密を明かされるサイコーに幸運な人間である。そのつもりで真面目に謙虚な姿勢で聞くこと。

2．妄想戦士が時間を置いて全く同じ話をくり返しても、それを指摘してはいけない。

3．全否定は絶対禁物。

4．全肯定も、馬鹿にしているのがミエミエの態度は相手にも伝わるので注意が必要。馬鹿にするのは家に帰って部屋で一人になってからだ。

5．全部分かっても分かったような顔をしない。「無知な私にはあまりに意外で恐ろしくて信じがたい話でした」と驚いてみせるのが礼儀。陰謀の真実は彼ら妄想戦士にとっては「シロウトにそう簡単に分かられてたまるか」の世界なのだ。

6．話を聞き終わったら「あなたのおかげでこの星の正義と平和は守られていたのですね、ありがとうございます」と必ずお礼を言うこと。それが英雄に対しての民衆の礼儀である。

この種の人々は基本的には正義の味方の善人。恐れる必要はない。

★自己破壊系

自殺電波などの干渉を受けやすい人達。死ぬほど酒びたりだとかジャンキーな連中も広

取ったりすると「馬鹿にしやがって」と逆上されるだけなので注意すること。常日頃から見なりや服装で人を判断してそれを顔に出すような態度を取るのを止めるのが、こういう奴らに襲われない為の基本的態度だろう。

★勘違い救世主系

自分を救世主だと思い込んだエラい奴。ここまで症状の進んだ電波系人間に対しては、そいつらの信者になるかならないかしか選択肢は残されていないだろう。もちろん、関わり合いにならない方がいいに決まっている。

救世主を自称する輩にある程度の信者が集まれば、予知や予言、不治の病の全快など、多少の奇跡が起こることぐらい不思議でも何でもない。その程度の事でいちいち驚いたり、ムキになって否定したりするのは電波の思う壺なので注意が必要。物理学的に説明のつかない不思議を見たら「あ～この世はこーゆーことも起こるいい加減な世界なんだなな～」ぐらいに思ってりゃいい。

オウム事件以降、マトモな人間がこの種のキ○ガイに関わるのは「時間の無駄」どころか「社会の迷惑」であるという風潮が強まった。善悪は別として、人類もそろそろ神や仏どもから自立して生きていかねばならない時期にさしかかっているようだ。

96年9月28日　太田出版発行

電波系の身体イメージ

村崎百郎

電波系の人間である俺は、「身体イメージ」についても一般の人間とは少々違った感覚を持っているようだ。ここでは実物の「形のある身体」ではなく、おもに妄想で拡大する「見えない身体」のイメージについてを電波系の視点から語ってみよう。妄想が身体メージをどう変えるか、欲望が妄想身体をどこまで拡大するか、その全てについて考察していきたい。

オカルティストは太る？

さて、誰が言い出したか知らないが「オカルティストは太る」という俗説がある。これはいかなるものか？　さしあたり、マダム・ブラヴァツキー、グルジェフ、アレイスター・クロウリー、ダイアン・フォーチュンなどの、今世紀有数の著名な神秘家たちは、残された写真などを見ると、確かに痩せているとはいえず、体格の良い巨漢であるという印象を受ける。特にフォーチュンなどは若い頃の写真では痩せているが、魔術の修行を積んでからの中年以降の写真を見ると明らかに太っている。SF作家であり神秘家でもあったフィリップ・K・ディックも、ピンク色の光を浴びて救世主の声が聞こえるようになった70年

代の半ばあたりから急激に肥満している。インドのサイババもデブというほどではないがなかなかいい身体である。

このような例をあげれば、本当に「オカルティストは太る」という気もするが、全てのオカルティストがデブだったわけではない。ルドルフ・シュタイナーは、顔はごついがデブではなかったろうし、エドガー・ケイシーだって、クリシュナムルティだってスマートだったし、ヨガ系の聖者はみんな痩せている（オウムの麻原教祖は特例か？）。

そういうわけで、やっぱり俗説だろうという所に落ち着きそうだが、俺にはオカルティストが太ること自体は何の不思議もない。考えてみれば当然の話で、「エゴが肥大すりゃあ、身体も肥大するだろう」ということなのだ。世界との合一を目指したり、「自分はこの世の真理を掴んだ特別な人間」という妄想を持ちたがるオカルティストほど、傲慢で自我が肥大しやすい連中もないだろう。自我が肥大すれば身体だって同様に肥大したがる。彼らにとって太ることは「自分の体積を増やし、他人よりもこの世界をより多く占有する」ことなのだ。デブの側からはとんでもない言いがかりだと抗議がきそうだが、我々がデブを見て抱く不快感は、単に見た目の美醜以上に、デブの姿の中に「世界を狭くされる不愉快さ」と「世界を占有しようというあさましさ」を感じとってのことかもしれない。俺の解釈では、太って体積を増やすということは、人より多くの空間を獲得し、人より多くの空間を支配するという身体拡張願望の現れでもあるのだ。

身体の拡張

身体を拡大して、空間を支配し、やがては世界と合一し、自分が世界になりたいという願望は、何もオカルティストに限ったものではない。それは一個の生命としての根源的な欲求でもあるはずだ。たとえば、われわれ男性が裸の女性を前にして興奮し、○茎を膨脹させるという行為も、極めて矮小だが身体の拡張行為である。この例を考えれば身体の拡張願望が支配欲や征服欲と密接なつながりがあることは容易に理解できるだろう。でかいき○たまと野太いサオは、性欲が強くて単純で頭の悪い、われわれ男性のあこがれの的だし、古来から天まで伸びる巨大なペ○スを夢想する輩は多いのだ。ここまでいうと陳腐なこじつけになるが、われわれ男性がペ○スを膨脹させ、性○によって女体を征服／支配しようという願望は、「女性」に象徴される、母なる大地を征服&支配したいという欲望のメタファーへつながるはずである。片一方が地球の大きさに匹敵するぐらいでかいき○たまと、太陽まで届きそうな太くて硬い強い陰○。スケールのでかいキ○ガイはいつもそんなものを夢みるのだ。ちなみにこの考察に女性側の視点は一切入っていないが、これも陳腐にこじつけて考えると、女性側の巨根獲得願望にも、自分の○穴へけたはずれに大きな男○を迎え入れて、「穴を拡大する」という、身体拡張願望が見て取れるはずだ。○根に象徴される「世界」を○に挿入されることは、女性にとっての敗北などでは決してない。セ○クスの快感については、女は男の十倍気持ちがいいというが、男性に支配されることで男性を支配しようという、これまた受動的な支配欲や征服欲が女性側にはきっとあ

るはずだ。

などと、話がどんどん抽象的で観念的になるが、別に電波系でなくともキ〇ガイというのは、そもそも観念的なものだからだ。がまんして読み続けてもらいたい。

身体の拡張願望についてもう少し考えよう。支配欲とのつながりは、古代の権力者たちの領地拡大の為の戦争が良い例としてあげられる。戦争とは、ある意味で国家という身体を拡大するための行為なのだ。俺は、アレキサンダー大王の怒涛の進撃や、秦の始皇帝による万里の長城の造営に、人間の身体拡張の可能性と限界を同時に感じる。王にとっては「領土＝自分の身体の延長」であり、王は王である限り、領地を拡大しようと闘い続けるものだ。しかし、苦労して獲得した領地も永遠ではない。強い王が現れて領土を拡張しようとも、王の死後に国が衰え、また別の国が覇権をにぎるというのが歴史の常である。領土はそのたびに変化するものだ。だから、王が、その身体を歴史の中にとどめようと、臣民に巨大な陵墓を作らせるのも身体拡張願望の一つとして理解できる。王は死して墓の中に収まり、陵墓と一体化して、時間の中でその身体を伸ばすのだ。

見えない身体の拡張

話は更に観念的で妄想的になるが、オカルティズムや私のようなキ〇ガイの世界では、思考が物質として存在するのは極めてあたりまえの常識である。思想は思考された瞬間、形はないが確かに微弱な物質として存在する。したがって、哲学者や思想家が強烈な思索

活動で生みだす思想や著書もまた、拡張された身体の一部として機能するのだ。生命体としての活動を一九四八年に停止したアントナン・アルトーも、肉体は滅び去っても、彼の思想としての身体は時間の中で拡張を続け、現在も刊行中の著書を通して多くの読者の頭の中で再生/増殖を続けるのである。そのさい著書がテクストとして機能し、新たに意味や物語が生成するのは当然の事である。思考物質は歴史の中で、幾多の人々の頭の中をすりぬけ形を変え、新たな意味をまとい、時代とともに膨脹、収縮を繰り返し、踊るように存在するのだ。この地上で最もその身体を拡張することに成功した思考物質は、言わずと知れたキリスト教である。それが正しいかどうかは、また別の話だが、聖書から放たれる強烈な思い込みと使命感は尋常なものではない。

同様に「言語」自体も、自ら拡大しようという意志を持った、我々とは形態の事なる生命体であることは「言語ウィルス論」を提唱したウィリアム・バロウズの妄想からも明らかである。彼ら言語ウィルスは、われわれ人類に取り付き、多くの個体に使用されることでその命脈を保つものだ。ラテン語のように日常で使用する人間が少なくなって瀕死の状態のものもあるが、大半はしぶとく強力な存在である。ついでに書くと、バロウズがしばしば指摘する「言語の不完全性」というのは、多くの言語に共通の、極めて悪意のある特徴であり、これらはしばしば他言語や多民族間にコミュニケーション不全をひきおこす要因となり、争いごとの元凶になるのである。言語ウィルスはおのれの身体拡張と領土拡大をはかり、人々に戦争をけしかけるのだ。われわれの日常生活の中でも、伝えたいことが

何一つ伝わらず、そのくせつまらない悪意ばかりが相手に伝わってしまい、人間関係がこじれてしまうということが良くあるだろう。それはあなたのボキャブラリーが不足しているとか、言葉の使い方を間違えたとかいう理由だけではない。言語そのものが持つ闘争本能に起因しているのである。言語には、その中に人と人の対立構造を発生させ、憎悪を増幅させる悪意がある。俺は、これに対抗する手段の一つとして、議論が言葉のあげ足取りになりかけたなら、有無を言わさず相手をイキナリ強く抱きしめ、舌まで差し入れるディープキスを行う事を無責任に薦める。もちろん、相手が同性であろうとだ。人は「言葉を失う」ほど強いショックを受けたとき、ほんの一瞬ではあるが文字通り言葉から解放されるのである。その一瞬を逃してはいけない。バロウズのカットアップ・メソッドもまた、言葉をずらす事によって言語の構造に混乱と空白を作りだし、言語の支配から逃れようとする手法なのだ。言語ウィルスに対抗して新たな言語、完璧な構造を持った言語を作りだすなどという試みは、俺には壮大すぎてとてもついてゆけない。

拡張する妄想

こうして常軌を逸したわけのわからない原稿を書くという行為も、自分の思考を物質化して身体拡張をはかるという快感を伴うものだ。この原稿は『電波系』という本の一部となって、その多くは、俺が生涯決して足を踏み入れることもない街へ運ばれ、生涯決して会うこともない人々の元へ届くことになる。自分の原稿が掲載された雑誌の発売日になる

と、俺は自分の分身が全国へ拡散してゆくさまを想像して、ほんの少し身体を拡張した快感に浸るのだ。作家やライターは文章を書くことで、その身体を拡張しようとする。編集者も本を編集することで自らの身体拡張をはかる。そう考えてみれば、どんな職業にもそういう疑似身体拡張の快感はあるだろう。たったいま俺の脳で受信したうどん職人の例をあげよう。そのうどん職人は、自分が打った手打ちうどんを多くの人々が食べて満足することに快感を覚えている。彼が丹精こめて打ったうどんは彼の身体の延長だ。彼は、彼の分身ともいうべきめんが、美人ＯＬの咽喉を通り、その可憐な胃の中に入りこみ、長く宿便のこびりついた腸をくぐり、大便となって固くすぼまったア○スから彼女の家の便所に排泄されるプロセスを感じると、思わずいっちまいそうな快感が、股間から脳天までつき抜けるのだ。この場合、彼の身体は美人ＯＬの身体を通して、彼女の家の便所まで伸びた事になる。彼は自分の手の一部が、美人ＯＬの内臓をなでるようにくぐり抜けていった幻想に酔いしれるのだ。こうして彼は今日もうどんを打つことで身体を拡張する妄想を楽しんでいる。勝手にひとの内臓や肛○を妄想するなという意見もあるだろう。しかし、この手の妄想に限らず、他人の妄想に歯止めをかける有効かつ手軽な手段など存在しないのだ。

たとえば、これを読んでいるあなたが女性なら、あなたの身体が、これまでの人生の中で一体何人の男性にズリネタとして楽しまれたかを考えてみるがいい。他人の妄想の中で、あなたは一体何回○され、何回ア○メを迎えたことだろう。あなたの恋人以外にも、

あなたに恋をし、秘かにあなたの身体をくまなく妄想し、何度となく妄想の中で愛撫をくわえたたわけ者は確実に存在するだろう。そんな奴に、妄想の中で何回イカ臭いちん○をしゃぶらされているかなんて、実際の所、分かったものではないのだ。そう考えると感慨深いものがあるだろう。参考までに、人の数十倍は性欲の強いこの俺の場合、中学や高校時代、自分の学校の女生徒にかんしては、学年、クラスを問わず、夜となく昼となく、美人はもちろん顔を見て気分が悪くなるような醜女も、妄想の中で整形手術をしてやったり、頭から袋をかぶせたりして工夫しながら、全員きっちりけツの穴まで○したものだ。このような妄想暴行も、身体拡張欲望のゆがんだ例である。

まあ、俺のようなキ○ガイやパラノイアの妄想の基本ってのは、だいたいこんなものだ。これが暴走するとてつもなく醜悪なものになるのだ。

国粋妄想

次に、最も醜悪で鬼畜な心が踊る身体拡張妄想の例について語ろう。

オカルティストにしても、古代の王にしても、自分が一番で、この世界を支配しようという大きな支配欲や征服欲を持つ連中は、大きな野望があって立派なものである。しかし、この世は何もそういう一番偉くなりたい連中ばかりで構成されているわけではない。一人の王がいたら、その何千何万倍の家来や兵隊が必要になってくるのだ。王を目指さない、適当に小市民な根性を持った連中がどういう身体拡張の願望を持つかというと、そう

いう連中はいくぶん矮小なエゴを持っていて、国家だの会社だのという大きなものの為にその身を捧げ、献身的に協力することで自己実現をはかるのだ。こういう兵隊アリのような連中は、自分が覇王として君臨できなくても、自分達の王が栄華を極めればそれで満足するという極めて便利で幸せな精神を持った連中である。こいつらは国家の為に命を捨てることで国家と一体化し、その小さな身体を拡張しようとするのだ。何て便利な連中だろう。考えてみれば人間というのは、そうした強力な王を中心に一枚岩のようにまとまると、山をも崩す強力な力を発揮する。俺はこの前、風邪で寝込んだ時に、ＴＶの政治関係のニュースを見ながら、ますますつのる政府への不信感から「ひょっとしてこの国は民主主義が合わないいんじゃないか」と思ったりもしたものだ。先の大戦による敗北以来、妙にこの国の連中は対外的に優等生を目指しすぎているような気がする。

そう考えた一瞬、俺の心の隙をついて、膨大な量の国粋電波が押し寄せてしまった。国粋電波というのは国粋主義系の怨霊電波の総称である。

俺の頭の中には、毎年夏になると「う～、う～、憎い、憎い、アメリカが憎い……仇をとってくれェ～！　日本を守ってくれェ～！」というたぐいの、英霊のじーちゃんたちの怨念のこもった無数の声が、ゴウゴウと南の島から俺の頭へ強力な電波となって押し寄せてくるのだ。これがすんげえ強烈でホトホト参る。「あいつらを皆殺しにしてくれ！　俺はこんなにみじめに殺された、このままでは成仏できない」って……あのなあ、じーさん、もう戦争はとっくに終わったんだよ、俺に言われても困るんだって説明しても聞い

ちゃくれない。また遺族の想念なのか、「あの戦争は正しかった。ヒデオはお国の為に命を捧げた……」というのを延々と繰り返し語る声などもやってくる。鬼畜な俺だが、さすがに国を守る為に一命を捧げた人達は無視できないので、こういう電波に対しては頭の中でお題目を唱えてたりする。おかげですいぶんと国粋主義思想に洗脳されたような気がするが、俺も、もともと国家などの大きなものにクラッときてしまう、矮小な自我の持ち主なので、それほど悪い気はしない。だから、虐殺された共産主義者の電波なんかには全く共感しない。俺は鬼畜だから正義なんかどうだっていいのだ。

しかし、確かにこの国の若い連中は、じーさん達がずいぶん殺されたり、原爆や水爆を落とされたというのに、不思議とアメリカに強い恨みや憎しみを持ってるやつが見当たらない。あまつさえ、街を歩いていてジーンズショップの広告を見ると「僕らはみんな、すでに少しずつアメリカ人だ」とかいう恥知らずなキャッチコピーが目に入る始末だ。何というう破廉恥な言葉だろう！　さすがの俺も一瞬全身の血が逆流した。これでは英霊でなくとも浮かばれない。よくも「戦争が悪かった」とかいうわけのわからん所で妥協できるもんだ。

そういうわけで、国粋主義系の電波は夏に多いのだが、今年は敗戦から50年ということもあってか、沖縄の米兵による少女暴行事件なども影響してるのか、風邪で熱を出して寝込んでいた俺の頭の中に、突然多数の国粋電波が集合し、今後の戦略についての作戦会議や、来たるべき日本による世界征服達成後の占領地の植民地化政策についての御前会議だ

か頂上会議だかが勝手に始まってしまった。俺は熱で弱っているので、振り払うこともできずになんとなく聞いていたが、頭の中の電波会議では非・人道的な植民地政策が次々と決定していった。

怨念と妄想力の暴走を理解して頂くためにも、ここにその恐怖の植民地政策の概要を記述しよう。今後何世紀かを経て、日本が再び大日本帝国として世界を征服した暁には、まず憎っくきアメリカ軍は、陸海空の全ての軍人を新兵に至るまで斬首死刑。民間人も役に立たない老人は電気イス送り。若い女や男を全員奴隷化するのは当然で、国民の数からいっても、日本兵一人につき二人はアメリカ女が奴隷としてあてがわれる勘定だ。ここまではまだ理解できる。更に今度の電波会議で凄かったのは、二度と再びアメリカが日本に逆らえないように、妊婦に様々な毒物を投与して、何世代かをかけてアメリカ人を全員キケイ児にしてしまおうという遠大な計画が発表された事だ。中でも支持されたのは、アメリカ人を、手が肩の付け根から全くない人種に作り変える計画である。日本人に向けて決して銃を向けられず、糞をした自分の尻も自分で拭けないような情けない民族に作り変えて辱めてしまおうというのだ。う~ん、凄い怨念だ。さすがの俺でもそこまでは妄想できない。加えて人類史の大がかりな改竄を行う計画もあり、白人は白ブタが放射能を浴びて突然変異で発生した、「豚から退化した種族」という汚名を徹底させるつもりらしい。当然過去において日本が敗戦した歴史も書き換えられる。開戦布告前に、卑怯にも先に東京を空襲したのはアメリカ側で、地球の裏を回って中国大陸で略奪、蛮行の限りをつくし、

多くの罪もない人民を苦しめたのはみ〜んなアメリカ人、世界史の中で悪事を働いていたのは常にアメリカ人だったという歴史を未来永劫残すのだ。

いやあ、全く凄まじい憎悪と怨念である。この残虐な思考も微弱ながら思考物質となって未来へ伸びていくのだろうか。こんな醜悪な形の、国家の身体拡張計画も、想像力の暴走のほんの一例である。以前どこかの本で「最も残酷な事は常に人々の心の中で行われている」と、ある山師のおっさんが書いていたが、全くその通りである。人々の広大な想像力の海の中には、いまだかつて誰も目にしたことのない残虐な欲望や妄想もドロドロと渦巻いているし、人々を幸福に導く大いなる叡智もゆらゆらと漂ったりしているのだろう。俺はこの先、残りの人生でどれだけ、鬼畜な思想や妄想にアクセスできるのだろうか。

電波系の身体拡張術

たまに自分の発狂指数が上がったり、ある種の電波が来ると、俺は自分と他人の区別があやふやになる。しげしげと自分の身体を眺め、どこまでが自分で、どこからが自分でなくなるのか真剣に悩み始めるのだ。そうすると自分のまわりの空間が妙にねっとりと柔らかく粘着性を帯びてくるので水の中にいる感覚に近くなる。これとは別に、今まで7年間暮らしてきたロフト付きのワンルームアパートなどは、身体がすっかり部屋になじみ、どこに何があるか分かっているので、入室すると身体が部屋全体まで膨脹するという感覚がある。これがアフォーダンスという奴なんだろうか。

人の身体感覚やイメージはどこまで延長できるのだろう。俺は15年前に東京に住み始めて以来、この都市に自分の身体をなじませようと、日夜努力を続けてきた。俺はいつも仕事や遊びで行った先々の場所に自分の身体の一部をばらまいてくる。それは路上に吐かれた唾やタンであり、壁やテーブルの裏にこっそりなすりつけた鼻糞であり、切り取って戸のすきまに投げ入れた爪であり、時には血や精◯、小便や大便であったりする。一番熱心にばらまき続けているのは、長く伸ばした髪の毛だ。俺の身体から抜けた髪の毛の一本一本は、俺に情報を運んでくれる妄想神経細胞の端末である。通勤電車で出会う気になる女の子の紙袋の中へ、中年親父のコートの肩へ、新宿や池袋の雑踏の中へ、喫茶店の観用植物の鉢の中へ、本屋の棚のすきまへ、15年間数えきれない数の髪の毛を引き抜いてはこの都市にばらまき続けた。多くの髪の毛は掃除され、ゴミとして焼却されたろう。それでもいいのだ、俺の身体の一部分が焼却され灰となってこの都市の大気へ拡がっていく。今夜も目を閉じて、身体じゅうの毛穴から無数の妄想神経を伸ばし、都内全域や関東全土に拡がった俺の髪の毛にアクセスすれば、役に立たない無数の情報が俺の頭へ電波として届き、声や映像へと変換されるのだ。東は九十九里から西は伊豆半島まで、薄く伸びて網の目のようにこの都市に根を張った俺の妄想身体は、夜風が吹くと髪の毛がゆれて、木の葉が舞うように踊り続けるのだ。たかだかキ◯ガイの妄想としちゃあ詩的すぎるか？　悪いが俺は真剣だ（本物のキ◯ガイだからね）。妄想身体は想像力と妄想力の続く限り、無限に拡張することが可能なのだ。

第2章　対談

海からの風が都市に張られた妄想神経を吹き散らかして、
雲間に輝く虚ろな夜空、鬼畜微笑。

「電波系」根本敬村崎百郎共著　掲載タイトル～妄想電波と身体拡張ｰ暴走する想像力の最果て～元原稿　１９９6年9月28日　太田出版発行

第2章



対談

根本敬

「根本敬村崎百郎　電波系の正体を解き明かす電波対談ここに開催！」

根本　えー、今日は電波の話なんですが、まずは村崎百郎がどういう人物なのかっていう話から始めたいと思います。ボクは電波が受信できる人＝精神障○者だと思っていた。ところが村崎さんは1000チャンネルも及ぶ大量の電波を受信しながらも、客観性を決して失っていない。そこで村崎さんの人となりから聞きたいんですが、いつごろから電波を受信するようになったんですか？

村崎　生まれつきでしょうね。だって、オレ、子供のころはみんなも電波が聞こえるもんだと思ってたから。みんなはそうじゃないんだって気がついたのが小学校の時。

根本　聞こえるっていうのはラジオを聴くような感じ？

村崎　何を言ってるかわかんないような低い声で何かがわめいてるヤツがこのへんにいたりとかね。今も頭のワキの辺りでマントラみたいなヤツを唱えている48歳ぐらいのオヤジがいる（笑い）。なかなか言葉で伝えるのは難しいんだよね。川口まどかのマンガにモノの声が、みんな聞こえちゃう少年の話があるんだけど、電波の受信はああいう状態に非常に近いね。常に何かの音がしてて、完全な静寂というのがないわけ。意識を他に集中させれば少しは小さくなるんだけど、やっぱりうるさい。しょっちゅう夜中に「うるせえッ」って絶叫してるから、アパートの住人にひんしゅく買ってるんだよね。それが悩みのタネ。

根本　役には立つの？　電波から来るメッセージは。

村崎　全然。できれば、電波なんて聞こえないほうがいいし、電波は絶対あるんだとか言

うつもりは全然ない。だって、オレなんかほとんど患者扱いされるわけだしね、精神科医に会うとさ。ただ、いわゆる〝電波〟というのは昔からあったわけでしょ。聖書にあるモーゼの十戒や神がかり状態の巫女なんかは完全に電波系だし、仏教の経典にしたって、ブッダの死後、何百年もたってから、弟子が「私はブッダからこう聞いた」って書いてるわけだからこれも電波。

根本　「受胎告知」もそうだよね。

村崎　そうそう。『稲生物怪録絵巻』とか、ブラヴァツキー夫人とか、どこの国にもその時代ごとの電波エリートはいるんだよね。人類は発生の段階から、そういう別の情報系から伝達として人に呼びかけてくる声や音を聞いてたんだと思う。要するに今は電気製品がたくさんあるから、そういう声や音を「電波」という単語で表現して頭のおかしいヤツの代名詞にしてるけど、本来はいつでもどこにもあるもの。人間はそれに多少でも影響されていて、ちょっと注意して聞けば、誰にでも聞こえるものだとオレは思うんだよ。特別なことじゃあない。それを、聖者に聞こえてくるのは「啓示」で、オレみたいに頭の狂った人間に聞こえてくるのは「電波」だというのは、どう考えても差別だよな（笑い）。

根本　じゃあ、その「別の情報系」っていうのは何なんだってことになるけど？

村崎　まあ、ユングの言うところの集合無意識とか、シュタイナーの言うアカシック・レコードとか、いろんな解釈があるよね。「温かく見守る知性の存在」だと言う人もいる。ジョン・C・リリーがそうだし、フィリップ・K・ディックなんかの場合がそうかな。逆

に悪霊がとりついたのがウィリアム・S・バロウズだね。

根本　人間が電波を発しているという場合はあるの？

村崎　それは絶対あるよ。「女とやりたい！」っていう男たちの念が〝淫波〟となって、夏の夜の東京を飛び交ってるのをオレは感じる。それに反応して普段はヘソしか出さないオネエちゃんが胸まで出しちゃうとかさ（笑い）。

根本　電波もネコとタチがあるわけか。岡本●郎がタチで横●忠則がネコ（笑い）。

村崎　それそれ。

根本　電波が伝えてくる内容は？

村崎　多いのは宗教系かな。柔らか〜な波動をたたえて、甘い香りなんかと一緒に、まるで聖書なんか読むみたいな優しい声で、「あなたは選ばれました」みたいに言うヤツ、いろんな世界観を語り出すわけですよ。宇宙の構造とか、この世の始まりとか、聞いてもいないのに（笑い）。逆に悪寒を伴うものもある。つまり「何月何日のこの工場のここのドアのカギが開いてるから、侵入して、こうこうこうして……」みたいなことを言うんだよね。行ってみたら本当に開いてた。もちろん、それ以上はしなかったけど。

根本　電波に命令されて、じゃあシャレにならないし。

村崎　でも、電波には不思議とあらがえない種類のものもあるんだよね。感情操作電波。オレも若いときは、電波に命令されて勝手に手が動いたり、引きずられてどっか行っちゃったりしたこともあったしね。昔、深川で通り魔殺人をやった男が「ニヤニヤ電波」

近はほとんど信じない。電波の言う通りの行動していたらぜったいにロクなことはない。必ずオレを破滅に導くな、という予感があるからね。だって日替わり、時間替わりで来ると、信用できないでしょ？　みんな言ってることが違うし。キリストと名乗っている電波だけでも、20や30は来てるしね（笑い）。結局、オレがものすごく幸福だったのは、電波の種類が一つではないってこと。いつも同じ電波ばっかだったら、もしかしてオレは選ばれた人間なのかもな、と思ってたかもしれないよね。

根本　案外そういうタイプって電波系の人には多いよね。他人よりも高級になったような意識を持っちゃって。

村崎　真面目なんだよ。だから、電波の言うことを真に受けて、使命感に燃えちゃう。きっと人生がうまくいかなくて、心が弱っているときにヘンな電波を受けたんじゃないかな。そうやって弱みを見せたときに、電波は忍び寄るから（笑い）。オレも疲れたときなんか、半径数キロ四方の音がすべて聞こえてくるんだよね。仕事の失敗を怒鳴る上司とか、テレビがついているお茶の間のとか、女子高生の会話とか、ＵＦＯが飛んでいるみたいな音とか。そういう雑音が延々と頭の中で爆発するんだから、もう拷問だよね。スッゲー迷惑。

根本　もし電波がどこにでもある当たり前のものだとしたら、どう付き合っていけばいいのかな？

村崎　う〜ん。電波でもなんでもそうだけど、ムキになるのがいちばんよくない。たかが

電波の言うことを真剣に受け取るからダメなんだよ。今って現実がものすごく怪しい時代でしょ。そういう中で電波が来たって不思議じゃないし、だいたいオレの体はオレのもんなんだから、わけのわからないヤツに命令されたくないしね。受信料なしに衛星放送が引けたぐらいに思ってればいいんだよ（笑い）。

根本　あとは電波スポットを探して楽しむとかね（笑い）。お、ここは電波が強いゾ、なんて。

村崎　そうそう。そういうのはあるよね。死海のほとりがそう。いろんな宗教が出てるし。東京ではやっぱり天気図の館。それとゴミ寺かな。あそこはスゴイよね。完全にイってる。最初はああじゃなかったんだよ。裏木戸があって、ホントに困ってる人はお金を持っていって、余裕ができたら返してくださいっていう、立派なお寺だったんだけど……。

根本　だから、今でもあのゴミは持って帰れるんだよ。でも返さなくちゃいけないけど（笑い）。

村崎　いい電波系だよな（笑い）。

根本　世界は人の数だけ現実があって、思い込みと妄想があって世界が成り立つ。みんな多かれ少なかれ自分につごうのイイように世界を築いて、その中で活きている。ボクが電波系の人に興味を持つのは、そのことを手短に確認させてくれるからなんだよね。

村崎　根本さんのマンガにもそういうのがあったよね。男がヤク打ってションベンしてる

「メソメソ電波」とか言ってたでしょ。その電波が来ると、悲しくもないのにメソメソしたり、うれしくもないのにニヤニヤしちゃうっていう。アレわかるんだよね。だから、なんとかふんばって、年とともに受け流し方を覚えたわけ。

根本　○○陰謀説みたいなことをいう電波も多いらしいけど。

村崎　そうそう、「陰謀電波」ね。製薬会社がゴキブリまいてるとか、精神病院は患者が足りなくなると病院の上にある避雷針から頭が狂う電波を出しているとか、何から何までユダヤの陰謀だとか。そういう電波を受けて義憤にかられている真面目な人はともかく、世の中にはユダヤ陰謀本なんかを書いては儲けてる「陰謀成り金」もいて、そいつらだけは許せないんだよ、オレ。だいたい、そんな陰謀組織があるなら、それを暴いているお前がどうして消されないんだっつーの、悔しかったら死んでみろ！

根本　ウソだって告白してるようなもんだもんね。みんな元気で。

村崎　あと、そういうことを考えているヤツがいるっていう情報を伝えてくる電波もある。オレは「情報電波」って呼んでるんだけどね。前に山口○恵の家に忍び込んだヤツがいたとき、すぐに「アイツはバ○ブを持ってたぞ」とかいう情報電波が来た。そしたらホントに持ってて驚いた。「半径２００ｍの中に、いまオナ○ーしてるヤツが8人いる」とか、そういうどうでもいい情報も入ってくるんだけどね（笑い）。

根本　当たってるわけだ。電波の情報もかなり信憑性がある？

村崎　いやいや、オレの経験から言えば、電波の言うことはかなり怪しいもんですよ。最

と、宇宙船が降りてきて、星に連れていかれて。その星の王様に「セ○クスしてみせてくれ」って言われてさ。そこに連れてこれらた女とやってたら、知らないうちに地球に帰ってて、暴行犯人になってたって（笑い）。アレですよね。

根本　それそれ。彼にとっては星での出来事が現実なんだから。

村崎　ホームレスにもね、自分は世界を統一した支配者で、不老不死もつかんで暮らしてるんだけど、退屈で仕方がないから、分割して人にまかせて、自分は最下層に落ちて余裕でホームレスやってるって人がいる。

根本　ビッグバンもオレ、地球を創ったのもオレ（笑い）。

村崎　宇宙を創ったのが、本当にそのへんに寝転がっているオヤジだったら面白いけどね。

根本　そういう妄想を持って生きていられれば幸せだしね。

村崎　オレも「世の中の女はみんな病気で、それを治せるのはオレのチ○ポしかない」みたいな妄想を持てれば幸せだけどなあ（笑い）。

「ＳＰＡ！　１９９５年11月1日号」　１９９５年　扶桑社発行

第3章　村崎百郎書き下ろし小説

第3章



村崎百郎書き下ろし小説

情熱

情熱

村崎百郎

「人を殴ることが大好きだ。もしかしたら、セ○クスよりも好きかもしれない」

そう気がついたのは、上京以来、夜を徘徊しては住宅地の露地裏で無差別に通行人を殴る通り魔をやるようになってからだ。人を殴るよりもセ○クスが好きなら、俺は通り魔ではなく暴行魔になっていたことだろう。どちらも迷惑な犯罪に違いはないが、いやがる女を押し倒して暴行する方が、通行人を殴り倒してすぐにその場から逃げる通り魔よりも手間も時間もかかり、それだけ捕まり易くて分の悪い犯罪だといえるだろう。俺は極端に短気で、面倒くさいことが大嫌いなのだ。

人を殴るのが好きなのも、そんな短気な性格からきていることは間違いない。俺はとにかく他人と「言葉」で会話するのがかったるくて堪らないのだ。カルシュウム不足なのかもしれないが、誰かがしゃべっているのを聞くとそれだけでイライラして殴りたくなってくる。頻繁に暴力事件を起こして勤務先の工場や工事現場をクビになったのも、主任や現場監督から何か注意を受けたり命令されたりすると無性に頭にきてすぐに殴りかかってしまうからだった。

「こんなことではいつまで経ってもまともに暮らして行けない」と少し反省したのは、そういう傷害沙汰が十件あまり続いて、一日限りの日払いの仕事でさえ昼休みまで我慢できず、午前十時の休み時間に現場監督を殴り倒して帰って来てしまい、給金が全く入って来ない自分の将来を不安に思い始めてからだ。

そして、「何とか良い方法はないだろうか」と、いつになく真剣に考えた末に思いついたのが〝ストレス解消の趣味としての通り魔〟だった。

「好きでも何でもない自分以外の赤の他人は、〝他人〟という点ではどれも全て等しく鬱陶しい存在である。したがって、ある〝他人〟から受けた苦痛や不快感は、その〝他人〟に仕返しをせずとも、全く別の〝他人〟に八つ当たり的にぶつけることで充分解消が可能である」という当たり前の真実に気がついて、仕事が終わってから通り魔をするようになって、俺は少しずつ落ち着いて、仕事中に人を殴らないでも平静でいられるようになった。

これが〝倫理的にも道徳的にも完全に間違った反社会的な悪行〟なのは俺も充分承知しているが、「世のため人のために正しく生きよう」などとこれまで一度も考えた事もない俺には、行為の善悪など大した問題ではない。いくら通り魔をやって罪もない赤の他人を無差別に殴っても、暴力を振るう快感以外には特に何も感じられなかった。

我々は清く正しく生きなければならない根拠など、どこにもない。もちろん、その逆も。

工場の昼休み。俺は食事の後で倉庫の前の芝生に座って胸のポケットから東京の鉄道路線地図を取り出しては、今日はどこで人をブン殴ろうかと場所を物色する。

当然のことだが、自分が住んでいる地元の街では通り魔はやらない。自分が住んでいる地区とは遠く離れた私鉄沿線の、これまで行ったこともない適当な駅を探すのだ。場所としては、住民の結束が固そうな下町方面ではなく、少々悲鳴を聞いても関わりあいになるのを嫌がって知らないふりをするような物分かりの良さそうな連中が多く住んでいる郊外の住宅地の方がいい。気をつけなくてはならないのは、地元から遠くばかりを選びすぎて、事件の発生現場を結ぶと自分の住んでいる街を中心に放射状に大きな円が出来上がったりするのを避けることだ。この行為は、旅行雑誌を見ながら今度の休みはどこの温泉に行ってどの宿に泊まろうかと物件を物色する行為に似て、とても楽しい。これまで行ったこともない街で、会ったこともない他人に思いきり八つ当たりの暴力を振るう。そう考えると、運命など信じない俺だが、今夜俺に殴られる不幸な奴はこの宇宙が始まったときから、今夜俺に思い切り殴り倒されることが決まっていたような気がして何となくいとおしい。そいつは現在何も知らずにこの空の下のそう遠くない場所で、俺と同じように昼飯を食ったあとで公園のベンチに座ってぼんやりとこの青空を眺めているかもしれないのだ。そう思うと、今夜殴られることも知らずにのん気にしているそいつがどうしようもない馬鹿に思えて、笑いがこみあげて止まらない。何て馬鹿で不幸な奴なんだろう。

試みに「可哀相に……」と、思ってもいないことを口にしてみる。運が悪い奴だとは思うが、可哀相だとはさっぱり思えない。毎日、自分がその日に食う動植物の死に際しての苦痛についていちいち考えて同情する奇特な奴が少ないのと同じで、俺も俺のために殴ら

れる奴の痛みや苦痛について必要以上に考えるようなことはしない。
「これも巡り合わせかねえ……ああ、なんてロマンティックで理不尽な暴力なんだろう」
――何がロマンティックだか知らないが、俺の人生は暴力的な旅の連続だ。人に殴られるのが嫌だから先んじて殴るのだ。「そんな人生には愛がない」という意見もあろうが、俺は〝愛〟とかいう汚らわしい二文字言葉が便所の糞より大嫌いなので、なるべく〝愛〟とは無関係な生涯を送りたいと切に願う。暴力は理不尽で見当違いのものを行使するほど、その快感は大きい。俺は少なくともそう思うし、そう感じる。
昼休みに今夜の襲撃地区を決めると、俺は午後の勤務時間中、心の中でその街の名前を何度もくり返して呼びながら、その街の夜と住んでいる住人たちのことを細部にわたるまでこと細かくきっちりと想像する。そうすると行ったこともない街が何となく身近に感じられ、その街のことがとても好きになってくる。「大好きな街で大好きな通り魔をやる」その喜びに胸を震わせることができれば、日々の重労働もウザい主任の存在も何だって耐え忍べるものだ。夕暮れのたそがれ時になると俺は胸の高鳴りを止められない。
待て！　耐えろ！　もうすぐだ！　もうすぐ人が殴れるぞ！
襲撃時のユニフォームはゴミ漁りで調達した他人様の捨てた服だ。服装から足がつかないようにという配慮から、自分が普段の生活では絶対に着そうもない種類のカラフルな色や柄の服を選んで拾い、襲撃地区の公園の便所などで着替えるのだ。俺はこのために普

段、黒色系の服しか着ない。俺を知る近所の住人や会社の同僚は、俺が黒色以外の服を着ているのを見たことがない。姑息な手段だが、こういう細やかな配慮やそれを用意する行為に凝ることは、チンケな通り魔行為に意味を持たせ、何か大層なことでもやっているような気分にさせてくれるので、それ自体なかなか楽しいものである。一度通り魔で使った服は、襲撃後の逃走中に脱いで、近くのゴミ集積所に出されている他人のゴミ袋の中に混ぜて捨てる。こうすることで目撃された服装から足がつくことはまずない。

襲撃対象は当然だが自分よりも弱そうな奴であることが一番の条件だ。そうするとヨボヨボの老人や幼い子供や身体障○者を狙うのが筋というものだが、こういう連中はめったに深夜一人でひと気のない夜道を歩くものではないし、弱いだけに殴り加減を間違えてコロしてしまわないとも限らないので、とりあえずは対象外である。また、原則として女は狙わない。女を殴ることなど何とも思わないが、殴り倒した女に「暴行されるのかも！」などとうす汚い期待をされるのがシャクに障るからである。そういうわけで、襲撃対象として最も適当なのは酔ったサラリーマンである。肉体労働者特有の見当違いのやっかみから、俺はセビロを着ているホワイトカラーの連中はみんなそれだけでスカしているように見えて殴りたくなるのだ。昼休みに工場の油に汚れた作業着を着て商店街を歩くと、すれ違うセビロのサラリーマンどもは、汚いものを見るような目で俺たちのことを見下す。本当はそうではないのかもしれないが、俺達にはどうしたって奴らが俺達のことを馬鹿にしているように思えて仕方がない。汚れた作業服のままでアパートの家賃を振込みに工場の

近くの銀行に行くと、接客係はいつも俺の姿を見るなり猛ダッシュしてやってきて、慇懃な態度で「お客様、今日は何のご用でしょうか？」と気色の悪い口調でわざとらしい笑みを浮かべる。その目は全く笑っておらず「何の用だ！　テメエ、俺に何の怨みがあって俺の店に来やがるんだこん畜生！　公共料金の支払いなら郵便局に行くか自動振込みにしやがれよ馬鹿！　ここはオメーみてえな汚くて臭くて下品で馬鹿な工員ふぜいが入って来ていい場所じゃねえんだよ。お前らはホームレスと同じでいるだけで他の客の迷惑なんだよ。ええい、アタマくんなあ！　用が済んだら二度と来るなよ馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿ァ！」と心の中で思っているのがミエミエである。だが、俺はその場で接客係を殴り倒したりはしない。

「ああそうだよ、俺はホントに臭いし汚いしアタマ悪いし最低だよ。それが何だってんだ。セビロ着てるぐらいで威張るなよ馬鹿野郎。今夜俺はお前の代わりにお前とは何の関係もない赤の他人を、奥歯が全部折れるまで思いきりブン殴ってやるからおぼえとけ！」

俺は心の中でそう思い、暗い情熱を燃やすのだ。

　酔った人間は動きが鈍くなるので武道の心得のある者でもシラフの時に比べれば相当に弱くなるものである。そこを狙って後から近づいて、まずは後頭部を思いきり殴る。ここで注意しなければならないのは、人間は酔うと痛みにも鈍感になるので、一発では反撃される怖れがあるので、最初の一撃の後に身体ごとぶつかっていって相手が地面に倒れるまで数発は思いきり殴る必要があるということだ。通り魔を始めた最初のうちはそれがわか

らず相手に反撃されることがしばしばあったので、俺も最近はすかさず相手のわき腹に強烈な肘打ちをかましてから腹部と股間を蹴り上げることを忘れない。倒れた顔の前歯のあたりに足を踏みつけると面白いように歯が折れる。俺の経験では、不用意に素手で相手の口のあたりを激しく殴ると、相手の歯が折れたときに拳を切ってしまうことが良くあるので、口のあたりは拳で殴らない方がいいと思う。倒れた相手の頭、とりわけ後頭部はあまり強く蹴ると死んでしまいそうなので注意した方が良いだろう。俺としては俺の襲撃で相手が死のうが生きようが、はたまた一生残る障害をかかえて生きるはめになろうが一向にかまわないのだが、殺人事件にまでなると警察の捜査もマジに真剣なものになる可能性があるので、せいぜい全治三週間程度の怪我を負わせるぐらいが丁度いいと思っている。

そうやって多くの人を襲った経験から俺が学んだのは、人間の身体は想像する以上に丈夫であり、それと同時に想像する以上に脆いものでもあるということだ。これぐらい殴っておけばもう立ち上がれないだろうと思って殴るのを止めると、相手がムクムクと立ち上がって向かってきたりするし、それとは逆に、さあ、これから仕上げの殴りに入ろうと思った瞬間に相手が意識を失ったりすることもある。人間というやつは常にこちらの期待通りには、倒れても起き上がってもくれないものなのだ。そこに人を殴り倒す難しさがある。

襲撃後に逃走する前に、俺はその後の捜査を攪乱させるために、思わせぶりな捨てゼリ

フを残していくことを忘れない。
「いいか、あの件は忘れろ！」
「他人の女に手を出すからこういう目に会うんだ」
「あのことをしゃべると今度はこんなものでは済まないぞ！」
相手は思い当たることがあるかもしれないし、そうでなければ誰かと間違われて襲われたと思い込むだろう。人間は犯罪には必ず何かもっともらしい動機があると信じる動物なので、こういうフェイクは意外に効果があるものだ。

以前、山手線の某駅のホームで、突然目の前の中年親父が殴りたくてたまらなくなり、自分が押さえられず、やむなく大勢の人がいる前で「この野郎！　俺の妹を何だと思っていやがるんだ！」「妹はお前のおかげで自殺未遂までしたんだぞ！」と叫びながらメチャクチャに殴り倒したことがある。周囲の連中は俺の言葉で「ああ、この親父はこの若者の妹を手込めにするか何かした極悪人なんだな」「それは殴られて当然だ」と思い、誰も俺が殴るのを止めなかったものである。殴られた親父は「人違いだ！　誤解だ！」とわめいたがそれも言い訳にしか聞こえなかっただろう。俺は誰にも邪魔されずに気が済むまで親父を殴りつけ蹴飛ばしてその場を後にした。言葉とは、物語とは実に便利なものである。

俺が襲撃する酔っぱらいのサラリーマンは往々にして無防備だ。殴られてもその瞬間に何が起こったのか全然分からない様子できょとんとする奴がほとんどで、多くの奴は悲鳴をあげる余裕もない。そんな暴力が自分の身に突然ふりかかるなどとは思ってもいなかっ

たのだろう。これを平和ボケと言わずして、何といおうかと思う所だが、実はこちらもそれを承知して、人が一日のうちで一番油断して気を抜きやすい〝帰宅時〟を狙って襲っているのである。卑怯と卑劣という言葉を浴びせられると褒めちぎられたとしか感じられない俺ならではの最低最悪の発想である。

このように、この世には俺のように、さしたる理由も動機もなく他者を襲ったり傷つけたりすることを何とも思わず、そこに至上の快楽を感じるキ○ガイが確実に存在する。

これは学校が悪いのでも社会が悪いのでも政治が悪いのでも何でもない。この俺だけが悪いのだ。改めるつもりは全くない。

今日も俺は今夜の獲物を物色して東京の地図を見る。沢山ある駅の白マルが、みんなおいでおいでをして俺を誘う。俺は明日も明後日も、これからもずっと、命と体力の続く限り無差別に人を襲うだろう。いつか、夜の路上で俺に出会ったら宜しくな。そのときは頼むから大人しく殴り倒されてくれよ。抵抗されたらこっちもムキになって、ついつい強く殴りすぎちまうからよォ。

「文藝第38巻第1号」　１９９９年2月1日　河出書房新社発行

第４章　コメント（五十音順／敬称略）

第4章



コメント

◆ア行

有光沙織（編集者／小学館元担当）

第2弾の村崎百郎電子本の刊行、おめでとうございます。
森園みるくさんの担当編集者として村崎さんにお会いしてから、打ち合わせやイベントなどでお会いする機会が多くありました。
村崎さんといえば世間では「鬼畜」「電波」「悪趣味」なんだと思いますが、私にとってはひたすらに「優しい」人でした。
仕事の場で私のＳＭ話や拾い癖のある夫のエピソードをしたときに、バカにしたりも笑いものにしたりもせず当事者の目線で聞いてくださったのは、後にも先にも村崎さん（と森園さん）だけです。
社会的にずれていたり蔑まれている人たちを見る目線の優しさが、ずっと心に残っています。
そんな村崎さんの原稿が埋もれたまま忘れ去られずに、こうして世に出ることがとても嬉しいです。
第３弾も楽しみにしております！

石丸元章（ライター）

「鬼畜降臨の夜。

──そうして一夜は続き、朝が来ないまま新しい時代が始まった」

10回忌になるのですね──。

自分が村崎さんとお会いしたのは、ご命日から遡ることさらに10年以上前だから、もういろいろなことを忘れているのだけど、あの夜のことは忘れようがない──。

新宿の厚生年金会館がちかくの富久町の靖国通り沿いの2階に、昔のロフトプラスワンがあって。そこで〝鬼畜ナイト〟と名付けられたイベントが開かれて、その夜、村崎さんと初対面したわけです。

イベントといっても入場料は取らないし、会場は業界関係者で満席だから、パーティといった方がイメージは近い。凄い熱気だった。超満員で。わんわんとあっちもこっちも知られた有名人ばっかり。

パーティでの自分の役目は、村崎さん×青山正明さんと鼎談すること。ちょうどその頃、青山さんはMDMAで逮捕されて〝シャバ〟へ戻ったばかりで、自分もクスリはちがえど同じような境遇で、それで声をかけてもらったんだと思う。

その夜は──のちに気づくのだが、ドラッグとかゴミ収集とか奇形愛とか少女売〇のような、世間のモラル基準から外れた悪趣味で露悪的な感覚や行動を肯定するバッドテイストカルチャー＝〝鬼畜系〟の大決起パーティのような勢いで、そのことを今の感覚で批判されるのもうんざりなのだが、その夜は、村崎百郎がその異形を生で人前へ披露するデビューパーティなのでした（記憶では）。そして、その夜をきっかけに、次の時代を代表

する前衛表現者として燦然と地の底をさらに下へ下へと駆けはじめる。

●時代を象徴するパーティ

鼎談といったけれど、村崎さんの独壇場というかね。隻眼の三角頭巾の異様な風体で語りだす常軌を逸したエピソードの数々。数奇なプロフィール。こわいでしょ、あれ。自分もまたほかの大勢と同じく、〈頭巾の下の素顔が見たい！〉と反射的に思ったけれど、同時に――〈いやいやいや見てはいけない。見ると地獄に堕ちるぞ〉とも直感した。

見沢知錬さんやねこぢるさんが会場にいて、むせ返るようで、サブカル界隈のライターや編集者やイラストレイターや、当時のカルチャー界のスターたちが、もう死んでしまった人もいるけれど、その夜の記憶をたどるときに大切なのは、そこにいた全員が燦然と夜に光る黒色矮星のようだったの。村崎百郎の皆既日食に照らされて黒く光っていた。

いつの時代にも、「その時代を象徴するパーティ」として思い出されるパーティというのがあると思って、あの夜がまさにそれ。

次々といろんな人が登壇して唖然とするエピソードを誇らしげに語り、新しい価値観を提示する。会場は大いに盛り上がって、お客さんたちもそれぞれの顔も、笑っているんだか陶酔しているんだか判別できないほどで、照明もテーブルの上のグラスのすべてがエレクトリックに輝いて視えて、本当に全員がLSDの幻想の中に漂っているようだったんだから。

思うに、富久町のプラスワンは2階にあったのだけど、その夜のパーティは本当は暗黒の地下で開かれていて、あんまり凄くて楽しいパーティだったから、途中で地下と地上をつないでいた梯子が外れてしまっていたことに、誰も気がつかなかったんだな。顔が見たい！〉と反射的に思ったけれど、同時に――〈いやいやいや見てはいけない。見ると地獄に堕ちるぞ〉とも直感した。

村崎百郎さん10回忌おめでとうございます。記憶に自信がない所があり、ちがっていたらすみません。地獄の居心地はどうですか。いずれ後先、そのうち行きます。また。

ウズマキマキオ（映画作家）

村崎さんとの出会いは、30年近く前に『ガロ』誌上で根本敬氏のコラムを読んだのが初見でした。「シベリアから転校してきた、中卒、乱暴魔、ゴミ漁り」などの情報を得て、世の中にはすごい人がいるもんだなと、その時は思いました。

その数年後、ロフトプラスワンにて『ガロ』関係のトークイベントを見に行った時に、初めて村崎さんの実物を拝見することとなりました。ただし、トークイベントのゲストですので、もちろん素顔を確認することは出来ませんでした。まあ、自分としては謎は謎のままにしておくのはあまり気にしない性分なので、さほど気にはなりませんでしたが。

とはいえ、紫色の三角頭巾を被って「例の姿」で登場したので、その奇妙な姿にはかな

りのインパクトがありました。その時のイベントでは、以前の『ガロ』での内容を、さらに詳細に熱く語っていたような記憶があります。

細かい箇所は失念しましたが、そのイベントの中で村崎さんが「変態であればあるほど品行方正じゃなきゃいけないいんだよ」と熱く語っていたことはしっかりと覚えています。本物の変態は自分自身の変態性を外に漏らさないように、日常生活は極めて良識的、常識的に行動しなければいけない、という意味だとその時は理解しました。

そのイベントで、「俺はゴミ漁りはするけど、ゴミ出しのときに近所の人と出会ったら、必ず笑顔で挨拶してるんだよ」とか「ゴミ出しのルールはしっかり守る」というようなことも語っていた記憶があります。

さらに数年後。自分が今でも続けている映画イベントの会場にもなっている江古田のフライングティーポットという喫茶店で、コーヒーを飲みつつマスターと雑談していた時に、思いもしない形で村崎さんとお会いすることとなりました。カウンターに座りコーヒーを飲んでいたところ、隣に座っていた恰幅の良い男性をフライングティーポットのマスターから「「この人、村崎百郎さんだよ」」と紹介されました。当たり前なのですが、紫色の三角頭巾は被っておらず、口髭をはやした気さくなおじさんといった印象でした。

その後、江古田で自分の活動などをしていくうちに、森園さん村崎さんとも仲良くさせていただき、お二人のお宅にもたまに伺うようにもなりました。

顔がわかってきたように、北海道出身、空手の達人、元雑誌編集者などなどと、だんだんと正体もわかってきました。

江古田のブックオフやフライングティーポット、森園さん村崎さんが仲良くママチャリで買い物途中など、江古田界隈で度々お会いすることもあり、最初に抱いていた「覆面を被った究極の変態」から「近所の気さくなおじさん」に自身の印象が変わっていったような気がします。

村崎さんが亡くなってから随分と経ちますが、自分の周囲に稀に出没する「自称変態」や「私変わってるんです」というような人物と会うたびに、今でも例の言葉を思い出します。

そして、そういったちょっと変わった人たち（というか、自分は人とは違う、自分は変わっているんだぞと思い込んでいたい人たち）を見かけるたびに、心の中で「自分は究極の変態と仲が良かったんだぞ」と、思ったりもします。

「変態ほど品行方正であるべし」

この言葉には、いろいろと影響を受けたような気がします。

座右の銘というわけではないですが、しっかりと自分自身の心に刻まれた言葉となりました。

宇田川岳夫（著述家／フリンジカルチャー研究家）

村崎百郎氏とはじめて出会ったのは1996年の年末に開催された太田出版の忘年会（一次会）の立食パーティだったと思う。スマートフォンやSNSもなかった90年代半ばには自らの行動をSNSにあげたりすることもなかったので、25年近く前の記憶は定かではない。村崎氏はその当時すでに『危ない1号』などのエクストリームなメディアで有名であり、黒いマスクから片方だけ除く邪眼が印象的な、まさに「文は人なり」といった、既存の道徳律を破壊し続ける魔人という印象が強かったが、会場で出会った村崎氏は大柄な肉体に反した穏やかな語り口で豊かな知性がうかがえた。私は、『危ない1号』の編集者であった青山正明氏とは80年代から交流があって、青山氏については作家と作品が一致していた印象を持っていたが、同じ『危ない1号』に寄稿している村崎氏に初めて出会って「作家と作品は別物」という全く正反対の印象を持った。村崎氏とはイギリスの秘教的アポカリプティック・フォーク・グループCurrent93や、日本の陰鬱なフィメール・デス・フォークと言える森田童子が好きだということで音楽の興味も一致したのを覚えている。さて当日は初対面でさほど突っ込んだ話もできず、結局それが村崎氏とは後にも先にも最後の出会いとなった。あいさつ程度の会話の後、村崎氏は別の会話の輪に入り、私は太田

出版の編集者の赤田氏・北尾氏・H氏、同じく太田出版で書いていた竹熊健太郎氏や大泉光成氏などと会話しているうちにパーティは散会となり、二次会へと流れていった。今となってはもっと村崎氏と会話しておけばよかったと思うのだが、穏やかな物腰の中にもときおり光る邪眼とでもいうか、何かすべてを見通すような村崎氏の眼光が私に躊躇させたのかもしれない。後になって村崎氏の文章や黒田一郎名義の文章を読み返してみると、黒田一郎という知性あふれる人物が、自らの中にいる大いなる獣としての村崎百郎をギリギリのところでコントロールしていたようにも思えたのだ。それは村崎氏の夫人であった森園みるく氏から、彼の蔵書の一部を見せていただいたとき、その思いは強くなった。（特に感じたのはアントナン・アルトーの影響を強く受けていたのではないかということを私見だが付け加えておく。）さて、思い返してみると、あの忘年会やそれにまつわる人々は２０２０年の今日、すでに故人であったり、出版社を退職していたり、全く別の分野で活動していたりしている。今となっては、90年代後半の「サブカル・バブル」とか「悪趣味ブーム」とか「ニュージャーナリズム」といった一部の雑誌メディアによる高揚らしきものは雲散霧消し、メディアにおいてはポリティカルコレクトネスが求められ、表現の自由度は制約されている印象を強く感じる。読者の皆様は、この電子書籍を読んで、制限のない想像力（妄想力）を奔放に奔らせ、自由な表現を求め続けた人物がいたことを、コロナ禍で閉塞し、口を閉ざすことを余儀なくされ、行動の自由を奪われた世相の中で、一人一人の無意識に刻印（シジル）として刻み込んでほしい。

鵜野義嗣（データハウス社長）

〈データハウス鵜野義嗣社長が語る「鬼畜のススメ」の誕生と悪趣味ブーム〉
～いかにして「鬼畜のススメ」は誕生したのか
「鬼畜・悪趣味ブーム」を生み出したデータハウスの鵜野義嗣社長インタビュー～

村崎百郎の処女作にして唯一の単著である「鬼畜のススメ」は１９９６年7月にデータハウスから出版された。同社で伝説のムック「危ない1号」シリーズなどを手掛けた天才編集者・青山正明と村崎を中心にして、世に「鬼畜ブーム」「悪趣味ブーム」が巻き起こった。この過激なブームはデータハウスなくして生まれなかったといえる。
「鬼畜のススメ」はどのように誕生したのか。90年代の「鬼畜ブーム」「悪趣味ブーム」とは何だったのか。
村崎の妻である漫画家・森園みるくが、データハウスの社長としてブームを支えた鵜野義嗣社長に聞いた。（佐藤勇馬）

森園みるく（以下、森園）　村崎百郎がデータハウスで「鬼畜のススメ」を書くことになったのはどのような経緯があったのでしょうか。

鵜野義嗣（以下、鵜野）　随分と昔のことですけども、そのころはサブカル系のかなり特

異な……強烈な人たちがデータハウスに集まりだしていて。

森園　青山正明さんをはじめとした？

鵜野　そうですね。僕自身が興味あったのかは別にして、そういう人たちの考えることって面白いので。その中から出てきた企画ですよね。とにかくどこか突き抜けていれば面白いかなということで、そういう企画をどんどん本にしていた時期でした。

森園　なるほど。本を出すにあたって村崎と打ち合わせとかもされたのでしょうか。

鵜野　いや、彼とは企画のことで話したことってあまりないんですよ。

森園　企画を見てからＯＫ出すか決めたりするんじゃないんですか？

鵜野　もちろん、最後にざっとは内容をチェックしますけども、誰かが仕切ってしまったら、きっと面白くなくなってしまうんですよ。まずは放っておいて、好きなことをやってもらって、問題があるところだけ僕が修正すればいいわけで。最終的にどうするかは僕が決めればいいことだから、それまでは自由にやってもらうというやり方でしたね。

森園　サブタイトルの「すかしきった日本の文化を下品のどん底に叩き堕とす」というフレーズも過激ですけど、問題なかった？

鵜野　そうですね。いいんじゃないですか。別に犯罪でも何でもないし。人間が頭の中で考えることって、何を考えてもいいわけです。もし極端なヘイトとかだったら僕個人としては出したくないけど、そういう内容でもないし。思想なんてすべて自由だと思いますよ。

森園　「鬼畜のススメ」はゴミ漁りが大きなテーマでしたけど、それも法律的に問題ないと解釈されたんでしょうか。

鵜野　もちろんね、ゴミの集め方によってとか、書き方によってはプライバシーもあるだろうし。ゴミの内容を発表されたら嫌な人もいるだろうから、そこに配慮すればね。別に盗むわけじゃないいんだし。

森園　確かに、集積所に出されたゴミを持っていくだけですからね。

鵜野　まあ、占有離脱物横領罪と判断される場合もあるかもしれないけど、それも結構あいまいな話なんでね。

森園　村崎と会って話した時の印象とかはありますか？

鵜野　どう言ったらいいのかな……僕としては「大人しい感じ」という印象しか受けてないんですよ。

森園　青山さんからの紹介だったんですかね。

鵜野　確か、そうでしょうね。青山君は……切れるんだけど繊細で弱い（笑）。青山君なんか「頑張ります！」と目を輝かせて言ってきても、3日経ったら連絡なくなったりして。そんなのが何年も続いていたから。それに比べたら、村崎さんはもうちょっとしっかりされていましたよね（笑）。

森園　「危ない1号」に係わったライターさんや編集者さんはたくさんいらっしゃったと思うんですけど、皆さん本当に「鬼畜」というわけではなかったですよね。

鵜野　違いますよね。ただ、どう言ったらいいのかな。ああいう本に載っているのは普通あまり出てこない情報で、本当に必要かどうかといえば世の中にとってあまり必要じゃない。だけど、そういう不必要なものから日常の中で遊びを見つけるというか、一般的な価値観とは面白いと思うものの対象が違っているだけですよね。「鬼畜」というのも曖昧だけど、村崎さんなりの「鬼畜」があったんだろうし。普通の人からすれば「鬼畜」って単に酷いってことですけど、それも彼には一般と違った「鬼畜」があったんでしょうね。

森園　村崎は事件に巻き込まれて亡くなったわけですけど、それについては鵜野社長としてはどうお感じになりましたか。

鵜野　テーマが「究極」のところまで行っちゃって。それに興味を持つ人も「究極」のところに行っちゃう、もっと期待も出てくるだろうし。本を作っている側は抑制もできるし、もちろん社会的な影響も計算してやっているわけですけども……ただ受け取る側って、宗教もそうなんですけど、自分の思いと違った時のものが大きくなる。まあ、結構付き合うのは危険なところですよね。ギリギリのところで。ただ、危ないものをやるならギリギリのところをやらないといけないから、危険は付きまといますね。

森園　当時は別冊宝島、太田出版やコアマガジンの過激なムックなどが続々と発売されて「悪趣味ブーム」「鬼畜ブーム」になっていました。その中でも私は個人的に「危ない1号」が内容で最先端を行っていたと思います。

鵜野　「サブカル」って定義するのはあまり好きじゃないんですけど、もともとは80年代

初期に宝島社さんが始めたのが「サブカル」といわれたんですね。80年代のサブカルって結構明るい感じがあったんですけど、どんどん先鋭化していって過激になっていったのが90年代だと思うんですよ。ただ、他社と同じ事やっても仕方ないし。他がやっていることはやりたくないし。ブームになっても、そこは距離を取っていた感じですね。

森園　当時と比べると、今の出版業界は全体的に最初からブレーキをかけて、危ない方に行かないようにしている感じがしますね。

鵜野　多分まあ、今はみんなそういうことに興味を持ってないんだと思いますよ。ネットなんかでも、誰でも発信できるんだけど個人の発信力はあまりなくて、大手企業とか政府とかの発信力が強烈に以前よりも強くなってきているので。今の受け取る側って、広告と同じようなものを読まされているわけでしょ。大手以外の出版社が昔のような突出した内容の本を出したとしても、世の中の人たちはそれに触れなくなってきているんでしょうね。

森園　今はネット主導だから、以前よりも面白いものが作れる可能性が低くなっているということでしょうか？

鵜野　僕はキツイと思いますね。ネットって発信は平等だし、昔よりも気軽にできるわけですけど、情報を受け取る場合は一方的に大量に流されるものを見ているだけで。多分、人がものを考えることができなくなっていきますよ。まともな情報がこなくなっているから。

森園　以前、鵜野社長は「〝すねた本〟がうけるのって実は貴族文化なんですよ」とも発言されていましたが……。

鵜野　もちろん、庶民だって文化はあるんですよ。農耕だって文化ですから。ただ、それはあまり残らない。文化って結局は、お金持ちが労働しなくなって暇になると生まれるんですよね。で、頭の中で考えることって過激になっていくし、現実とは離れちゃうんだけど、そこから文化がどんどん生み出されていくと。世の中に余裕がないと、日常生活から離れた貴族文化って生まれにくいんじゃないですか。

森園　資料を整理していたら村崎が「鬼畜のススメ２」という企画を用意していたことがわかったのですが、鵜野社長はご存知でしたか？

鵜野　そういう企画があったような、なかったような……。彼って現実をどう変えようというよりは、自分の世界を作っていくタイプ。文学に近い世界ですよね。そういう、人に影響を与えて読まれていくものが世の中にいっぱい出るのは良いことで、それ以外に出版社の価値なんてないんですよ。けど、それもなかなか難しい時代になっていますね。ただ、過激な本って「危ない１号」も１巻と２巻は売れたけど、３巻は売り上げが半分になって、４巻はもうダメ。だから経験上、強烈な本ってせいぜい２冊か３冊くらいまでです。

森園　「鬼畜のススメ」の新作を刊行するにあたって心に刻んでおきます。ありがとうございました。

榎本由美（漫画家）

「村崎先生へ……」

２０１０年のこと

村崎先生といえば
鬼畜というパフォーマンスに
そぐわない
『赤ちゃん泥棒』
（赤ちゃん題材のエッセイ）
の取材をしていただいたことが
思い出されますが

２０１０年初頭
某喫茶店でお会いしたとき
的確なアドバイスして
いただいたことが印象深いです

その頃自分は
ネット上の評判や攻撃に
ナーバスになっていました

「何か行動おこして
攻撃されるかもしれない
と思うと怖いんです．」
と話すと

「それは
攻撃されるかも、
と思った時点でもう
攻撃されてるのと一緒だよ

怖いとか
攻撃されるんじゃないかとか
思い込まない方がいい」

と
当たり前といえば
当たり前ですが
大事なご意見をいただきました。

ネガティブになってると
ネガティブな思考にしか
ならない

それを指摘して
くださったんだと思います

あまり鬼畜ぽくない思い出話で
失礼致しました、村崎先生……

◆カ行

鏡リュウジ（占星術家／翻訳家）

「村崎百郎さん、また怒ってください」

村崎百郎さんとはいったい何度、お酒を酌み交わしたことだろう。若い頃から僕を可愛がってくださった森園みるくさんもふくめ、よくお食事をご一緒させていただいた。

何を勘違いされたか、僕を魔術や秘教の「専門家」と見てくださって、本当はご自身のほうが詳しいだろうに、グラスを傾けながらずっと僕を褒め、立ててくださったことが思い出される。

なのに、僕は、村崎さんを何度も「怒らせて」いる。ご存知のように、村崎さんはご自身、「鬼畜」を名乗っておられて、規範から逸脱している「悪い」人であるというペルソナを付けておられた。けれど、僕にはとてもそんなふうには見えない。僕の知る限り、村崎さんはどんなにお酒が進んでもいつも礼儀正しく、変わらず周囲に気を遣い、そしてどんなときも優しい人だった。だから僕は、よく言っていたのだ。「村崎さんてほんとはいい人なんですよね」。

その度、村崎さんは半ば本気で怒っておられた

「違いますよ、僕は鬼畜で電波なんです！　本当に」と。

それが商業用のペルソナを守る「営業用」の態度であったとは思えない。

きっと村崎さんは目を逸らさず見ていたのだ。世の多くの人が目をふさいでいる、誰の魂の奥にある悪や邪や闇を。巨漢には似つかわしくない、あの純粋な瞳で人の心にひそむ

いやらしさを、忌むべきものを勇敢に見据えておられたのだ。
だから、村崎さん、また怒られてもいいです。もう一度言わせてください。やはりあなたはいい人なのです。清濁を併せ呑む、あの両義的なダイモーン、アブラクサスのような魂の持ち主だったのです。
いつかまた、僕はあなたに「いい人だ」と言って、怒られるでしょう。そのときを、僕は僕の仕事をしながら、焦らずに待っています。

きょん（エロ漫画家）

「掌の思い出」
初めて会ったのは、ロフトプラスワンだったのには間違いない。みなみ先生が原作を書いている森園みるくさんが、あの村崎百郎と付き合い始めたと聞いて、二人で「えーっ!?」と驚き、兎にも角にも祝福を！　と出かけて行ったのだ。すると三角頭巾から隻眼だけを出した、自称中卒の工員村崎百郎が近づいてきて「あなたが南智子さんと一緒になられたきょんさんですか〜いやあ羨ましい。実に羨ましい」と、ボクの手を握りながら愛想よくいったのだ。三角頭巾をかぶっていても分かる愛想の良さというものは、そうあるものではない。なによりもフワフワとした掌や指が、決して中卒の工員ではないと告げていた。ある夜、森園さんに届け物があって、ボクが伺うとスッピンの森園みるくさんに続いて素顔の村崎さんが出てきて、また「いや〜羨ましい！　実に羨ましい」とフワ

フワとした掌と指で握手を求めてきた。ボクはそれ以降村崎百郎という人を、ずっとフワフワとした柔らかい人、血の通った暖かい人だと思っている。衝撃的にこの世を去ろうとも、ボクがそう記憶している限り、ボクにとってはそうなのだ。

クーロン黒沢（ライター）

なんでもありの90年代。鬼畜を気取るライターは掃いて捨てるほどいたが、そのなかにいて段違いの狂○をばらまき、ひとり気炎を吐いていたのが村崎さんだった。

愛読者のひとりだった私は、村崎さんの「アナ○はいいぜえ……」という書き出しで始まるコラムに衝撃を受け、畏敬の念を抱いていたが、そんなある日、共通の知人である編集者・木村重樹さんの計らいで、憧れの村崎さんとアフタヌーンティーをすることになった。

今はなき新宿の純喫茶。入ると、正面でニコニコと手を振る木村さんの傍らで、黒装束でザンバラ髪の不気味な巨漢が、大きな目をカッと見開き、身体を揺すってケタケタ笑いながら、凄まじくよく通るドスの効いた声でこんなことを叫んだ。

「黒沢さん？　いやァーッ、ゴルゴダの丘でお会いして以来、本当に久しぶりですね。私のこと、覚えてますかッ！」

怪物めいた外見と想定外のセリフに、私はひどく戸惑った。周りにいた何人かの客も、ギョッとした顔でこちらを振り返り、二度見、三度見していたのを覚えている。

そんな周りの反応など意に介さず、村崎さんは途切れのない独特の語り口で、前回（たぶん、数千年前）エルサレムで会ったときの状況をこと細かく説明してくれた。

青二才だった私は村崎ワールドにのまれ、口も挟めず、流れは自然と村崎さんの独演会となって、彼がこれまで行ってきた奇行のエピソードをこれでもかと聞かされたのは覚えているが、残念ながら詳細な内容は覚えていない。

そんなことより驚いたのは、マシンガントーク中の村崎さんが、口を動かすのと平行して頭やら脇の下をボリボリ掻きむしっては、採取したカスを指先で弾き飛ばしたり、傍らの観葉植物にそっとふりかけたりを、ひたすら繰り返していたことだった。

しばらく黙って眺めていたが不思議でたまらず、勇気を出してわけを訊ねると――。

「ああ？　遺伝子を撒いてるんですよ」

と、事も無げにわけを説明してくれた。

己のフケ、鼻くそ等を外出先でばら撒くことによって、霊的な縄張りを少しずつ拡大しているのだという。ネタと思いきや、その後2時間近くも遺伝子をばら撒き続ける村崎さんの姿を眺め、この人は本物なんだと確信した。

て、創刊号と第2号が刊行されている。
過去を振り返るほど、「90年代サブカル」における村崎百郎の影響力の大きさを感じずにはおれない。実際、鬼畜・悪趣味・世紀末といった「90年代サブカル」の属性をキャラクターとしても体現していたのは彼である。そんな村崎百郎に対する最大限のリスペクトの表明が、創刊号の表紙モデルである姫乃たまを「まぼろし博覧会」に展示されている彼の遺品の前で撮影することであった。

「まぼろし博覧会」とは、2011年7月、静岡県伊東市にデータハウスの鵜野社長がオープンしたキモかわいいテーマパーク。昭和的なものを中心に、蝋人形やマネキン、古本、中古レコード、ポスター、さらには潰れた秘宝館から持ってきた奇妙なエロ造形物まで、ありとあらゆるものが収集され、〝セーラちゃん〟こと鵜野社長の独自のセンスによって陳列され、インスタレーションに仕上げられている。

その様子は世界のアウトサイダーアートもびっくりのトンデモ空間で、根本敬氏曰く、「日本のガウディ、すでにシュヴァルは超えている」という。近年はネット上でも大いに話題となっており、珍奇で不思議で怪しいものが好きなマニアたちの絶好の観光スポットとなっている。東京ドーム並みの敷地面積を誇る「まぼろし博覧会」のなかでもかなり奥まったところに「村崎百郎館」がある。

ひとつの部屋には、パソコンを置いたデスクがあり、背面の壁いっぱいに資料のコピーや雑誌の切り抜き、チラシ、ハガキなどが貼り付けてあり、まるで彼の仕事場を再現して

これが村崎さんと（前世を除けば）最初で最後の出会いとなってしまったが、それから四半世紀が経ち、何もかも忘れかけた7月のある週末。暇つぶしに出かけた伊豆の「まぼろし展覧会」で「村崎百郎館」を目の当たりにし、久々、村崎さんのことを思い出した。
このとき、なんとなく気になって村崎さんの命日を調べると、奇しくもその日が十回忌の翌日だったことに驚き、もっと言うとその日の晩、（詳細は書けないが）私の人生を変える重大な出来事があった。
さらにそれから何日もしないうち、今まで交流の無かった森園さんから突然の依頼が舞い込み、この原稿を書いているわけだが、もしかするとあれもそれもこれも、あのとき村崎さんが遺伝子マーキングした領域にうっかり足を踏み入れたことと、何らかの因果関係があるのではないか。と、密かに思っている次第である。

ケロッピー前田（身体改造ジャーナリスト）

「僕らのなかには鬼畜の血が流れている
〜『バースト・ジェネレーション』が継いだ血統」

2018年前の夏、僕は90年代後半からゼロ年代にかけて時代を疾走した伝説の雑誌『BURST』（白夜書房／コアマガジン）を復刊するべく、「90年代サブカル」の全盛期に思いを馳せていた。現在、それは『バースト・ジェネレーション』（東京キララ社）とし

いるかのようだ。デスクの上には無造作に数冊のエロ本が置かれ、本棚にも猥褻な雑誌が溢れている。周囲を見渡すと、壁や柱にも村崎百郎の手書きのメモや誰だかわからないモノクロ写真などが貼り付けられてる。

森園みるくさんによれば、アーティストのマンタム氏の協力により、一年がかりで部屋3つとギャラリースペースを作ったものだという。

そこにあるものは限りなくゴミのようだが（彼のゴミ漁りの成果）、村崎百郎の感性によって選びとられたものでもある。「村崎百郎館」は他の空間とは違う〝何かを感じる場〟となっていた。

『バースト・ジェネレーション』は、村崎百郎の遺品に触れたことで、「90年代サブカル」に連なる血統の証を確かに受け取ったのだ。

「90年代サブカル」の全盛期（１９９６年）は、日本の出版業界全体のピークでもあったという。

『BURST』を作っていた頃、毎号雑誌が出るたびに全国読者からの反響は凄まじく、取材現場に行くたびにトンデモない出来事が起こり、それを〝時代の記録〟として誌面にすることに追われていた。

僕はカルチャーの生まれる現場を目指し、国際規模のタトゥーコンベンションや身体改造の最前線を追って海外に赴くことが多かった。世界で最も過激な現場を目指したのは、死体写真家の釣崎清隆も同じである。僕らは、世界の最前線に立ち会うことから日本の新

しいカルチャーが生まれると信じていたし、いまもその気持ちは変わらない。

当時、村崎百郎といっしょに仕事をするチャンスはなかったが、『危ない1号』を立ち上げた青山正明は、白夜書房界隈の名物ライターであり、ボディピアスの記事をいっしょにやらせてもらった。また、村崎百郎が企画したトークイベント『鬼畜ナイト』には、釣崎清隆や石丸元章も登壇している。そのイベントの記録が印刷物として残されていることはいまとなっては貴重である。

青山正明が『危ない1号』の創刊号で「妄想にタブーなし」と宣言したことは有名だが、僕ら『BURST』はリアルを極めることでタブーを超えることを目指していた。そういう意味でも、僕らのなかには鬼畜の血が流れている。

現在、『BURST』は『バースト・ジェネレーション』として復刊し、日本からカルチャーを発信するメディアとして活動を続けている。鬼畜の血を未来にまで届けるためにも。

◆サ行

さかもと未明（アーティスト）

「村崎百郎さんへのオマージュ〜現代の神話になった男」

「彼ができたのよ。今度の彼はね、すっごく頭がよくって、優しくってね。原作まで書いてくれて、アタシ、今最高に幸せなの！」

森園みるくさんが、初めて村崎百郎さんとの交際について教えてくれた日のことは、忘れられない。

森園さんは、当時「レディコミの女王」の名を欲しいままにしていた。華のある絵柄、都会の匂いのするエロス描写で時の人となり、本人も美人で「女版YOSHIKI」といったビジュアル。一目見たら忘れられない存在感だった。

お洒落も大好きで、家は集めたボンデージやら着物やらで溢れ、それらのコスチュームを活かして、ベルリンで撮影した退廃美あふれる写真集まで出した。そんな漫画家、今までいなかった！　みるくさんは間違いなく当時の女たちの憧れの的だった。

けれど、「好きなことしかしない」「好きな服しか着ない」「したいことは全部する」そういう強さと信念、素直な欲望を持った森園さんは、女から見たらもう憧れのスーパースターだったけれど、男の手には余る女だったと思う。

一体どんな男が、「美人で、才能に溢れ、それをお金にする方法も持っている」女に立ち向かうことができるだろう。森園さんから恋の話をいくつか聞いた事があるけれど、どれも情けない男たちの残念なエピソードばかりだった。

「ものすごいお金持ちの男と付き合ったこともあるけれど、自慢しかしない嫌な奴だった

わ」とか、「年下のハンサムで優しい彼もいたけど、あんまり貧乏で頭が少し足りないのも、イマイチ燃えないのよねえ」と、どの男も帯に短し、たすきに長し、といった感じ。

そもそも男というのは、欲望のダブルスタンダードを持つ生きもので、遊ぶ女なら「派手で美人がいい」けれど、結婚するなら、「ほどほどの楚々とした、何事も中くらいの女がいい」。自分より収入も知能も低ければ、自分は家でふんぞり返っていられるものね。でも、森園さんや私は作家でもあるので、たちまちそんな男のダブルスタンダードを見破ってしまう。

「一発やりたいだけなら、ごめんよ。本気になれるの？　あたしと結婚できるの？」

そんな風に迫る女に、たいていの男は退散してしまう。

でも私たちは、別に一人で生きていたいわけじゃなかった。いつだって、自分を受け止めてくれる男を求めていた。ただ正直すぎただけだと思う。私たちは、男の「射程範囲」に収まるために、『Classy』なファッションに身を包んだり、仕事はそこそこにして男のために味噌汁を作って待ったりできなかった。要するに、私たちはおマタも心も全開過ぎたのだ。男を呼び寄せるための擬態もできない女たち。

「私たちっていつも、『あなたがいないと生きていけない』とか言って、ガス栓ひねったり手首切っちゃう、フツーのつまんない女に負けちゃうのよね」と、私たちはよく笑って

話したものだ。

ところがそのみるくさんがある日、「運命の男に会ったのよ！」という。「素晴らしいの。頭が良くて、優しくてね。あんな男に会ったことがない、絶対に私を束縛しようとしたりしないし、セックスをいくら求めても怒ったりしないし、女の正直な姿をそのまま受け入れてくれる人なの、とにかく頭がいいの、それどころか原作も一緒にすることにしたのよ。彼といるとね、いくらでも創作意欲かわいてくるの‼」

あの森園みるくさんをこんなにトロットロにしてしまうなんて？　そんな男がいるの？　羨ましすぎる‼　いったいそれはどんなかた？？

私は期待と羨望と好奇心と、色んな気持ちをないまぜにして、その「彼氏」と森園さんが一緒に出演しているイベント会場に向かった。当時（１９９０年代）も新宿ロフトワンは、80年代から続くサブカルの殿堂。いかにも森園さんが好みそうなトークショーの会場だ。彼女は彼とそこでトークショーをしているから見てね。といった。私の隣にいる人がその人だから、と。

けれど……その隣に座っている男性を見て私は絶句した。「……あの人は……なにも

の？？？」
　私は混乱の中に突き落とされた。言葉を失ったと言っていい。
「あの、ＫＫＫ団が被るような形の、青い三角のごみ袋を被った人は一体？？？」
　そう、それが当時「電波系・鬼畜の村崎百郎」として売り出していた森園さんの意中の人だったのだ。本名は黒田一郎さん。

　正直初めの印象は、「どんな男だって選り好みできる森園さんがなぜ「ゴミ漁りと下着集めが趣味です」なんて（キャラだとはいえ）いう男性と？？？」という感じ。
　そのロフトのイベントでは、村崎さんの奇天烈さにただ仰天したが、一方で喋る言葉には、露悪的ではあったけど、惹かれた。当時問題になっていた言葉狩りとしての差別用語の使用禁止への知的な批判などは至極、まっとうだった。言葉は汚かったけどね（笑）。要するに批判の為のメタファーとしての「鬼畜キャラなのかも？」と、思わせるに十分な知性とレトリックが感じられた。

　後日、森園みるくさんと村崎さんがすでに同居していたアトリエを訪ねると、そこに座っていたのは、あのごみ袋を被って奇声を発していた人とは思えない、知的でハンサム

かつ温厚な、大人の男性だった。体格はしっかりしていて、ちょっとプロレスラーのような逞しさがある。こんな人に抱かれたら、さすがの森園さんも安心するだろうなと思った。

そして、少し話せば半端でない読書量の歴史があることが分かった。正統的な古典から、学術書、バタイユやバロウズ、クローネンバーグみたいないわゆる暗黒文学や幻想文学、はてはゾッキ本、エロ本まであらゆる書物を縦横無尽に読んできた方だ。だけどとてもバランスの取れた人格、優しさを持っていた。すなわち、逆説的だがとても常識的な方。だから、世の中の非常識を一刀両断できるのだろう。

「彼はね、編集者をしていたの」

と、みるくさんが幸せそうに紹介してくれた。今はみるくさんの漫画の原作も手伝いながら、「村崎百郎」という鬼畜キャラで、舌鋒鋭く現代日本への批評をしているのだと教えてくれた。話せば政治にも日本の歴史にも詳しく、今の日本が抱える様々な問題、精神的な病理について。明確な意見をお持ちだった。その視点には強く肯（がえんじ）ることができた。さらに村崎さんのほうも、私がそのころに始めていた批評家としての文章を評価してくれた。

「未明さんは、ただ本で読んで書くのでなく、ご自身の体験を通し、自分に引き寄せて描

くので、とても説得力があります」と言って下さった。森園さんから聞いたのか、私が生家でいろいろ苦労したこと、親との問題と確執を抱えていることなども知っていてくださり、「私たちは親は選べませんが、友達は選べますから、これからはいくらでも人生をよくしていけますよ」と、言って下さった。

そのあと森園さんがちょっとお使いに行っている間に、私は村崎さんと二人でゆっくり話せる30分ほどの時間を得た。幼いころの親の暴力やなんかの恐ろしい記憶や、鬱やいじめに苦しんだ青春期の話なんかを聞いていただいた。そういうことを、聞いてほしくなる人だった。あとから知ったけれど、村崎さんも凄絶ないじめを体験している。彼はそういう弱い立場の人に寄り添う視線を持っている人だった。また、人を虐めて平気でいたりする人たちの卑劣さや卑怯さに対する激しい怒りを持っていた。それが彼のことを「鬼畜系」にしたのだと思う。

彼が演じる「卑劣で卑怯な」電波系ライターの姿はそのまま、彼が批判したい人々への痛烈な批判になっている。その人たちの卑劣な姿を演じることで。「おい、気づけよ。俺はお前なんだよ。笑ったり、忌々しそうに見ているけど、俺はお前の心の中を映しているんだよ」と言っていたと思う。

今彼が生きていたとしたら、加計・森友問題などには、どれだけの名著が生まれたこと

だろうか。今の政治や官僚世界は、子供たちに到底見せられない、見せるべきでない卑怯なふるまいばかりをメディアで垂れ流している。村崎さんは、そういう日本に対して、20年前の当時からすでに、レトリックの効いた、痛烈な批評をしていたわけだ。

私は初めて会った時、村崎さん（本当の名前は黒田さん）の前で、身の上話をしながら、涙を流したと思う。そのときに森園さんがお使いから帰られて「どしたの？」と聞いてきた。村崎さんは「家の話とかを聞いていたんだよ。ほら、君と一緒だよ、彼女も色々あったみたいで」といい、森園さんもすぐ理解してくれて、「ああ、そうよね。でもだからあたしたちは何か表現したいパワーを身に着けたし、結局のとこ今思い通りに生きているし、オッケーよ。アタシも親とはまるでだめだから！」と。森園さんは言ってくれた。そんなところも、私たちの距離を近づけてくれたのだと思う。私たちは傷を抱えた子供の魂のままに大人になった、「アンファン・テリブル」だった。

「子供の時にかなわなかったことを、大人になったんだからみんな叶えてやろう」と、そして、「私たちを苛めたり、今世の中で卑怯なことをしている大人たちをやっつけてしまう」ため、奴らへの復讐のためにも書き続けるんだという、そういう部分が共通していたと思う。

その時村崎さんが私に紹介してくれたのは「異形の愛」（キャサリン・ダン著　河出書房新社）。その後映画にもなったようだけれど、あるフリークスの巡業サーカスの一家の

物語で、子供が奇形なほど、客が入るからということで、親がありとあらゆる方法で子供を奇形にしようとし、その奇形の子供たちをとことん愛し抜くという物語。色んな読み方ができる作品で、村崎さんらしいセレクトだった。

要するに村崎さんは、「どんな子供でも愛されていいんだ」と言いたかったんだと思う。でも実際は「普通」でないといじめられてしまうのが世の中だ。特に日本において。でも、親の血筋が総理大臣だとか、小さい頃から名門の学校にいるとか、ブランド物を一杯持っているとか、そんなことで自意識を増長させている人たちの心こそよっぽどフリークスではないのか。

正直な役人が一人自殺してしまい、その奥さんが「再調査を」と命がけで告発しても、国家権力はそれをなかったものにしてしまう、私たちも、そんなニュースをただ見て文句を言ったり「気の毒」というだけで、デモ一つするわけではない。悪事を見て見逃しているのは、私たちも同じくらい罪深い。

村崎さんが生きていらしたら、どれだけ舌鋒鋭く私たちを、この世の中を批判してくれたろうか。そんなことを思うと、彼の志を何らかの形で私たちも引き継いでいかなくてはと思わずにいられない。

でも、何よりも私にとって村崎さんは、あの森園みるくさんを、「ありえないくらい幸せにした素晴らしい男の人」として記憶されている。私たちのような、お○んこ丸出しで本音を語り、男に向かって、血を流しているむき出しの心を「抱いて」と迫る。そんな怖くて飢えた女の代表格でもあり、また最も美しく才能に溢れた森園みるくさんという怪物を抱き留め、癒し、幸福にした。そんな偉大な男が村崎さんこと、黒田さんなのだ。

私だって彼の前で泣いてしまった。彼は、ゴルゴンのような女の首を切るのでなく、癒し、もっと素直だった娘の姿に戻してくれる魔法使いだったのだ。ペルセウスのような逞しさと強さを持っていたけれど、神話の中で例えれば、ディオニュソスのような人だった。

彼の前で女たちは陶然となり、その毒気（酒）に酔って自己を開放することができる……。そう、彼の言葉は刃物のように私たちの心に突き刺さる。さらにその刃物には毒が塗られていて、その毒が私たちの身体に回ると、私たちは躍りだしてしまうのだ。踊りながらあるものは過去の色んな楔から解放され、あるいは己の浅ましいさを恥じ。卑劣なものは恥ずかしさのあまり崖から身を投げてしまう。でもまた生き直せるよう導いてくれる……そんな死と再生を司る力を、彼と彼の言葉はもっていたのだと思う。

まさかの突然の暴力に襲われ、彼は殺されてしまった。ディオニュソスさながらの影響

力で人々を陶酔させ、躍らせた彼は、その言葉の力で魔法にかかったかのような読者の一人に殺されてしまったのだ。まさにそれ自体が神話のような結末。

でも、そのあとの私たちの悲しみは言葉にすることはできない。

村崎さん……すなわち黒田さんの素顔を知る人で彼を悪く言う人など一人もいなかった。彼はそれほどに優しい人だった。森園さんはそのあと何年も人前に出ることができなかった。私たちも、彼女の張り裂けた心を思い、声をかけることができなかった。あれほどに愛し合い求めあった運命の二人。やっと魂を分かち合う喜びを知り、女性として男性として互いに本当に幸福を与えあっていた、あんな理想的なカップルを私たちは他に知らない、その『半身』を奪われてしまった森園さんに、私たちは何もすることができなかった。

しかし、10年以上の沈黙を経て、森園さんは再び立ち上がっている。漫画も描き始め、村崎さんの記念館を作り、その著作の再販などに力を尽くしている。今なお変わらない愛が彼女を支えているのだと思う。私は確信する。村崎百郎は、灰の中から再生したディオニュソスのごとく、いずれまた私たちの前に姿を現すだろう。彼の活動や著作。その活動は、永遠に忘れられることなく、引き継がれなくてはいけない。ずっと秘儀として継承されてきたディオニュソス信仰のように。

私たちは心の中に、だれもが闇を持っている。それを引きずり出し、瞠目してみなくてはだめなのだ。見つめて、それを食らう、あるいはコントロールする意思を身につけなくては、鬼畜道を生きるしかない。自分の心の中にある暗黒を「ない」ものとして隠すほどに、私たちの世界では卑劣な振る舞いが跋扈する百鬼夜行の闇となる。

それではならぬと彼は警鐘を鳴らし続けたのだ。踊り狂え、尻を出し、卑劣なるふるまいを、性的なる欲望のままにそれを吐き出してしまえと。さもなくば自分の臓物を引きずり出すようにして己の卑劣さと向き合えと。

私たちはこれからも彼の言葉から陶酔と自己批判と解放の恩恵を受け続けよう。そしてこの世界を彼が見たようにして、ごみ袋を被り、そこに空けた穴から、暗闇から見つめてみよう。そこから見える私たちの住む日常のなんと歪（いびつ）なことだろう。

「不正」を決して許さず、卑劣なる権力者におもねることなく、私たちは暗闇を生きていこう。異形の弱者であり続けよう。

其れが、私たちの誇りだ。村崎百郎の説いた「鬼畜系」の裏街道を歩き、表通りで裸の王様とパレードをする人々を笑おう。

世界がどんなに歪んでいても、自由で愛に溢れた世界は私たちのものだ。

それは、世間の光とは反対側の闇の中にしかないけれど、その中では私たちは何も持た

なくていい、贅沢をするために嘘をつき、友達を売ったりしなくていい。当たり前に、純粋に生きる道を、彼は「ゴミ漁り」という手法を通して説いたのだ！　まさに、天国～PARADIS～に住む方法を。

村崎百郎とその精神の継承者たちに、そして我々の女王、森園みるく氏に祝杯の盃を捧げたいと私は思う。彼の説いた暗黒の世界は不滅であり、今も異形なる愛に満ち溢れているのだと。それを継承する夜の女王、森園みるく氏にも栄誉と感謝の盃を皆で捧げよう。彼女は彼を復活させる。彼の人生と活動の証を広め続ける。

私も又、その一人に加わることが出来たらと、願わずにいられない。

そして、今回こうして私に、村崎さんについて書かせてくれた森園みるくさんに、心からの感謝を差し上げ、筆をおきます。

２０２０年9月18日

GENET（AUTO-MODリーダー）

「鬼畜電波大魔神村崎百郎復活　今電波の時代に降臨せり」

村崎百郎氏とは過去一度電話で話した事がある。僕と村崎さんとのコンタクトは、後にも先にもその一度だけの接触で終わってしまった。しかも其れは、奥様の森園みるくさんに電話した時、至極普通に、しかしとても丁寧に『ちょっとお待ち下さい』と電話をとりついで頂いた唯其れだけの事であった……。僕はその時森園さんの旦那様が村崎氏であるとは知らず、まあ森園さんの同居人が繋いでくれた位にしか捉えていなかった……あの時僕と村崎氏とは、交信が出来ていたのだろうか……。残念ながらその時僕には、なにも聴こえて来なかった……。亡くなられた後、森園さんから、村崎氏が僕に熱烈なシンパシーを持ち、レコードやCDを全部購入して下さったり、ライブにも何度も足を運んで下さって居たとの事を聞き、あの村崎百郎が……、と驚き、同時にそこに出会いが無かった事に、無念さえも感じた。

電波系、鬼畜系、そんな言葉昔流行ったなと思いつつ、実は今、村崎氏の事を思うに、彼って本当に電波を受けてたんじゃないかなと思える様になって来ている。彼の三角頭巾に一つ目のスタイルは、実は第3の目を開化させての電波を感じ取る手段だったのでは無いか……。僕は元来人間は縄文の日本やウバイドの地で宇宙からの意志を第3の目（意識の目）で受けていたと考えている。当時は人類も生まれたばかりで、その思考も宇宙又は神に準ずる至極ピュアなものであった筈だ。お互いが反応し合い、共鳴し、それは真理に近い物だった筈。其れが当時の人類のコミュニケーションであり、文化そのものだった筈だ……。本来神に作られし者達はそんなチャンネルは持っていた筈だ。しかし今そんな

チャンネル旦那様が村崎氏であるとは知らず、まあ森園さんの同居人が繋いでくれた位にしか捉えていなかった…あの時僕と村崎氏とは、交信が出来ていたのだろうか…。残念ながらその時僕には、なにも聴こえて来なかった…。亡くなられた後、森園さんから、村崎氏が僕に熱烈なシンパシーを持ち、レコードやCDを全部購入して下さったり、ライブにも何度も足を運んで下さって居たとの事を聞き、あの村崎百郎が…、と驚き、同時にそこに出会いが無かった事に、無念さえも感じた。

電波系、鬼畜系、そんな言葉昔流行ったなと思いつつ、実は今、村崎氏の事を思うに、彼って本当に電波を受けてたんじゃないかなと思える様になって来ている。彼の三角頭巾に一つ目のスタイルは、実は第3の目を開化させての電波を感じ取る手段だったのでは無いか…。僕は元来人間は縄文の日本やウバイドの地で宇宙からの意志を第3の目（意識の目）で受けていたと考えている。当時は人類も生まれたばかりで、その思考も宇宙又は神に準ずる至極ピュアなものであった筈だ。お互いが反応し合い、共鳴し、それは真理に近い物だった筈。其れが当時の人類のコミュニケーションであり、文化そのものだった筈だ…。本来神に作られし者達はそんなチャンネルは持っていた筈だ。しかし今そんなチャンネルを持った人間が現代の汚物思考の混沌に放り出された時、その無垢なる純粋さは、一瞬にして崩壊し、その全ては邪悪なる闇へと堕ちるしかない。

つまり、やられてしまったって事でしょう。村崎さん、持ってたんですよ。村崎さん、だから、やっぱりやられちゃったんですよ。村崎氏が盛んに自らをキ◯ガイと呼んで居た

のは、あの20世期末の日本の狂○に耐えられなくなっての足掻きだったのか……。もしくは本当に他の人間達とは、その内に流れる気が違って居たのか、いずれにしろ、村崎氏はきっとあの一つ目三角頭巾に、まさに気が違う程の暴力的自我を閉じ込め、その覆面で封じた古代の○気と憎悪を、あの暗黒の深淵の象徴の様な一つ目の奥から、彼を排除した社会に、電波と言う武器を持ち、最大限に反撃をして居たのかも知れない。

今時代はコロナ騒ぎに端を発し、グレートリセットとばかりにＡＩ社会を目指し、金融、経済、ライフスタイル、社会意識、社会構造、管理体制と何もかも変えてしまう正に大激変の真っ只中にある。その中で気をつけ無くてはならないのは、今回の世界的コロナ渦の裏でワクチン摂取の義務がマトリックス新時代への生存権を得る為の通過儀礼、デストピアへの踏み絵として用意された事だ。このワクチンなる物の得体の知れなさと言ったら半端ではなく、水銀やアルミニウム等から始まり、数知れぬ胡散臭い物質が多数混入されている。そして、今時代は５Ｇと言う電波を巡り、中国とアメリカは隠れた戦争迄起こしている。そしてこれは電波戦争でも有り、新時代の覇権戦争でさえある。

５Ｇは金属に激しく関与できる。当然身体の中の金属にも激しく関与する事が出来るのだが、その事は殆ど言われる事は無い。又呼吸器系の障害を引き起こす事も出来るとも言われている。問題はそのワクチンに更にマイクロチップ迄入れられたりして、そこに５Ｇで電波操作されたらどうなるか……。

結局、電波なんです。

今、電波魔神村崎百郎が生きてたら、こんな今をどう見るのか、そして今彼は、どんな電波を受けて居るのか、切実に教えて貰いたい。いや今、この5Gの時代だからこそ、電波大魔神村崎百郎が必要なんですよ。今正体を晒そうとするマトリックス社会、真実のディストピアの出現、鬼畜電波魔神村崎百郎は復活しなくてはならないのです。しかし、そんな彼は死んでしまった。彼は自宅を訪れたキ◯ガイの青年に刺殺された。

驚く事に彼は自分のその死を予言して居た。信じられない事だが、事其れが村崎百郎ならば、有り得る事となってくる。しかも、其れから察するに、彼は自分の死さえも、操作して居た気さえしてくる。村崎さんは自らへの殺意を仕掛けたんじゃないかな……。電波は伝わる奴には伝わるものだ。きっと村崎さんには古の邪悪なる血が流れて居たんだろう。

ふと思うに、彼は自分を生贄にしたんじゃないかな……。神は試行錯誤の中、アダムとイブと、其れを誑かしたヘビも造っていたんですよ。アダムとイブの血統が在れば、ヘビの血統もあった筈。ひょっとしたら、村崎氏はレプテリアンの血を引いて居たのかも知れない……。故に、彼は自らを鬼畜と言い放って居たのかも知れない。村崎百郎が放つ電波の時代は今なのだ。

鬼畜電波魔神村崎百郎はもう直ぐ復活する。いや、きっとその為に彼は死んだんのだ。

『ミズの中からさざ波を立てて移動しながら浮かび上がる十字架のイエス像』　邪悪な

る復活はもう、始まってるのかも知れない……。

須川善行（編集者／元「ユリイカ」編集長）

村崎百郎が亡くなって10年。時の経つことの早さには驚かされるほかないが、それ以上に世間の常識の変わり身の早さには唖然とさせられる。しかし、いま読んでも村崎の挑発力がまったく衰えていないことにはともかくも頭が下がる。村崎は自分の中を掘り抜いて、ある普遍的なあられもなさに到達したのだ。人はみなこの恥部を抱いたまま、生きていかなくてはならない。村崎百郎という恥部を。

砂（漫画家）

「防疫のない世界から」

家が近所だったので、生前の村崎さんとはむしろ街角でばったり、古本屋やカフェなどでお会いすることが多かった。鬼畜の紫頭巾ではない村崎さん、だがそれを素顔とは言うまい。それも村崎さんの仮面であったはずだ、私たちと同じように。そんな村崎さんはいつもニコニコして優しかった。うるせえ！　の人である。他者の声がノイズとして脳髄に割り込んで来る人である。仮面というほかない。昨日の夜はうるせえ！　になって大変だったのよ、と言う森園みるくさんに、村崎さんはパソコンでいえばファイアウォールが、セキュリティソフトが無い人だものね、と笑い話にしたことがある。帰宅した森園さ

んからそのパソコンのたとえを聞いた村崎さんも笑っていたそうだ。そう、ウイルスにさらされるがままのパソコン、他者の声のノイズにまみれた脳髄、今なら少しその感じがわかる気がする。このインターネットの、ＳＮＳ以後の世界なら。心温まる話として胸糞悪い話がバズって流れ着き、可愛い動物画像は無断転載する業者のもので、世界中のすべての悲惨に心を寄せよと善意は搾り上げ、右を見ても左を見ても薄汚い憎悪と嘲笑にまみれている。うるせえ！　なるほどこれはたしかにうるせえであるし、自然と心もささくれて来ようものだ。私もカッとなって怒りにまかせてつぶやいてみようか、そして憎悪と嘲笑で憂さを晴らす右や左の紳士淑女の複製になるのだ……。だが憎悪と嘲笑、その言葉は同じながらも、それらは村崎百郎的憎悪と嘲笑からなんと遠いことか！　まるで似ていない。村崎さんはいつもニコニコしていて優しかった。素顔は優しい人だった、などという話ではない。それは仮面だ、そうなろうと化けるものだ。うるさい他者の声のノイズにまみれながらそれに感染せず、逆に人はなおいかにして優しくなれるか。それはまた、他者の憎悪と嘲笑を復唱するデッドコピーにならず、いかにして自分だけの憎悪と嘲笑を語る者になれるかと表裏一体のものだろう。私たちより少し先に、村崎さんはどうしたらそうなれるのかを試して生きていたのだ。

ソワレ（シャンソン歌手）

親愛なる森園みるくさんの最愛のお方をご紹介戴いたのは21世紀がはじまって４年程過

ぎた頃。
お昼のPARCO劇場エレベーター前。黒い出で立ちと赤い唇とサングラス。二つの寄り添う影。
振り返ると忘れられない瞬間というのはそう多くは浮かばないものです。
公園通りを通るたびにあの日のことが蘇るのは村崎百郎さんの存在感とその個性が鮮明に刻まれているからでしょう。
人の心とはそういうもの。それぞれの村崎さんをもう一度咀嚼出来るだなんて素敵！
永久なる鬼畜な新刊に乾杯！

◆タ行

釣崎清隆（死体写真家）

私、釣崎清隆は死体写真家である。「鬼畜系」である。いまだに「鬼畜系」を名乗って活動を続けている唯一の現役アーチストである。あの文芸運動において生き残った最後の「鬼畜系」を自任している。そして、あれから二十年、当時は時代の恩恵にあずかっておきながら、それを恥じるかのように「鬼畜系」の看板を下げ、過去を抹消し、現在素知らぬ顔をして蔓延するポリコレに阿るあまたの悪趣味系文化人たちとは一線を画し、「鬼畜系」を今まさに声高に叫ぶ必要を感じている。

先日、バイト先で若者にこう話しかけられた。「釣崎さんて、鬼畜カメラマンなんですか？」私のことをスマホで検索したようだ。「『鬼畜』カメラマンて言い方はないでしょう。『鬼畜系』カメラマンです」

村崎さんの本意とは異なるかもしれないが、私なりの理念をもって「鬼畜系」に殉死する覚悟である。

◆ナ行

流水りんこ（漫画家）

村崎先生のこと、今更ではありますが心よりのお悔やみを申し上げます。

もう10回忌なのですか。時の流れの速さに驚きます。

また村崎先生の作品の刊行、素晴らしいことだと思っております。

作家として作品が残っていくことは夢のようなことです。

私が村崎先生とご縁があったのは1度だけ、『赤ちゃん泥棒』の取材で、うちまでいらしてくださったことがあったのみでして……。

村崎先生の素顔をそれまで私は存じなかったもので正直驚きましたが、本当に穏やかで物言いも優しくて、というのを覚えています。

あれはうちの子供達を怯えさせないように溢れんばかりに気遣いをされていたのだと思

います。

そのせいで、最後にはうちの母まで村崎先生に懐いてしまっておりました。

村崎先生は姿のインパクトと心遣いがこれでもかというくらい違って、思い出すたびに思わず　笑顔になってしまうと言ったら失礼でしょうか。

本当に忘れ得ぬいい思い出です。

二村ヒトシ（AV監督）

「こぎれいな明るい場所」

いつごろだったか、どこだったのか忘れてしまったのだが、こぎれいなラウンジみたいな明るい場所で、ゆったりしたソファーに腰掛けて、人間が3人で話をしていた記憶があります。

3人のうちの1人が、まちがいなく村崎百郎さんだった。もう1人は、たしか福居ショウジン監督だったように思うのだが、福居監督ともその後ずっとお目にかかっていないので確かめられていません。

ホテルのロビーのような場所だったのかもしれない。昼間だった。あたりは清潔な感じだったような気がする。

村崎さんは、覆面をかぶっていなかった。

何の話をしたのかもまったく覚えていないのだが、村崎さんは話しながら、ご自分の髪の毛に手をつっこんで、爪を立ててひっ掻きまわし、ちぎれた髪の毛や剥落したふけがある程度の量、爪や指のあいだにたまると、それを撒き散らすのではなく、周囲の床のタイルだったか絨毯だったかに優しく置くように、ふわり、ふわりと落としていた。

ふけの粉がゆっくり落ちていった。

村崎さんが我々に「こうしてDNAを残していくようにしているのです」と静かにおっしゃったような気がするのだが、もしかしたら記憶ちがいで、村崎さんのしぐさを見た福居監督がそう評したのだったかもしれない。

いったいどうしてその3人でその場所にいたのか、さっぱりわからない。大きな窓から外の光が差しこんでいた。

◆ハ行

比嘉健二（元「GON!」編集長）

エ、本当にそこのゴミ漁るのかよ、まったく頼むにはいいけど、万が一何かあったら責任とってくれる、わけないよな。ホント、あの編集長は顔色一つ変えず、淡々とこういうきつい依頼してくるからまったくとらえどころのないゲスな野郎だぜ。でも、ま、いいか。女子大の寮のゴミなんて野郎なら誰だって覗き見たいよな。

清楚な顔して汚い汚物まみれのタンポンやらナプキンもあるに違いないし、マ◯汁まみ

れのパンティだって今夜あたりは収集できそうな予感がするぜ。おまけにもしかしたら、男をひっそり連れ込んでよがりまくった証のザ○メンたっぷりのコンド○ムもゴロゴロ出てくるに違いない。

そんな連れ込む男のいない寂しいメスどもが使いまくったぶっとい大根やニンジンの残骸も収集できそうだ。そう考えたら何やらえらく興奮してきたぜ。今夜は同行するあの雌猫の編集者をゴミ収集場で押し倒しても俺のせいじゃないぞ。あの雌猫いい乳してるもんな。そういえばあの雌猫が担当になる時、編集長は乳揉みは自由にどうぞって言ってたもんな。今夜がその夜だぜ。

では今夜依頼どうり、ミッション系の女子大寮のゴミを勝手に収集だ。帰りに汚物まみれのパンティを被ってる俺が目に浮かぶぜ。

これは1996年『GON!』8月号の連載「村崎百郎の勝手に清掃局」の連載11回目「ミッション系大学女子大寮のゴミ漁り」当日を俺が勝手に妄想したものだ。思えばこんなゲスで下品な企画を4年間も続けたものだ。おまけに都内中の汚物をかってに回収したのをわざわざカラーページで読者に提供してたんだから、よくよくどうしょうもない雑誌だ。今なら関係者一同ブタ箱行きだろう。連載当初はエリアとか地域斬りしていたが後半から俺も村崎さんも頭が完璧に腐りかけ、「修道院のゴミ」だとか「風俗嬢のゴミ」だとか果ては「クリスマスイブのラブホのゴミ」なんて次第に野郎のゲスな願望と妄想が次第

にエスカレートしていった。
おまけに、おメガネにかなった女性スタッフは軒並みかってに生ゴミを回収させられその恥を紙面にさらされもした。
返す返すもひどい雑誌だ。こんな最低のクズ雑誌だから適当に手を抜けばいい企画なのに村崎さんはホントガチで取り組んでくれたのが素晴らしい。こういうゲス雑誌こそ真剣に取る組まないと恥ずかしいだけだ。
そういう意味でも『GON!』イコール〝ゴミ漁りの雑誌〟と連想する読者も多数いたのはこの上なく誇りに思ってる。
ありがとう村崎さん。合掌

福居ショウジン（映画監督／演奏動画（VJ）／TVBARけむり（マスター））

村崎百郎氏と初めて出会ったのはイベント打ち合わせで新宿の喫茶店だった。
事前に『鬼畜のススメ』を渡されていて読むのになんか嫌な抵抗感を感じていたのを覚えている。パラパラとページを捲るんだけど頭に入って来ない。これホンマの変態が書いたシャレにならん本やろ。俺が人の事を変態とか言えるポジションに居ない事は分かっている筈なのにこの触れたく無い感が甚だしい『鬼畜のススメ』、初日は全く読むに至らなかった。翌日思いっきり酒を飲んで確かマイヤーズラムをお湯割にして飲んだ様に記憶しているけどもしかしたら二階堂のお湯割りかもしれない。ともかくかなりのハイペースで

一本飲みながら再びパラパラと捲り目に飛び込んでくるワードと言うか下世話な単語が生々しくというよりナマ臭く生理的嫌悪感に満ち溢れながらフッと気がつくと前に戻って読み返し更に先に読み進めまた前に戻って読み返すを繰り返していたのだ。一文字でも理解出来ないと前に戻って読み返しているうちに物凄い集中力が湧いてきて限界に来ていた吐き気や生理的嫌悪感がむしろ淀みのない勃○力へと移行していき吐き気と快感が表裏一体となってどんどん読み進めていくスピードが加速し一言一句が嘘みたいにスポンジ状態の脳に吸収されていく快感が今でも忘れられないでいる。これ体感型の今までに無い探偵小説的マニュアルやないか！　もしかしたら今後ＣＩＡやＭＩ６、モサドがバイブルにするかもしれない。いやもしかしたら百郎さんが諜報活動的な方法論を徹底的に研究した結果なのか？　それにしても読み終わったこの感触は初めての体感だ。酔いは覚め頭の中は実にクリアーでもう一度読み始める。再びあの快感を体感する為だ。

スタッフと二人で待ち合わせの30分前に到着し多分、いや絶対マスク（覆面）を装着して来るから目立たない一番奥の窓側席を確保して百郎氏を待つ。珈琲よりビールやろな。いやいや絶対にバーボンや。ツマミどないしょ？　チーズとかソーセージの盛り合わせかな。もしかしたら腹減っててなんか食うかもしれんな。あれこれ考えながらどんな怪物が来るんやろと身構えながら数日前から鍛えていた筋肉を確認しつつ益々テンションが高まって来たタイミングで目前に物凄い長髪で黒いピチピチのＴシャツ（この時はまだチビＴは発売されていない）のレスラー的な感じの人物が現れる。想像していた覆面姿とは全

然違うが発する熱量が物凄く一瞬で百郎さんやと直感し次の瞬間にはお互いに挨拶を交わしこちらは直ぐにハイテンションな状態で色んな事を凄まじい速度で喋っていた。初めて会ってこんな状態（しかもノンアルコール）になったのはなかなか無い事で何度か客観的に抵抗しながらもグイグイと百郎ワールドにそのまま引き込まれていった。この人はプロデューサー的な人なのか？　最初に『鬼畜のススメ』を手にした時に感じたキ◯ガイなのか？　それとも変態なのか？　どれも違っていた。全部の要素を含んでいるようでこれもまた違う。ただ話が進行していくうちに脚本家と監督の次回作の企画会議的な場に展開していく。トークイベントの打ち合わせだった筈がこんな感じだ。百郎氏の壮大なSFプランはこれまで読んで来たどんなSF小説よりも刺激的で斬新で今までに無い全く新しい感触のものだった。長い髪の毛を手櫛ですきながら指に絡んだ髪の毛を床にハラハラと撒き散らして……。はたして髪の毛の意味するものとは？　この光景は一生脳裏に焼き付いて離れないだろう。百郎氏の大切なアイディアなのでこれ以上は語らないけどともかくその時浴びた感触を今でも何かのタイミングで思い出す。『鬼畜のススメ』を書き上げた凄まじい観察力で創造するSFプランはリアリティを超え現代（２０２０年）を間違いなく予測していた。予知と言った方が的確かもしれない。アメリカの技術は10年先を走っていて一般に普及されるのは10年前の技術だという認識が巷で語られることが多いが、実は遥か50年先を爆進していてSF的想像力を持ってないと恐らく受け止められないレベルが展開しているらしい。もし生きていたらの〝もし〟は実にナンセンスかもしれないが、百郎さ

んなら確実にテクノロジーを操り最先端の場で次なる時代を先導していたに違いない。時代が漸く百郎さんに追い付いたんだと思う。しかも百郎さんは更に先に進みまた遥か先をノシノシと歩み進んでいるに違いない。

丁度この時期は森園みるく氏原作の映画化企画を進めていたタイミングで、たまたまなのか、それとも必然なのか、そうなる運命だったのか、両氏からほぼ同時に〝逢いたい〟と言うリクエストを受けお二人を引き合わせる事になる。今これを書きながら改めて確信している。これは運命だったんだ。そしてこの時代に10年という時を経て改めて村崎百郎氏の事を脳内で展開させるのは、これもまた運命だったんだ。

◆マ行

三浦悦子（造形作家）

みるくさんの所に私の人形が居ます。村崎さんがご生前のときのお話をさせて頂きます。

村崎さんからご連絡がありご自分が大切にされている本を私にお渡ししたいということでした。今思うと村崎さんはみるくさんが好きな物や人を大切にされているからでしょう。

私はウルトラマンの「この人に近づいちゃダメセンサー」を持っています。なんと村崎さんとお会いしたときに光りました。折角の本も貰うのが怖かったのです。しかも題名が

［黒魔術］……何度も読み返しているであろう本の形跡……。
しかし人間こうなると逆に興味が湧くものです。
結局読みました。本は村崎さんのおっしゃるように変に宗教的だったり呪いなどではなく論理的ですんなりと楽しく読ませて頂きました。読み終わった頃には怖さもなくなり、なるほど！　村崎さんってこおいう方なんだなと納得した気になりました。ごめんなさい！　私のウルトラマンセンサーもあてになりません。

ピュアなお心の村崎さんどうかお静かにお眠り下さい。あなたの生きた形跡は消えることなく皆さん深く感じている事でしょう。

目黒子（江古田・フライングティーポット洞主）

「村崎百郎さんと、プログレとか、江古田とか」
村崎百郎さんは、私が江古田でプログレ喫茶フライングティーポットを開店した１９９７年の６月頃から姿を見せるようになりました。
ピンクフロイドやサードイヤーバンド、ロバート・ワイアットなどがお気に入りだったですかね。
そう言えば「プログレは寒いところの方が良く聴かれるんだよ」みたいな事を言ってま

した。
彼も私も北海道出身なのですが、寒冷の地方ほど引きこもって聴くような音楽（プログレ）に夢中になるんだと言うことでしょう。
まぁ、言い得て妙と。
ロバート・ワイアットの新譜の話をしたり。
ロジャー・ウォータースのライブ会場でバッタリ。
クラウス・シュルツェのライブにお誘いしたり。

私は、神保町の大型書店で働いていたことが有り、彼の文章も読んでいました。
同僚達とも彼の下品でユニークな文章が話題になったりもしていましたね。
後で、ペヨトル工房に勤めていたと知ったのですが、
担当していた音楽・芸能・演劇・映画の棚にはペヨトル工房の本も多く入れていて、
ちょっとした縁が有るものだなぁ、などと思いましたよ。

一緒に来店された方に村崎さんを紹介された時にも、なんとなく驚きは無かったという
か、
何故か身近なところに居ても不思議は無いような気がしたのです。
これが、電波の導きというヤツでしょうかね？

それからも、何くれと無く文章でフライングティーポットを紹介してくれました。
イベントに出演者として参加してくれたことも何度かありましたね。
そして、森園みるくさんの漫画に登場することもしばしば。
村崎さんの文章を読んで、訪れてくれた方も少なくありませんでした。
ノイズイベントを行ってくれるようになった方も居るくらいです。

以前は近隣の大学生の中に村崎百郎ファンも多かったですね。
常連大学生が「中卒、工員でこんな面白い文章を書くなんて凄いです」なんて言うものですから、
「欺されるなよ、北海道生まれ、明大卒、出版社勤務経験者だぞ」と業務妨害的暴露。
「えぇ～がっかりですよ」なんて言うので「何言ってるの、鬼畜なんだから、そのくらいの嘘なんてへっちゃらなんだよ」と、
「あっ、ホントそうです。やっぱ凄いですね」だって。
ははは、大学生、チョロいぞ。

そして、何と意外にも女性ファンも少なくなかったのです。
今でもフライングティーポットの本棚に入れてある村崎本を読み始めた女性客が、興味

を持って村崎さんについてたずねて来ることもあるくらいです。

江古田の町中でも見かけると挨拶を交わしたりしてましたが、古本屋で棚を物色している姿が真剣そのもので、何か気後れして声をかけられなかったことも度々ありました。

村崎さんが亡くなってから後、世界中に起こった災害、事件、政変などなどについて、今こそ鬼畜力を全開にした彼の文章が読みたかったと思えますよ。もっと、無理にでも色々と話をしておけば良かったとわけですが、これぱかりは……。

村崎さん、死んでる場合じゃ無いですよホントに。Wish You Were Here ですよ。

◆ヤ行

安田理央（フリーライター／アダルトメディア研究家）

村崎さんと木村重樹さんが各界クリエイターや業界関係者の赤ちゃんを見に行くという『赤ちゃん泥棒』という『スタジオボイス』誌の連載があり、そこに当時生後4ヶ月の娘と僕が取材されたことがあった。

僕の事務所に入ってきた時、村崎さんは例のマスクを被ったままで、結局最後までマスクは取らないまま帰っていった。僕は「ああ、徹底して素顔は見せない人なのだな」と感心した。

それからしばらくして、娘をベビーカーに乗せて散歩していたら、長髪でヒゲを生やした悪役プロレスラーのような男がいきなりニコニコしながら「わぁ、〇〇ちゃーん、ベロベロバー」と娘の名前を呼びながら近づいてきた。もちろん僕は「うわぁ、やべえ奴！」と身構えたが、それが村崎さんであった。

実は自宅がすごく近所だったのだ。でも、素顔知らないんだから、わかんねぇよ！　驚くよ！

結局、実際に村崎さんと顔を合わせたのはその2回だけだったが、近所ともあって行きつけの店が重なっていたりして、話はよく聞いたりしていた。だから、あの凶報を知った時も、あまりに身近でゾッとした。

あれから、もう十年という時間が過ぎたのか。僕も隣町に引っ越したし、『赤ちゃん泥棒』で取材された娘も、もうとっくに成人している。記事の中で僕は、若いうちにさっさと結婚して子供をボコボコ産んじゃうような子になってくれればいいなぁ、と話していたが、残念ながら孫の顔は当分見られそうにない様子だ。これで孫が生まれてれば、無類の赤ちゃん好きだった村崎さんの墓に見せに行ったところなんだけど。

湯山玲子（著述家／プロデューサー）

　ＳＮＳ以前、まだ世間がオモテの建前で動いていたときに『鬼畜のススメ』は、きちんと「人間なんて所詮ゲス」という影を示して、世界は健全だった。そして、現在はご存じの通り鬼畜がその意識もなく跋扈する時代。村崎百郎が今、生きていたならば、何を表現しただろうか。

萬眞理子（編集者／株式会社シュークリーム代表）

「森園さんと村崎さんのこと」

　森園さんと最初にお会いしたのは１９８６年の夏前くらい、当時は大人の女性向けのレディス漫画雑誌が創刊花盛りで、まだ少女漫画を描いていた森園さんに、今の『フィールヤング』の前身『微笑フィール』での執筆を依頼したのが始まりです。

　時はバブルの真っ盛り、レディス漫画も全盛期を迎え、森園さんのオシャレな絵柄と、余計なものを一切省いたスピーディな作風、女性主体の恋愛&性の描写が時代にマッチして売れに売れ、レディスの女王と呼ばれるまでになって、一世を風靡していたのです。

　そんな女王様の素顔はとても気さくで、とにかく元気、美味しいものとお酒と男が大好きで、そして占いやオカルトも大好きなのでした。

　で、その頃、森園さんに頼まれて、とある霊能者の先生をご紹介したのです。その先生はかの『うしろの百太郎』に登場する船越先生のモデルとなった方で（漫画では男性です

が、実際には女性です～）、当時離婚したあと彼氏ともうまくいかなくなっていた森園さんは、一も二もなく将来の結婚について霊視してもらったのでした。
「あなたはね、なんかこう大柄な……プロレスラーみたいな男と結婚するよ」
先生は森園さんの背後をじっと見つめながら、どう言えば良いかなぁ？という感じで「プロレスラーみたいな」と表現されたのでした。後になって、「あれは村崎さんの事だったんだね～！」と、二人で言い合ったものです。
先生はこうも仰いました。
「あなたの魂はとても若いのね。だから今はなんでも面白くて興味津々で、怖いもの知らずで首を突っ込んでは痛い目もみるけど、彼と結婚すると落ち着いてね、素晴らしい成長ができて、理想の女性になれるかもしれないよ」。
ちなみに「魂が若い」というのは、転生した経験が少ないという意味です（笑）。
（理想の女性ねぇ……締切守んないわ、掃除はしないわ、1日が40時間くらいでぐるぐる回っていて一旦寝ると起きられない森園さんが理想の女性になれる結婚って……そりゃそうなったら素晴らしいでしょうけどね……）。口には出さずにそんな失礼なことを思っていた私でしたm(_ _)m
それから10年ほどの月日が流れ、本当にプロレスラーのような男性が現れ、あれよあれよという間にお付き合いを始め、一緒に住む事となり、そしてご結婚！（といっても、婚

姻届を出すだけのシンプルなものでしたが）されたのでした。
結婚届の証人欄を頼まれて、私の旦那や息子も一緒にみんなで食事に行ったのですが、たぶんその時が村崎さんとゆっくりお話した最初かな？　と思います。みなもと太郎の『風雲児たち』を熱く語ってくれて、その後コミックスを購入してみたら家族でハマってしまい、今でも新刊を楽しみに読んでいます。
著作や業界内でのイメージはともかく、私はいつも優しそうなニコニコした村崎さんしか知りません。私には息子が二人いるのですが、ある日偶然近所の公園で村崎さんと出会い、少し遊んでもらい、その風貌と実際には優しい人柄から、それ以来息子たちは村崎さんのことを「ハグリッドのおじさん」と呼んでいたくらいです。こまめでお料理好きで猫も大好き！　鉢植えの世話も上手で、以来森園邸の観葉植物たちは枯れなくなりました（笑）。住んでいた江古田の商店街を、森園さんと村崎さん二人で仲良く自転車に乗って、移動する姿もよく見かけたものです。何しろあの巨体の村崎さんと、度付きサングラスをかけた個性的なファッションの森園さんが、ママチャリで並んで移動するのですから目立ちます～！　かなり遠くからでもそれとわかり、とても微笑ましい光景でした（たぶん当時の江古田の住人は、相当な数の人が彼ら二人を印象深く覚えているのではないかと思います）。
さて森園さんと結婚されてからの村崎さんは、かなりの時間と労力と才能を、森園さん

の原作に注ぎ込みました。それまでいろいろな方の原作を手掛けていた森園さんですが、結婚してからは森園さんの方も村崎百郎原作をメインに執筆するようになり、担当の私もよく長時間3人で打合せをさせていただいてました。

そんな時、打合せがてらいろいろなお話を伺う事も多く、ああ、この人は視えたり聴こえたりする人なんだなぁ……と、つくづく思ったものです。

最初に村崎さんに原作をお願いした作品は『フィータス』というタイトルで、殺人を犯しても目撃しても、何も感じない女性が主人公で、当時はまだあまり知られていませんでしたが、今でいうサイコパスものでした。そういう人間が本当にいて、奴らは最低なんだという話をずいぶん聞いたような気がします。でもそれは、本当にそういう人間で、悪気はないのだとも。自分でもなぜ自分に感情がないのかわからない人たちなのだと……そういうお話でした。

そして、ドッペルゲンガーを目撃したり、夏前の空に響き渡る特攻隊員の叫び声を聴いたり、自分がアタマのおかしい人間に殺される幻影を視たりなど、とにかくいろいろ視えたり聴こえたりして煩くてしょうがないのだとおっしゃるのでした。

ご自分では電波系と名乗ってらっしゃいましたが、私的には霊感体質の方なのだろうなと思い、そのように言いますと、自分は霊能者ではないし、幻聴や幻覚、妄想などの統合失調症的症状は誰にでも多かれ少なかれあって、自分にもそれがあるにすぎないのだと。

そんな村崎さんはショートスリーパーでもあり、4時間以上寝れないのでした。森園さ

んは一旦寝ると、まる30時間寝てしまう事さえあるロングスリーパー。既読がつくなどの便利なＳＮＳがなかった時代、連絡手段は電話のみ……それまで一旦寝ると電話のベルがいかに鳴り響こうとも起きなかった森園さんですが、結婚してからは必ず村崎さんが電話に出てくれて、さらにいついつ寝たから次に起きるのはこれくらいと、見込みまで教えてくださるので、とてもとても助かりました。そしてよく「僕が起きてる時間の半分を森園は寝ているんですよ……僕は彼女の寝顔を見てるだけなんです」と、嘆きとものろけともつかない愚痴を電話口で話し続けるのでした。

村崎さんの悲報はラジオで知りました。なぜその時ラジオが点いていたのかは覚えていません。びっくりして旦那と森園邸に駆けつけましたが、すでにロープが張られ警官だらけ……とりあえず「担当編集者なんですが」と言ってはみましたが、もうここは立入禁止で、森園さんももういないと言われるばかりでした……。電話も通じませんし、仕方なくメールだけ出して、できることがあったらいつでも連絡くださいとだけ……。

ようやく連絡がきた後は、とにかく怒涛のようにいろいろなことがあって、書くのが憚られる事も多く（詳しくは森園さんのデジタルエッセイ漫画『私の夫はある日突然殺された』を是非お読みくださいませ。めちゃコミで配信中です）、森園さんは本当に本当に大変だったと思います。悲しみやショックなどの精神的な苦痛や、理不尽さに対する怒りなどは勿論ですが、物理的にも大変な作業の連続だったと思います。

村崎さんが借りていた資料部屋の整理と撤去（扉を開けた時、天井まで本や雑誌に覆い尽くされたその部屋は、入ることとすらできませんでした……！）、自宅兼仕事場の整理と撤去だけでも毎週1回のお手伝い数人がかりで半年、さらにそこで選り分けた膨大な量の本、雑誌、コミックス、写真集etc.収集したゴミ、書き付け、魔術道具等々の収納先の交渉と確保（本は明治大学に今後できるという漫画や雑誌の資料館へ寄付、ゴミや道具系は伊豆の博物館『まぼろし博覧会』内に『村崎百郎館』を設立して収めるなど、もう数年がかり！　しかも全て自費）を、持ち前のバイタリティーと周りを巻き込む力で次々と成し遂げていったのでした。

この間、犯人が実は森園さんをも狙っていたという警察からの情報でウィークリーマンションを転々としたり、その後も度重なる引越し、そして何より統合失調症という事で無罪（！）になってしまった犯人に対する民事訴訟など、普通の人ではとても無理と思われることを延々とやり遂げ、なおかつお仕事の方も続けてこられた森園さんには本当に頭が下がります。村崎さんとの結婚は、まさに素晴らしい女性を生み出したんですね（涙）。

今回、村崎さんの10回忌にあわせ、今度は名著『鬼畜のススメ』を電子書籍として復刊され、これもお互いに尊敬しあっていたからこそなのだろうなぁと思います。本当にベストカップルでしたから。村崎さんも今まで以上に喜ばれていることでしょう！（合掌）

復刊おめでとうございます‼　そして、おつかれさまでしたー‼

終章　後書き＆奥付＆次号予告

終章



後書き＆奥付＆次号予告

データ版「鬼畜のススメ」〜発売までの道のり②〜

村崎百郎の10回忌である２０２０年7月23日、四苦八苦しながらも、何とかデータ版「鬼畜のススメ」〜村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！①〜をＫｉｎｄｌｅＫＤＰで発売することが出来ました。

ところが、発売直後に自分で購入して（実はＫｉｎｄｌｅで書籍を買ったのはこれが初めてでした……汗）確認したところ、何と自分の漫画と根本敬先生の漫画がボケてて全く絵もセリフも読めないと分かり、尚且つ本の説明ページにも文字のミスがあると分かり（↑こちらは知人に指摘されるまで全く気がついていませんでした）大驚愕！

思えば、ＫＤＰ入稿した後、発売する前に内容を確認する（この時ミス等があれば直してもらえる）のを適当に、というかミスは無いはず！と勝手に思い込みちゃんと確認しなかったのが原因でした。

大慌てで、代行出版の担当さんに連絡して修正をお願いし、既に購入された方々に修正版を（無料で）ダウンロードしていただく方法を担当さんに聞いたり調べたりして、ようやく発売から数日後に修正版が発売になり、再ダウンロード方法をＳＮＳで告知してよう

やく胸をなでおろしたのでした。

書籍の「鬼畜のススメ」の付録付きデータ版を発売する事に決めた時、せっかく個人（私のアカウントで）出版出来るようにしたのだから、1冊だけではなくその続刊（第2巻や第3巻）も発売してみようかな～……と考えていました。

1冊目は初めての書籍出版だったので分からないことだらけだったし、入稿してからもミスの連発で大変だったけれど、そのおかげで色々学んだこともあり、次は大丈夫！　という妙な？　自信もついて、内容もだいたい決まっていました。

村崎が過去にかなりの数の寄稿文を書いていたので、そのセレクト集と、村崎が中学生の頃から詩や文章を書き溜めていた大量のノートが残されていたので、その中から選んだものを未発表セレクト集として1冊にしようと考えていたのです。

作業的には確かに1巻目よりは楽ではあったものの、寄稿文と未発表分をチェックしてセレクトするのは、多分私一人では時間的に厳しいだろうと思い、制作進行や校正をお願いしている小山繭子さん、ライターの佐藤勇馬さん、知人のけいしけいさんに一緒にセレクトする作業をお願いしました。

寄稿文のセレクトは意外と簡単に終わったのですが、未発表のノートの文章のセレクトはともかく、その文章をテキスト化する作業がとっても大変だったのです。

なぜかと言うと……そのノートの文章は、村崎の10代～20代の頃が中心で当然ＰＣ登場の前なので、ほとんどが村崎の手書きで、その文字たるや最初は綺麗な字で書かれていても途中からどんどん変形？　していって最後の方はもはや字というより記号と化してしまっていて、全く判読できないものだったのです。

そう言う事情で、なるべく面白くて読めそうな文章を選び、私と先ほどの小山繭子さん、ライターの佐藤勇馬さん、知人のけいしけいさんと、村崎の姪っ子のゆなさんとで手分けをして、読めないところは姪っ子のゆなさんに解読をお願いして（流石に血筋というべきなのか？　彼女は私たちの読めない文字もかなり判読することが出来ました）ゆなさんですら読めない部分は諦めて××表記にする事にして、無事？　テキスト化する事が出来ました。

この文章を書いている時点ではまだ入稿していないのですが、この後入稿した後にミス等が無いかしっかり確認して前回のような事が無いようにしたいと思います。

この本を買って読んでくださった方々には、村崎百郎（黒田一郎）の寄稿文を、そして若い頃の文章を楽しんで頂ければ幸いです。

当初から色々アドバイスをして下さり、データハウス鵜野社長のコメント録音と文字起こしと文章セレクトを手伝って下さった佐藤勇馬さん。アドバイスをはじめ、煩雑な連絡や文字校正、台割り等の進行全般の担当と、文章セレクト&テキスト化を手伝って下さった編集の小山繭子さん。文章のセレクトとテキスト化のご協力をして下さった、けいしけいさん。テキスト化を手伝って下さったゆなさん、本当に有難うございました。

そして、素晴らしいコメントを下さった皆さまに心から感謝いたします。

２０２０年　９月25日　森園みるく

※追記　２０２１年１月　その後色々あってＫＤＰ以外の電子配信サイトから再出版する事になりました。

村崎百郎（むらさき・ひゃくろう）

61年シベリア生まれ。中卒。80年に上京。凶悪で暴力的な性格が災いし、陰惨な傷害事件をくり返しながら多くの工場や工事現場を点々とする。現在は工員兼鬼畜ライター。生まれつき神や悪魔の声が頭の中に直接聞こえてくるという「電波系」であり、その体質を

利用して、「妄想神経」と呼ぶ透明無形の神経繊維を体外に無限に伸ばして、他人の体に潜入&憑依をしたり、路上のゴミを探査したりと、いつ精神病院からスカウトがきても不思議ではない状態のキ○ガイ技を多数会得している。95年より「すかしきった日本の文化を下品のドン底に叩き堕とす」ために「鬼畜系」を名乗り、この世の腐敗に加速をかけようと、「卑怯&卑劣」をモットーに日本一ゲスで下品なライター活動をはじめる。（この活動に関する同志&奴隷&喜び組&敵対する「正義の味方」は常時募集中）主な執筆雑誌は『危ない1号』（データハウス）、『GON！』（ミリオン出版）、『イマーゴ』（青土社）など。共著に『ジ・オウム』（太田出版）、近刊予定に『鬼畜系』（太田出版）、『電波系』（太田出版／根本　敬と共著）などがある。

村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！③
鬼畜のススメ③
復活編～純粋妄想電波批評～

著者　村崎百郎
発行者　有限会社　ミルキーワールド
スキャンニング　株式会社　エレキテル　電子化代行スキャンPRO事業部
新表紙デザイン　電子書籍出版代行サービス

モノクロ表紙デザイン　森園みるく
表紙デザイン　電子書籍出版代行サービス
表紙カバー写真　村崎百郎
編集　校正　森園みるく　小山繭子
協力　佐藤勇馬　矢崎雅之　黒田ゆな　けいしけい

☆参考サイト

「まぼろし博覧会」で検索
http://maboroshi.pandora.nu/

「怪しい少年少女博物館」で検索
http://ayashii.pandora.nu/

「猫の博物館」で検索

http://nekohaku.pandora.nu/

Ｔｗｉｔｔｅｒ「セーラちゃん まぼろし博覧会」で検索

https://twitter.com/maboroshimusume

ＹｏｕＴｕｂｅ 「アムールみるくチャンネル」で検索
（「まぼろし博覧会」内「村崎百郎館」の完成工程動画が観られます）

https://www.youtube.com/user/1225MILKMILK

ｎｏｔｅ「milk 村崎百郎の言霊」で検索（村崎百郎の過去の文章が読めます）

https://note.com/kitiku

「村崎百郎非公式ＨＰ」で検索

http://murasaki100.com/index_00.html

「森園みるく公式ＨＰ」で検索

http://morizono.babymilk.jp/

★次号予告★

２０２１年　夏頃「鬼畜のススメ」第４弾発売予定！

～内容（詳細未定）～

☆村崎百郎　未発表遺稿『紫の炎』

☆村崎百郎　小説

○パープルナイト

○フリークスキラー

☆村崎百郎原作漫画

○「ワイルドガーデン」マンガ　森園みるく

○「パワースポット紀行／伊勢神宮」マンガ　森園みるく

＆ＭＯＲＥ

乞うご期待！

情報は以下よりチェックよろしくお願い致します。

「森園みるく　ＦＢ」で検索

https://www.facebook.com/milk.morizono

「森園みるく　Ｔｗｉｔｔｅｒ」で検索

https://twitter.com/noritakamilkmor